

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第624集

ふ　どう　がて　あと  
**不動館跡発掘調査報告書**

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

2014

岩手県県北広域振興局土木部二戸土木センター  
(公財) 岩手県文化振興事業団

# 不動館跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業に関連して、平成23・24年度に発掘調査を実施した不動館跡の調査成果をまとめたものであります。

今回の調査では、中世の城館跡として平坦地（曲輪）や空堀、切岸、土塁などの普請造成工事の痕跡と掘立柱建物・竪穴建物跡や住居状遺構など多数の遺構が検出されました。これら遺構からは中世の中国産磁器や国産陶器、中国産古銭、鉄鋤や仏具などの鉄製品、鎌型や鍛冶滓などの鉄製品生産関連遺物など多数出土いたしました。浄法寺地区には浄法寺城を筆頭に多くの中世城館跡が存在しています。本事業に関連して館II遺跡、吉田館跡、本遺跡と調査事例も増え、当地の中世城館の様相が明らかになりつつあります。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県県北広域振興局土木部二戸土木センター、二戸市埋蔵文化財センター、二戸市役所浄法寺総合支所をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成26年2月

公益財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 池田克典

## 例　　言

1 本書は、岩手県二戸市淨法寺町清水尻11-2ほかに所在する不動館跡の調査成果を収録したものである。

2 岩手県遺跡データベースの遺跡コードはJE37-0073、遺跡略号はFD-11、FD-12である。

3 発掘調査期間・調査面積・調査担当者は以下のとおりである。

平成23年度 / 平成23年 6月16日～12月8日 / 4.645m<sup>2</sup> / 小山内透・福島正和・小林弘卓・菅野梢  
平成24年度 / 平成23年 4月10日～7月13日 / 5.697m<sup>2</sup> / 福島正和・北村忠昭・小林弘卓

4 室内整理期間及び整理担当者は以下のとおりである。

平成23年度 / 平成23年11月1日～平成24年3月31日 / 小山内・福島・小林・菅野  
平成24年度 / 平成24年11月1日～平成25年3月29日 / 福島

5 報告書の執筆は、Iは委託者、IIは福島、IIIは小山内、IVについては各年度の整理担当者が各自担当分を分担執筆し、Vと編集・構成は主に福島が担当した。

6 分析・鑑定・委託業務は次の機関・方々に依頼した。(順不同・敬称略)

保存処理：岩手県立博物館、石質鑑定：花崗岩研究会、地形測量：北宋調査設計株式会社、基準点測量：株式会社柳平測量設計、炭化材同定：阿部利吉(岩手県木炭協会)

7 土層色調観察には、農林省農林水産技術会議事務局、財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」を、地図は建設省国土地理院発行の25,000分の1(浄法寺)を使用した。

8 発掘調査及び遺物整理あたっては下記の機関と方々にご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(あいうえお順、敬称・所属略)

内山敏行・柴田知二・関 豊・津野 仁・西岡文夫・羽柴直人・本堂寿一・水澤幸一・室野秀文

9 発掘調査による成果は、現地説明会、遺跡報告会および『平成23・24年度発掘調査報告書』等で公表しているが、内容も含め本書を正式な報告とする。

10 今回の発掘調査による出土品及び記録資料は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 目 次

序

例言

報告書抄録（巻末）

### [本 文]

|                     |     |
|---------------------|-----|
| I 調査に至る経過 .....     | 1   |
| II 位置と環境 .....      | 3   |
| 1 遺跡の位置 .....       | 3   |
| 2 地理的環境 .....       | 3   |
| 3 歴史的環境 .....       | 4   |
| III 発掘調査と整理方法 ..... | 7   |
| 1 調査と整理の経過 .....    | 7   |
| (1) 平成 23 年度 .....  | 7   |
| (2) 平成 24 年度 .....  | 10  |
| 2 発掘調査の方法 .....     | 11  |
| (1) 発掘 .....        | 11  |
| (2) 諸記録 .....       | 11  |
| 3 整理作業の方法 .....     | 12  |
| (1) 遺構図 .....       | 12  |
| (2) 写真的整理 .....     | 12  |
| (3) 遺物の整理 .....     | 12  |
| 4 遺跡概観と基本層序 .....   | 13  |
| (1) 遺跡概観 .....      | 13  |
| (2) 基本層序 .....      | 13  |
| IV 調査成果 .....       | 17  |
| 1 調査概要 .....        | 17  |
| 2 検出遺構 .....        | 18  |
| (1) 曲輪 .....        | 18  |
| (2) 堀・土塁・切岸 .....   | 98  |
| (3) 通路 .....        | 106 |
| (4) 縄文時代の遺構 .....   | 107 |

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| 3 出 土 遺 物 .....           | 117 |
| (1) 陶 磁 器 .....           | 117 |
| (2) 金 属 製 品 .....         | 119 |
| (3) 石製品・鋳造および鍛冶関連遺物 ..... | 131 |
| (4) 縄文時代の遺物 .....         | 131 |
| V 総 括 .....               | 151 |
| 1 中世の遺構と遺物 .....          | 151 |
| (1) 普 請 遺 構 .....         | 151 |
| (2) 作 事 遺 構 .....         | 153 |
| (3) 陶 磁 器 .....           | 156 |
| (4) 金 属 製 品 .....         | 159 |
| 2 不動館の変遷と機能 .....         | 161 |
| (1) 遺 構 の 変 遷 .....       | 161 |
| (2) 遺 構 の 機 能 .....       | 164 |
| (3) 不動館の画期 .....          | 165 |
| 3 不動館の歴史的背景 .....         | 165 |
| (1) 初 期 段 階 .....         | 165 |
| (2) 中 期 段 階 .....         | 166 |
| (3) 終 末 段 階 .....         | 166 |
| 4 結 語 .....               | 166 |

## 図版目次

|      |              |    |      |                       |     |
|------|--------------|----|------|-----------------------|-----|
| 第1図  | 浄法寺工区計画路線図   | 1  | 第43図 | 堅穴建物14・15（曲輪1）        | 53  |
| 第2図  | 遺跡位置         | 2  | 第44図 | 堅穴建物16（曲輪1）           | 54  |
| 第3図  | 周辺地形分類・地質縦断面 | 4  | 第45図 | 堅穴建物17（曲輪1）           | 54  |
| 第4図  | 周辺遺跡分布       | 5  | 第46図 | 堅穴建物18（曲輪1）           | 56  |
| 第5図  | 周辺地籍図        | 6  | 第47図 | 堅穴建物19（曲輪1）           | 56  |
| 第6図  | 基本層序概念図      | 13 | 第48図 | 堅穴建物20（曲輪1）           | 57  |
| 第7図  | 調査範囲         | 14 | 第49図 | 溝1・2（曲輪1）             | 58  |
| 第8図  | 調査前地形測量図     | 15 | 第50図 | 土坑1～5（曲輪1）            | 61  |
| 第9図  | 主要普請遺構配置     | 16 | 第51図 | 土坑6～11（曲輪1）           | 62  |
| 第10図 | 曲輪1全体図       | 19 | 第52図 | 土坑12～16・24（曲輪1）       | 65  |
| 第11図 | 曲輪1分割図（北東部）  | 20 | 第53図 | 土坑17～19・30・35・36（曲輪1） | 66  |
| 第12図 | 曲輪1分割図（南西部）  | 21 | 第54図 | 土坑37・44～48（曲輪1）       | 67  |
| 第13図 | 掘立柱建物3～4     | 22 | 第55図 | 焼土1～4（曲輪1）            | 69  |
| 第14図 | 掘立柱建物15～22   | 23 | 第56図 | 曲輪2                   | 71  |
| 第15図 | 掘立柱建物3（曲輪1）  | 25 | 第57図 | 曲輪3                   | 73  |
| 第16図 | 掘立柱建物4（曲輪1）  | 26 | 第58図 | 掘立柱建物1                | 74  |
| 第17図 | 掘立柱建物5（曲輪1）  | 27 | 第59図 | 掘立柱建物2                | 75  |
| 第18図 | 掘立柱建物6（曲輪1）  | 28 | 第60図 | 堅穴建物21                | 76  |
| 第19図 | 掘立柱建物7（曲輪1）  | 28 | 第61図 | 堅穴建物22                | 77  |
| 第20図 | 掘立柱建物8（曲輪1）  | 30 | 第62図 | 堅穴建物23                | 78  |
| 第21図 | 掘立柱建物9（曲輪1）  | 30 | 第63図 | 溝3                    | 79  |
| 第22図 | 掘立柱建物10（曲輪1） | 31 | 第64図 | 土坑25・27・28・31（曲輪3）    | 80  |
| 第23図 | 掘立柱建物11（曲輪1） | 32 | 第65図 | 土坑33・34・43（曲輪3）       | 81  |
| 第24図 | 掘立柱建物12（曲輪1） | 33 | 第66図 | 鍛冶炉・焼土                | 82  |
| 第25図 | 掘立柱建物13（曲輪1） | 33 | 第67図 | 曲輪4・5                 | 84  |
| 第26図 | 掘立柱建物14（曲輪1） | 35 | 第68図 | 曲輪6                   | 85  |
| 第27図 | 掘立柱建物15（曲輪1） | 35 | 第69図 | 曲輪7                   | 86  |
| 第28図 | 掘立柱建物16（曲輪1） | 37 | 第70図 | 堀1東側                  | 88  |
| 第29図 | 掘立柱建物17（曲輪1） | 37 | 第71図 | 堀1東側断面                | 89  |
| 第30図 | 掘立柱建物18（曲輪1） | 38 | 第72図 | 堀1西側                  | 90  |
| 第31図 | 掘立柱建物19（曲輪1） | 38 | 第73図 | 堀1西側断面                | 91  |
| 第32図 | 掘立柱建物20（曲輪1） | 40 | 第74図 | 堀2西側・堀4断面             | 93  |
| 第33図 | 掘立柱建物21（曲輪1） | 40 | 第75図 | 堀3                    | 94  |
| 第34図 | 掘立柱建物22（曲輪1） | 41 | 第76図 | 堀4                    | 96  |
| 第35図 | 堅穴建物1・4（曲輪1） | 43 | 第77図 | 堀4断面                  | 97  |
| 第36図 | 堅穴建物2（曲輪1）   | 44 | 第78図 | 堀5                    | 98  |
| 第37図 | 堅穴建物3（曲輪1）   | 45 | 第79図 | 堀6                    | 100 |
| 第38図 | 堅穴建物5・9（曲輪1） | 48 | 第80図 | 堀6断面                  | 101 |
| 第39図 | 堅穴建物6（曲輪1）   | 49 | 第81図 | 堀7                    | 102 |
| 第40図 | 堅穴建物7・8（曲輪1） | 50 | 第82図 | 堀9                    | 102 |
| 第41図 | 堅穴建物11（曲輪1）  | 51 | 第83図 | 堀8                    | 103 |
| 第42図 | 堅穴建物13（曲輪1）  | 52 | 第84図 | 土壠1                   | 105 |

|       |                    |     |       |                  |     |
|-------|--------------------|-----|-------|------------------|-----|
| 第85図  | 通路 1               | 106 | 第101図 | 土器（その1）          | 133 |
| 第86図  | 貯藏穴 1              | 107 | 第102図 | 土器（その2）          | 134 |
| 第87図  | 陥し穴 1～3（曲輪 1）      | 109 | 第103図 | 土器（その3）          | 135 |
| 第88図  | 陥し穴 4～6（曲輪 1）      | 110 | 第104図 | 石器（その1）          | 136 |
| 第89図  | 陥し穴 7・9・10（曲輪 1）   | 111 | 第105図 | 石器（その2）          | 137 |
| 第90図  | 陥し穴 11～13・18（曲輪 4） | 112 | 第106図 | 石器（その3）・石製品（その1） | 138 |
| 第91図  | 陥し穴 19～21（曲輪 5）    | 113 | 第107図 | 石製品（その2）・土製品     | 139 |
| 第92図  | 遺物包含層              | 114 | 第108図 | 調査前の想定縄張図        | 154 |
| 第93図  | 陶磁器                | 118 | 第109図 | 調査前の想定縄張図（不動館城）  | 155 |
| 第94図  | 金属製品（その1）          | 123 | 第110図 | 掘立柱建物集成          | 157 |
| 第95図  | 金属製品（その2）          | 124 | 第111図 | 竪穴建物集成           | 158 |
| 第96図  | 金属製品（その3）          | 125 | 第112図 | 出土遺物の時期          | 159 |
| 第97図  | 金属製品（その4）          | 126 | 第113図 | 武器・武具集成          | 160 |
| 第98図  | 金属製品（その5）          | 127 | 第114図 | 仏具集成             | 160 |
| 第99図  | 石製品                | 129 | 第115図 | 曲輪 1・3 東側断面概念図   | 162 |
| 第100図 | 石臼                 | 130 | 第116図 | 不動館東側変遷図         | 163 |

## 表 目 次

|     |              |     |     |             |     |
|-----|--------------|-----|-----|-------------|-----|
| 第1表 | 不動館跡遺構名一覧    | 140 | 第6表 | 掲載遺物一覧（石器）  | 148 |
| 第2表 | 掲載遺物一覧（陶磁器）  | 141 | 第7表 | 掲載遺物一覧（石製品） | 149 |
| 第3表 | 掲載遺物一覧（金属製品） | 142 | 第8表 | 掲載遺物一覧（土製品） | 149 |
| 第4表 | 掲載遺物一覧（石製品）  | 145 | 第9表 | 掲載遺物一覧（鉄滓）  | 150 |
| 第5表 | 掲載遺物一覧（縄文土器） | 146 |     |             |     |

## 写真図版目次

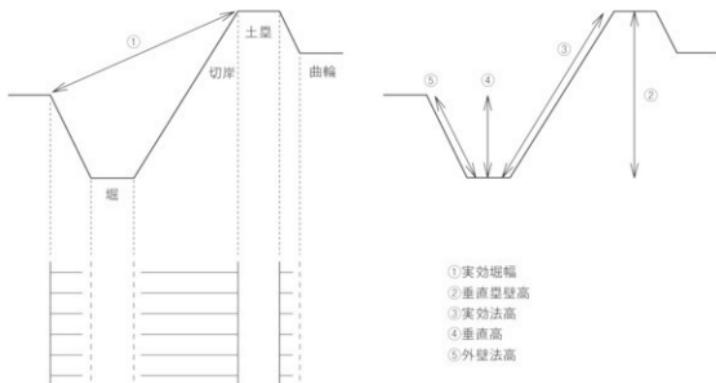
|        |           |     |        |        |     |
|--------|-----------|-----|--------|--------|-----|
| 写真図版 1 | 遺跡遠景      | 171 | 写真図版17 | 堀 3    | 187 |
| 写真図版 2 | 航空写真調査前現況 | 172 | 写真図版18 | 堀 4    | 188 |
| 写真図版 3 | 航空写真調査終了時 | 173 | 写真図版19 | 堀 4    | 189 |
| 写真図版 4 | 曲輪 1 全景   | 174 | 写真図版20 | 堀 5    | 190 |
| 写真図版 5 | 曲輪 1・2    | 175 | 写真図版21 | 堀 6    | 191 |
| 写真図版 6 | 曲輪 3      | 176 | 写真図版22 | 堀 6    | 192 |
| 写真図版 7 | 曲輪 3      | 177 | 写真図版23 | 堀 7    | 193 |
| 写真図版 8 | 曲輪 4・5    | 178 | 写真図版24 | 堀 8    | 194 |
| 写真図版 9 | 曲輪 6      | 179 | 写真図版25 | 堀 9    | 195 |
| 写真図版10 | 曲輪 7      | 180 | 写真図版26 | 土塁 1   | 196 |
| 写真図版11 | 堀 1       | 181 | 写真図版27 | 土塁 1   | 197 |
| 写真図版12 | 堀 1       | 182 | 写真図版28 | 切岸 1   | 198 |
| 写真図版13 | 堀 1       | 183 | 写真図版29 | 通路 1   | 199 |
| 写真図版14 | 堀 1       | 184 | 写真図版30 | 通路 2   | 200 |
| 写真図版15 | 堀 1       | 185 | 写真図版31 | 通路 3   | 201 |
| 写真図版16 | 堀 2       | 186 | 写真図版32 | 竪穴建物 1 | 202 |

|        |                    |     |         |                                |     |
|--------|--------------------|-----|---------|--------------------------------|-----|
| 写真図版33 | 堅穴建物2              | 203 | 写真図版71  | 陥し穴19~21、調査区西端低地               | 241 |
| 写真図版34 | 堅穴建物3              | 204 | 写真図版72  | 陶磁器（1~7）                       | 242 |
| 写真図版35 | 堅穴建物4              | 205 | 写真図版73  | 陶磁器（8~14）                      | 243 |
| 写真図版36 | 堅穴建物5              | 206 | 写真図版74  | 陶磁器（15~20）                     | 244 |
| 写真図版37 | 堅穴建物6              | 207 | 写真図版75  | 金属製品（21~28）                    | 245 |
| 写真図版38 | 堅穴建物7              | 208 | 写真図版76  | 金属製品（29~41）                    | 246 |
| 写真図版39 | 堅穴建物8              | 209 | 写真図版77  | 金属製品（42~47）                    | 247 |
| 写真図版40 | 堅穴建物9・10           | 210 | 写真図版78  | 金属製品（48~54）                    | 248 |
| 写真図版41 | 堅穴建物13             | 211 | 写真図版79  | 金属製品（55~62）                    | 249 |
| 写真図版42 | 堅穴建物14・15          | 212 | 写真図版80  | 金属製品（63~65）                    | 250 |
| 写真図版43 | 堅穴建物14・15          | 213 | 写真図版81  | 金属製品（66~74）                    | 251 |
| 写真図版44 | 堅穴建物16             | 214 | 写真図版82  | 金属製品（75~79）                    | 252 |
| 写真図版45 | 堅穴建物17             | 215 | 写真図版83  | 金属製品（80~83）                    | 253 |
| 写真図版46 | 堅穴建物18             | 216 | 写真図版84  | 金属製品（84~95）                    | 254 |
| 写真図版47 | 堅穴建物19・20          | 217 | 写真図版85  | 金属製品（96~109）                   | 255 |
| 写真図版48 | 堅穴建物21             | 218 | 写真図版86  | 銭貨（110~120）                    | 256 |
| 写真図版49 | 堅穴建物22             | 219 | 写真図版87  | 不明石製品（121）・紙石（122）             | 257 |
| 写真図版50 | 堅穴建物23             | 220 | 写真図版88  | 砥石（123~125）                    | 258 |
| 写真図版51 | 曲輪3 捩立柱建物1・2       | 221 | 写真図版89  | 石臼（126）                        | 259 |
| 写真図版52 | 曲輪1 捩立柱建物3         | 222 | 写真図版90  | 石臼（127）                        | 260 |
| 写真図版53 | 土坑1~4              | 223 | 写真図版91  | 縄文土器（128~137）                  | 261 |
| 写真図版54 | 土坑5~8              | 224 | 写真図版92  | 縄文土器（138~147）                  | 262 |
| 写真図版55 | 土坑9~14             | 225 | 写真図版93  | 縄文土器（148~157）                  | 263 |
| 写真図版56 | 土坑15~18            | 226 | 写真図版94  | 縄文土器（158~168）                  | 264 |
| 写真図版57 | 土坑19~21・25・26、作業風景 | 227 | 写真図版95  | 縄文土器（169~181）                  | 265 |
| 写真図版58 | 土坑27・28・30~32      | 228 | 写真図版96  | 縄文土器（182~186）                  | 266 |
| 写真図版59 | 土坑33~36            | 229 | 写真図版97  | 縄文土器（187）                      | 267 |
| 写真図版60 | 土坑37・38・42・43      | 230 | 写真図版98  | 石器（188~197）                    | 268 |
| 写真図版61 | 土坑44~46            | 231 | 写真図版99  | 石器（198~201）                    | 269 |
| 写真図版62 | 溝1                 | 232 | 写真図版100 | 石器（202~205）                    | 270 |
| 写真図版63 | 溝1~4               | 233 | 写真図版101 | 石器（206~208）                    | 271 |
| 写真図版64 | 焼土1~5              | 234 | 写真図版102 | 石器（209~213）                    | 272 |
| 写真図版65 | 炉6~9               | 235 | 写真図版103 | 石器（214）・石製品（215・216）           | 273 |
| 写真図版66 | 性格不明遺構1・2、陥し穴1・2   | 236 | 写真図版104 | 石製品（217~221）                   | 274 |
| 写真図版67 | 陥し穴3~6             | 237 | 写真図版105 | 土偶（222~229）                    | 275 |
| 写真図版68 | 陥し穴7~10            | 238 | 写真図版106 | 土偶（230）                        | 276 |
| 写真図版69 | 陥し穴11~14           | 239 | 写真図版107 | 鍛造鋤片（231~233）・鉄状錠（234）・鉄鋤（235） | 277 |
| 写真図版70 | 陥し穴15~18           | 240 | 写真図版108 | ナイゴ羽口（236・237）・舞型片（238・239）    | 278 |

## 凡　　例

- 1 本報告書収載の遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系(世界測地系)による座標北を示す。
- 2 遺構・遺物の種別を表す略号は以下のとおりで、遺構名は略号と組み合わせた検出順の連番とした。

|             |            |                         |              |              |
|-------------|------------|-------------------------|--------------|--------------|
| S B : 挖立柱建物 | S C : 曲輪   | S D : 堀跡・溝跡             | S F : 土壘・切岸  | S K : 土坑     |
| S M : 通路    | S N : 焼土遺構 | S K I : 豊穴建物跡・住居状・豊穴状遺構 | P : 柱穴       |              |
| R C : 炭化物   | R M : 金属製品 | R O : 獣骨                | R P : 土器・土製品 | R Q : 石器・石製品 |
| S : 碑・石     | R X : その他  |                         |              |              |
- 3 土層注記は基本層位にローマ数字、遺構埋土にはアラビア数字を用い、攪乱(木根等)はKと示した。
- 4 表中の法量の残存値は( )、推定値は〔 〕で表示した。
- 5 堀跡・塁壁の計測位置と呼称は以下のとおりとした。



## I 調査に至る経過

不動館跡は、「地域連携道路整備事業浄法寺工区」の道路改築工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

主要地方道二戸五日市線は岩手県二戸市を起点とし、旧二戸郡浄法寺町の中心部を経由して、八幡平市五日市に至る総延長27.7kmの路線であり、岩手県北部の産業、経済活動を支える幹線道路である。

しかしながら本地区は、幅員狭小であることや、見通しの悪いカーブが多く、また歩道がないことから、自動車、歩行者とも安全で円滑な通行に支障を来している。さらに冬期には、堆雪により道路幅員が減少するため、車両同士のすれ違いすら困難になるなど幹線道路、生活道路としての機能が著しく損なわれている。

本事業は、現路の隘路区間を回避し堆雪帶を考慮した幅員の線形良好なバイパスを整備するものであり、年間を通じて安全かつ円滑な通行を確保を図るために事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県北地方振興局土木部二戸土木センターから平成18年2月3日付二地土第451号「緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財の試掘調査(依頼)」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

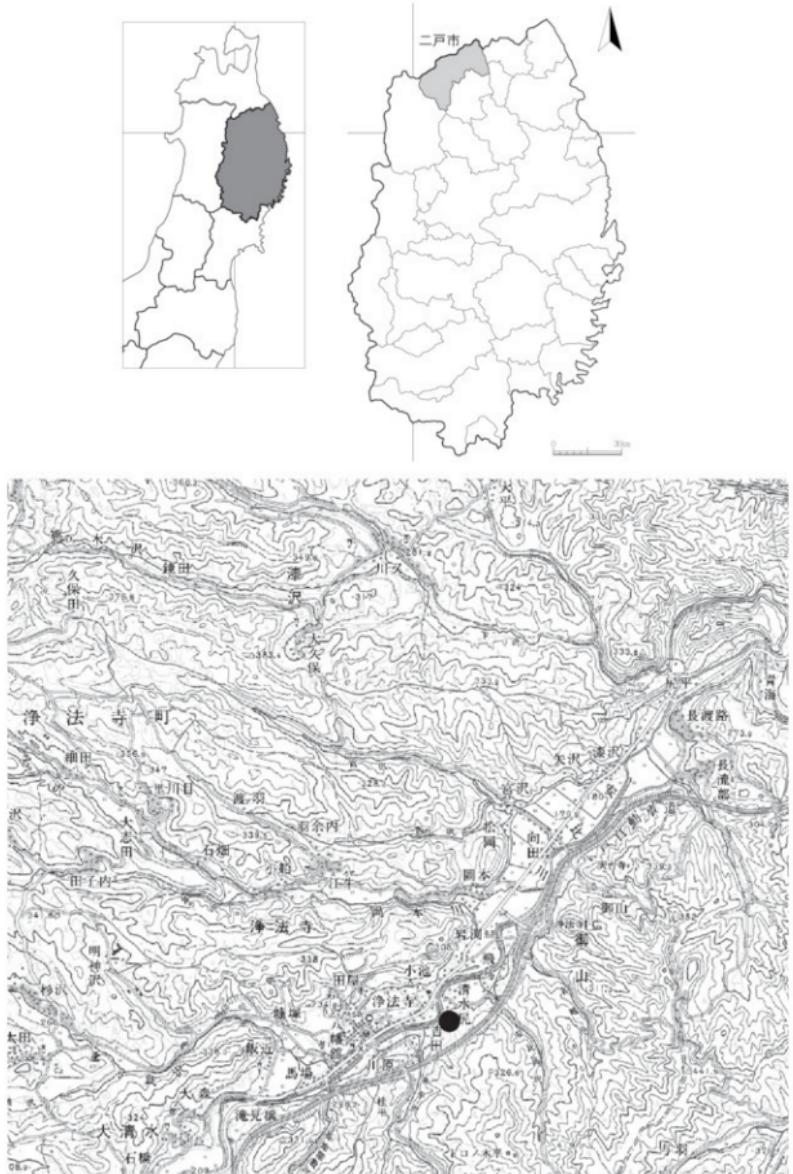
依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年2月3日に現地踏査を実施し、工事に着手するには不動館跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年2月21日付教生第1625号「緊急地方道路整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木センターは岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成23年5月25日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

(県北広域振興局土木部二戸土木センター)



第1図 浄法寺工区計画路線図



第2図 遺跡位置

## II 位置と環境

### 1 遺跡の位置

不動館跡は、岩手県二戸市浄法寺町清水尻11-2ほかに所在する。

遺跡は二戸市役所浄法寺総合支所の東約1kmに位置し、安比川右岸の北側に張り出した標高198~230mの台地上に立地する。

二戸市は岩手県内陸北端部に位置し、平成18年1月1日に二戸市、浄法寺町の1市1町が合併し、新「二戸市」となり現在に至る。市域の北は青森県田子町および三戸町、東は青森県南部町、軽米町、九戸村、南は一戸町、西は八幡平市と接している。平成22年現在で、市域面積420.31m<sup>2</sup>、人口29,702人である。二戸市域は東北新幹線、IGRいわて銀河鉄道、東北自動車道が貫通しており、岩手県内陸部と青森県三戸地方とを結ぶ陸上交通の重要な拠点である。

不動館跡の所在する旧浄法寺町は二戸市の南西側に位置し、二戸市役所から直線距離にして約18km南東に中心部が位置している。山林に囲まれた狭小な平野部に町中心部が立地する。旧浄法寺町を縱断する県道6号は鹿角街道と称され、八幡平市安代を経由して秋田県鹿角地方へ、北進すれば二戸地域を経由して青森県三戸地方へ至る。浄法寺には北東北有数の古刹、八葉山天台寺があり、観光資源としても多くの人々が集まる。また、漆生産が盛んで、浄法寺漆は近世以来国内一の生産量と高品質を誇っている。この浄法寺漆を用いた漆器生産も地場産業として根付いている。

不動館跡の所在する清水尻地区は、町中心部より安比川対岸にある。大半は山林であるが、安比川沿いには民家や田畠が広がっている。不動館跡は山林および畠地からなっており、現況では平坦な部分を畠地として利用されている以外は、植林された杉を中心とした山林となっている。

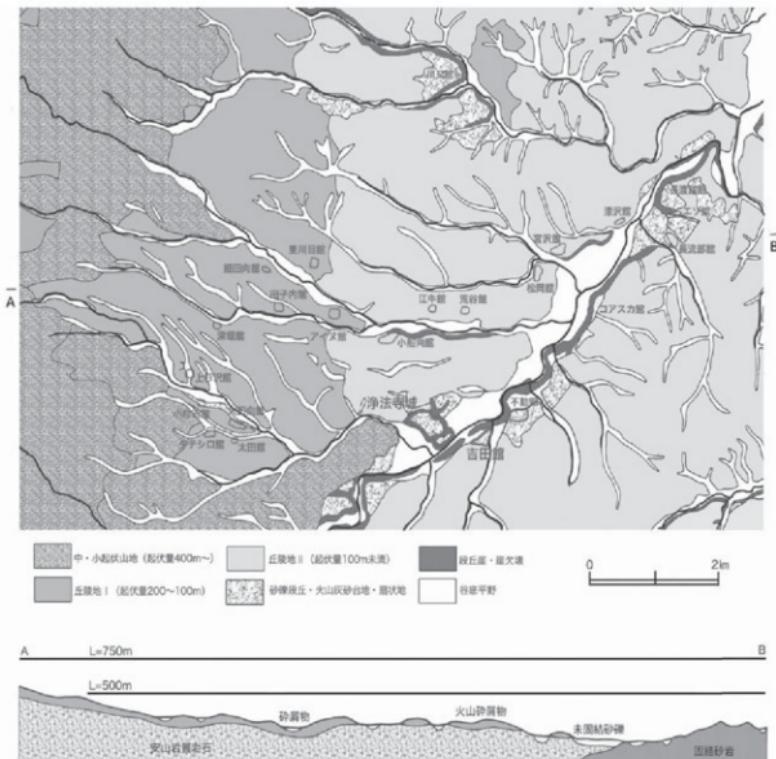
### 2 地理的環境

岩手県は西側から奥羽山脈、北上川流域の北上盆地、東側の北上山地、リアス式海岸として有名な三陸海岸を有する沿岸地域からなっている。

二戸市は馬淵川水系にあたる。葛巻町袖山に端を発し一戸町内を流れる馬淵川は、二戸市内を貫流し後、青森県域を経て八戸で太平洋に注ぎ出る。二戸地域は周辺地域と同様、火山起源の噴出物が重層構造となって堆積している。堆積する火山起源のテフラ層の大半は、十和田系火山噴出物からなり、十和田a火山灰(To-a)を最上位として、中押浮石(To-Cu)、南部浮石(To-Nb)、二ノ倉火山灰(To-Nk)、八戸火山灰(To-H)、最下位の大不動浮石(To-Of)までがみられる。

旧浄法寺町を貫流する馬淵川水系の安比川は八幡平東麓の茶臼岳よりおおむね北東方向へ流れ、二戸市馬仙峠付近で馬淵川に合流する。安比川流域は周囲を山地・丘陵で囲まれ、段丘縁辺にみられる平野部は狭小である。旧浄法寺町中心部は、安比川流域にわずかに分布する谷底平野に位置する不動館跡は安比川右岸域の高位段丘上にあり、これに連なる段丘面が一帯に広がる。

遺跡は安比川とは接続しており、この安比川の浸食作用を受け続けているものとみられ、遺跡内の丘陵頂部から安比川の浸食と崩落によって、少なくとも有史以来の元来の地形は安比川側で損なわれているものと考えられる。丘陵上の遺跡から北側を見下ろすと眼下には旧浄法寺町中心部が一望できる。また、西側には安比川に注ぐ小河川による小さな扇状地が形成されている。



第3図 周辺地形分類・地質縦断面

### 3 歴史的環境

不動館跡の所在する旧淨法寺町では、縄文時代から近世に至る遺跡が多く分布している。そのうち、不動館跡周辺では縄文時代～近世にかけての遺跡が確認されている。飛鳥台地Ⅰ、安比内Ⅰ、大久保Ⅰ、館Ⅱ、桂平Ⅱ、沼久保Ⅰで縄文時代の遺構や遺物が確認されている。特に、飛鳥台地Ⅰでは、早期・前期・後期・晚期の各時期に属する堅穴住居が調査されており、出土した早期の土器は県内でも稀少な出土事例として知られている。古代においては飛鳥台地Ⅰ、大久保Ⅰ、桂平Ⅰ・Ⅱ、沼久保Ⅰなどで平安時代に属する堅穴住居等がみられ、飛鳥台地Ⅰは周辺地域を含めた拠点集落である。

不動館跡と関連する時代である中世の遺跡は、おもに城館跡が多く確認されている。隣接地では、吉田館、館Ⅱが調査されており、ともに中世城館の普請構造や作事遺構が多数みられる。館Ⅱ遺跡は今回の不動館跡と同一事業により発掘調査がおこなわれており、不動館跡と密接に関係する城館であることが判明している。また、不動館跡の西方に位置する吉田館は、吉田川を挟んで対岸に堀で囲ま

れた曲輪の存在がやはり同一事業に関わる発掘調査で明らかになっている。曲輪には、掘立柱建物が乱立して検出されたが、その多くは近世の遺構である。中には中世の掘立柱建物も含まれていると考えられており、不動館と同時期に機能していた可能性がある。さらに、安比川対岸には、浄法寺城が存在する。この浄法寺城は、広大な城域を有する城館で、この地を治めた浄法寺氏の居城であったとされており、発掘調査でも多数の遺構が確認されている。

(福島)



| No. | 遺跡名    | 時代            | 遺構・遺物                | 報告概要      |
|-----|--------|---------------|----------------------|-----------|
| 1   | 不動船跡   | 縄文・中世 城館跡     | 曲輪、堀、掘立柱建物、陶器類、金属製品  | 岩手県文七624集 |
| 2   | 飛鳥台跡 I | 縄文～近世         | 竪穴住居、竪穴建物 他          | 岩手県文七130集 |
| 3   | 安比内 I  | 縄文・古代         | 竪穴、縄文土器              | 岩手県文七106集 |
| 4   | 船 I    | 縄文            | 縄文土器                 |           |
| 5   | 吉田館    | 縄文～近世 集落跡・城館跡 | 曲輪、堀、掘立柱建物、陶器類       | 岩手県文七520集 |
| 6   | 船 II   | 縄文・古代・近世      | 曲輪、堀、掘立柱建物、堀、竪穴 他    | 岩手県文七497集 |
| 7   | 大久保 I  | 縄文・中世         | 竪穴、縄文土器 他            | 岩手県文七90集  |
| 8   | 桂平 I   | 縄文・古代         | 竪穴住居 他               | 岩手県文七538集 |
| 9   | 桂平 II  | 縄文            | 竪穴住居、竪穴 他            | 岩手県文七110集 |
| 10  | 沼久保 I  | 縄文～近世         | 竪穴住居、竪穴 他            | 岩手県文七109集 |
| 11  | 大坊     | 縄文            | 縄文土器                 |           |
| 12  | 浄法寺城   | 中世            | 曲輪、堀、掘立柱建物、竪穴建物、磁器 他 |           |
| 13  | 上外野    | 古代            | 土器                   |           |
| 14  | 小池     | 古代            | 土器                   |           |
| 15  | 小池塚    | 不明            | 塚                    |           |
| 16  | 岩瀬Ⅲ    | 縄文            | 縄文土器                 |           |
| 17  | 岩瀬IV   | 縄文            | 縄文土器                 |           |
| 18  | 岩瀬V    | 縄文・古代         | 縄文土器                 |           |
| 19  | 福蔵寺経塚  | 古代～中世         | 経塚                   |           |

第4図 周辺遺跡分布



第5図 周辺地籍図

### III 発掘調査と整理方法

#### 1 調査と整理の経過

##### (1) 平成23年度

初年度の発掘調査は、平成23年6月16日から12月8日まで行った。

6月16日本曜日の午後、発掘機材を搬入し、プレハブ事務所・休憩所等の環境整備を行った。

同日は、委託者と調査範囲を把握するために用地杭等の状況確認、併せて重機業者と安比川に面する崖の転落防止安全柵の設置についての打合せを行った。

現況で主郭と思われる調査区中央の平坦地とこれを閉む堀跡では高低差と幅が8m以上もあり、この堀跡を挟んだ主郭の東西両側も斜面や段々など地形的に起伏に富んでいて、調査前から粗掘と堆土搬出には重機と人力作業のいずれにしてもかなり難渋することが予想された。僅かな救いは、委託者側で発掘調査に先駆けて行った山林の伐採と搬出のために、重機進入路として堀跡を山砂で埋めて保護整備していたことから、調査においてもこれを利用できることであった。ただし、借地分も含めて盛土の撤去が作業として必要となった。

17日から7月11日までは地形測量のための雑物撤去を行った。

17日には、不足していた作業員補充のために、チラシ募集した応募者の面接を行い、新規に12名を雇用することとし、27日から調査員2名、作業員26名と一緒に陣容は整った。

20日と21日の両日で單管打設による転落防止安全柵が設置された。

新緑の6月、調査区の大半は草木が生い茂っており、当初は作業員も少なかったことから効率性を考え、6月下旬には特に酷い状況であった調査区西部について草刈りを外部委託した。

30日には地形測量業者と打合せを行い、7月12日にはラジコンヘリによる地形測量を実施した。

7月12日の午後からは状況把握のための試掘に着手し、主郭と思われる二重堀で囲まれた平坦地から始め、次に東側の斜面、堀、平坦地と7月末にかけて行った。

遺跡は、現況の地形観察から明らかに館跡であり、また保安林指定されていたこともあって、県教委による試掘が実施されていなかった。このため作業工程を考える上で全体的な層序や実際的な地形等の早めの状態把握が必要とされたが、調査区西部の試掘は人員の問題から9月に入りから実施することになった。これは当初計画では7月後半から調査員3名体制の計画であったことから、試掘確認後に順次重機による粗掘を進め、主郭精査班、堀跡・切岸精査班、副郭・その他平坦地精査班の三班体制として作業を進める予定としていたものだが、東日本大震災による影響で埋文センター全体でのチーム編成に不具合が生じ、8月前半までの一ヶ月間を調査員2名で凌ぐ状況となったことによる。実際には遺跡の性格上急傾斜地が多く、安全面を最優先として作業を進める必要があったことから、重機と調査区東部の監督作業に追われ、主郭の精査と調査区西部の着手が先送りされたことにより、結果的に1200m<sup>2</sup>ほどが次年度に繰り越すこととなってしまった。

前半の試掘結果では、主郭平坦地と東斜面にある平坦地は表土及び盛土下がおよそ遺構検出面(中世造成面)、堀跡はさらに墨壁崩落土と自然流入土が互層となっていたが、遺物は盛土(客土)中に縄文土器が僅かであったことから、表土と盛土の除去は堀跡も含め重機を使用することとした。

14日から主郭平坦地について重機による粗掘を開始し、終了した下旬には東側の帶曲輪と堀跡の掘削のために、重機が通行可能となるまで主郭南側の堀跡に架設進入路の盛土(山砂)を流用して埋め

立てを行った。

7月下旬以降は、先のとおり調査体制の見直しが必要となり、主郭を問む切岸・堀跡などの急傾斜地の普請遺構専従班と主郭他の平坦地の作事的遺構班の二班編制として安全面に配慮しつつ作業を進めることとした。東側の切岸と堀跡は作業の安全面と効率性から試掘トレンチ部分で覆土の断面記録を作成することとし、8月初旬で作業を終えた。以降西側堀跡についても同様に進めることとした。

25・26日には測量用の基準杭が打設されている。

7月下旬から8月上旬にかけては主郭の遺構検出と抜根作業も行ったが、調査員が重機と東側斜面の作業にはば専従したため、調査員が増えた9月に再検出という非効率的な作業となってしまった。

8月上旬には、調査区東側墨壁の断面記録の終了後、東側帶曲輪の粗掘に重機を投入し、普請班は調査区西側の内堀のトレント断面記録作業に着手した。東側帶曲輪の粗掘はお盆休み前に終え、引き続き主郭からの切岸斜面の粗掘を行った。現況で堀底まで8mほどの高低差があることから、作業の安全を確保するために重機による粗掘と人力によるクリーニングを交互に三段階に分けて行い、クリーニング作業には普請班の男性作業員2~3名を随時あて、これらの作業は9月上旬ではば終えた。この間には主郭の遺構精査や東側堀跡で重機の通行の妨げとなる木根について、チェーンソーによる裁断抜根を業者に委託し、これ以降も必要に応じて隨時行った。

8月中旬のお盆休み前には、排土処理手順の関係から効率性を考え、作事班は主郭の作業を一時中断し、東側帶曲輪の粗掘の終わった北側から検出作業に取りかかった。

お盆休み明けの8月後半からセンターの調査員ローテーションに若干のゆとりが生じたことから待望の調査員1名、福島専門員が支援増員された。8月前半の時点では、調査員1名と普請班は西側堀の断面記録関連作業、もう1名は東側帶曲輪の重機による粗掘作業と作事班による検出作業の監督と手一杯の状況であったが、このころには暑気疲れとタバコ農家の農繁期に入ったことで、作業員の出勤率が低下し、調査員は増えたものの、西側調査区に着手する人の余裕は無くなってしまい、口コミによる増員を図っていたが、状況は芳しくなかった。期間的にもこれまでの進捗状況と残務量を照らし合わせると余裕はほとんどなく、虫食い状態で調査が次年度に残ることのないように主郭及び東部の調査を確実に進めることとし、作業員はこれまで通りの普請班と作事班の二班編制で、それぞれ調査員1名が指示・監督を行い、残る調査員1名は、堀跡について覆土と遺物の状況から、専従して盛土以下の埋土も重機により可能な限り掘削することとした。

9月5日には、他遺跡の支援で遅れていた小林調査員がようやく合流し、調査員の布陣はベスト状態となったが、やはり作業員の増員は芳しくない。今後の作業の見通しを考え、班編制は二班体制のまま、東側帶曲輪の検出作業の進行に従い、順次主郭に人員を移動し、これ以降12月の調査終了まで、小林調査員と作事班は主郭の遺構精査に専念することになった。

9月前半は、東切岸に引き続き、堀跡も重機による掘削を行い、中旬から東側下位の斜面と腰曲輪の断面記録作業に移った普請班から、切岸での作業と同様に人員を割いて精査を行い、これらの作業を9月で終えた。

中旬には西側の内堀の掘削のために、排土の一部を運搬して下幅の狭い内堀の嵩上げに利用したが、今後も多量の土量が見込まれることから、溜まっていた排土と抜根した木根の大部分を搬出した。これ以降、必要に応じて随时調査終了まで調査区外への排土搬出を行った。

9月20日~22日は、台風襲来により作業を中止した。台風通過後の22日に確認した被害状況は、掘削をほぼ終えていた東部で酷く、切岸には多数の雨裂と広範囲の壁面の崩落、降雨の流路となった堀底には深い雨裂ができる、安全のために残していた堀跡北端の壁を貫通して土砂が安比川に流出して

いた。さらに主郭北西側の崖の真ん中が抉れるように崩落しており、主郭北西部の調査区際には地割れも認められた。安全確保のために、一応地割れ部分から5m離して立ち入り禁止の措置を執り、センター上司に報告し、今後の調査について指示を仰ぐこととした。28日には県教委と委託者の立ち会いのもと現地を確認し、安全な範囲で調査を行うこととなり、取りあえず立ち入り禁止とした部分を除き調査を再開した。

9月下旬から10月前半にかけては、重機を二チーム体制とし、調査区西側の内堀の掘削と副郭平坦地（タバコ畑）の粗掘を行った。この間、首野調査員と普請班が前半は東部斜面下位の断面記録作業と台風による崩落土等の撤去とクリーニング作業、後半は副郭平坦地の検出作業と内堀の精査を行った。主郭では堅穴状遺構が狭い範囲で重複する状況が精査の進行により徐々に判明し、作業の手間数が増えるのが見込まれる様子となった。

10月上旬には、副郭で中世の盛土整地と考えていた範囲が、昭和の開田の際に1m程度削平して西側に平坦地を拡幅したものであることが判明し、さらに拡幅部分の下からは副郭を埋むと推定される堀跡が検出され、主郭外堀に繋がる状況であることが認められた。

10月14日をもって支援に来ていた福島専門員が新規の調査遺跡に移動となる。この段階の状況で西側の帶曲輪二段は無論のこと、副郭西側の切岸と堀跡については着手困難と判断し、上司に報告相談の上で副郭までの終了を目指すこととした。悲しいかな不幸中の幸いとしては副郭の作事的遺構が消失していることからこの部分の精査が不要となったことである。

10月後半は副郭粗掘の重機通路としていた外堀の掘削も始め、内堀と併せて2条の堀で重機作業と人力作業を交互に進行した。この間に東部斜面上位の遺構群と副郭の光波測量による平面図も作成した。主郭では東部の堅穴状遺構群で炭化物・焼土が多く認められたが、1セットの測量機器では効率的な運用が適わず、予定期間である11月前半での終了はかなり厳しい状況であった。

11月は、初旬で西側外堀の粗掘を終え、東部斜面下位の粗掘に着手し、12日の現地説明会までにおよそ重機による粗掘を終えた。これ以降の重機は排土運搬のみの稼働となった。

12日土曜日には、現地説明会開催。県外からのお城マニアもいて、約100名もの参加者があった。

16日は、外部から招聘した労災防止指導員による主郭北西部の崩落部について指導を受けた。取りあえずは現状の措置と対応で構わないが、立ち入り禁止範囲の調査の実施については次年度の春先の状況をもって再度判断することとなった。

24・25日は大雪となり、作業は中止。次週の空撮の実施に暗雲が立ちこめる。

29日、生涯学習文化課・委託者立会いのもと、終了確認が行われる。西側未了範囲は次年度予定であった調査区と併せて調査を行うこととし、工事は調査終了後に開始予定であるとのことから、季節的にこれ以上の調査延長は不可能なこともあって、区切りの良いところまで調査を行い、部分的に残る断ち割り作業などのだめ押しについては次年度に一部繰り越すことで了承が得られた。また、崩落危険箇所の調査についても次年度に労災防止指導員の判断を仰ぐことで了解を得た。

12月2日は航空写真撮影を実施。日陰には先月末に降り積もった雪が残るが天候は良好であった。

5日～7日は測量機器と共に調査員2名の支援を受け、残っていた東部斜面下位の測量を行った。

8日、調査に一応の区切りをつけ、発掘機材等を搬出し、午後には撤収して野外調査を終了した。

13・14日には、遺跡進入路の借地分の盛土を撤去し、現況を復旧してすべての野外作業を終えた。

整理作業は11月1日から平成24年3月30日まで行った。

11月から整理作業員1名体制で整理開始し、12月前半までは遺物の洗浄と金属製品の銷落としの前処理を行った。

12月13日には、岩手県立博物館で金属製品のレントゲン撮影を行い、12月後半はレントゲン写真で確認しながら銷落としを行い、その他の遺物の仕分け・登録・重量計測も順次行った。

1月からは遺物実測を主作業とし、後半から整理作業員が2名となり、野外調査の写真整理や採拓なども行った。

2月は整理作業員1名に減ったが、実測作業を上旬で終え、以降トレース作業に移り3月下旬まで行った。2月下旬には遺物写真撮影も行う。

3月下旬には遺物写真データの処理や台帳類の入力作業を行い、月末には遺物の仮収納作業を行い、30日をもって平成23年度分の整理作業を終了した。

(小山内)

## (2) 平成24年度

2年目の発掘調査は、平成24年4月10日から7月13日までおこなった。

4月10日午後、発掘機材を搬入し、プレハブ事務所・休憩所等の環境整備をおこなった。プレハブ用地については、昨年度同様、同一事業用地の未供用分を利用した。

調査開始以前に新規作業員の募集チラシを旧浄法寺町内中心に配布していた。この作業員の追加募集に5名の応募があり、4月11日に面接を経てこの5名を採用することになった。

調査は西側のトレーナー掘削からおこなった。この作業は昨年度未着手であったため層序の把握に努めることを第一義とした。トレーナーは位置・大きさ等を任意で設定し、遺構復元まで掘り下げた。この作業はおよそ1週間で終え、昨年度未了部分遺構の調査へ移行した。

5月1日には、昨年度崩落の危険性があり、調査中断を余儀なくされていた主郭西側部分について協議がおこなわれた。これについては、建設業労働災害防止協会岩手県支部東日本大震災復旧復興工事労災防止岩手県支援センターの小林農所長に崩落箇所の危険性や安全対策についての指導を受け、岩手県教育委員会生涯学習文化課および二戸土木センターを交えた協議の結果、安全対策を施したうえでこの部分の調査をおこなうことになった。

5月7日から西側表土除去作業を開始した。作業は西側堀に堆積した埋土上層を重機によって大まかに掘削することから始めた。一方、主郭崩落危険箇所では、検出した堅穴建物の調査を進めた。堅穴建物は重複著しく、約1ヶ月の期間を費やした。

西側堀大半を掘削した後、この堀に付随する平坦面および緩斜面にかけての遺構検出をおこなった。検出した遺構は、おもに縄文時代の陥穴であった。

例年ない猛暑の6月下旬より西側急斜面および吉田川に面した低地部分の調査を開始した。低地、急斜面に数箇所ずつトレーナーを設定した。トレーナーは人力により掘削したが、いずれのトレーナーも出土遺物が皆無であった。また、急斜面となっている崖面は崩落痕跡が確認でき、その崩落土が低地部分に堆積していることが判明した。

7月6日には、生涯学習文化課と委託者の同席により終了確認がおこなわれ、西側急斜面および吉田川沿いの低地は全面的な調査は不要と判断され、トレーナーのみの調査で終了することとなった。

7月7日午後、一般の方を対象とした現地説明会を開催し、66人の参加があった。

7月11日には、調査区範囲の航空写真を撮影した。しかし、その事前クリーニングによって主郭で多数の柱穴が確認できたため、撤収直前まで遺構検出・遺構掘削・実測・写真撮影をおこなった。

7月13日午前には、その残り作業も終了し、午後現場を撤収した。

(福島)

## 2 発掘調査の方法

### (1) 発 挖 掘

遺跡は、現況地形から城館跡の様子が明瞭に読み取れることと、保安林指定地であったこともあって、県教委による試掘が実施されていなかった。このため粗掘を行う上で全体的な層序や実際的な地形等について状況把握が必要とされ、適宜設定したトレンチ及びテストピットによる試掘を実施した。層序等の確認では、主郭平坦地と東斜面及び東側平坦地は表土及び盛土下がおよそ遺構検出面（中世造成面）であり、西側副郭平坦地は現代の開田で削平されていた。堀跡は表土と盛土以下には多量の埴壁崩落土と自然流入の黒ボク土が互層となっていた。ただし、遺物は全体的に盛土（客土）中に繩文土器が僅かであったことから、表土と盛土の除去は堀跡も含め重機を使用することとした。

また、調査の進行と期間のこともあって、堀跡については埋土と遺物の状況から判断し、新しい堆積であると思われる上部を重機により掘削することとした。

精査は、堅穴状遺構等は4分法、土坑類は2分法、焼土遺構はサブトレンチによる断面の観察を行い、重複するものなどのプランの不明瞭なものについては状況把握のために適宜複数のベルトを設定して掘り下げを行った。切岸・土壙・堀跡などの長大な埴壁類については適宜トレンチ掘りによる断面観察を行った。柱穴は半削り・土層注記と柱痕・掘削時の特異な状況等は野帳等に記録した。

遺物の取り上げは、遺構内では遺構名と埋土層位を記入し、出土位置を計測した遺物については取り上げ番号も記入した。遺構外出土の縄文時代の遺物については出土位置・層位にはほとんど意味が認められない状況であったことから、曲輪や堀跡名と便宜的な範囲・位置等を記入して採り上げた。

### (2) 諸 記 錄

調査時に実際の測量等の作業を行う上で、必要な基準杭の測量打設は委託しており、基準点として使用した世界測地系による国家座標第X系における座標値は以下のとおりである。

|     |               |               |              |
|-----|---------------|---------------|--------------|
| 基点1 | X = 20473.000 | Y = 28200.000 | H = 229.215m |
| 基点2 | X = 20445.000 | Y = 28200.000 | H = 229.633m |

遺構の記録は実測図と写真撮影により、図で表現できない場合はフィールドカードに記録した。

遺構図は、遺構の平面形・焼土・炭化物範囲、遺物出土状況等を記録した平面図、及び遺構の断面形、埋土の堆積状態を記録した断面図と適宜エレベーション図も作成した。作図は、平面図については電子平板とトータルステーションにより、必要に応じて作図記録している。断面図は原則手描きの実測によるものとしたが、切岸・土壙・堀跡等の高低差が大きく長大で通常の手描き実測作業では手間がかかるものについては、効率と安全性を考え、電子平板を使用した光波測量の応用により作図した。

写真是、遺構検出時の確認状況、埋土堆積状態、遺物等の出土状況、完掘状態というように調査工程毎に必要に応じて撮影を行った。おもに記録保存用として6×7判のモノクロ銀塗写真と、普及活用を主体とした35ミリフィルム相当となる1300万画素のフルサイズデジタルカメラを使用した。

なお、調査開始前の遺跡全景写真是地形測量時のラジコンヘリで、調査終了後の全景写真はセスナによって、記録保存用として中判サイズのモノクロ銀塗写真と、普及活用を主体とした35ミリフィルム相当となる1300万画素のフルサイズデジタルカメラを用いて航空写真撮影を委託して行った。

### 3 整理作業の方法

図面等の点検は、原則現場で野外調査と並行して行った。遺物の洗浄については、洗浄用水の確保が困難なことと人員の不足から、ほとんどを11月以降埋文センターで行った。

遺構名は凡例に示した略号を用いて検出順に番号を付したが、精査中や整理段階で登録を抹消し欠番となったものや種別の変更が必要となったものがあり、作業上の混乱を避けるため、本報告に際して最終的に遺構名を変更している。

なお、作業上の旧遺構名と本報告に掲載した変更遺構名の対応表は第1表(p140)に示したとおりである。

#### (1) 遺構図

遺構図面は、点検後に手描き実測した断面図をデジタル化し、一部簡易写真測量用として撮影したデジタル写真データも取り込み、これらと電子平板測量によるデジタルデータを合成して作成した。

挿図中の縮尺は、堀跡・切岸等の長大なものは1/100・200、竪穴建物跡と竪穴状遺構は1/60、掘立柱建物跡は1/80、柱穴は1/80・100、土坑類と焼土遺構は1/40を原則とし、スケールを付している。

#### (2) 写真の整理

野外調査中に撮影した写真は、撮影順に対応するようにモノクロフィルムはネガアルバムに整理をして台帳に記載した。報告書に掲載した写真はデジタルカメラ(1300万画素フルサイズ)による撮影データを使用したものである。

測量図・写真的デジタルデータについては当センターの資料整理保管要綱に従って整理して、調査課普及資料室にあるPCの外付けハードディスクに保管している。

#### (3) 遺物の整理

遺物は洗浄後、全出土遺物を点検しつつ、遺構内外の種別毎に仕分けを行い、中世遺物を主体として接合・注記・復元と作業を進め、実測や採拓の必要なものを選択した後に登録した。金属製品については、岩手県立博物館でレントゲン写真を撮影し、これを参考しながら鋸落としを行っている。

報告書に掲載した遺物は、登録した中からさらに選択して実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。作業は、調査員が仕事の計画と指示・点検、作業員が実測・トレース等の実際の仕事というように分担している。

報告書に掲載した遺物の選択基準は、陶磁器類は近世以前のものすべてとし、鉄製品は実測可能なものを選択している。古銭と土・石製品は、全点を掲載した。縄文土器は破片実測可能なものと復元実測可能なものを選択した。

挿図中の縮尺は陶磁器類と砥石は1/3、鉄製品と土偶及び剥片石器は1/2、古銭は原寸、石臼は1/4を原則とした。

遺物写真是登録したものをデジタルカメラ(1300万画素フルサイズ)で当センターの写真技師が撮影し、その中から選択して掲載している。

(小山内・福島)

## 4 遺跡概観と基本層序

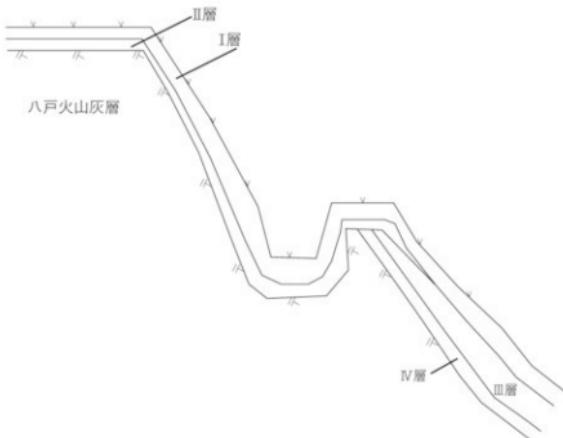
### (1) 遺跡概観

遺跡は、北側が安比川との標高差約30mの断崖、西側が安比川支流の吉田川に形成された谷で、谷に面する斜面は上位に帯曲輪と堀、下位は自然崖による防御とし、この谷向かいには吉田館跡が位置する。東側は館II遺跡（中館・陣場館）を隔てる沢があり、沢に向かい斜面上位は帯曲輪、下位は腰曲輪とそれぞれ堀と切岸の組み合わせで防御効果を上げ、南側は台地を区切る数条の堀で区画防御されている。本遺跡を含め、隣接する吉田館跡、中館・陣場館跡も北側の中心平野部側は自然地形の崖や谷・沢などを利用しつつ、切岸・空堀などで堅固な防御態勢となる繩張構造であるが、南側の山側に対しては数条の堀跡程度であり防御性は高くない状況を呈している。

### (2) 基本層序

遺跡の層序は、中世城館の特性上、削平と盛土による普請造成がされており、基本的にはI層（表土）およびII層（盛土）下は薄い旧表土が認められた部分もあるが、ほとんどは地山の一部であるV層（中揮火山灰層）VI層（八戸火山灰層）となっていた。II層（盛土）は山砂で50cmから1mの厚さで堆積、主郭から東側の堀、帯曲輪まで盛られており、伐採した樹木の年輪を参考とすると100年以上前に行われたものと思われ、遺跡は保安林となっていたことから、明治30年の森林法に関連して盛土された可能性が考えられる。東側沢筋では一部ではあるがIII層（黒ボク土）とIV層（褐色漸移層）が部分的に確認された。遺構検出面は、旧地形に対する削平の度合いにより異なるが、おおむね黄褐色の八戸火山灰上層と灰白色の八戸火山灰下層の両層である。

(小山内)

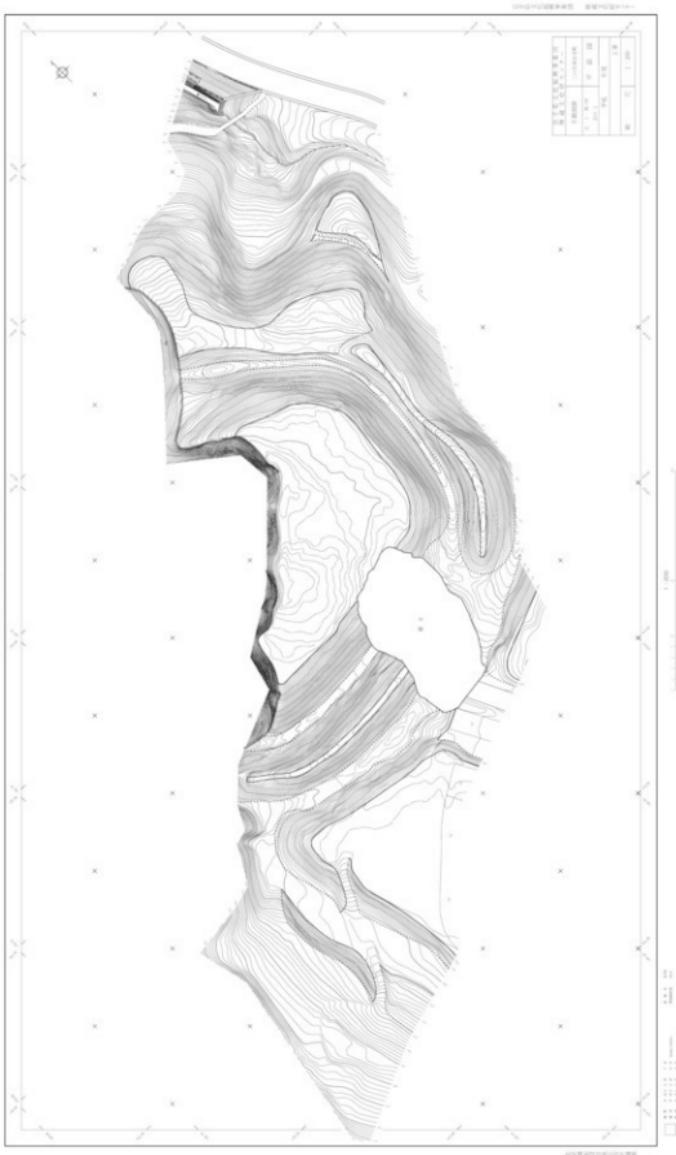


第6図 基本層序概念図

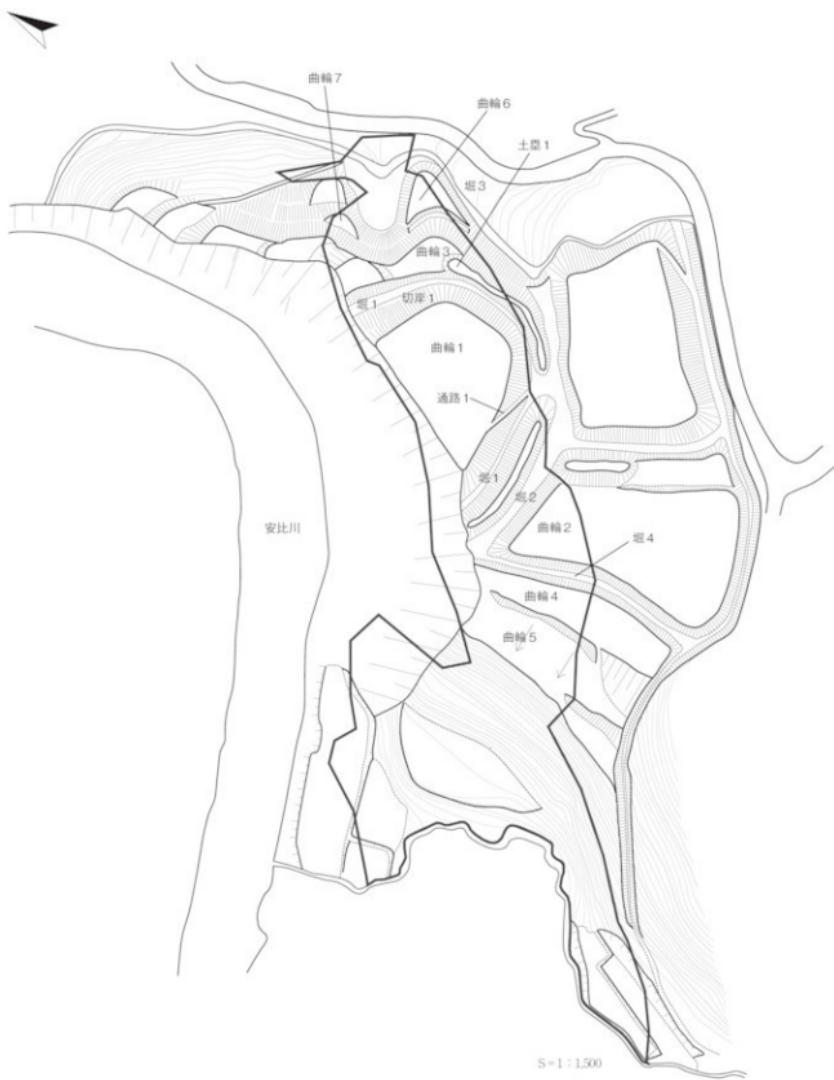


第7図 調査範囲

不動館跡地形図



第8図 調査前地形測量図



第9図 主要普請遺構配置

## IV 調査成果

### 1 調査概要

2箇年におよんだ調査の結果、中世の城館として残存良好な普請遺構および作事遺構を検出した。特に、普請遺構の凹凸は発掘調査前現況でも、その形状・規模が確認でき、事前におおよその縄張りを想定できた。しかし、完全埋没していた遺構や造り替えの遺構など、その詳細な様子が発掘調査で初めて明らかになった部分もある。

発掘調査で検出した普請遺構は、大小の曲輪7箇所、堀9条、切岸3箇所、通路2箇所である。これらで構成される縄張りは概ね3郭以上であり、調査区外に位置する他の施設を考えると、これらと連結された連郭式の城館の一部であることが想像される。

曲輪は、その大半が地山を削り出すことによって造成された平坦面を有する。切岸はいずれも自然地形を利用しているとみられるが、主要な曲輪に付随するものはいずれも人工的に急峻な傾斜となっている。堀は、最高位に位置する曲輪を囲む大規模なものが2重となっているほか、尾根を分断する堀切や、曲輪造成によって埋め戻された古期のものも含まれる。通路はもっとも注目される虎口部分の大半が調査区外であるためその全容は不明ながら、最高位の曲輪を囲む堀の切れ目やこれに続くスロープが認められるため、この通路が虎口に付隨する施設であると考えられる。

発掘調査で検出した作事遺構は、掘立柱建物22棟、堅穴建物23棟などである。これらは主郭と目される曲輪で多く検出され、その重複や建て替えから長期間の利用を考えられる。また、一部柵列のような区画施設(溝1・2)が縁辺に配されていることが明らかになった。

また、鉄に関する遺構もみられ、鍛冶炉が検出されたほか、鋳型と思われる遺物がいくつか出土していることから鍛冶のみならず、鑄造がおこなわれていた可能性を考えられる。

中世の出土遺物は多岐にわたるが、陶磁器類はわずかの出土にとどまっている。国産陶磁器は古瀬戸、瀬戸・美濃、常滑等の破片が出土した。輸入陶磁器は青磁片、白磁片がみられるが、染付は皆無である。出土鉄製品はその種類、量ともに豊富である。武器では鉄鎌が多く出土し、武具では小札や杏葉が出土した。杏葉は、全国でも出土事例の少ない型式のものであり、非常に貴重な遺物であることが判明した。また、武器・武具以外には工具、从具なども出土しており、この遺跡の多様性を窺うことができる。从具の中には鉄磬、経筒蓋、鐵錚などがあり、城館との関わりを考える必要がある。また、錢貨類は北宋錢中心であるが、の中には古くは漢錢の五銖錢、唐錢の開元通寶、新しいもので明錢の永樂通寶が出土している。石製品として、石臼や砥石等の出土があり、城館機能時に用いられていたものと推測される。出土遺物は中世全般にわたるものであり、これからもある程度長期の利用や活動が推測される。

中世以前の遺構として、縄文時代の陥し穴が20基検出され、縄文時代にはこの台地上が狩猟領域として利用されていたものとみられる。また、陥し穴と対応するかどうか不明であるが、縄文時代晚期の土器を含む遺物包含層を調査区東側で確認した。

本章、調査成果は全体的に中世の遺構・遺物を主として記載し、その後に縄文時代の遺構・遺物を補助的に記載することとする。なお、検出遺構は普請遺構毎に完結する体裁をとっているため、作事遺構の順序が普請遺構に伴って遺構名の順序が前後することをご了承願いたい。

(福島)

## 2 検出遺構

### (1) 曲輪

#### a) 曲輪1 (第10~14図、写真図版4・5)

〈位置・検出状況〉 調査区中央部、台地の北側端部に位置する平坦地で、北西側は安比川に面する崖、残る三方は切岸1および堀1によって区画防御されている。調査区内において最高位に位置し、眼下に流れる安比川との雑木林となっていたため、その根株によって調査困難な箇所も存在するが、後世の人工的な改変はほとんどなく、現況地形として遺存状況はかなり良好であった。繩張りから考えてこの城館の主郭と推定される曲輪である。表土およびII層を除去すると平坦面を検出できる。

〈形態・規模〉 平面形は安比川に面する北西側が現代までに幾度か崩落しているもと考えられ、特に北部の崩落が著しく、旧状を止めていない。しかし、周辺の地形状況と曲輪内の作事関連遺構の分布状況からは、南東側が狭いおよそ平面台形を呈していたと思われる。推定される規模は、東南縁長約22m、北東縁長約25m、南縁長約37m、北西縁長約47mで、面積は約1,130m<sup>2</sup>である。

〈造成・埋土〉 平坦地の造成はすべて削平によっており、段差や極端な傾斜もなく、概ね平坦である。標高は230mほどである。作事遺構の掘り込み面はV層の八戸火山灰上層および下層となっていった。中世の整地面上の層序は、10cmほどの現表土下に近代の客土と考えられる50cm~1mの山砂、そして部分的に薄い旧表土が認められるという状況であった。また、この造成面では繩文時代の陥し穴が検出されており、ここでみられる陥し穴は、いずれもおよそ30cmの深さである。その他周辺の残存良好な陥し穴の深さがおよそ1.2mであることを勘案すると、この曲輪平坦面は最低でも80cm程度地山を削平して造成されたものとみられる。

〈付属普請遺構〉 前述の通り、安比川側以外を切岸1および堀1が巡らされており、この曲輪を防御している。また、南側に位置する斜面では虎口から続くと考えられるスロープ（通路1）があり、通路東側縁辺には小規模な犬走り状の通路（通路2）が付属する。

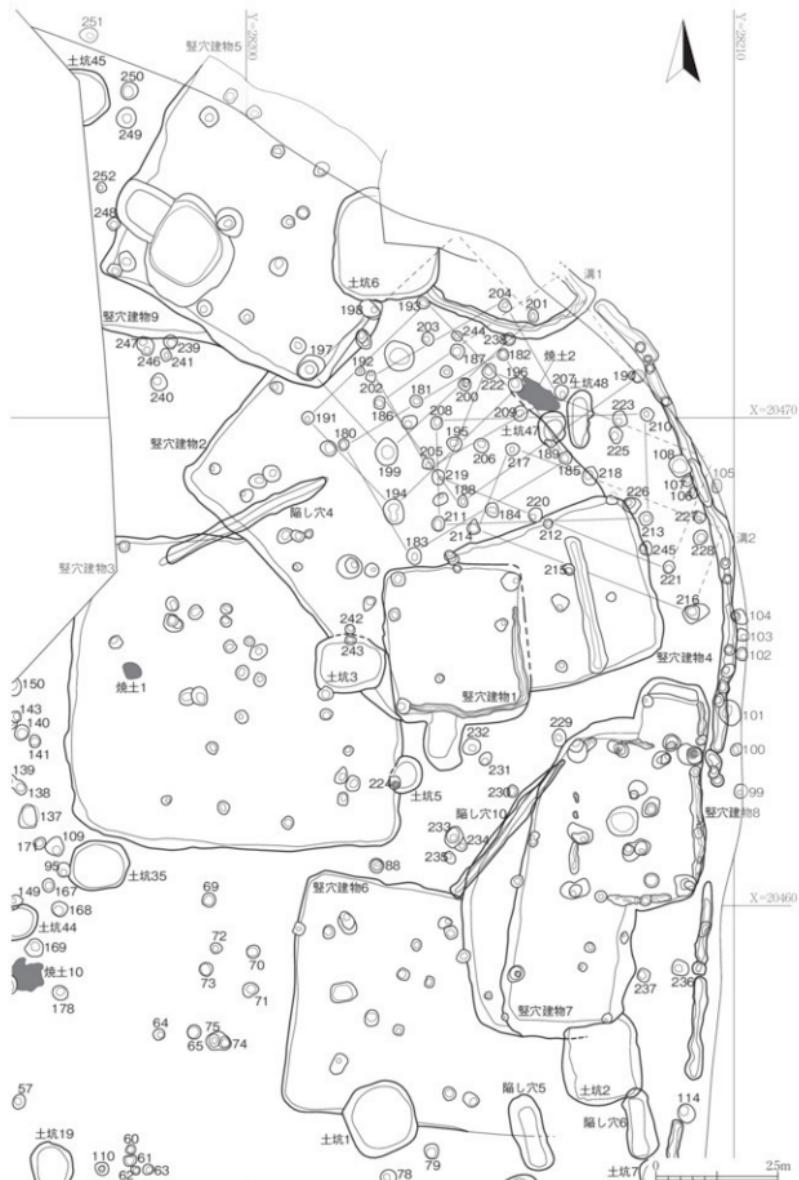
〈付属作事遺構〉 作事の痕跡としては、中央で掘立柱建物が集中して検出され、さらにこれを囲むようにその他全域を埋め尽くすように堅穴建物が重複しながら検出された。この曲輪で検出した掘立柱建物は20棟（掘立柱建物3~22）、堅穴建物20棟（堅穴建物1~20）、土坑29基（土坑1~21・24・30・32・35~37・44~46）、焼土遺構5基（焼土1~5）、溝2条（溝1・2）が検出されている。作事遺構は安比川で浸食された崖面付近まで続いており、曲輪北側が大規模に安比川へ崩落したことを物語っている。また、堅穴建物の空白域に掘立柱建物が繰り返し建てられており、これらがこの曲輪の主となる掘立柱建物の南端部であると仮定するならば、この安比川への崩落に曲輪機能時本来の中心部が含まれていると考えられる。堅穴建物は曲輪縁辺で途切れているものがあり、さらに曲輪東側縁辺では内部に柱穴条の凹凸がみられる溝1が認められる。これは縁辺に配された柵あるいは堀である可能性が考えられ、建物がこれより外方へ展開することにより、この曲輪の平面形態は最終段階であって、それより古い段階において東側へ平坦面が広がっていた時期が存在するものと考えられる。

〈出土遺物〉 II層客土中から繩文時代（晩期）や須恵器片（平安時代）の遺物が出土しているが、中世に属する遺物については検出面において若干量出土した。この曲輪での出土遺物の大半は堅穴建物より出土したもので、陶磁器・金属製品・石製品・鉄滓等である。

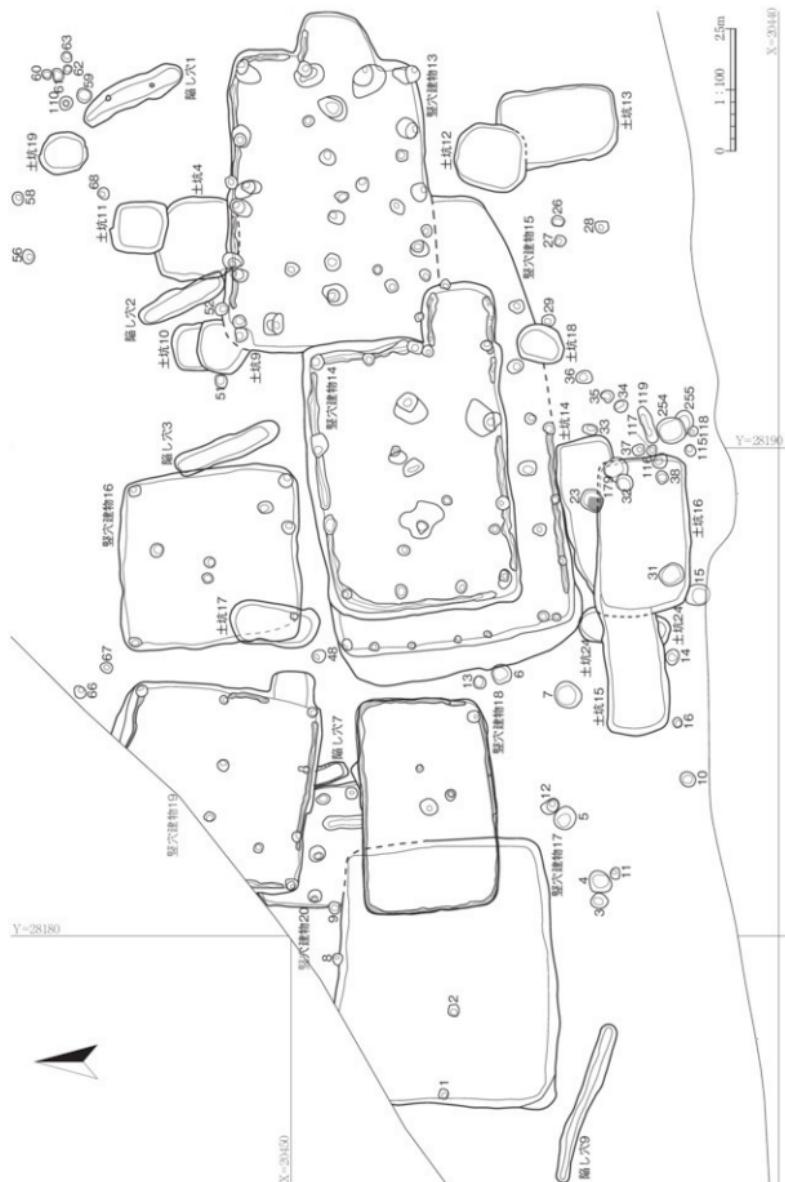
〈帰属時期〉 出土遺物はいずれも中世に属するが、その年代幅は大きく、鎌倉～戦国時代かけてのものである。掘立柱建物と堅穴建物の重複、堅穴建物の過度な密集等も加味すると中世初頭から戦国期



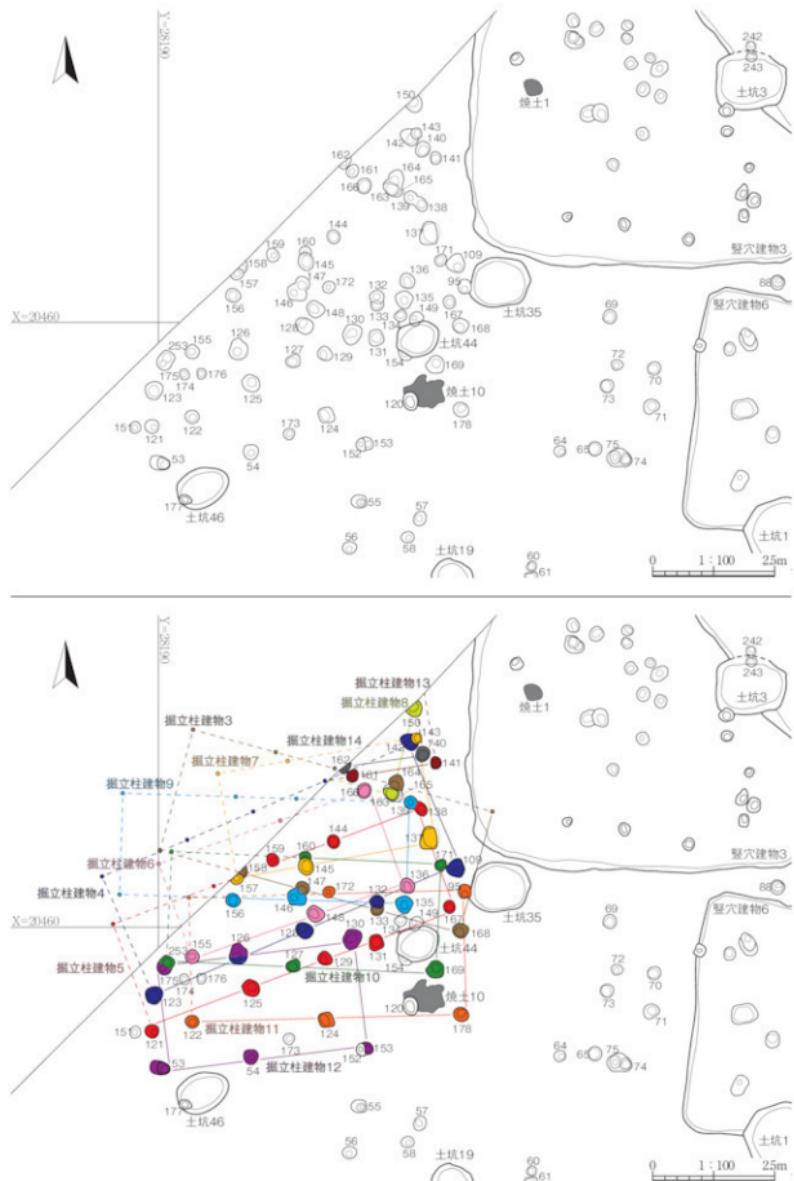
第10図 曲輪1全体図



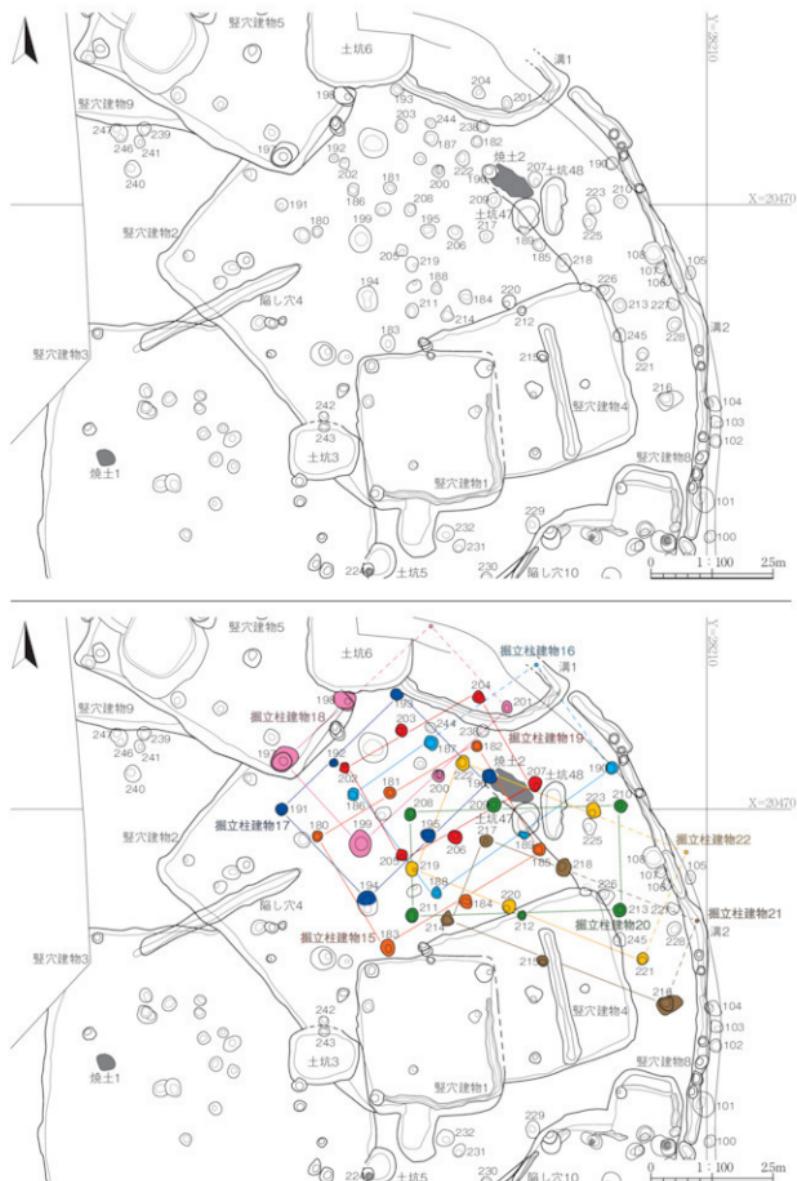
第11図 曲輪1分割図（北東部）



第12図 曲輪1分割図（南西部）



第13図 挖立柱建物3~14



第14図 挖立柱建物15~22

にかけて長期間にわたって利用された平坦面であったものと考えられる。このことは、先述した曲輪平坦面の縮小と併せ、この城館を考えるうえで重要である。

(小山内・福島)

#### 掘立柱建物3(第15図、写真図版52)

〈位置・検出状況〉曲輪1中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面で柱穴5個を検出した。

〈重複状況〉西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて多くの掘立柱建物と重複している。このエリアで重複していないのは掘立柱建物12のみであるが、近接関係にあるため同時に存在した可能性は低い。

〈平面形・規模〉推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は3間分の柱穴を調査区内で確認しているが、他の掘立柱建物規模を考えると4間まで延びる可能性が考えられる。1×4間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は5.1m、桁行12.9m、面積は65.79m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉WP133・147・158・164・168で構成されている。各柱穴の平面形は円形を基調とし、埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物4(第16図、写真図版52)

〈位置・検出状況〉曲輪1中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面で柱穴6個を検出した。

〈重複状況〉西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は4間分の柱穴を調査区内で確認している。1×4間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は5.3m、桁行13.5m、面積は推定で71.55m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉WP109・123・126・128・142で構成されている。各柱穴の平面形は円形を基調とし、埋土はいずれも黒褐色シルトである。

〈遺物・時期〉時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物5(第17図、写真図版52)

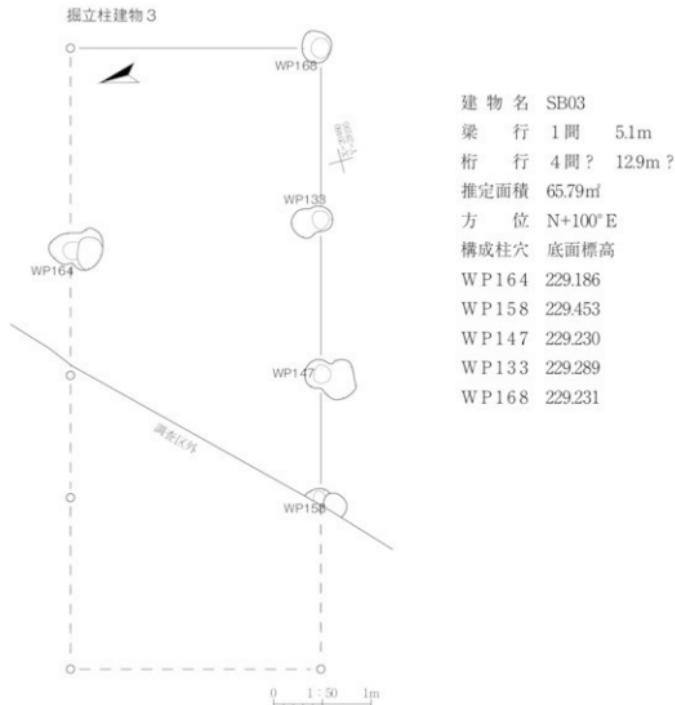
〈位置・検出状況〉曲輪1中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面で柱穴8個を検出した。

〈重複状況〉西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は4間分の柱穴を調査区内で確認している。1×4間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は4.5m、桁行13.4m、推定面積は60.30m<sup>2</sup>である。桁行の柱間寸法は梁側がそれぞれ広くなっている。

〈柱穴〉WP121・125・129・131・138・144・159・167から構成されている。各柱穴平面形は円形であり、埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。



第15図 掘立柱建物3（曲輪1）

## 掘立柱建物6（第18図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉曲輪1中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面で柱穴5個を検出した。

〈重複状況〉西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は3間分の柱穴を調査区内で確認している。1×2間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は4.1m、桁行9.1m、面積は37.31m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉WP136・148・155・166で構成されている。埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

## 掘立柱建物7（第19図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉曲輪1中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上

面で柱穴5個を検出した。

〈重複状況〉 西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

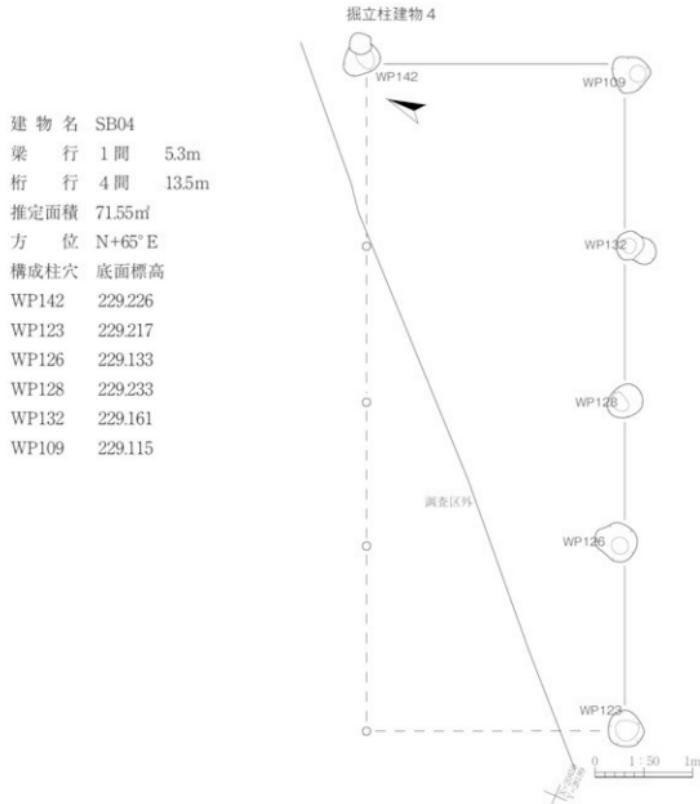
〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は2間分の柱穴を調査区内で確認しているが、柱配置をみると桁行はそれ以上に延びる可能性が考えられる。1×2間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は4.7m、桁行8.2m、面積は38.54m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉 WP137・143・145・157から構成されている。埋土はいざれも黒褐色シルトを基調とする。

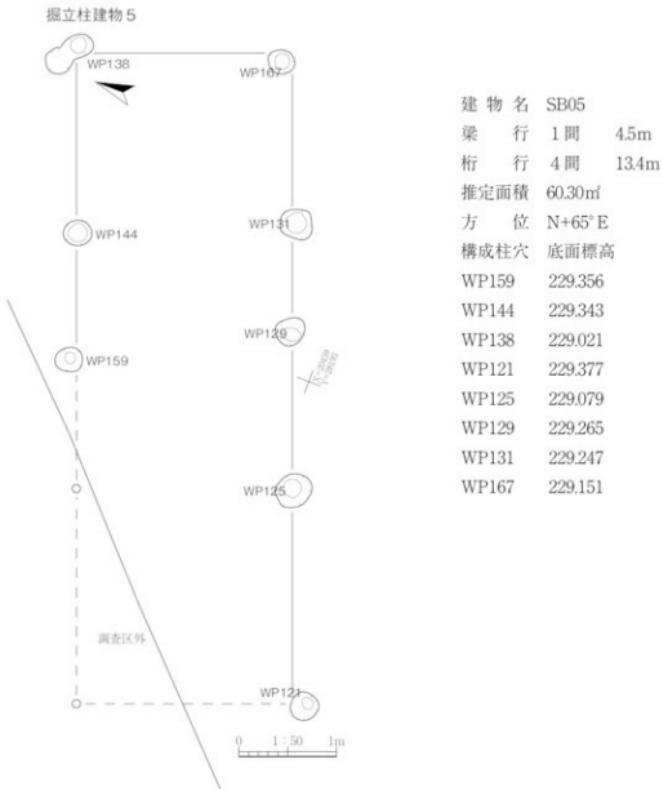
〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかつたが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物 8 (第20図、写真図版52)

〈位置・検出状況〉 曲輪1中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上



第16図 掘立柱建物 4 (曲輪1)



第17図 掘立柱建物5（曲輪1）

面で柱穴5個を検出した。

〈重複状況〉 西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

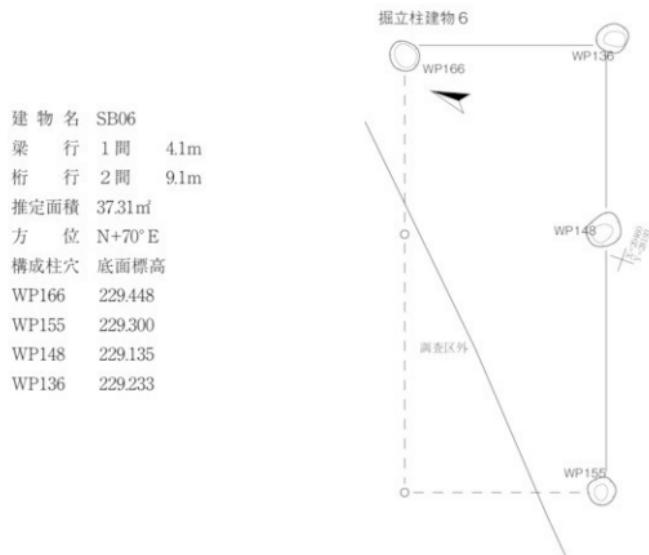
〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間であると考えられ、桁方向の柱穴は調査区外へ及ぶため不明ある。他の掘立柱建物規模を考えると3~4間まで延びる可能性が考えられる。

〈柱穴〉 WP150・163で構成されている。埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

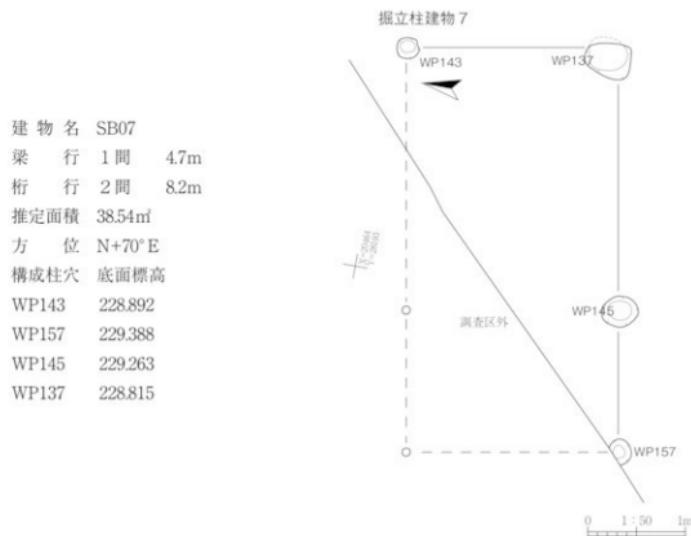
〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物9（第21図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪1中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上



第18図 掘立柱建物6（曲輪1）



第19図 掘立柱建物7（曲輪1）

面で柱穴 5 個を検出した。

〈重複状況〉 西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は 1 間、桁行は 2 間分の柱穴を調査区内で確認しているが、他の掘立柱建物規模を考えると 3 ~ 4 間まで延びる可能性が考えられる。1 × 3 間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は 4.2m、桁行 11.2m、面積は 46.62m<sup>2</sup>であるがあくまでも推定の域を出ない。

〈柱穴〉 WP135・139・146・156 から構成されている。埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物 10（第22図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪 1 中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。II 層除去後のIV 層上面で柱穴 5 個を検出した。

〈重複状況〉 西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は 1 間、桁行は 3 間分の柱穴を調査区内で確認している。1 × 3 間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は 4.4m、桁行 10.9m、面積は 47.96m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉 WP127・160・169・171・253 で構成されている。埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物 11（第23図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪 1 中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。II 層除去後のIV 層上面で柱穴 5 個を検出した。

〈重複状況〉 西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は 1 間、桁行は 2 間分の柱穴を調査区内で確認している。1 × 2 間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は 5.1m、桁行 11.2m、面積は 57.12m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉 WP95・122・124・172・178 で構成されている。埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物 12（第24図、写真図版52）

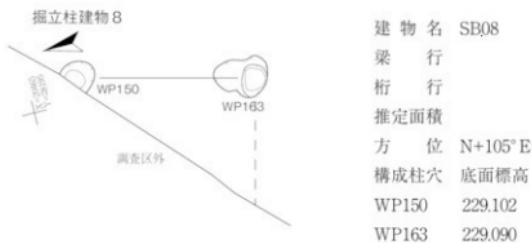
〈位置・検出状況〉 曲輪 1 中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。II 層除去後のIV 層上面で柱穴 6 個を検出した。

〈重複状況〉 西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

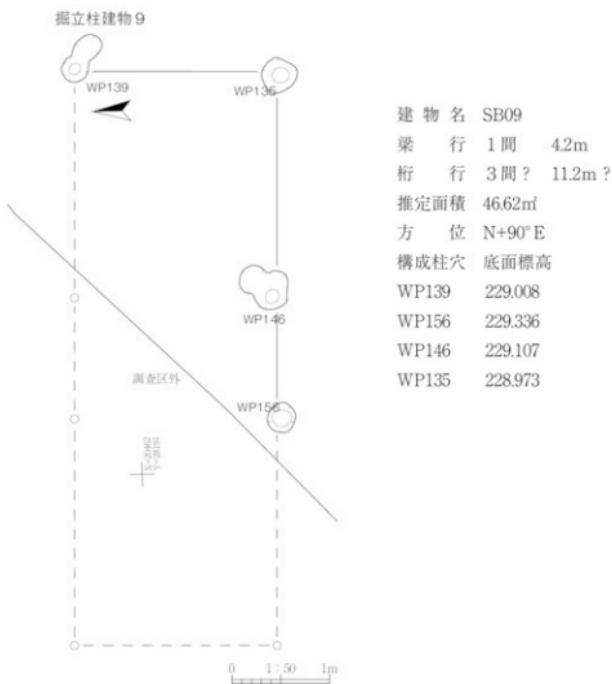
〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は 1 間、桁行は 2 間の建物である考えられる。梁行の柱間寸法は 4.3m、桁行 8.0m、面積は 34.40m<sup>2</sup>である。平面形態はやや歪な形態である。

〈柱穴〉 WP53・54・126・130・153・175 から構成されている。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

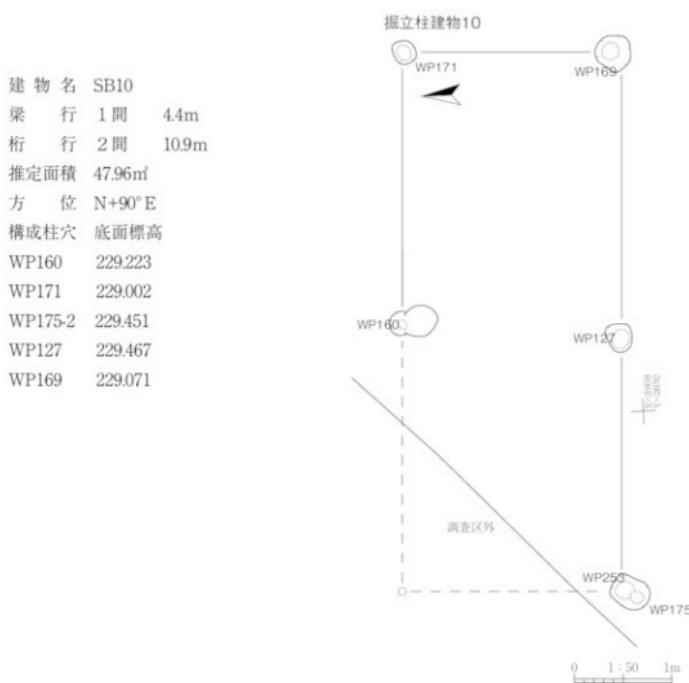
〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の



第20図 掘立柱建物 8（曲輪 1）



第21図 掘立柱建物 9（曲輪 1）



第22図 掘立柱建物10（曲輪1）

掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物13（第25図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪1中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。Ⅱ層除去後のⅣ層上面で柱穴5個を検出した。

〈重複状況〉 堅穴建物3と重複しているものとみられるが、新旧は判然としない。さらに、西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。推定で平面長方形を呈するものとみられるが、2個のみの柱穴から建物の形態や規模を推定することはできない。ただし、他の掘立柱建物の軸方向規則性を考慮すると2個の柱穴は桁行を示している可能性が考えられる。

〈柱穴〉 WP140・161で構成されている。埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。



第23図 掘立柱建物11（曲輪1）

## 掘立柱建物14（第26図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪1中央西寄りに展開する西側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面で柱穴2個を検出した。

〈重複状況〉 西側掘立柱建物群の中で平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられるが、2個のみの柱穴から建物の形態や規模を推定することはできない。ただし、他の掘立柱建物の軸方向規則性を考慮すると2個の柱穴は桁行を示している可能性が考えられる。

〈柱穴〉 WP162・141で構成されている。柱穴埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

## 掘立柱建物15（第27図、写真図版52）

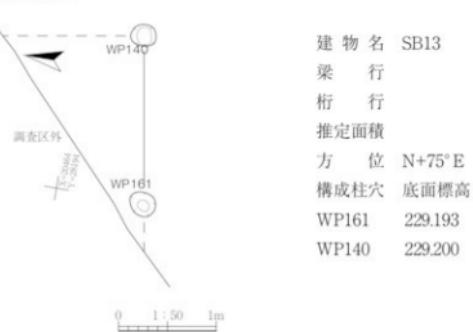
〈位置・検出状況〉 曲輪1東端に展開する東側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面および縦穴建物2床面で柱穴5個を検出した。

掘立柱建物12



第24図 掘立柱建物12（曲輪 1）

掘立柱建物13



第25図 掘立柱建物13（曲輪 1）

〈重複状況〉 堪穴建物2・土坑47と重複しているものとみられるが、新旧は判然としない。さらに、東側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は2間分の柱穴を調査区内で確認している。1×2間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は5.2m、桁行7.5m、面積は39.00m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉 WP133・147・158・164・168で構成されている。埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかつたが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物16（第28図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪1東端に展開する東側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面および堪穴建物2床面で柱穴5個を検出した。

〈重複状況〉 堪穴建物2・土坑47・48等の遺構と重複しているものとみられるが、新旧は判然としない。さらに、東側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は2間分の柱穴を考えられる。1×4間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は5.3m、桁行9.0m、面積は47.70m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉 WP186・187・188・189・190で構成されている。埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかつたが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物17（第29図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪1東端に展開する東側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面および堪穴建物2床面で柱穴6個を検出した。

〈重複状況〉 堪穴建物2と重複しているものとみられるが、新旧は判然としない。さらに、東側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は2間分の柱穴を調査区内で確認している。1×2間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は5.0m、桁行6.8m、面積は34.00m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉 WP191～196で構成されている。柱穴埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかつたが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

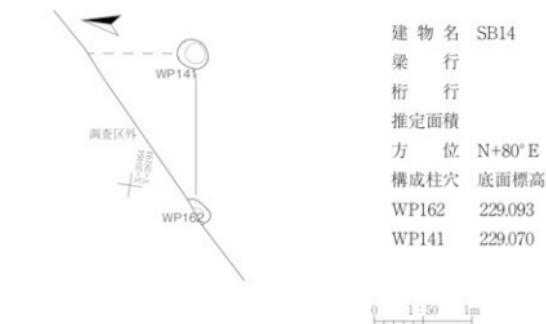
#### 掘立柱建物18（第30図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪1東端に展開する東側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面および堪穴建物2・5床面で柱穴5個を検出した。

〈重複状況〉 堪穴建物2・5・土坑6等の遺構と重複しているものとみられるが、新旧は判然としない。さらに、西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

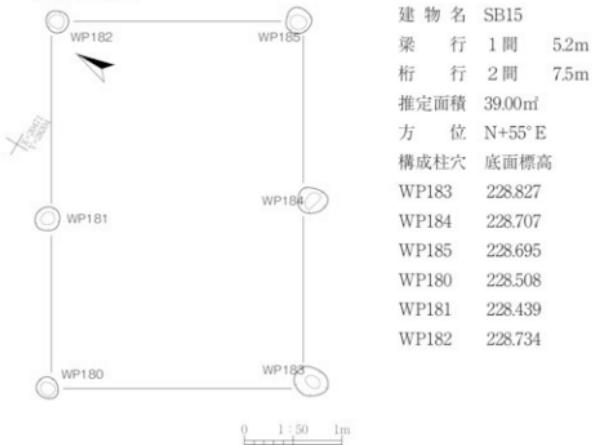
〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は2間分の柱穴を調査区内で確認している。1×2間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は4.8m、桁行8.0m、面積は34.40m<sup>2</sup>である。

掘立柱建物14



第26図 掘立柱建物14（曲輪1）

掘立柱建物15



第27図 掘立柱建物15（曲輪1）

〈柱穴〉 WP197～201で構成されている。柱穴埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物19（第31図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪1東端に展開する東側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面および堅穴建物2床面で柱穴6個を検出した。

〈重複状況〉 堅穴建物2と重複しているものとみられるが、新旧は判然としない。さらに、東側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられるが、やや柱筋に不整合が認められる。梁行は1間、桁行は2間分の柱穴を確認している。1×2間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は4.4m、桁行5.6m、面積は24.64m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉 WP202～207で構成されている。柱穴埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物20（第32図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪1東端に展開する東側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面および堅穴建物1・2床面で柱穴6個を検出した。

〈重複状況〉 堅穴建物1・2と重複しているものとみられるが、新旧は判然としない。さらに、東側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は3間分の柱穴を調査区内で確認している。1×2間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は6.3m、桁行8.5m、面積は36.55m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉 WP208～213で構成されている。柱穴埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物21（第33図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪1東端に展開する東側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面および堅穴建物2・4床面で柱穴5個を検出した。

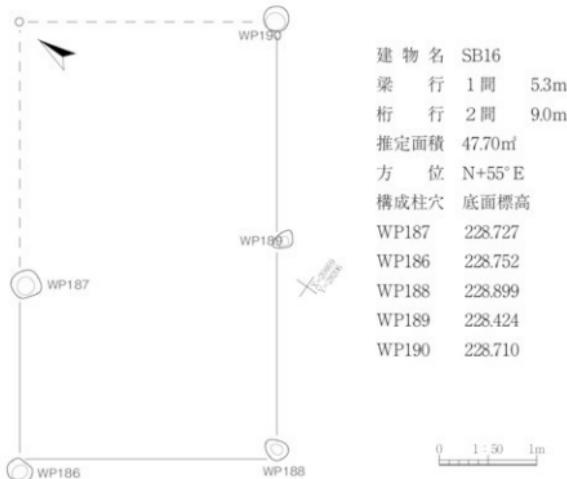
〈重複状況〉 堅穴建物2・4と重複しているものとみられるが、新旧は判然としない。さらに、東側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行はやや広い柱間ではあるが2間分の柱穴を確認している。1×2間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は3.7m、桁行9.3m、面積は34.41m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉 WP214～218で構成されている。柱穴埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

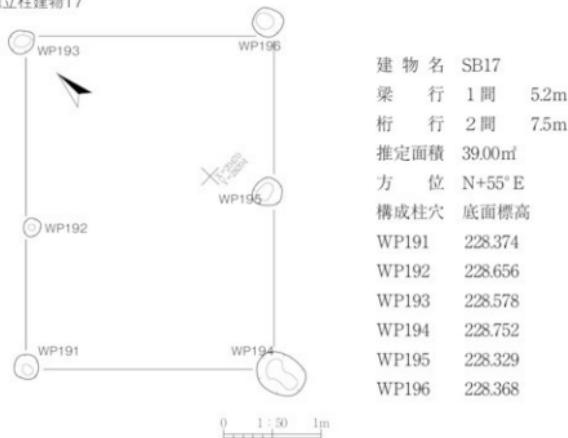
〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

掘立柱建物16



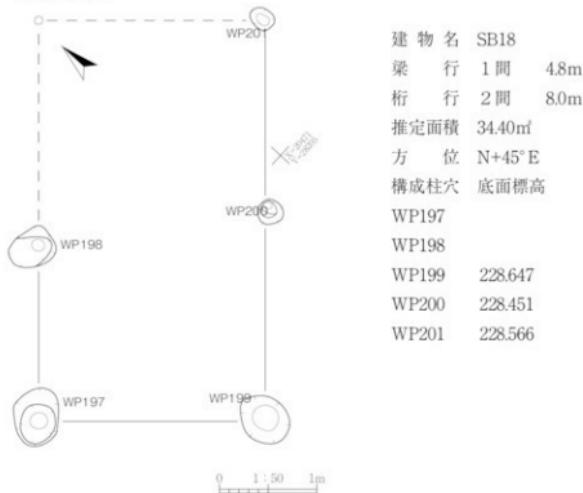
第28図 掘立柱建物16（曲輪1）

掘立柱建物17



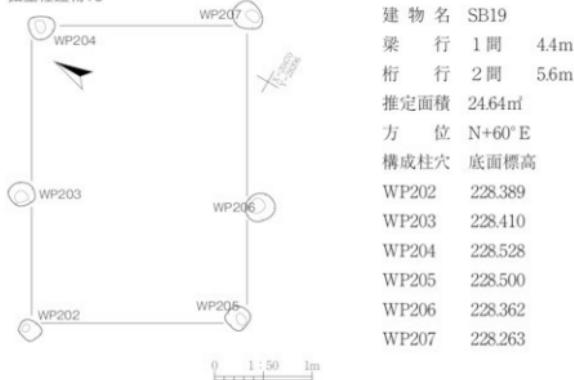
第29図 掘立柱建物17（曲輪1）

掘立柱建物18



第30図 掘立柱建物18（曲輪1）

掘立柱建物19



第31図 掘立柱建物19（曲輪1）

### 掘立柱建物22（第34図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 曲輪1東端に展開する東側掘立柱建物群の中にある。II層除去後のIV層上面および縦穴建物2床面で柱穴5個を検出した。

〈重複状況〉 縦穴建物3と重複しているものとみられるが、新旧は判然としない。さらに、西側掘立柱建物群の中にあっては平面プランにおいて大半の掘立柱建物と重複している。

〈平面形・規模〉 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は3間分の柱穴を調査区内で確認しているが、他の掘立柱建物規模を考えると4間まで延びる可能性が考えられる。1×4間の掘立柱建物を想定した場合、梁行の柱間寸法は4.7m、桁行10.0m、面積は47.00m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉 WP219~223から構成されている。柱穴埋土はいずれも黒褐色シルトを基調とする。

〈遺物・時期〉 時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

(福島)

### 竪穴建物1（第35図、写真図版32）

〈位置・検出状況〉 曲輪1北東側に位置し、IV層上面で検出した。

〈重複状況〉 竪穴建物2・4と重複しており、これら2棟の竪穴建物を切る。

〈平面形・規模〉 330×285cmの隅丸長方形を呈する。南壁のやや西寄りに100×80cmの張出部を伴う。長辺の軸方位はおよそ北-南にある。

〈埋土〉 暗褐色の单層である。

〈壁・床面〉 本体部の壁はいずれも直立気味に立ち上がり、深さ50cmを測る。張出部は床面から緩やかな立ち上がりで、スロープ状となっており、出入り口機能を有していたものと考えられる。床面は概ね平坦である。西壁から南壁にかけてL字状に壁溝が巡る。床面では柱穴が7個確認された。いずれも円形を基調とするもので、配置からP1・2・5は本遺構に伴う主柱穴と判断される。

〈遺物〉 埋土上位より古瀬戸と思われる合子蓋片、埋土下位より銭貨（開元通寶）、床面より不明鉄製品2点が出土した。

〈時期〉 中世の竪穴建物であり、遺構の形態から15世紀以降であると考えられる。

### 竪穴建物2（第36図、写真図版33）

〈位置・検出状況〉 曲輪1北東側に位置し、IV層上面で検出した。

〈重複状況〉 竪穴建物1・3・4・5、土坑3と重複する。新旧関係は、竪穴建物1・4・5、土坑3に切られ、竪穴建物3を切る。

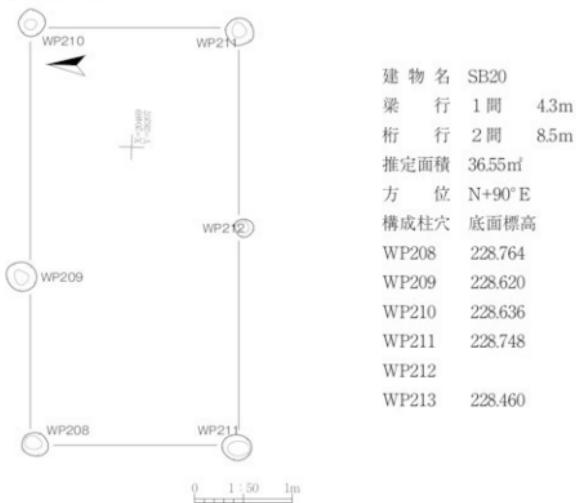
〈平面形・規模〉 重複遺構が著しく、またそれらに切られる部分が多いため、全容は判然としないが、推定すると670×610cmの長方形を基調とするものと思われる。

〈埋土〉 13層に細分される。中位から下位にかけて、廃棄焼土・炭化物が堆積することから、人為堆積と判断した。

〈壁・床面〉 残存する北西・南西壁は床面から直立気味に立ち上がり、深さ20cmを測る。北東壁は立ち上がりが判然としない。床面は概ね平坦である。中央には歪な形状に焼土が広がる。暗赤褐色の比較的強い焼成で、焼成深度は10cmに及ぶ。周辺から鋳型片が出土していることから、铸造関連の焼成痕の可能性が考えられる。

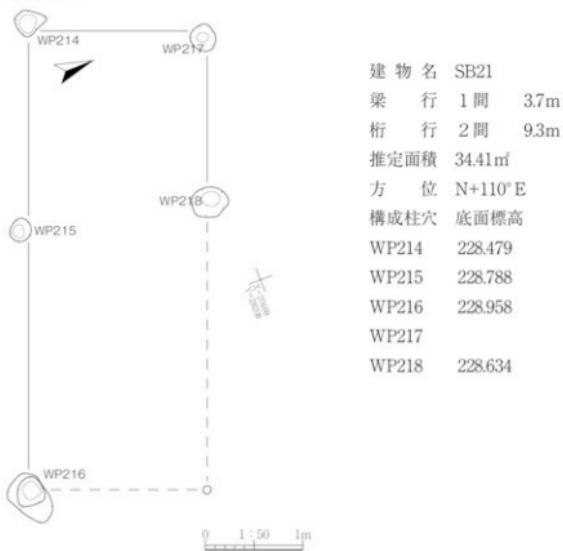
〈柱穴〉 本遺構に伴うものとして18個記載したが、配置等に規則性はなく、本遺構に帰属するかは不明と言わざるを得ない。掘立柱建物を構成するものの可能性も否めない。

掘立柱建物20



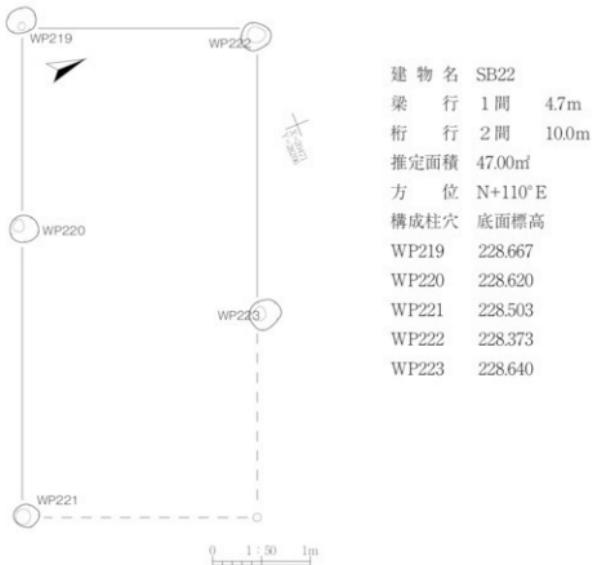
第32図 掘立柱建物20（曲輪1）

掘立柱建物21



第33図 掘立柱建物21（曲輪1）

## 掘立柱建物22



第34図 掘立柱建物22（曲輪1）

残存する北西・南西壁は床面から直立気味に立ち上がり、深さ20cmを測る。床面は概ね平坦である。中央よりやや南側に焼土が広がる。また、柱穴（状土坑）が30～40個検出されたが、本遺構に伴うものは少なく、すべて本遺構より新しい可能性が高い。

（遺物）埋土下位より砥石が1点、北側焼土面より鉄釘が1点出土した。

（時期）中世の竪穴建物であり、遺構の形態や規模から15世紀以前であると考えられる。

## 竪穴建物3（第37図、写真図版34）

（位置・検出状況）曲輪北東側、IV層面で検出した。

（重複状況）竪穴建物1・2・焼土1・土坑3・5と重複し、本遺構がすべてに切られる。状況的にはこの区域で一番旧い遺構と判断される。

（平面形・規模）残存部から推定すると一辺640cmの隅丸方形を呈するものと思われる。

（埋土）9層に細分される。埋土の大半を構成するのは暗褐色土であるが、全体に還元化した焼土ブロックが散在しており、人為的に廃棄されたものと判断される。

（壁・床面）いずれの壁もほぼ直立し、深さ15～35mを測る。床面は概ね平坦で、赤褐色の焼土が散在する。比較的焼成深度のある北東側の焼土断面のみ図示したが、この他はいずれも厚さ5cmに満たない焼成の弱い焼土である。

（柱穴）25個検出されたが、本遺構に伴うものか判断できない。

〈遺物〉 埋土上位より青磁碗1点、鉄鏃1点、鉄釘1点、鉄製紡錘車1点、埋土中位より鉄鏃1点、鉄製紡錘車1点、埋土下位より細板状不明鉄製品、砥石1点、床面より刀子1点等が出土した。

〈時期〉 中世の堅穴建物であり、遺構の形態や規模から15世紀以前であると考えられる。また、16世紀頃の青磁碗が埋土上位より出土していることから、これよりも古い段階に機能していた遺構であると思われる。

#### 堅穴建物4（第35図、写真図版35）

〈位置・検出状況〉 曲輪1北東側、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 堅穴建物1・2と重複する。堅穴建物1に切られ、堅穴建物2を切る。

〈平面形・規模〉 重複により西側は残存しないが、推定すると一辺400×380cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。長軸方向はおよそ北東-南西にある。

〈埋土〉 6層に細分される。主体は黒褐色土で、全体にぶい黄褐色～黄橙色土が混入する人為堆積と思われる。

〈壁・床面〉 残存する壁はいずれも直立し、深さ35cmを測る。床面は概ね平坦で、焼土が2カ所で確認できる。また、東壁と平行する溝が東寄りの部分で確認できる。長さ280cm×幅30cm、深さ20cmである。間仕切り溝の可能性が考えられる。

〈柱穴〉 本遺構に伴うものは4個と判断した。P5・7は隅に設置された主柱穴か。

〈遺物〉 埋土より鉄鏃1点、床面より鉄釘1点、不明鉄製品1点が出土した。

〈時期〉 中世の堅穴建物であり、遺構の形態や規模から15世紀以降であると考えられる。

#### 堅穴建物5（第38図、写真図版36）

〈位置・検出状況〉 曲輪1北東側、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 堅穴建物2・堅穴建物9・土坑6と重複する。新旧関係は堅穴建物2・9を切り、土坑6に切られる。また、北東側は埋土が残存しないため判然としないが、堀1および切岸1によって切られた可能性がある。

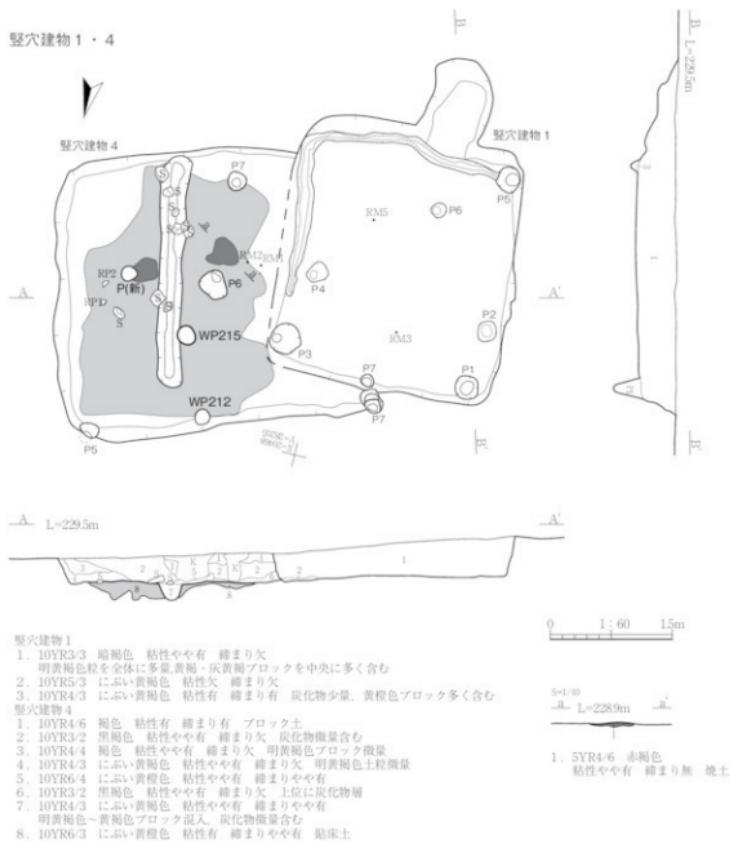
〈平面形・規模〉 560×480cm以上の隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと思われる。長軸方向はおよそ北西-南東にある。

〈埋土〉 39層に細分されるが、床面土坑（K1）を含めた層位である。廃絶後、人為的に埋め戻されたと考えられ、廃棄焼土等を含む層や黄褐～明黄褐色土層が互層となって見られる。

〈壁・床面〉 残存する壁は床面からほぼ直立し、深さ30～50cmを測る。床面は概ね平坦で、中央より斜面下方部に貼床が施されている。中央部には2か所焼土が散在する。焼土はどちらも不整形に広がり、厚さ5～7cmの明褐色を呈する。また、西側には土坑（K1）が確認された。K1の平面形は主体となる略円形の土坑の北西部にテラス状の楕円形の土坑が合わさった8の字状を呈する。これらに新旧関係は認められず、底面に段差をもつ一連の床面土坑と判断した。規模は開口部約270×200・100cm、床面からの深さは約60～80cmを測る。埋土は上述した様に、住居本体と同時に人為的に廃棄されたものと考えられ、中位にはアクリ状の灰白色土や還元色を帯びた焼土ブロック等も確認された。

〈柱穴〉 14個が確認されたが、規模・深さともそれぞれ異なり、本遺構に伴うかの判別は付かない。P2・5は各々本遺構の床面施設を切ることから、本遺構より新しい可能性が高い。P15・16は柱痕跡が認められた。

〈遺物〉 検出面より不明鉄製品1点、埋土上位より鉄鏃1点、埋土下位より小刀1点、鉄錘1点、鉄



第35図 壇穴建物1・4（曲輪1）

釘1点が出土した。

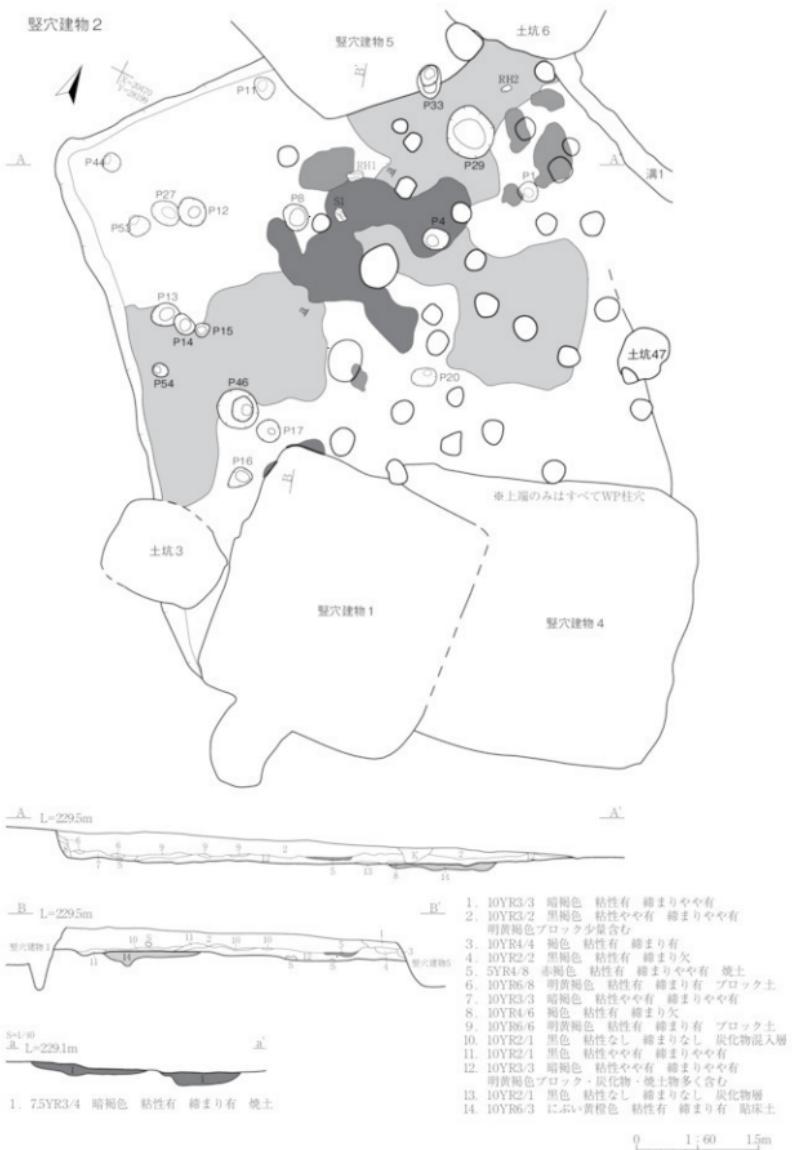
（時期）中世の壇穴建物であることは疑いないが、戦国期の普請によって切られていっていることを考える  
と16世紀より古い可能性が考えられる。

#### 壇穴建物6（第39図、写真図版37）

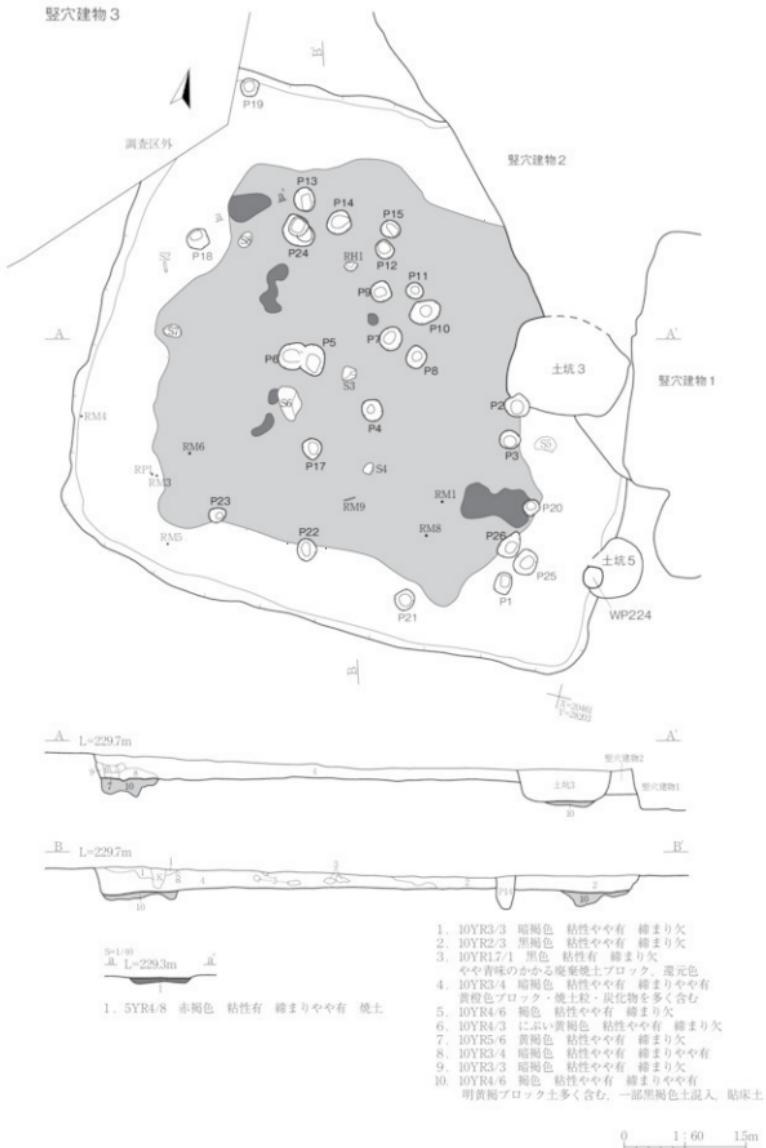
（位置・検出状況）曲輪1東側、IV層面で検出した。

（重複状況）壇穴建物7・土坑1・陥し穴5と重複し、壇穴建物7・土坑1に切られ、陥し穴5を切る。

（平面形・規模）残存部から推定すると550×490cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。長軸方向



第36図 縦穴建物2（曲輪1）



第37図 竪穴建物3（曲輪1）

はおよそ西-東にある。

〈埋土〉 5層に細分される。下層においては地山と同色の砂質土となる。上位から下位にかけて焼土ブロックが中心寄りに堆積しており、人為堆積と判断される。

〈壁・床面〉 残存する壁は直立気味に立ち上がり、西壁で深さ25cmを測る。傾斜の下方側にあたる東へ向かうに従い、壁は残存しない。床面は概ね平坦で、北から西壁沿いにL字状に貼床が認められる。焼土が數カ所で確認できたが、いずれも焼成が弱く、厚さ1cm程度である。また、西側中央で土坑(K1)が確認された。約55×40cmの楕円形を呈し、深さは約10cmを測る。

〈柱穴〉 14個が確認されたが、本遺構に伴うかの判別は付かない。

〈遺物〉 貼床より鉄鎌1点、絹筒蓋1点が出土した。

〈時期〉 中世の堅穴建物であり、遺構の形態や規模から15世紀以前であると考えられる。

#### 堅穴建物7（第40図、写真図版38）

〈位置・検出状況〉 曲輪1東側、IV層面で検出した。当初は重複する3棟の堅穴状遺構と考えていたが、断面の堆積状況などから西側部分は本遺構に伴う棚状施設と判断した。

〈重複状況〉 堅穴建物7・8の新旧関係は断面状況から判別は付かなかったが、平面形状や総合的な観点から、堅穴建物8の方が新しい可能性が考えられる。このほか、堅穴建物7に堅穴建物6・土坑2・陥し穴10が重複するが、いずれもこれが切っている。

〈平面形・規模〉 650×250cmの隅丸長方形を呈する。上記のとおり、西側に一段高い棚状の施設が付属する。棚状部分は不整形に取り付き、500×90cmを測る。

〈埋土〉 にぶい黄褐色土が主体で、所々に暗褐色土が混入する人為堆積と思われる。

〈壁・床面〉 いずれの壁も床面から直立し、深さは本体部分で約45cm、棚状部分で約30cmを測る。床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉 本遺構内で9個が確認されたが、本遺構に伴うものなのかは不明である。

〈遺物〉 埋土上位より不明銅製品1点、埋土下位より鉄釘1点、錢貨（大觀通寶）1点出土した。

〈時期〉 中世の堅穴建物であり、遺構の形態や遺構の重複から15世紀以降であると考えられる。

#### 堅穴建物8（第40図、写真図版39）

〈位置・検出状況〉 曲輪1東側に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 堅穴建物7・8の新旧関係は断面状況から判別は付かなかったが、平面形状や総合的な観点から、堅穴建物8の方が新しい可能性が考えられる。

〈平面形・規模〉 390×260cmの隅丸長方形を呈し、北壁東側に120×150cmの張出部を伴う。

〈埋土〉 3層に細分される。下位には黄褐色土と褐色土が交互に堆積する層が見られることから、人為堆積と思われる。

〈壁・床面〉 本体部の壁はいずれも直立気味に立ち上がり、深さ30~70cmを測る。張出部は床面から緩やかな立ち上がりで、スロープ状となる。出入り口か。床面は概ね平坦である。東壁と南壁沿いにはしっかりとした壁溝が確認されるが、西壁・北壁側は部分的である。中央部には土坑(K1)が確認された。径約60cmの円形を呈し、断面形は椀状をなし、深さは最深部で25cmを測る。

〈柱穴〉 17個確認された。配置からP2・5・8・17は四隅、P1・10・16・6・7は辺を構成、P4・13は中間を構成する柱穴と思われる。P3・12は配置から堅穴建物7に伴う可能性が考えられる。また、P2・10は柱痕跡が確認されている。

〈遺物〉埋土下位より鉄鎌が1点出土した。

〈時期〉中世の堅穴建物であり、遺構の形態や遺構の重複から15世紀以降であると考えられる。

#### 堅穴建物9（第38図、写真図版40）

〈位置・検出状況〉曲輪1北東側、IV層面で検出した。当初は堅穴建物5を含む単独の堅穴状遺構と考えたが、床面位置が異なること、床面にある地床炉が堅穴建物5に切られること、断面観察の結果などから、重複する2棟の遺構と判断した。なお、大部分が調査区外へと続くため、確認できたのは南壁の一部である。

〈重複状況〉堅穴建物5と重複し、これに切られる。

〈平面形・規模〉大半が調査区外へと続くため詳細は不明で、南壁のみが確認された。おそらく方形状を呈するものと考えられる。残存する辺から、軸方向は北-南にあるものと思われる。

〈埋土〉暗褐色土の單層である。

〈壁・床面〉床面から直立し、深さは18cmを測る。床面はほぼ平坦で、地床炉が確認された。SKI05に切られるため全容は不明だが、50×30cmの範囲に焼土が広がっている。

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉中世の堅穴建物であり、遺構の形態や遺構の重複から15世紀以前であると考えられる。

#### 堅穴建物11（第41図、写真図版40）

〈位置・検出状況〉曲輪1南東側に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉なし。

〈平面形・規模〉570×190cmの長楕円～長方形を呈する。長軸方向はおよそ北-南にある。

〈埋土〉黒褐色土の單層である。

〈壁・床面〉壁は床面から直立気味に立ち上がり、深さは15～20cmを測る。床面はやや凹凸が認められるものの、概ね平坦である。

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉中世の堅穴建物であると考えられるが、大半が切岸の造成によって消失していることから15世紀以前の遺構である可能性が高い。

#### 堅穴建物13（第42図、写真図版41）

〈位置・検出状況〉曲輪1南側中央に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉堅穴建物14・15、土坑4・9と重複する。新旧関係は堅穴建物14>13>15、土坑4>堅穴建物13>土坑9となる。

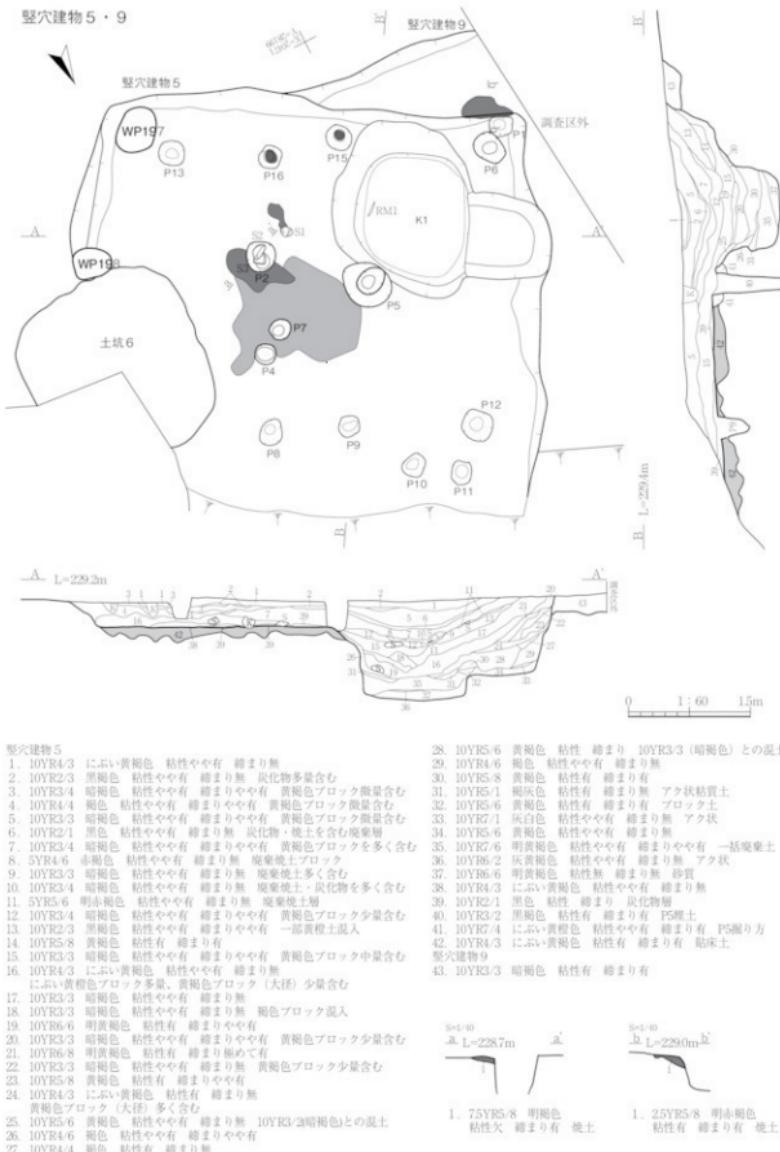
〈平面形・規模〉630×400cmの隅丸長方形を呈し、西壁の中央に100×160cmの張出部を伴う。主軸方向はおよそ西-東にある。

〈埋土〉11層に細分される。暗褐色土が主体である。

〈壁・床面〉本体部の壁はいずれも直立気味に立ち上がり、斜面上方の北壁で深さ約35cm、下方の南壁で約10cmを測る。張出部は床面から一段高く、スロープ状に立ち上がる。床面は概ね平坦で、中央から西寄りに貼床が施されている。北壁と東壁の一部に壁溝が見られる。

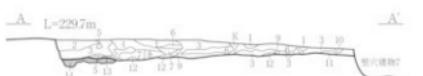
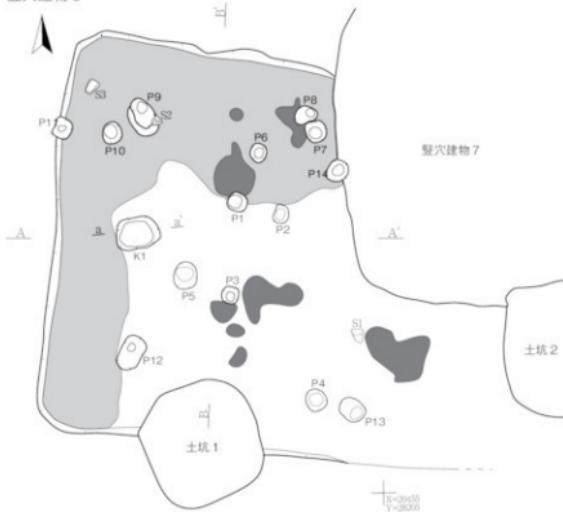
〈柱穴〉29個が確認された。西壁を除く壁沿いにと中央長軸線上に柱穴が配置されているものと思われる。なお、北壁では同規模のものが隣接して確認されている（P14・28、P11・15、P29・31）。

## 豎穴建物 5・9



第38図 豊穴建物 5・9 (曲輪 1)

堅穴建物 6

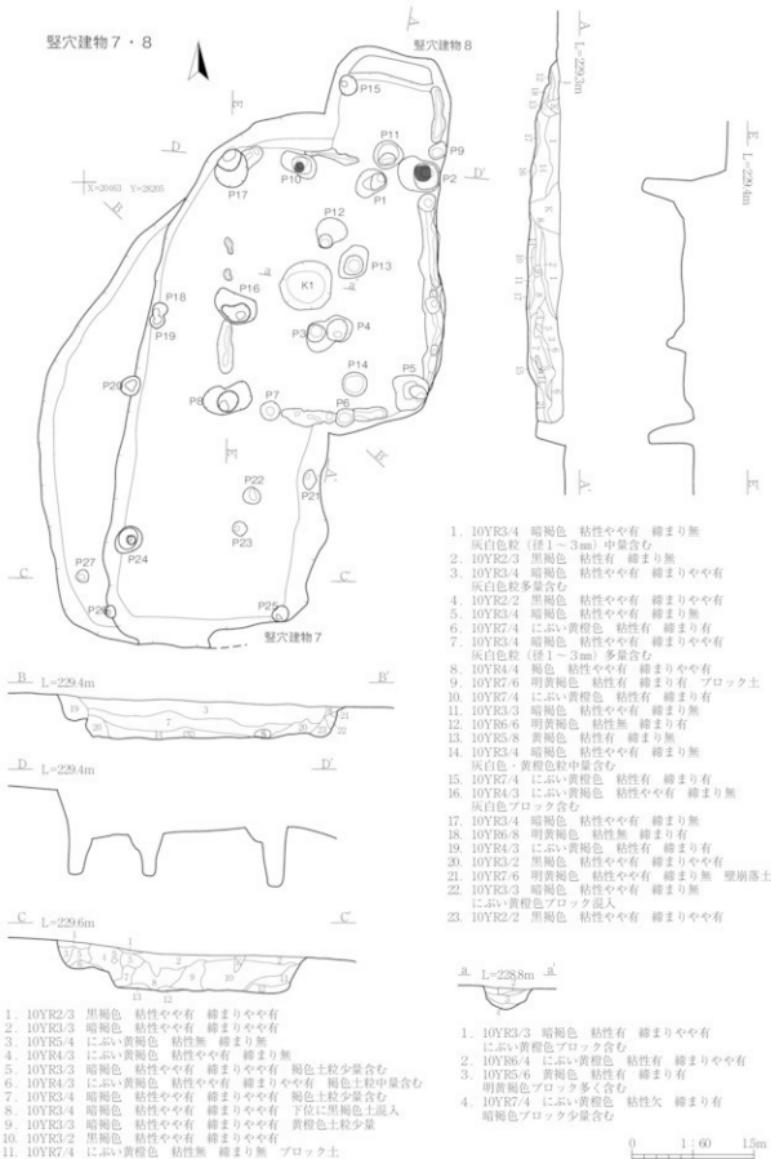


1. 10YR3/2 黒褐色 粘性やや有 繊まりや有  
炭化物微量含む

1. 10YR2/2 黒褐色 粘性やや有 繊まり無
2. 10YR3/3 黒褐色 粘性やや有 繊まり無
3. 10YR2/2 黒褐色 粘性やや有 繊まり無
4. 10YR4/4 黒褐色 粘性やや有 繊まり無
5. 10YR4/4 黒褐色 粘性やや有 繊まり無
6. 5YR4/8 黒褐色 粘性やや有 繊まり有  
亜酸性土プロック
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色  
粘性やや有 繊まりやや有
8. 10YR3/4 黒褐色 粘性やや有 繊まり無  
明黄色ブロック少量含む
9. 10YR6/6 明黄褐色 粘性有 繊まりやや有
10. 10YR3/3 黒褐色 粘性やや有 繊まり無
11. 10YR2/1 黒色 粘性有 繊まりやや有  
プロック土
12. 10YR5/8 黄褐色 粘性やや有 繊まりやや有  
炭化物含む
13. 10YR5/8 黄褐色 粘性やや有 繊まりやや有  
褐色ブロック少量含む粘土土

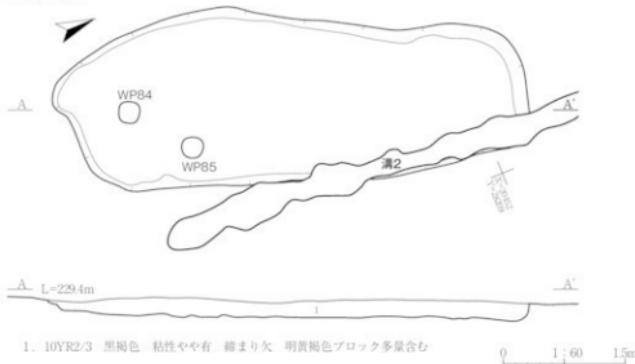
0 1:60 15m

第39図 堅穴建物 6 (曲輪 1)



第40図 縫穴建物 7・8 (曲輪1)

## 竪穴建物11



第41図 竪穴建物11（曲輪1）

各々の新旧関係は不明だが、建て替えが行われた可能性が高い。

〈遺物〉 埋土より鉄鏃（20）、埋土下層より常滑窯片（20）、床面より白磁碗片（1）が出土している。

〈時期〉 中世の竪穴建物であり、床面出土白磁碗を考慮すると13～14世紀であると考えられる。ただし、遺構の重複が著しいため他の遺構の残存物である可能性も考えられる。

## 竪穴建物14（第43図、写真図版42・43）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南側中央に位置し、IV層面で検出した。重複遺構が著しく、風倒木痕が存在したため、新旧関係の把握は断面ベルトで行うこととした。そのため、東壁は床面からのわずかな立ち上がり部分のみ残存する。

〈重複状況〉 竪穴建物13・15と重複し、新旧関係は $14 > 13 > 15$ となる。

〈平面形・規模〉  $570 \times 410\text{cm}$ の隅丸長方形を呈し、西壁の南側に $120 \times 160\text{cm}$ の張出部を伴う。主軸方位はおよそ西南→東にある。

〈埋土〉 4層に細分される。暗褐色土が主体である。

〈壁・床面〉 本体部の壁はいずれも直立気味に立ち上がり、深さ約35～55cmを測る。床面は概ね平坦で、張出部の北側以外すべてを巡る。張出部北側が出入り口である可能性が高い。

〈柱穴〉 本遺構内で確認された柱穴は21個である。壁沿いには同一間隔にと中央長軸線上のもの（P9・13）が本遺構を構成するものと推察される。

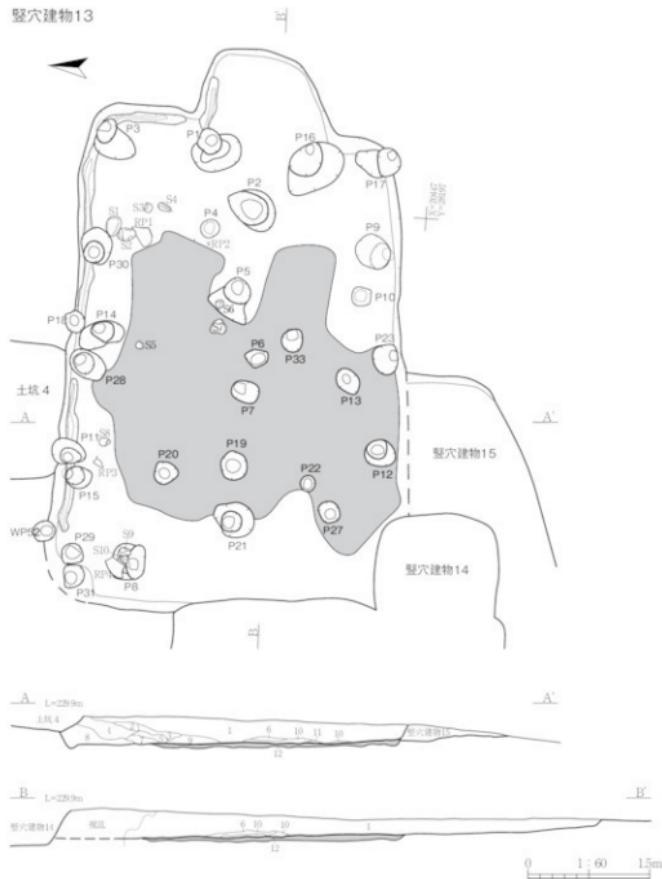
〈遺物〉 埋土より常滑窯片（19）、埋土上位より鉄鏃（28）、埋土下位より鉄鐸（45）・鉄鎌（87）・鑄造鉄片（88）が出土している。

〈時期〉 中世の竪穴建物であり、遺構の重複から13～14世紀であると考えられる。

## 竪穴建物15（第43図、写真図版42・43）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南側中央、IV層面で検出した。

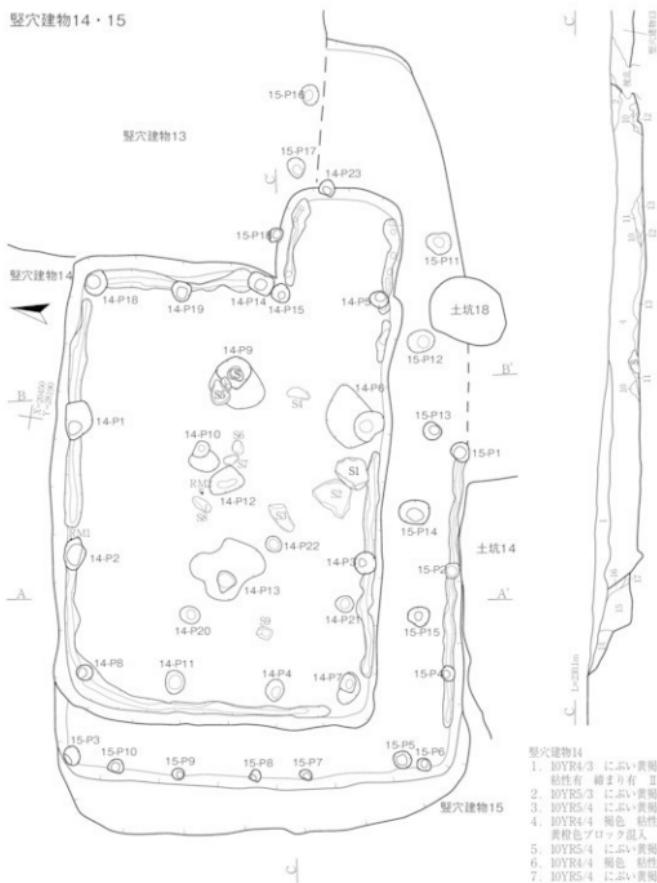
〈重複状況〉 竪穴建物13・14、土坑14・18と重複する。すべての遺構に本遺構が切られる。



1. 10YR3/4 暗褐色 粘性無 繋まりやや有 明黄褐色土粒多く含む
2. 10YR4/3 にふい黄褐色 粘性やや有 繋まりやや有 浅黄橙色ブロック少量含む
3. 10YR3/4 暗褐色 粘性やや有 繋まりやや有
4. 10YR4/4 暗褐色 粘性やや有 繋まり無
5. 10YR4/4 暗褐色 粘性やや有 繋まり無
6. 10YR6/3 にふい黄褐色 粘性やや有 繋まりやや有
7. 10YR6/3 暗褐色 粘性やや有 繋まりやや有
8. 10YR6/6 暗褐色 粘性無 繋まり無
9. 10YR4/4 暗褐色 粘性やや有 繋まりやや有
10. 10YR2/3 暗褐色 粘性やや有 繋まりやや有 浅黄橙色ブロック少量含む
11. 10YR6/8 明黄褐色 粘性有 繋まり有 ブロック土
12. 10YR4/3 にふい黄褐色 粘性有 繋まりやや有 一部灰白色土躉状に混入、貼床土

第42図 堅穴建物13（曲輪 1）

## 堅穴建物14・15



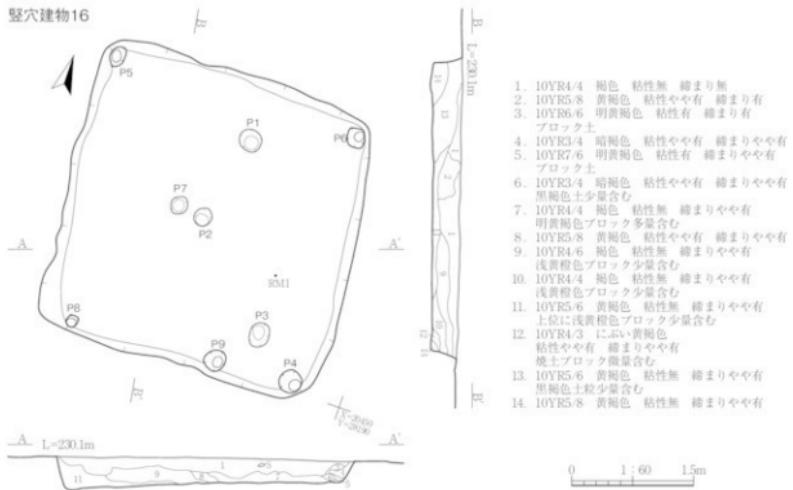
## 堅穴建物14

1. IORY4-2 にひい黄褐色 粘性有 繕まり欠
2. IORY5-2 にひい黄褐色 粘性やや有 繕まり欠
3. IORY5-4 にひい黄褐色 粘性やや有 繕まり欠
4. IORY4-4 黄褐色 粘性有 繕まり有  
米白色プロック土混入
5. IORY5-4 にひい黄褐色 粘性やや有 繕まり欠
6. IORY4-4 黄褐色 粘性やや有 繕まりやや有
7. IORY5-4 にひい黄褐色 粘性やや有 繕まり欠
8. IORY5-4 黄褐色 粘性やや有 繕まりやや有  
灰白色プロック多量含む
9. IORY5-4 にひい黄褐色 粘性やや有 繕まり欠
10. IORY7-4 にひい黄褐色 粘性やや有 ブロック土
11. IORY7-4 にひい黄褐色 粘性やや有 繕まり欠
12. IORY4-3 にひい黄褐色 粘性欠 繕まりやや有  
粘性やや有 繕まり欠 ブロック土
13. IORY8-3 浅黄褐色 粘性欠 繕まり欠  
ブロック土

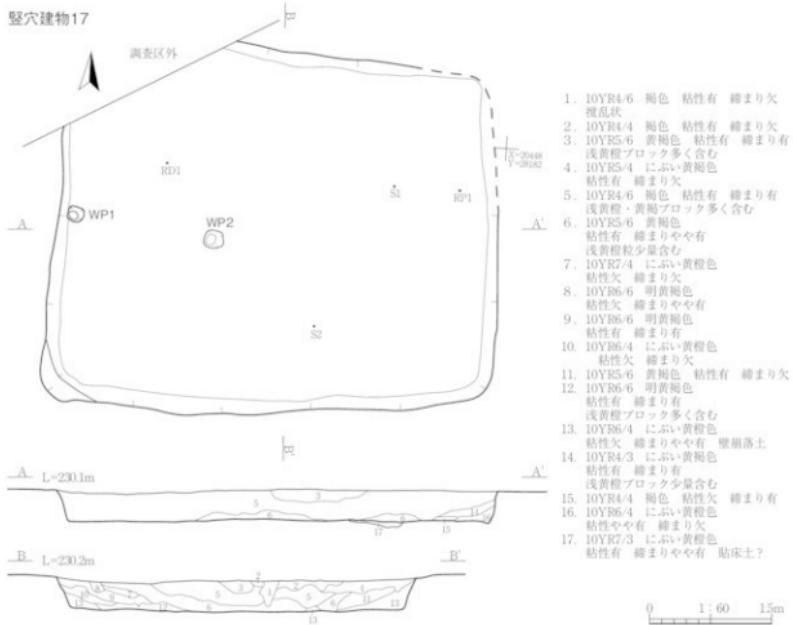
## 堅穴建物15

14. IORY7-4 にひい黄褐色 粘性欠 繕まり欠
15. IORY5-3 にひい黄褐色 粘性欠 繕まり欠
16. IORY6-4 にひい黄褐色 粘性欠 繕まり欠  
粘性やや有 繕まりやや有
17. IORY8-2 灰白色 粘性有 繕まり有  
IORY4-3 にひい黄褐色 粘性欠 繕まり欠  
塑性埋土

第43図 堅穴建物14・15（曲輪1）



第44図 穫穴建物16（曲輪 1）



第45図 穫穴建物17（曲輪 1）

〈平面形・規模〉重複が著しいため全容は不明だが、970×500cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。

〈埋土〉5層に細分される。にぶい黄褐～黄橙色土が主体である。

〈壁・床面〉全容が確認できる西壁は、床面から直立するが、中位より上半部で緩やかに立ち上がり。当初は壁の崩落部分と考えたが、棚状に取り付く施設の可能性もある。南壁においては、立ち上がりは確認できなかった。床面は概ね平坦で、南側の一部に壠溝が認められる。

〈柱穴〉壁溝内と西壁沿いに柱穴が15個検出された。本遺構を構成するものと思われる。なお、堅穴建物13内で確認されたP16・17・18と14-P14または14-P15は、本遺構を構成する中間柱の可能性が考えられる。

〈遺物〉埋土より砥石（124）、埋土上位より鉄釘（93）、埋土下位より鉄釘（104）が出土している。

〈時期〉中世の堅穴建物であり、遺構の重複から13～14世紀であると考えられる。

#### 堅穴建物16（第44図、写真図版44）

〈位置・検出状況〉曲輪1南側中央に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉土坑17と重複する。新旧関係は土坑17が本遺構を切る。

〈平面形・規模〉一辺370cmの隅丸方形を呈する。軸方向はおよそ北～南にある。

〈埋土〉14層に細分される。褐色土を主体とするが、浅黄橙色土ブロック等を混入する複雑な層位状態で人為堆積と判断される。

〈壁・床面〉壁はいずれも直立気味に立ち上がり、深さ約25～40cmを測る。床面は概ね平坦である。

〈柱穴〉9個確認された。四隅に位置するもの（P4・5・6・8）については本遺構を構成するものと判断される。

〈遺物〉埋土下位より皇宗通寶（112）、政和通寶（117）が出土している。

〈時期〉中世の堅穴建物であるが、詳細な時期は不明である。

#### 堅穴建物17（第45図、写真図版45）

〈位置・検出状況〉主郭部南側中央に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉堅穴建物18・20と重複、これらを切る。

〈平面形・規模〉約550×450cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向はおよそ西～東にある。

〈埋土〉16層に細分される。南側の層位が複雑になる傾向にあり、状況から人為堆積と考えられる。

〈壁・床面〉壁はいずれも直立気味に立ち上がり、深さは約35～40cmを測る。床面は概ね平坦である。なお、断面図において17層とした層位は貼床土の可能性があるが、平面的にははっきりと認識できなかった。

〈柱穴〉2個が確認されたが、本遺構に伴うかの判別は付かない。

〈遺物〉埋土中位より常滑甕片（14）が出土している。

〈時期〉中世の堅穴建物であるが、詳細な時期は不明である。

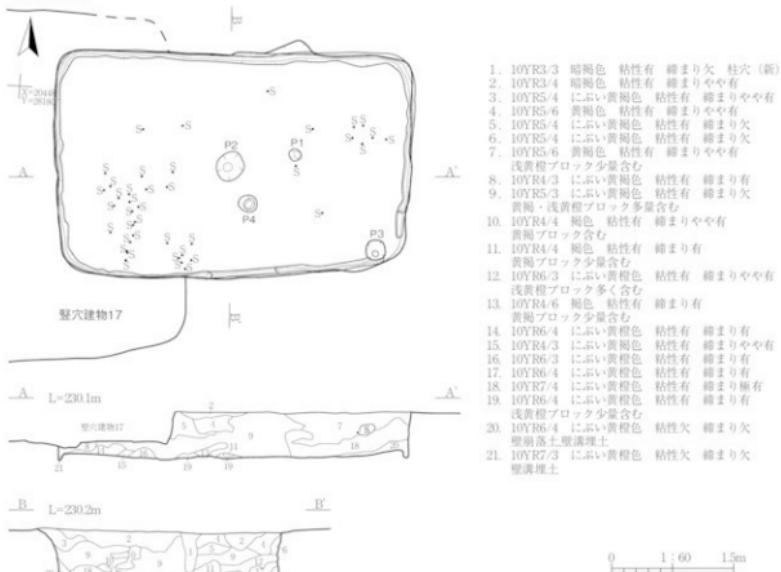
#### 堅穴建物18（第46図、写真図版46）

〈位置・検出状況〉曲輪1南西側に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉堅穴建物17・20と重複し、堅穴建物17に切られ、堅穴建物20を切る。

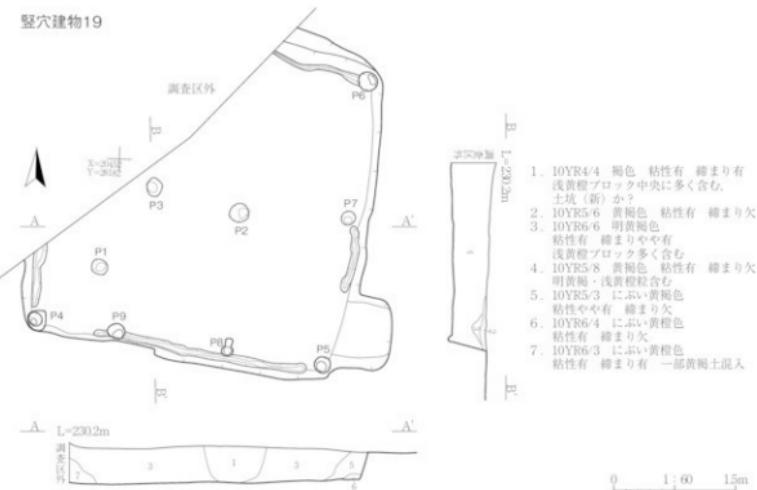
〈平面形・規模〉西側は重複により上半部は残存しない。約440×280cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向はおよそ西～東にある。

## 竪穴建物18

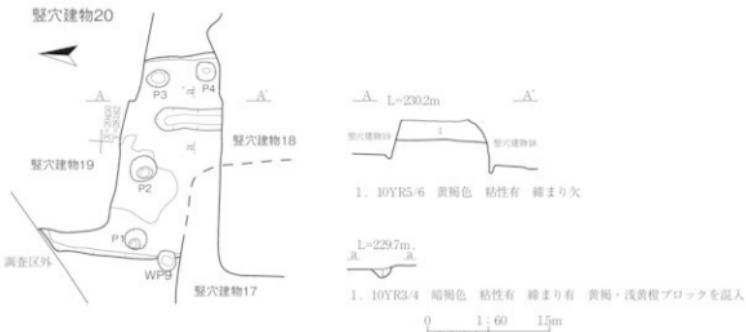


第46図 竪穴建物18（曲輪1）

## 竪穴建物19



第47図 竪穴建物19（曲輪1）



第48図 壁穴建物20（曲輪1）

〈埋土〉 20層に細分される。にぶい黄褐色土を主体とし、にぶい黄橙色土が混在する人為堆積と判断した。  
 〈壁・床面〉 壁はいずれも直立気味に立ち上がり、北壁のみ崩落により上半部が外傾する。深さは約15~55cmが残存する。床面はほぼ平坦で、しっかりとした壁溝が全周する。

〈柱穴〉 4個が確認されたが、南東隅のP3以外の配置は判然としない。

〈遺物〉 埋土中位より治平元寶（115）が出土している。

〈時期〉 中世の壁穴建物であるが、詳細な時期は不明である。

#### 壁穴建物19（第47図、写真図版47）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南西側に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 壁穴建物20、陥し穴7と重複し、これらを本遺構が切る。

〈平面形・規模〉 北西側は調査区外のため不明だが、残存部より一辺約410cmの隅丸方形を呈するものと思われる。東壁の南側には約65×90cmの張出部を伴う。主軸方向はおよそ西・東にある。

〈埋土〉 5層に細分される。地山と近似する黄褐色土を主体とするが、自然堆積か人為堆積かの判別は付かない。なお、1層とした部分は、本遺構より新しい土坑の可能性がある層であるが、平面上では認識できず、断面ベルトでのみ確認がされたものである。

〈壁・床面〉 残存する部分の壁はいずれも直立し、深さは約35~50cmを測る。張出部は床面からスロープ状に緩やかに立ち上がる。出入口か。床面は概ね平坦で、部分的ではあるが壁溝が残存壁沿いで確認できる。

〈柱穴〉 9個が確認された。配置からP1以外はすべて本遺構を構成する柱穴と判断される。

〈遺物〉 埋土上位より不明銅製品（180）が出土している。

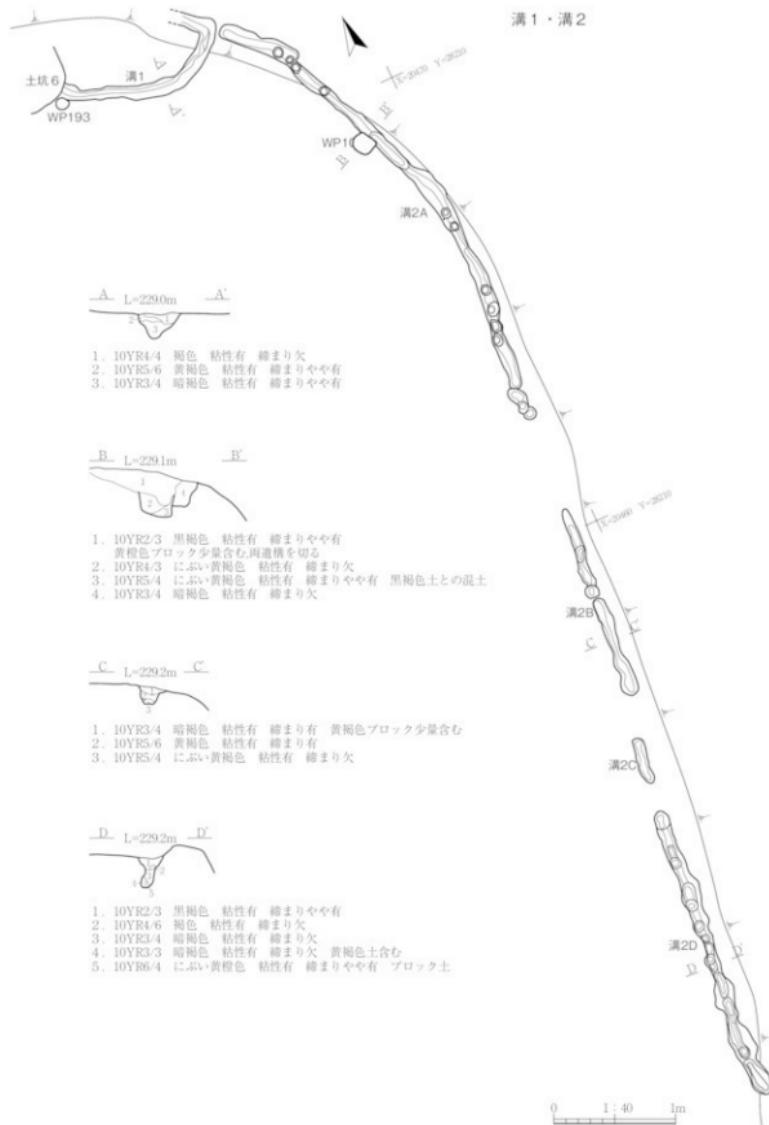
〈時期〉 中世の壁穴建物であるが、詳細な時期は不明である。

#### 壁穴建物20（第48図、写真図版47）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南西側に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 壁穴建物17・18・19と重複し、これらすべてに本遺構が切られる。

〈平面形・規模〉 南北壁は遺構重複により消失しており全容は不明であるが、残存する東西壁の一部



第49図 溝1・2 (曲輪1)

から推定すると、長辺130cm以上×短辺約145cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。残存する辺から主軸方位はおよそ北・南にあるものと思われる。

〈埋土〉 黄褐色土の單層である。

〈壁・床面〉 残存する東西壁はどちらも直立し、深さは約25~35cmを測る。床面は概ね平坦で、残存部中央付近に部分的に貼床が施されている。また、中央からやや東寄りに南北方向に延びる溝が検出された。残存長80cm、幅約25cm、深さ約10cmを測る。間仕切り溝の可能性が考えられる。

〈柱穴〉 4個が確認された。配置からP1・2・3は本遺構を構成するものと思われる。

〈遺物〉 時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉 中世の堅穴建物であるが、詳細な時期は不明である。

#### 溝1（第49図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 主郭部南東側、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 東側掘立柱建物群と重複する。

〈平面形・規模〉 曲輪1縁辺を縫うような直線部分と弧状の曲線部分からなる。

〈埋土〉 地山ブロックを含み、人為的に埋め戻されている。底面には凹凸がある。

〈遺物〉 繩文土器片等が少量出土した。

〈時期〉 曲輪1縁辺に施された中世の溝であると考えられ、人為的に埋め戻されていることから柵等の施設であった可能性が考えられる。検出状況から溝2と同時期に併存したものと考えられる。

#### 溝2（第49図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉 主郭部南東側、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 東側掘立柱建物群と重複する。

〈平面形・規模〉 曲輪1縁辺を縫うような弧状の曲線であり、途中途切れながら総延長約100mの長さである。

〈埋土〉 地山ブロックを含み、人為的に埋め戻されている。底面には凹凸がある。

〈遺物〉 繩文土器片等が少量出土した。

〈時期〉 曲輪1縁辺に施された中世の溝であると考えられ、人為的に埋め戻されていることから柵等の施設であった可能性が考えられる。検出状況から溝2と同時期に併存したものと考えられる。

#### 土坑1（第50図、写真図版53）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南東側に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 堅穴建物6と重複し、本遺構がこれを切る。

〈平面形・規模〉 開口部径約140~160cm、底部径約120cmの略円形を呈する。

〈壁・底面〉 壁は直立気味に立ち上がり、深さ約30cmを測る。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 3層に細分される。

〈遺物〉 遺構底面より鉄鍋片が1点出土した。

〈時期〉 出土遺物から曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

#### 土坑2（第50図、写真図版53）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南東側に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 堪穴建物6・7と重複し、新旧関係は堪穴建物7>本遺構>堪穴建物6となる。

〈平面形・規模〉 開口部約180×160cm、底部約160×140cmの略長方形を呈する。

〈埋土〉 7層に細分される。上位には廃棄焼土、下位には黄褐色土ブロックが混入することから、人為堆積と判断される。

〈壁・底面〉 壁は直立し、深さ約25~40cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 埋土上位より鉄製針が1点、底面より鉄製鎌と思われる遺物が出土した。

〈時期〉 出土遺物から曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

#### 土坑3（第50図、写真図版53）

〈位置・検出状況〉 曲輪1北東側に位置する。堪穴建物3の精査途中で本遺構の存在を確認した。検出面はIV層である。

〈重複状況〉 堪穴建物2・3と重複し、いずれ本遺構が切る。

〈平面形・規模〉 開口部約150×110cm、底部約130×80cmの楕円形を呈する。

〈埋土〉 13層に細分される。全体に廃棄焼土ブロックや炭化物が認められることから、人為堆積と判断される。

〈壁・底面〉 壁は直立し、深さ約35cmを測る。底面は中央にやや凹凸が見られる。

〈遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられるが、詳細不明である。

#### 土坑4（第50図、写真図版53）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南側中央に位置し、検出面はIV層である。堪穴建物13精査中に確認したため、南側は断面状況より推定した。

〈重複状況〉 堪穴建物13・土坑11と重複する。両者に本遺構は切られる。

〈平面形・規模〉 開口部辺約170cm、底部辺約140cmの方形を呈するものと思われる。

〈埋土〉 暗褐色土の単層である。

〈壁・底面〉 壁は直立気味に立ち上がり、深さ約20cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 遺構底面より鉄鍋片が1点出土した。

〈時期〉 出土遺物から曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

#### 土坑5（第50図、写真図版54）

〈位置・検出状況〉 曲輪1北東側に位置する。堪穴建物3の精査途中で本遺構の存在を確認した。検出面はIV層である。

〈重複状況〉 堪穴建物3・WP224と重複する。検出時期が遅れたため新旧関係は不明だが、状況的には堪穴建物3より新しく、WP224に切られるものと思われる。

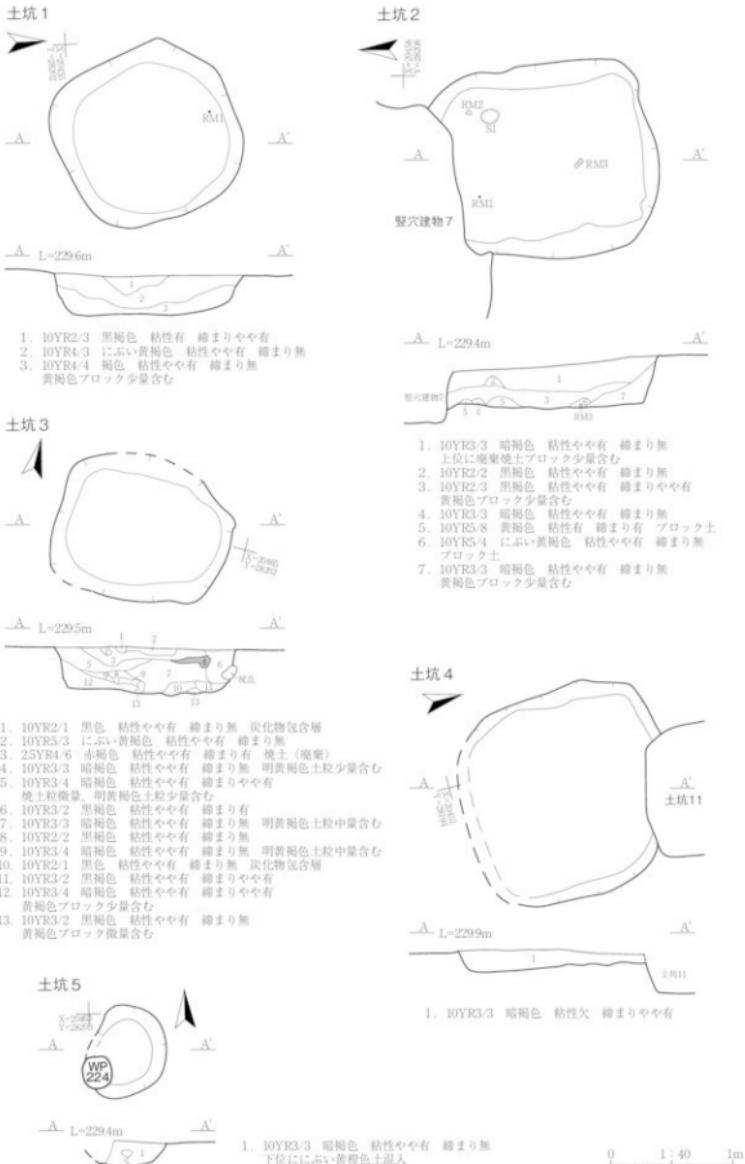
〈平面形・規模〉 開口部径約60~80cm、底部径約50cmの略円形を呈する。

〈埋土〉 暗褐色土の単層である。

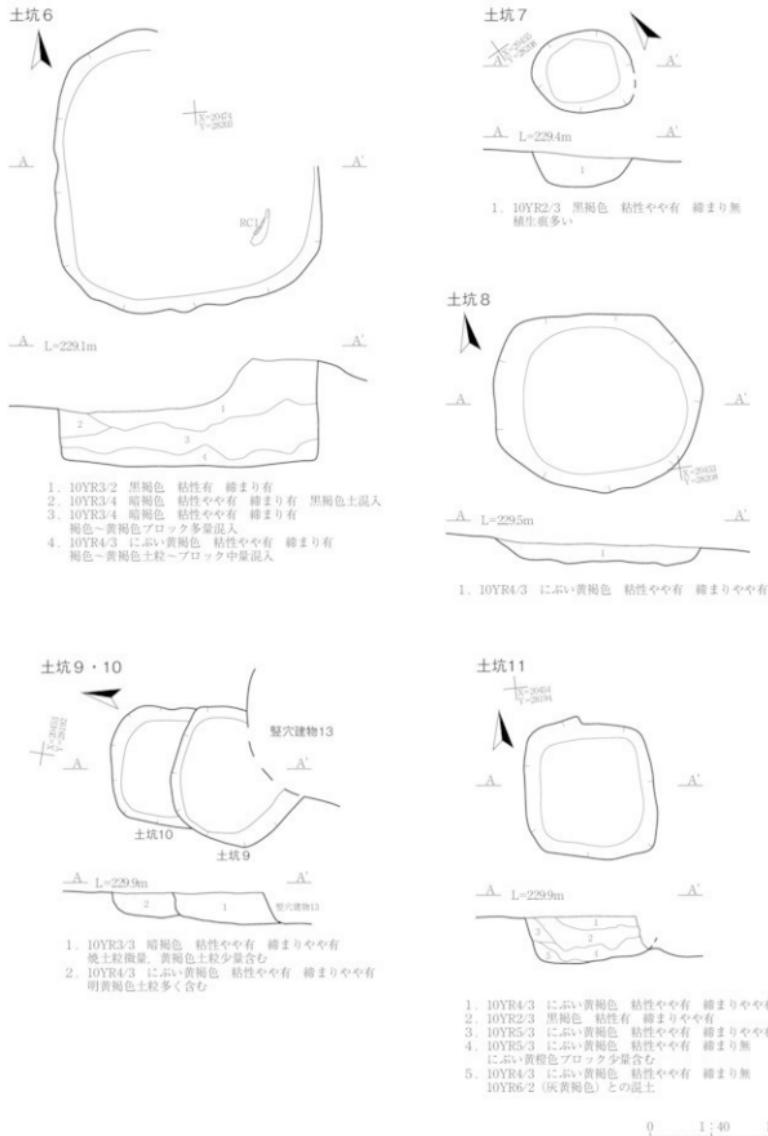
〈壁・底面〉 壁は底面から緩やかに立ち上がり、断面形は椀状を呈する。深さは約50cmを測る。

〈遺物〉 時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。



第50図 土坑 1～5 (曲輪 1)



第51図 土坑6～11（曲輪1）

**土坑6（第51図、写真図版54）**

〈位置・検出状況〉曲輪1北東側に位置し、IV層で検出した。立地する場所が主郭の縁辺であり、さらにこの部分に巨大な木根があるため、作業安全上の観点から北東側の約1/4部分の調査を見送った。

〈重複状況〉堅穴建物5・溝1と重複し、堅穴建物5を切り、溝1に切られる。また判然としなかつたが、平面状況的に堅穴建物2とも重複するものと思われるが、詳細は不明である。

〈平面形・規模〉開口部辺約220~240cm、底部辺約200cmの隅丸方形を呈する。

〈埋土〉4層に細分される。上位において獸骨が検出された。鑑定の結果、ウマの下顎骨であった。層位状況から人為堆積と判断される。

〈壁・底面〉壁は直立し、深さ200cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉上記ウマ下顎骨以外の遺物は出土しなかった

〈時期〉出土遺物からウマの墓壙である可能性が高い。時期は不明であるが、埋土の特徴から近世以降である可能性が高い。

**土坑7（第51図、写真図版54）**

〈位置・検出状況〉曲輪1南東側に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉なし。

〈平面形・規模〉開口部径約60~80cm、底部径約50cmの略円形を呈する。

〈埋土〉暗褐色土の単層である。

〈壁・底面〉壁は山側では直立気味に、谷側では底面から緩やかに立ち上がり、深さは約15~25cmを測る。底面はやや凹凸がある。

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

**土坑8（第51図、写真図版54）**

〈位置・検出状況〉曲輪1南東側、IV層面で検出した。

〈重複状況〉なし。

〈平面形・規模〉開口部径約140~170cm、底部径約130cmの略円形を呈する。

〈埋土〉にぶい黄褐色土の単層である。

〈壁・底面〉壁は緩やかに立ち上がり、深さ約40cmを測る。底面には凹凸が認められる。

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

**土坑9（第51図、写真図版55）**

〈位置・検出状況〉曲輪1中央に位置し、検出面はIV層である。当初は1つの遺構と考え精査を行つたが、底面に段差が認められることや断面状況などから、重複する2基の土坑と判断した。

〈重複状況〉堅穴建物13と重複する。新旧関係は堅穴建物13>土坑9>土坑10となる。

〈平面形・規模〉堅穴建物13に切られるため、南東側は消失するが、開口部径約110cm、底部径約80~90cmの略円形を呈するものと思われる。

〈埋土〉暗褐色土の単層である。

〈壁・底面〉壁は直立し、深さ約60cmを測る。底面はほぼ平坦である。

〈遺物〉 時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

#### 土坑10（第51図、写真図版55）

〈位置・検出状況〉 曲輪1中央に位置し、検出面はIV層である。当初は1つの遺構と考え精査を行ったが、底面に段差が認められることや断面状況などから、重複する2基の土坑と判断した。

〈重複状況〉 壁穴建物13と重複する。新旧関係は壁穴建物13>土坑9>土坑10となる。

〈平面形・規模〉 南側を土坑9によって切られるため、全容は不明であるが、開口部約100cm、底部辺約80cmの隅丸方形を呈するものと思われる。

〈埋土〉 黄褐色土の單層である。

〈壁・底面〉 壁は床面からなだらかな立ち上がりで、断面形は椀状となる。深さは約50cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

#### 土坑11（第51図、写真図版55）

〈位置・検出状況〉 曲輪1中央に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉 土坑4と重複し、本遺構がこれを切る。

〈平面形・規模〉 開口部辺約110cm、底部辺約80~90cmの方形を呈する。

〈埋土〉 5層に細分される。下位にはぶい黄褐色土を主体とする人為堆積と判断される。

〈壁・底面〉 壁はほぼ直立し、深さ約40cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

#### 土坑12（第52図、写真図版55）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南側中央に位置する。検出面はIV層である。

〈重複状況〉 土坑13と重複し、本遺構がこれを切る。

〈平面形・規模〉 開口部約150×130cm、底部約130×110cmの略円形~方形を呈する。

〈埋土〉 3層に細分される。

〈壁・底面〉 壁はほぼ直立し、上半部で外傾し、深さは斜面上方の北側で約25cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 遺構埋土上位より鉄片が1点出土した。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

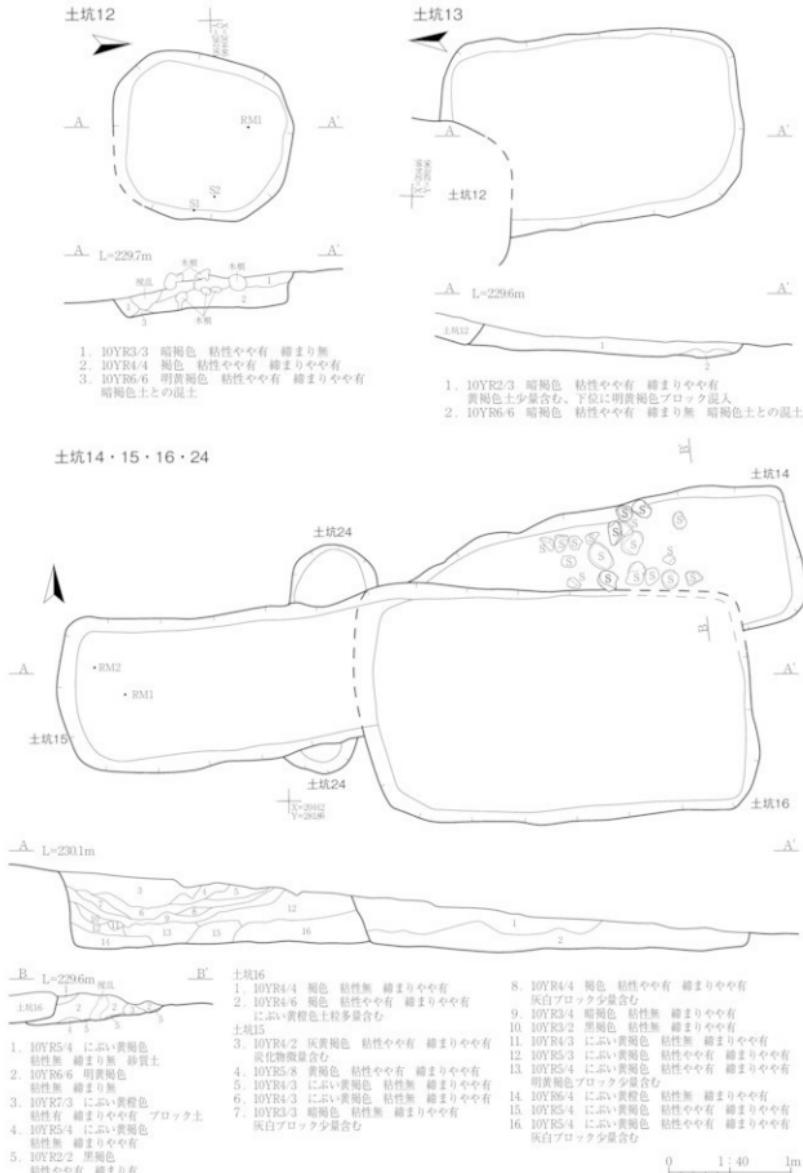
#### 土坑13（第52図、写真図版55）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南側中央に位置する。検出面はIV層である。

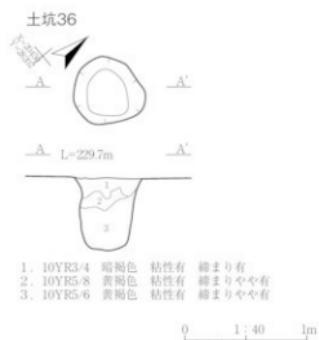
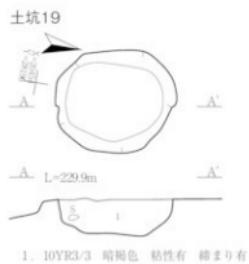
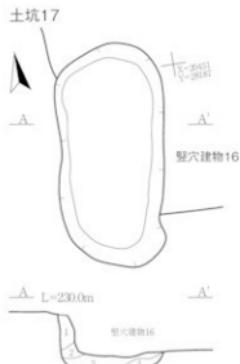
〈重複状況〉 土坑12と重複し、本遺構がこれに切られる。

〈平面形・規模〉 開口部約250×160cm、底部230×140cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向はおよそ北~南にある。

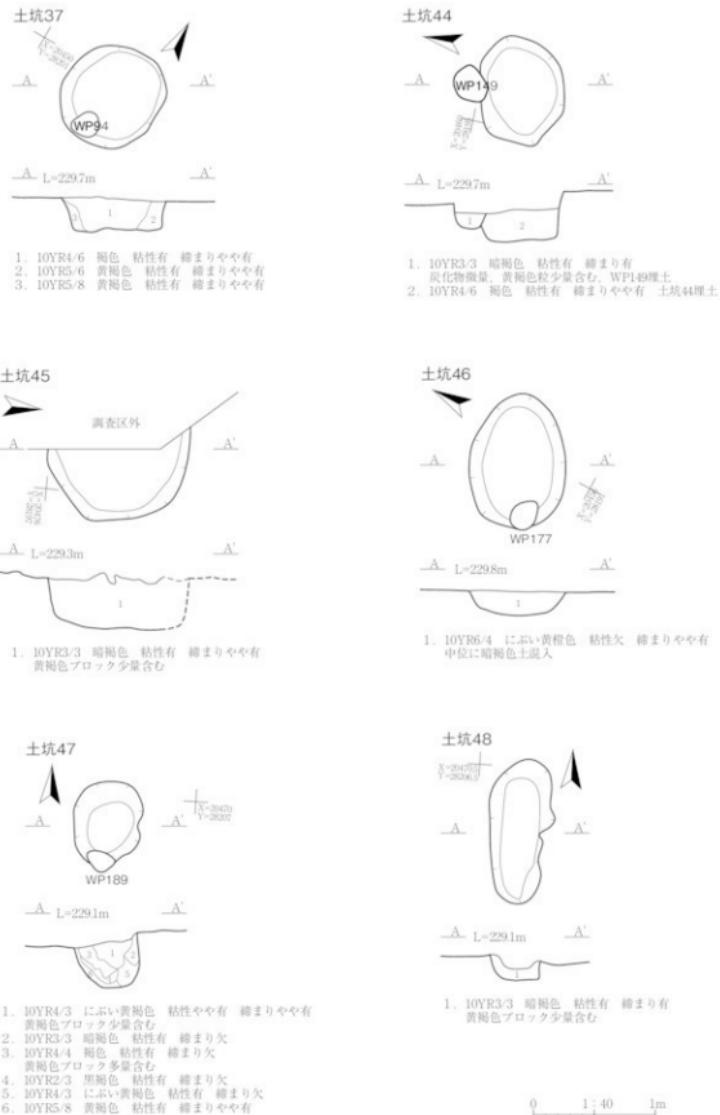
〈埋土〉 2層に細分されるが、黒褐色土が主体である。



第52図 土坑12~16・24（曲輪1）



第53図 土坑17~19・30・35・36（曲輪1）



第54図 土坑37・44~48(曲輪1)

〈壁・底面〉 壁は直立気味に立ち上がり、深さは斜面上方の北側で約20cmを測る。底面はやや凹凸が見られ、斜面下方の南側にわずかに傾斜する。

〈遺物〉 時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

#### 土坑14（第52図、写真図版55）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南側中央に位置し、検出面はIV層である。重複が著しく、堅穴建物15精査中にて検出した。

〈重複状況〉 堅穴建物15・土坑16と重複する。新旧関係は土坑16に切られ、堅穴建物15を切る。

〈平面形・規模〉 重複により南西側は残存しないが、開口部290（推定）×120cm、底部270（推定）×110cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。長軸方向はおよそ西-東にある。

〈埋土〉 5層に細分した。上位には人頭大の躰が多量出土しており、廃棄された人為堆積層と判断される。

〈壁・底面〉 残存する壁は直角に近い角度で立ち上がり、深さは約25cmを測る。底面は概ね平坦である。なお、精査後、底面から柱穴（WP23）が検出されたが、本遺構より新しいものと考えられる。

〈遺物〉 遺構底面より鉄鍋片が1点出土した。

〈時期〉 出土遺物から曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

#### 土坑15（第52図、写真図版56）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南側中央に位置し、検出面はIV層である。重複が著しく、堅穴建物15精査中にて検出した。

〈重複状況〉 土坑16・24と重複する。新旧関係は土坑16に切られ、土坑24を切る。

〈平面形・規模〉 東側が遺構重複により不明であるが、開口部250cm以上×120cm、底部230cm以上×100cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。長軸方向はおよそ西-東にある。

〈埋土〉 14層に細分される。にぶい黄褐色土を主体とし、層位状況から人為堆積と判断される。

〈壁・底面〉 壁はほぼ直立し、深さ約60cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 遺構底面より鉄磬、鉄製鎌1点、鉄鍋片2点、不明金具が出土した。

〈時期〉 出土遺物から曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

#### 土坑16（第52図、写真図版56）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南側中央に位置し、検出面はIV層である。重複が著しく、堅穴建物15精査中にて検出した。

〈重複状況〉 土坑14・15・24と重複し、本遺構がこれすべてを切る。

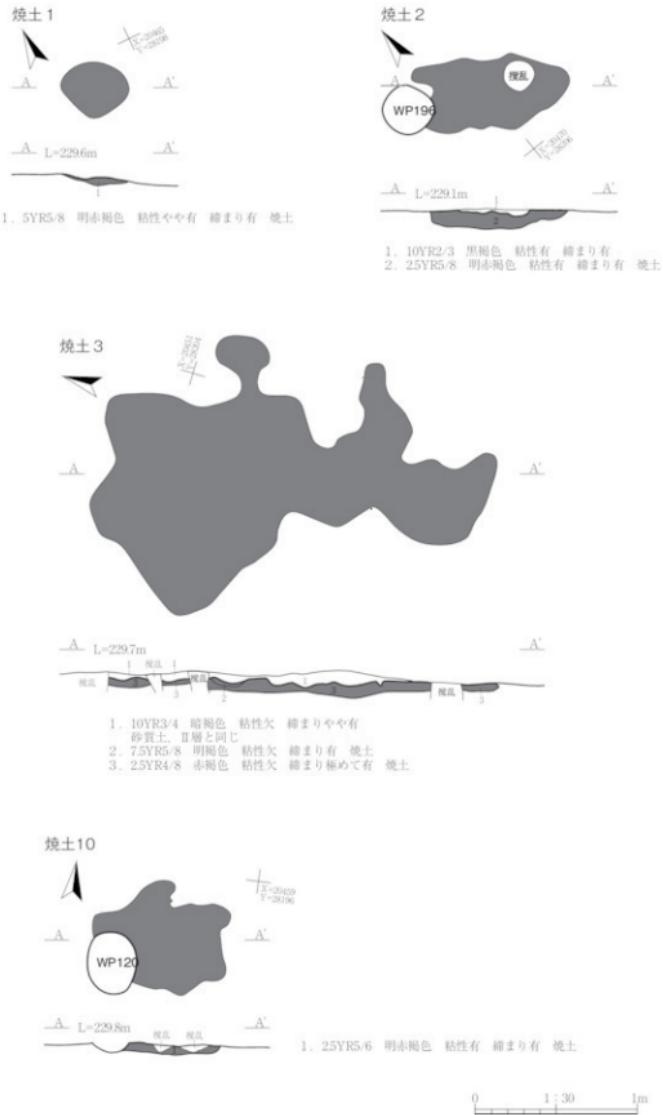
〈平面形・規模〉 土坑15との重複に気付かず同時に精査したため、西側の一部は消失したが、開口部約320×190cm、底部約290×170cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向はおよそ西-東にある。

〈埋土〉 2層に分層される。いざれも褐色土を主体とするが、混入物の状況などから人為堆積と判断される。

〈壁・底面〉 壁は直角に近い角度で立ち上がり、深さ約35cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。



第55図 焼土 1～3・10（曲輪 1）

土坑17（第53図、写真図版56）

〈位置・検出状況〉曲輪1南側中央に位置し、検出面はIV層である。堅穴建物17精査中に存在を確認した。

〈重複状況〉堅穴建物17と重複し、本遺構がこれを切る。

〈平面形・規模〉開口部約180×90cm、底部160×70cmの楕円形を呈する。長軸方向はおよそ北-南にある。

〈埋土〉4層に細分される。にぶい黄褐色土を主体とし、人為堆積土の可能性が高い。

〈壁・底面〉壁はほぼ直立し、深さ約50cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉遺物は出土していない。

〈時期〉曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

土坑18（第53図、写真図版56）

〈位置・検出状況〉曲輪1中央に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉なし。

〈平面形・規模〉開口部径約90~100cm、底部径約60~80cmの略円形を呈する。

〈埋土〉暗褐色土の単層である。

〈壁・底面〉壁は底面から緩やかに立ち上がり、中位からほぼ直立する。楕円形の断面形状を呈する。

深さは約30cmを測る。底面は凹凸がある。

〈遺物〉不明鉄製品1点が出土した。

〈時期〉曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

土坑19（第53図、写真図版57）

〈位置・検出状況〉曲輪1中央に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉なし。

〈平面形・規模〉開口部径約90~100cm、底部径約60~80cmの略円形を呈する。

〈埋土〉暗褐色土の単層である。

〈壁・底面〉壁は底面から緩やかに立ち上がり、中位からほぼ直立する。楕円形の断面形状を呈する。

深さは約30cmを測る。底面は凹凸がある。

〈遺物〉遺物は出土していない。

〈時期〉中世の土坑であると考えられる。

土坑30（第53図、写真図版58）

〈位置・検出状況〉曲輪1南東側に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉なし。

〈平面形・規模〉開口部径約70cm、底部径約40cmの略円形を呈する。

〈埋土〉5層に細分される。上位の暗褐色土系と下位のにぶい黄褐色土に大別される。

〈壁・底面〉壁はほぼ直立し、深さ約40cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉遺物は出土していない。

〈時期〉曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。規模・形状等から柱穴の可能性もある。

土坑35（第53図、写真図版59）

〈位置・検出状況〉曲輪1中央に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉 WP95と重複し、これに切られる。

〈平面形・規模〉 開口部径約100~130cm、底部径約90cmの略円形を呈する。

〈埋土〉 3層に細分される。褐色土を主体とし、土層への混入物等から人為堆積土の可能性が考えられる。

〈壁・底面〉 壁は直角に近い角度で立ち上がり、深さ約25cmを測る。木根があったためか、底面は凹凸が見られる。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

#### 土坑36（第53図、写真図版59）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南東側、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 なし。

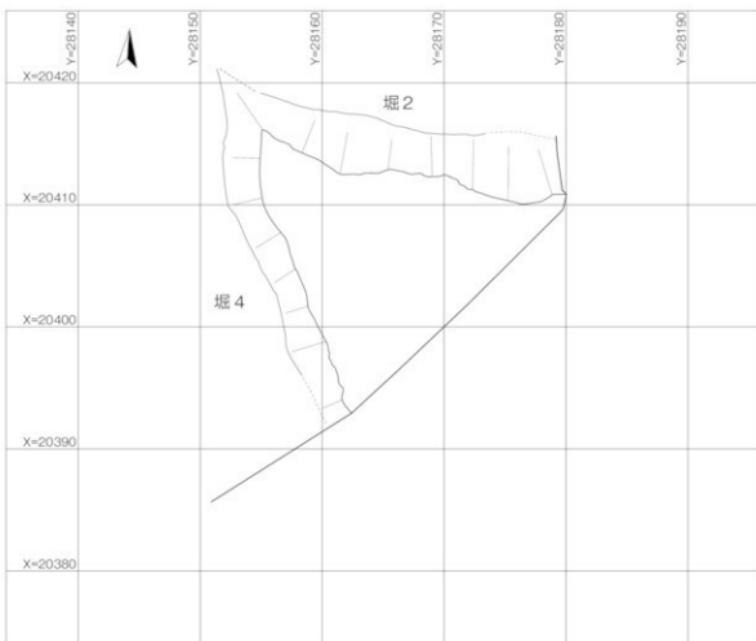
〈平面形・規模〉 開口部径約60cm、底部径約35cmの略円形を呈する。

〈埋土〉 3層に細分される。黄褐色土を主体とする。

〈壁・底面〉 壁は直角に近い角度で立ち上がり、深さ約55cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。土坑として精査・掲載したが、規模・形



第56図 曲輪2

状等から柱穴の可能性が高い。

**土坑37（第54図、写真図版60）**

〈位置・検出状況〉 曲輪1南東側に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉 WP94と重複し、これに切られる。

〈平面形・規模〉 開口部径約80cm、底部径約65cmの円形を呈する。

〈埋土〉 3層に細分される。褐色土を主体とし、壁側に黄褐色土が流入する自然堆積と思われる。

〈壁・底面〉 壁は直角に近い角度で立ち上がり、深さ約25cmを測る。底面は中央付近で凹凸が見られる。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

**土坑44（第54図、写真図版61）**

〈位置・検出状況〉 曲輪1中央に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉 WP149と重複し、これに切られる。

〈平面形・規模〉 開口部約90×70cm、底部約70×50cmの楕円形を呈する。

〈埋土〉 褐色土の単層である。

〈壁・底面〉 壁は直立し、深さは約40cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

**土坑45（第54図、写真図版61）**

〈位置・検出状況〉 曲輪1北側に位置し、検出面はIV層である。大半は安比川浸食によって崩落したものと考えられる。

〈重複状況〉 なし。

〈平面形・規模〉 大半が調査区外へと延びるため全容は不明だが、開口部径約120cm、底部径約100cmの円～方形を呈するものと思われる。

〈埋土〉 暗褐色土の単層である。

〈壁・底面〉 壁は直立し、深さは約40cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 杏葉、小札（48）が埋土中より出土した。

〈時期〉 中世の土坑あるいは堅穴建物の一部であると考えられる。

**土坑46（第54図、写真図版61）**

〈位置・検出状況〉 曲輪1中央に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉 WP177と重複し、これに切られる。

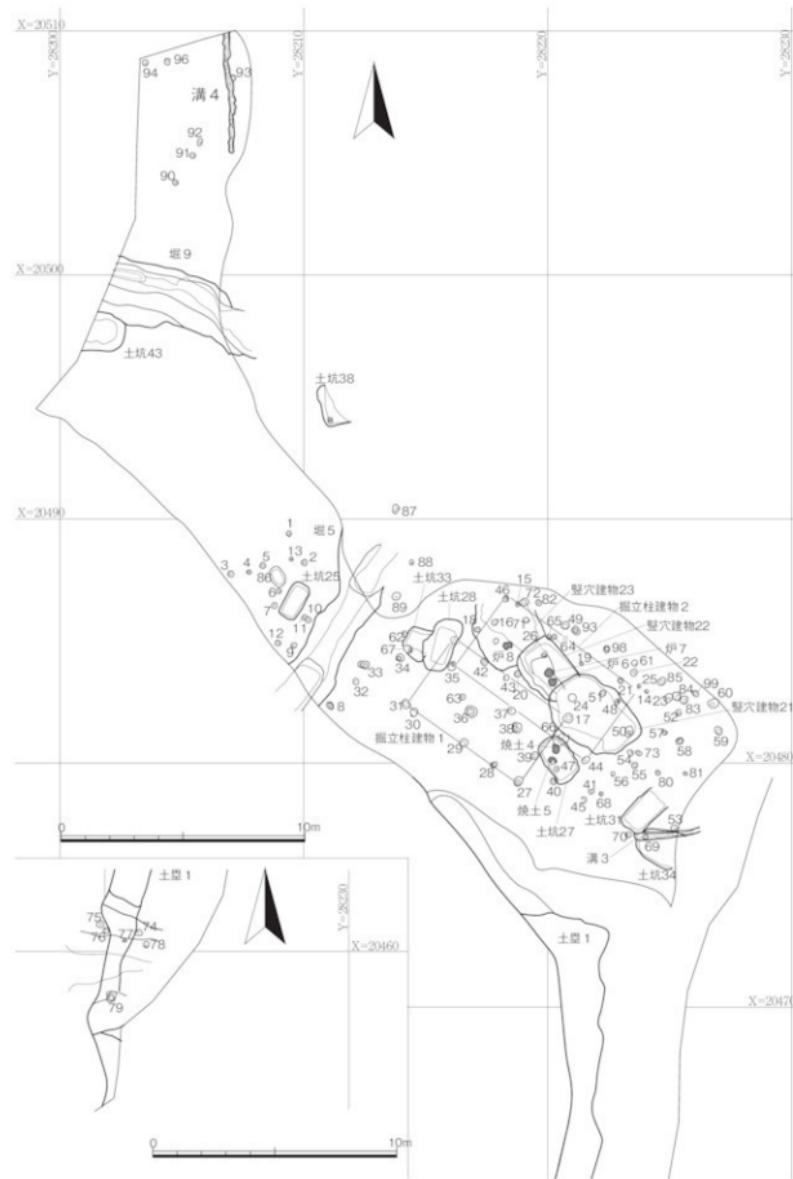
〈平面形・規模〉 開口部約110×80cm、底部約90×55cmの楕円形を呈する。

〈埋土〉 にぶい黄橙色土の単層である。

〈壁・底面〉 壁は底面からなだらかに立ち上がり、深さ20cmを測る。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

〈時期〉 埋土がその他の遺構と異なり、浅いため城館造成時に削平された中世以前の土坑であると考えられる。



第57図 曲輪3

## 土坑47（第54図、写真図版58）

〈位置・検出状況〉 曲輪1中央に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉 WP189と重複し、これに切られる。

〈平面形・規模〉 開口部径約70cm、底部径約60cmの円形を呈する。

〈埋土〉 6層に細分される。層位状況から人為堆積土と思われる。

〈壁・底面〉 壁は底面からはなだらかに立ち上がり、直立する。深さは約45cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

〈時期〉 中世の土坑であると考えられる。位置状況から焼土遺構2に付設する土坑の可能性も考えられる。

## 土坑48（第54図、写真図版58）

〈位置・検出状況〉 曲輪1中央に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉 なし。

〈平面形・規模〉 開口部約120×50cm、底部約100×30cmの長楕円形を呈する。

〈埋土〉 暗褐色土の單層である。



第58図 標立柱建物 1

〈壁・底面〉 壁は直立し、深さは約20cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1に帰属する中世の土坑であると考えられる。

#### 焼土1（第55図、写真図版64）

〈位置・検出状況〉 曲輪1北東側に位置する。本遺構は堅穴建物3検出面上に広がるものである。

〈重複状況〉 上述のとおり、堅穴建物3と重複し、本遺構の方が新しい。

〈平面形・規模〉 赤褐色焼土が40×30cmの楕円状に広がる。焼成深度は最大6cmを測る。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

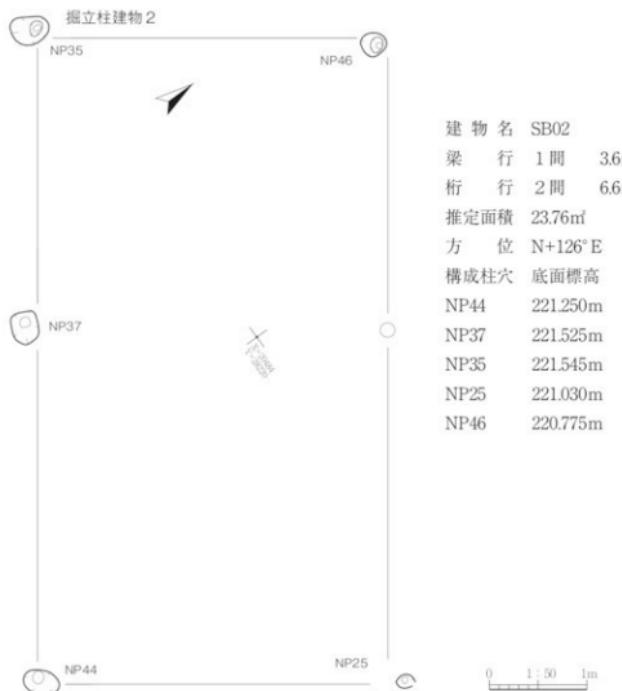
〈時期〉 検出状況から中世以降のものであると判断される。

#### 焼土2（第55図、写真図版64）

〈位置・検出状況〉 曲輪1北東側に位置し、検出面はIV層である

〈重複状況〉 WP196に切られる。

〈平面形・規模〉 明赤褐色焼土が約100×50cmの楕円状に広がる。焼成深度は最大10cmを測る。



第59図 挖立柱建物2

（遺物） 遺物は出土していない。

（時期） 検出状況から中世以降のものであると判断される。なお、その性格は不明である。

### 焼土 3（第55図、写真図版64）

（位置・検出状況） 曲輪1南東側に位置する。検出面はIV層である。

（重複状況） なし。

（平面形・規模） 明掲～赤褐色焼土が250×50～140cmの不整形に広がる。焼成深度は最大10cmを測る。全体に凹凸が著しく見られるが、焼成面は堅く縮まる。

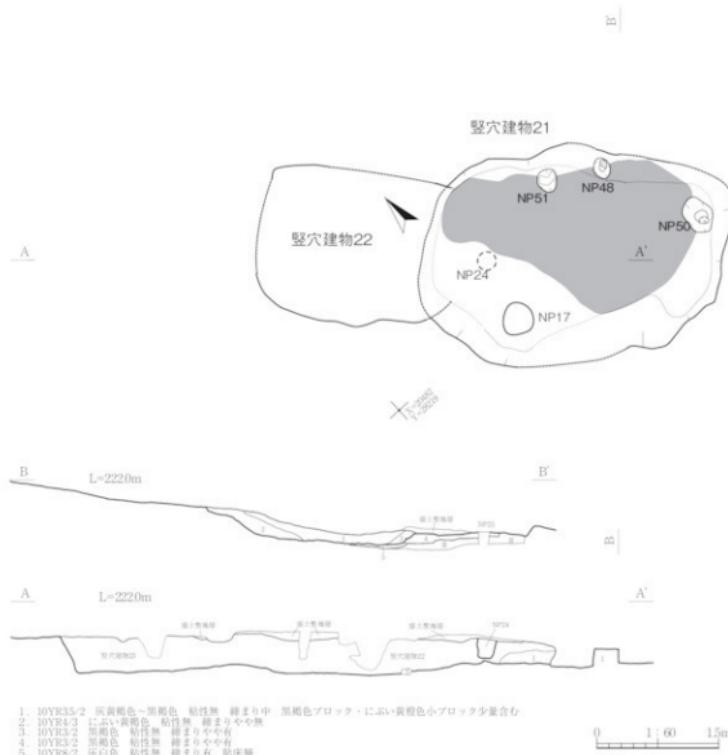
（遺物） 遺物は出土していない。

（時期） 検出状況から中世以降のものであると判断される。なお、その性格は不明である。

（小林）

### b) 曲輪2

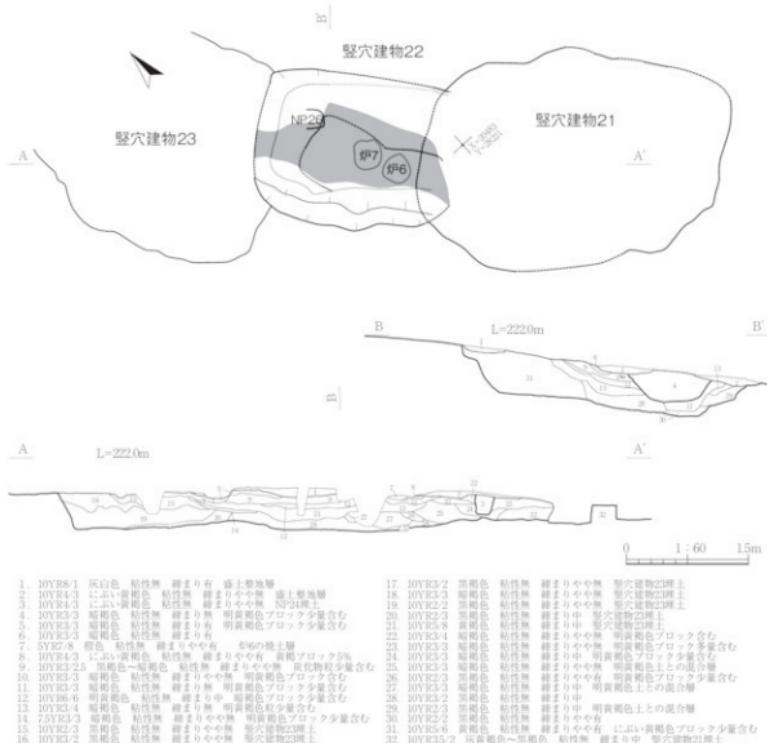
（位置・検出状況） 調査区中央部の西寄り、遺跡全体では曲輪1の南西側、堀1・2の先に位置する



第60図 堅穴建物21

平坦地である。曲輪2北側は現況通り、堀1とそれと並行する堀2の二重堀で区切られていた。西側は現況では極端な高低差のない切岸となっていたが、調査の結果、昭和期の開田で平場を1mほど削平した土を西側に盛って平坦地を拡幅したものであり、実際には切岸5と堀4が連続する崖壁で区画防御されていることが判明した。東側と南側は調査区外のため全容は不明であるが、東側には現況でやや低く、高低差がほとんどない幅約9mと約7mの二段の帯状の平坦地があり、さらにこの東側には一段高く、縄張りからみて副郭と考えられる曲輪がある。南側は現況では区画はまったく認められない。縄張りから見て東側の副郭と同列か、もしくは三郭と思われる。

**（形態・規模）** 平面形は上述のとおり、南側の区画が不明であるが、地元地権者の方々からの聞き取りによると現道の北側には副郭及び三郭を区切る堀切があつて、両郭の間の帯状の二つの平坦地は、堀2側は土塁、副郭側は主郭の外堀堀切と連結する堀があったとのことである。また西側の谷斜面には堅堀状の山道があり、位置的におそらく両郭の南側堀切の延長にあるものと考えられる。調査成果と聞き取りおよび現況の地形状況からは、やや歪な南北に長く中央で括れる鼓状を呈するものと思われる。推定される規模は、北縁長約27m、西縁長と東縁長は直線距離で約61mと約54m、南縁長は約42m、中



第61図 壁穴建物22

央部の幅は約26mで、面積は約1,900m<sup>2</sup>である。このうち調査部分は北辺から西辺の北側にかけてであり、およそ全体の六分の一の範囲である。

（造成・埋土）平坦地の造成はすべて削平によるものと推測されるが、開田により1m程度削平されているため詳細は不明である。削平面での標高はおよそ228.5m前後である。層序は、20cmほど現在表土下が削平されたV層八戸火山灰土層および下層となっていた。

（付属普請遺構）付随する普請遺構は、堀2・4、切岸3である。堀4は西側の切岸から連続する。先に述べた煙突造成によって完全に検出面が埋まっていたため、調査によって初めてその存在が明らかになった。

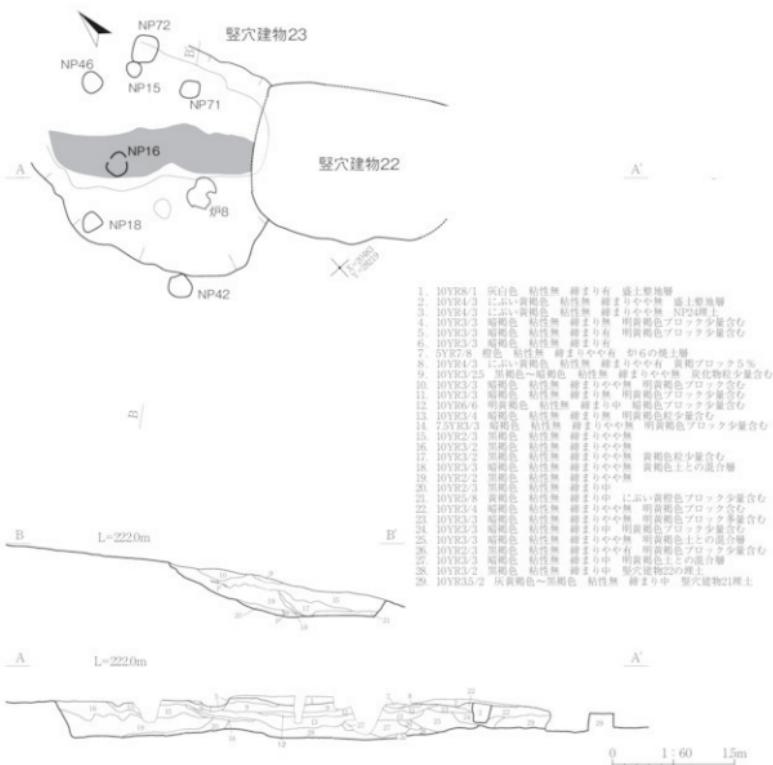
（付属作事遺構）作事の痕跡は、みられなかった。縄張りから考えても建物等の何らかの遺構があつたものと思われるが、現代の削平規模が大きく遺構が遺物と共に消失した可能性が高い。

（出土遺物）削平された抵幅分の盛り土中から縄文時代（晩期）の遺物がわずかに出土した。

（小山内）

### c) 曲輪3

（位置・検出状況）調査区東側、遺跡全体では曲輪1の北東側斜面中腹に位置する平坦地で、西側は堀



第62図 堪穴建物23

1、東側は切岸2の急傾斜で区切られる。調査区外の北側にはやせ尾根が延びており、現況での尾根頂部には先端に向かい低くなる数段の腰曲輪が認められる。南側は地山削り出しの土壘1配されている。調査前の現況では北側が幾分高く、南側に緩い傾斜面となっていたが、繩張り的に一連の帶曲輪と捉えていたものである。調査の結果、南北で約1mの高低差の段差をもつ平場が確認され、中央部分は葛折れの細長い通路3となっていて、二つの腰曲輪を連結して帯状を呈していた。ただし、南側平場では山砂客土下位で烟の畠間を確認していることから、近世・近代以降に削平されて低くなった可能性もある。

**〈形態・規模〉** 平面形は、南北に長い帯状を呈するが、西側は堀1により直線的なものに対し、東側は自然地形の沢筋に沿って中央が抉れた形で、上記のとおり二つの腰曲輪的狭小な平場が犬走り状の細い段差で結ばれており、北端は先に続く腰曲輪に向かい緩い下り勾配となっていた。北端の緩傾斜地を除いた規模は、南北合わせて総長は約34mで、北側平場は約8m、南側平場は約15m、東西幅は北側は約5.5m、南側で約10m、中央の犬走り部分では約4.5m

を測り、総面積は約230m<sup>2</sup>、北側平場は約50m<sup>2</sup>、南側平場は約130m<sup>2</sup>ほどである。

**〈造成・埋土〉** 平坦地の造成は斜面山側を削平してV層中で造成整地していたが、中央部分は沢筋のためⅢ層黒褐色土とⅣ層褐色土が残っていて、通路3周辺と南側平場の谷側はV層土を使用して一部盛り土整地されていた。南北の平坦地は概ねフラットで北側の標高は223.5m前後、南側の標高はおよそ222.1mほどである。中世の整地面上の層序は、10cmほどの現表土下に近代の客土と考えられる厚さ約60cmの山砂、部分的に薄い旧表土、南側では整地盛り土に類する耕作土が認められるという状況であった。

**〈作事的遺構〉** 作事遺構は南側平坦面で掘立柱建物2棟（掘立柱建物1・2）を検出した。この面より谷側では鍛冶炉（炉6～8）を検出し、その下層は堅穴建物（堅穴建物21～23）であり、これらを構築するための造成盛土を除去すると最下面で小規模な堀（堀6）を検出した。

**〈出土遺物〉** II層客土中から縄文時代（晩期）の遺物が出土している。中世に属する遺物としては旧表土から鉄滓が数点出土した。

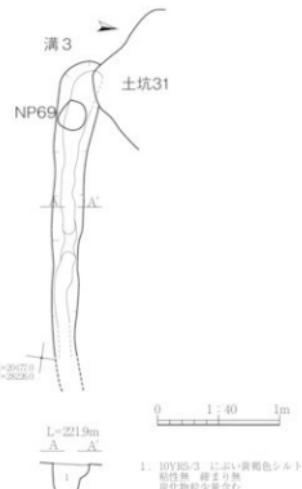
#### 掘立柱建物1（第58図、写真図版51）

**〈位置・検出状況〉** 曲輪3中央に位置する。II層直下のVI層上面及び堅穴建物検出上面で柱穴を5個検出した。

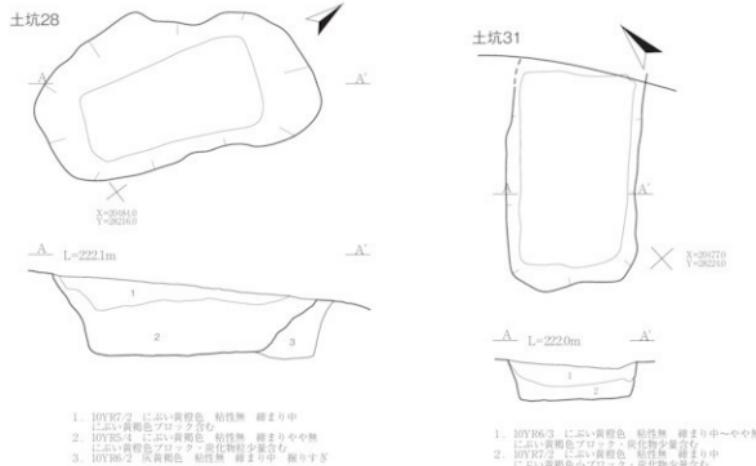
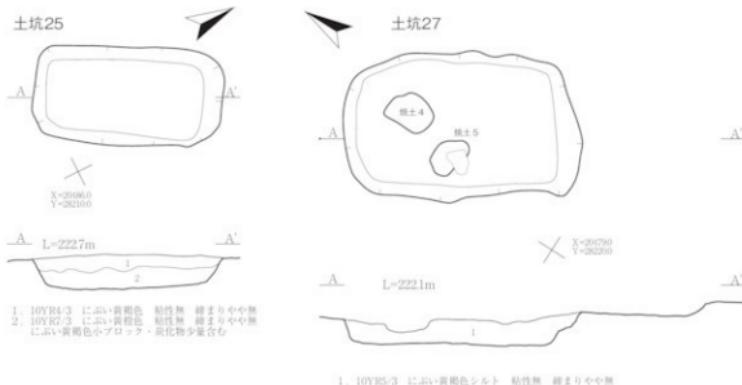
**〈重複状況〉** 平面プランにおいて、掘立柱建物2、堅穴建物21、土坑27、土坑28、柱穴と重複している。

**〈平面形・規模〉** 推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は2間の建物であると考えられる。梁行の柱間寸法は3.4m、桁行5.6m、面積は19.04m<sup>2</sup>である。

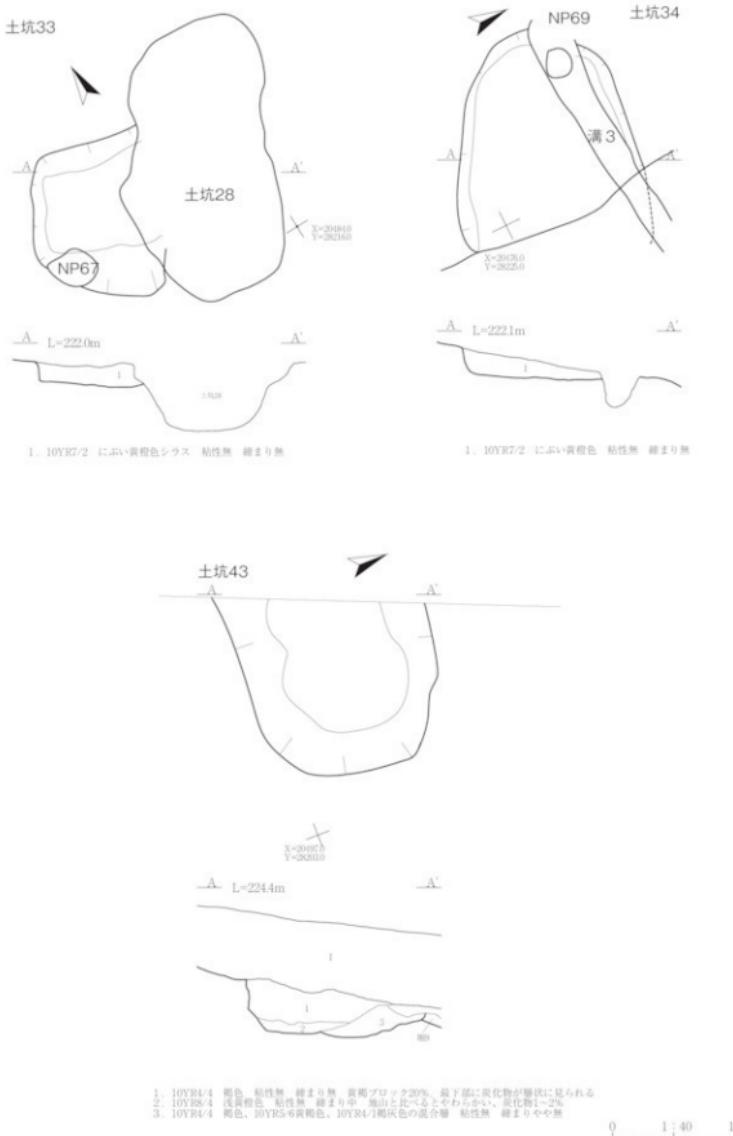
**〈柱穴〉** NP17・27・29・31・43で構成されている。NP17は黒褐色シルトと八戸火山灰との混合層で



第63図 溝3



第64図 土坑25・27・28・31（曲輪3）



第65図 土坑33・34・43（曲輪3）

あるが、その他の柱穴埋土は灰白色や黄橙色を呈する八戸火山灰主体である。

〈遺物・時期〉時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 掘立柱建物2（第59図、写真図版51）

〈位置・検出状況〉曲輪3中央に位置する。II層直下のVI層上面及び堅穴建物検出面上面で柱穴を5個検出した。

〈重複状況〉平面プランにおいて、掘立柱建物1、堅穴建物21～23、土坑27、炉6～8、柱穴と重複している。

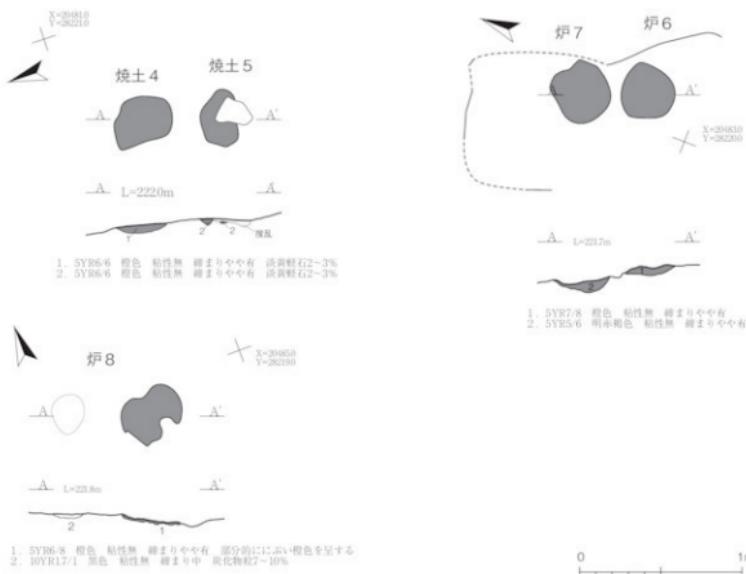
〈平面形・規模〉推定で平面長方形を呈するものとみられる。梁行は1間、桁行は2間の建物であると考えられる。梁行の柱間寸法は3.6m、桁行6.6m、面積は23.76m<sup>2</sup>である。

〈柱穴〉NP25・35・37・44・46で構成されている。NP25・35・37は灰白色を呈する八戸火山灰主体、NP44にはぶい黄褐色シルト主体、NP46は暗褐色シルト主体である。

〈遺物・時期〉時期を特定するような遺物は出土しなかったが、平面形態やその柱間構造から中世の掘立柱建物であると考えられる。

#### 堅穴建物21（第60図、写真図版48）

〈位置・検出状況〉曲輪3中央に位置し、II層直下のVI層上面で検出した。



第66図 鋼冶炉・焼土

〈重複状況〉掘立柱建物1(NP17)、堅穴建物22、堀8、NP24・66と重複し、堀8、NP66を切り、その他に切られる。また、平面プランでは掘立柱建物2と重複している。

〈平面形・規模〉384×280cmの不整形を呈する。長辺の軸方向はほぼ北西-南東にある。

〈埋土〉壁際にぶい黄褐色シルト層や黒褐色シルト層が確認できるが、大部分は灰黄褐色～黒褐色シルトで埋没している。

〈壁・床面〉いずれの壁も床面からなだらかに立ち上がり、深さ35～40cmを測る。八戸火山灰主体の掘り方埋土を床材として平坦な床面を構築している。柱穴3個(NP48・50・51)を床面で検出しており、本遺構に伴うと判断した。

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉中世の堅穴建物であると考えられるが、盛土整地層に被覆されており、16世紀以前と考えられる。

#### 堅穴建物22(第61図、写真図版49)

〈位置・検出状況〉曲輪3中央に位置し、II層直下のVI層上面で検出した。

〈重複状況〉堅穴建物21・23、堀7・8、炉6・7、NP20・26・65と重複し、堅穴建物21、堀7・8、NP65を切り、炉6・7、NP20・26に切られる。堅穴建物23との新旧関係は不明瞭であった。また、平面プランでは掘立柱建物2と重複している。

〈平面形・規模〉重複により南東壁が不明瞭であるが、推定すると250×195cmの隅丸長方形を呈するものと考えられる。長辺の軸方向はほぼ北西-南東にある。

〈埋土〉南西側には厚く地山の流入土と考えられる黄褐色シルト層が確認されるが、その他は黒褐色シルト主体である。上半には炉6・7等に関係する堆積層が観察される。

〈壁・床面〉北東と南西壁は床面から直線的に立ち上がり、深さ55～60cmを測る。黄褐色～明黄褐色シルト主体の掘り方埋土を床材として平坦な床面を構築している。本遺構に伴うと考えられる柱穴は確認できなかった。

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉中世の堅穴建物であると考えられるが、盛土整地層に被覆されており、16世紀以前と考えられる。

#### 堅穴建物23(第62図、写真図版50)

〈位置・検出状況〉曲輪3中央に位置し、II層直下のVI層上面で検出した。

〈重複状況〉掘立柱建物2(NP46)、堅穴建物22、堀7・8、炉8、NP15・16・18・71・72と重複し、堀7・8、NP71・72を切り、掘立柱建物2、炉8、NP15・16・18に切られる。堅穴建物22との新旧関係は不明瞭であった。

〈平面形・規模〉重複や雨裂により北壁や南壁が不明瞭であるが、推定すると300×270cmの不整隅丸長方形を呈するものと考えられる。長辺の軸方向は北北西-南南東にある。

〈埋土〉最下層に地山起源と考えられる黄褐色シルト層が堆積し、大部分は黒褐色シルト主体で埋没している。

〈壁・床面〉西壁は床面からなだらかに、東壁は直立気味に立ち上がり、深さ20～60cmを測る。黄褐色～明黄褐色シルト主体の掘り方埋土を床材として平坦な床面を構築している。本遺構に伴うと考えられる柱穴は確認できなかった。

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉中世の堅穴建物であると考えられるが、盛土整地層に被覆されており、16世紀以前と考えられる。

溝3（第63図、写真図版63）

〈位置・検出状況〉 曲輪3南東に位置し、VI層上面で検出した。

〈重複状況〉 堀8、土坑31・34、NP69と重複し、堀8、土坑34を切り、土坑31、NP69に切られる。

〈平面形・規模〉 曲輪3の南東の一部を横断するように直線的な部分で構成される。確認できた長さは2.75mである。

〈埋土〉 にぶい黄褐色シルトの単層である。



第67図 曲輪4・5

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉曲輪3縁辺に構築された中世の溝と考えられるが、詳細な時期は不明である。

#### 土坑25（第64図、写真図版57）

〈位置・検出状況〉曲輪3北側のやや高い部分に位置し、VI層上面で検出した。

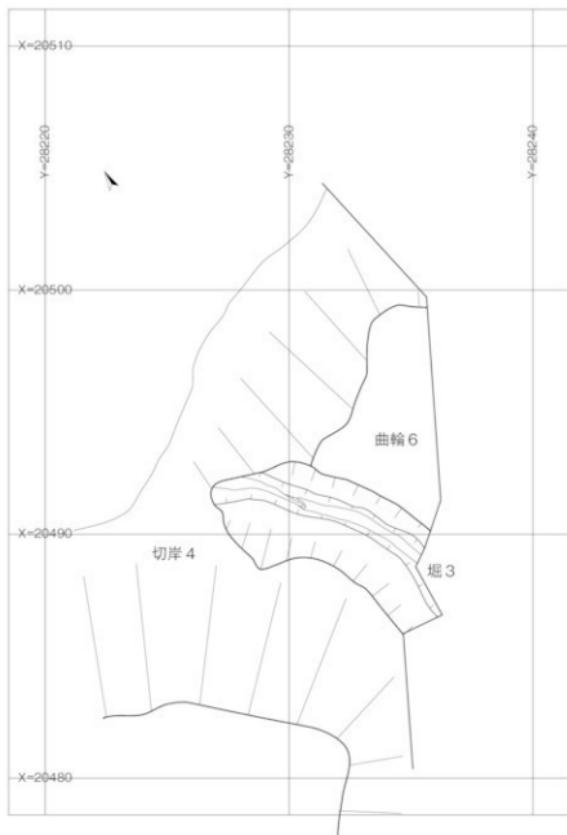
〈重複状況〉重複する遺構はない。

〈平面形・規模〉開口部155×83cm、底部129×63cmの隅丸長方形を呈する。

〈埋土〉色調や混入物の違いにより2層に細分したが、軽石主体の堆積土で短時間に埋まっており、人為堆積の可能性が高いと考えられる。南側に近接している堀5と堆積状況が類似している。

〈壁・底面〉壁は概ね直線的に立ち上がり、深さ20~30cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉埋土中位から漆の付着した小札、埋土上位から五銖銭が出土している。



第68図 曲輪6

《時期》 出土遺物から曲輪3に帰属する中世の土坑と考えられる。

#### 土坑27（第64図、写真図版58）

《位置・検出状況》 曲輪3中央～南東の平坦面に位置し、VI層上面で検出した。焼土4・5の掘り方とも考えたが、焼土4・5が並立する軸線と土坑27の長軸方向が異なるため、別遺構と判断した。

《重複状況》 焼土4・5、NP47・66と重複し、NP47・66を切り、焼土4・5に切られる。

《平面形・規模》 開口部196×125cm、底部163×105cmの隅丸長方形を呈する。

《埋土》 にぶい黄褐色シルトの単層である。単一の堆積層で短期間で埋まっており、人為堆積の可能性が高いと考えられる。

《壁・底面》 壁は直線的に立ち上がり、深さ20～30cmを測る。底面は概ね平坦である。

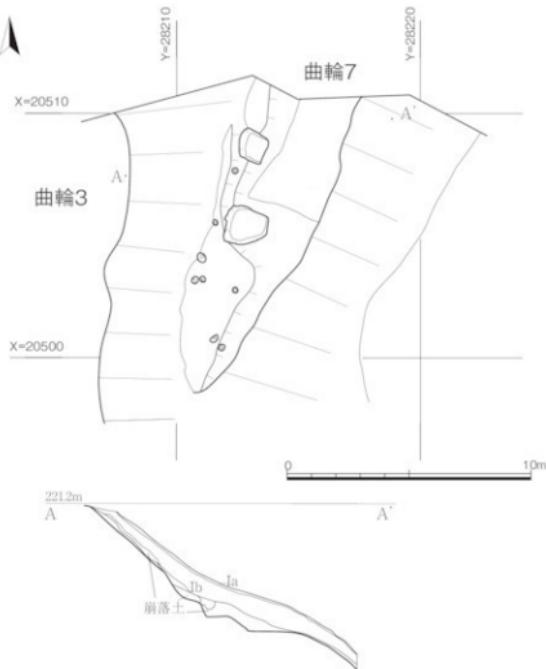
《遺物》 時期を特定するような遺物は出土していない。

《時期》 重複関係から曲輪3に帰属する中世の土坑と考えられる。

#### 土坑28（第64図、写真図版58）

《位置・検出状況》 曲輪3中央に位置し、VI層上面で検出した。

《重複状況》 土坑33と重複し、本遺構が切る。また、平面プランで掘立柱建物1と重複している。



第69図 曲輪7

〈平面形・規模〉開口部238×132cm、底部147×78cmの不整長方形を呈する。

〈埋土〉色調や混入物により2層に細分したが、地山起源の堆積土で短時間に埋まっており、人為堆積の可能性が高いと考えられる。

〈壁・底面〉壁は直線的に立ち上がり、深さ45~65cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉平面形や堆積状況から曲輪3に帰属する中世の土坑と考えられる。

#### 土坑31（第64図、写真図版58）

〈位置・検出状況〉曲輪3南側に位置し、VI層上面で検出した。

〈重複状況〉堀8と重複し、本遺構が切れる。また、北東壁を盛土整地によって切られる。

〈平面形・規模〉北東壁を盛土整地により残存しないが、推定すると開口部200×114cm、底部160×93cmの隅丸長方形を呈すると考えられる。

〈埋土〉混入物やしまり具合により2層に細分したが、混入物のある類似した堆積土で短期間で埋まっており、人為堆積の可能性が高いと考えられる。

〈壁・底面〉壁は直立気味に立ち上がり、深さ30~35cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉盛土整地に切られており、曲輪3に帰属する中世の土坑と考えられる。

#### 土坑33（第65図、写真図版59）

〈位置・検出状況〉曲輪3中央に位置し、VI層上面で検出した。

〈重複状況〉土坑28、NP67と重複し、本遺構が切られる。

〈平面形・規模〉隅丸長方形を呈するものと考えられるが、土坑28に大半を切られているため、詳細は不明である。

〈埋土〉地山起源の堆積土の単層である。

〈壁・底面〉残存する壁は直立気味に立ち上がり、深さ15~20cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉重複関係や堆積状況から曲輪3に帰属する中世の土坑と考えられる。

#### 土坑34（第65図、写真図版59）

〈位置・検出状況〉曲輪3南側に位置し、VI層上面で検出した。

〈重複状況〉堀8、溝3と重複し、堀8を切り、溝3に切られる。

〈平面形・規模〉東側の残存状態が悪く、詳細な規模は不明である。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉地山起源の堆積土の単層である。

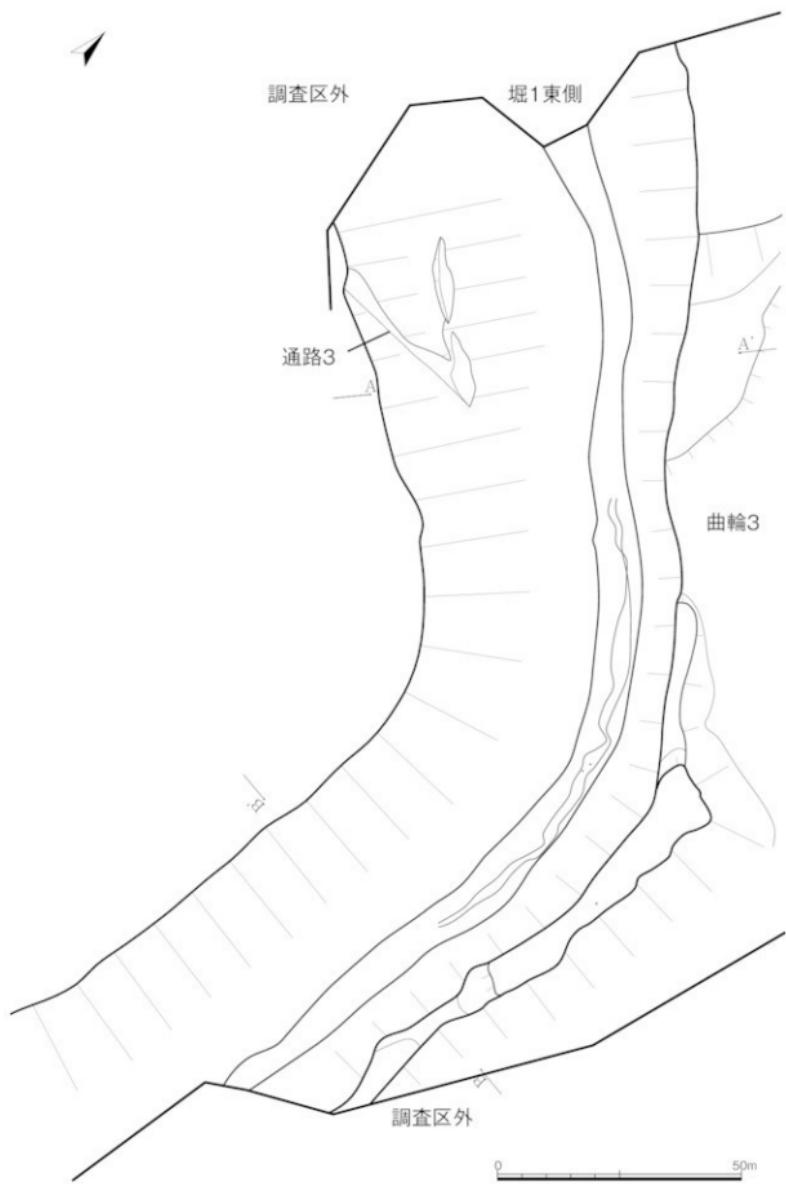
〈壁・底面〉残存する壁は直立気味に立ち上がり、深さ15~25cmを測る。底面は概ね平坦である。

〈遺物〉時期を特定するような遺物は出土していない。

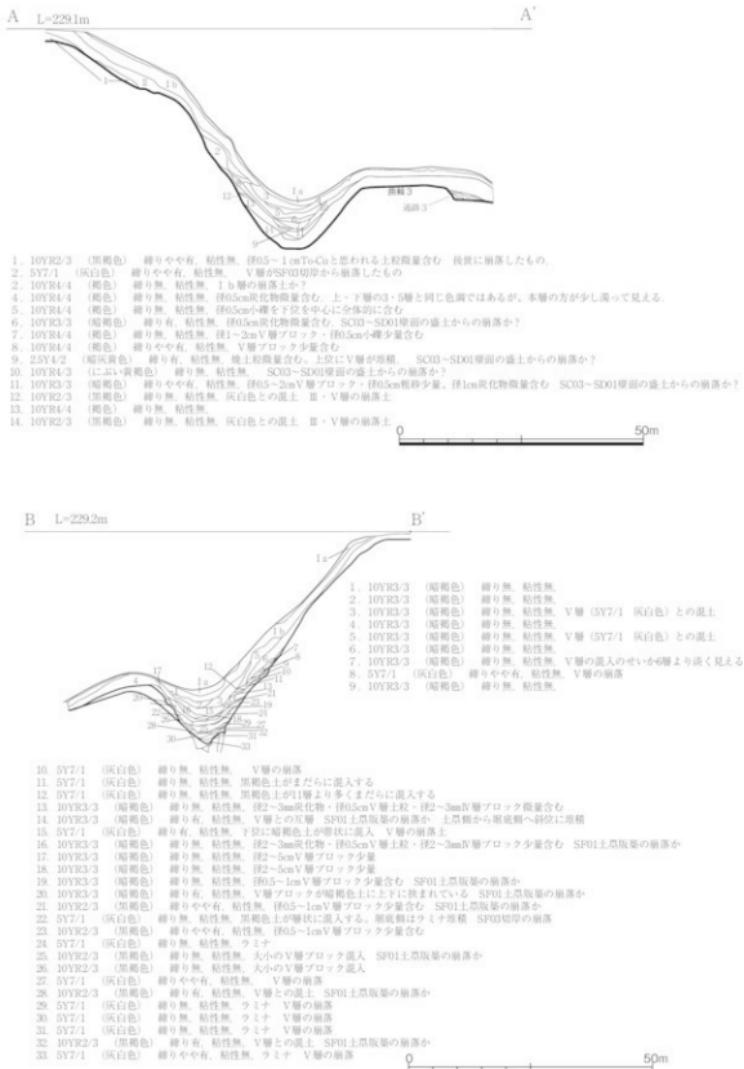
〈時期〉重複関係や堆積状況から曲輪3に帰属する中世の土坑と考えられる。

#### 土坑43（第65図、写真図版60）

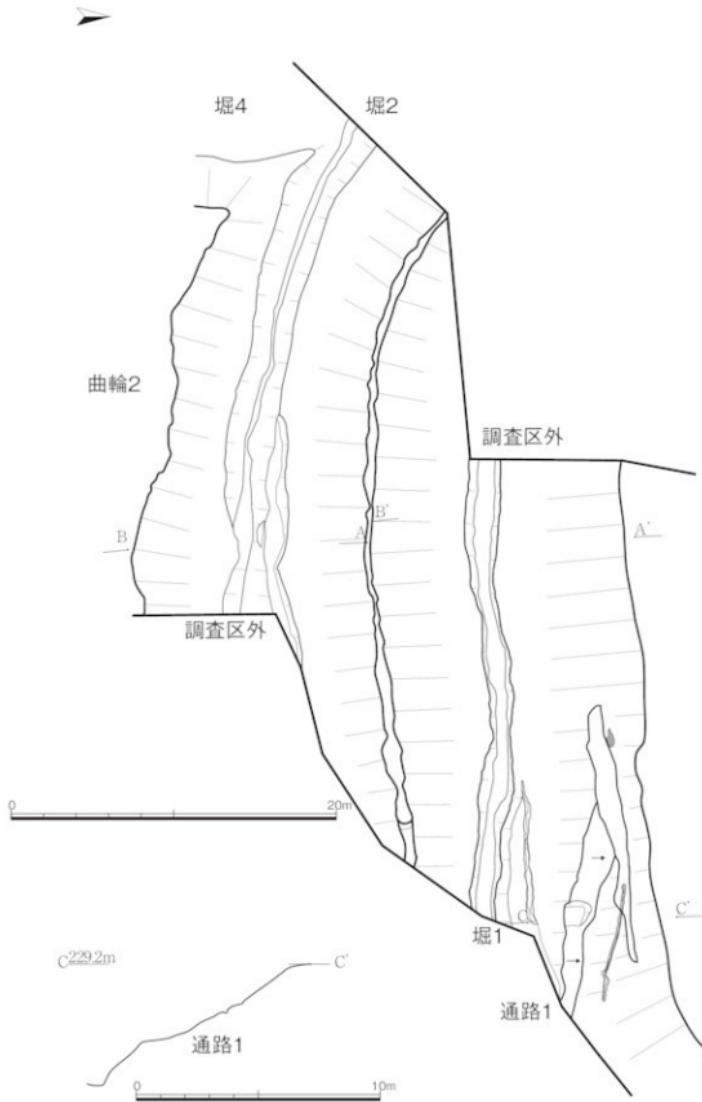
〈位置・検出状況〉曲輪3北側のやや高い部分に位置し、VI層上面で検出した。



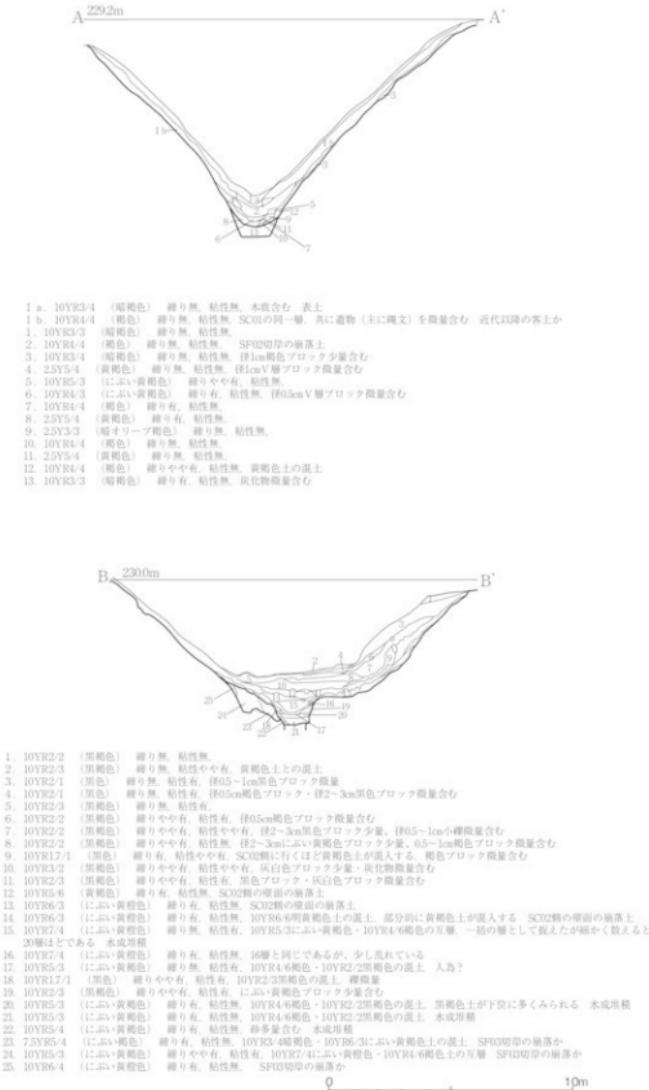
第70図 堤1東側



第71図 堀1東側断面



第72図 堀1西側



第73図 堀1西側断面

〈重複状況〉 堀9と重複し、本遺構が切る。

〈平面形・規模〉 西側が調査区外に広がっており、詳細な規模は不明である。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉 3層に細分される。炭化物や混入物が確認でき、人為堆積と考えられる。

〈壁・底面〉 南壁は直立気味に立ち上がるが、堀9と重複する北壁はなだらかに立ち上がる。深さは20~40cmを測る。底面は浅いすり鉢状を呈する。

〈遺物〉 時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪3に帰属する中世の土坑と考えられるが、詳細不明である。

#### 炉6（第66図、写真図版65）

〈位置・検出状況〉 曲輪3中央に位置し、II層直下のVI層上面で検出した。炉7とは近接する。鍛造剥片や粒状滓は確認できなかったが、掘り方を持つこと、炉8と類似することから鍛冶炉と判断した。

〈重複状況〉 堆穴建物22、堀7・8と重複し、本遺構が切る。また、平面プランにおいて掘立柱建物2と重複している。

〈平面形・規模〉 炉7と共に掘り方を持ち、橙色焼土が35×33cmの円形状に広がる。焼成深度は最大5cmを測る。

〈遺物〉 不明金具が1点出土した。

〈時期〉 検出状況から曲輪3に帰属する中世の鍛冶炉と考えられる。

#### 炉7（第66図、写真図版65）

〈位置・検出状況〉 曲輪3中央に位置し、II層直下のVI層上面で検出した。炉6とは近接する。炉6と同様の理由から鍛冶炉と判断した。

〈重複状況〉 堆穴建物22、堀7・8と重複し、本遺構が切る。また、平面プランにおいて掘立柱建物2と重複している。

〈平面形・規模〉 炉6と共に掘り方を持ち、明赤褐色焼土が38×38cmの不整円形状に広がる。焼成深度は最大8cmを測る。

〈遺物〉 炉6の通り。

〈時期〉 検出状況から曲輪3に帰属する中世の鍛冶炉と考えられる。

#### 炉8（第66図、写真図版65）

〈位置・検出状況〉 曲輪3中央に位置し、II層直下のVI層上面で検出した。焼土及びその周辺から鍛造剥片及び粒状滓を確認し、鍛冶炉と判断した。

〈重複状況〉 堆穴建物23と重複し、本遺構が切る。また、平面プランにおいて掘立柱建物2と重複している。

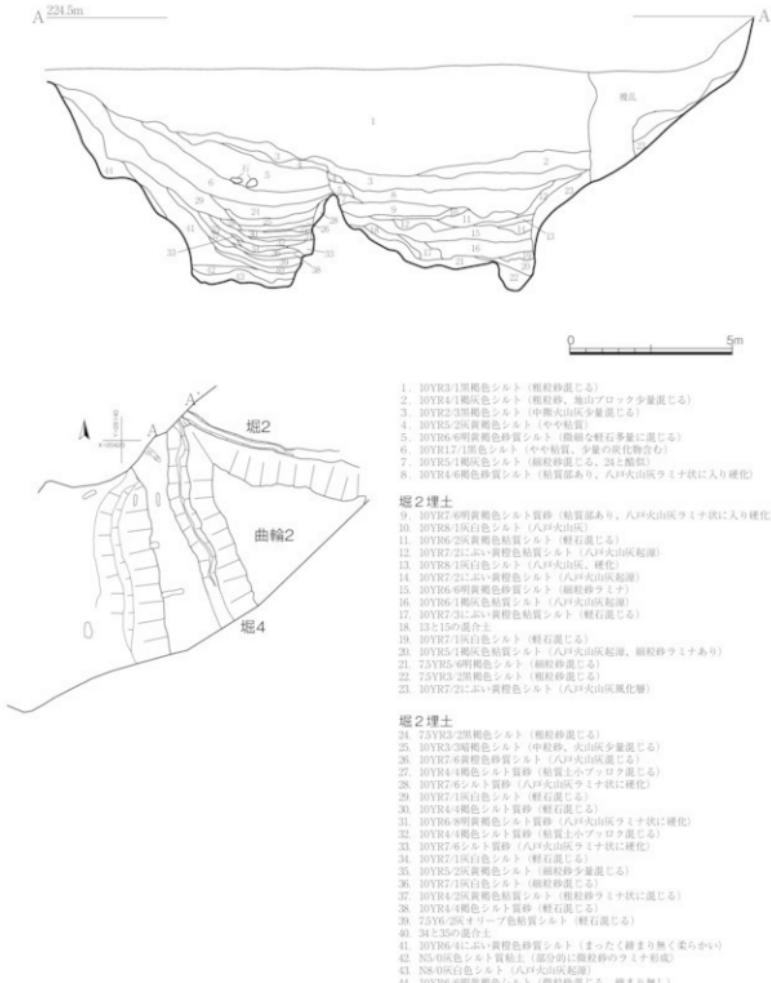
〈平面形・規模〉 橙色焼土が40×30cmの不整形に広がる。焼成深度は最大3cmである。

〈時期〉 検出状況から曲輪3に帰属する中世の鍛冶炉と考えられる。

#### 焼土4（第66図、写真図版64）

〈位置・検出状況〉 曲輪3中央～南東の平坦面に位置し、II層直下のVI層上面で検出した。焼土5とは近接する。

〈重複状況〉 土坑27と重複し、本遺構が切る。



第74図 堤2西側・堤4断面

〈平面形・規模〉 橙色焼土が42×34cmの不整形に広がる。焼成深度は最大6cmを測る。

〈時期〉 検出状況から曲輪3に帰属する中世の遺構であると考えられる。

#### 焼土5（第66図、写真図版64）

〈位置・検出状況〉 曲輪3中央～南東の平坦面に位置し、II層直下のVI層上面で検出した。焼土4とは近接する。

〈重複状況〉 土坑27と重複し、本遺構が切る。

〈平面形・規模〉 橙色焼土が36×23cmの楕円形状に広がる。焼成深度は最大4cmを測る。

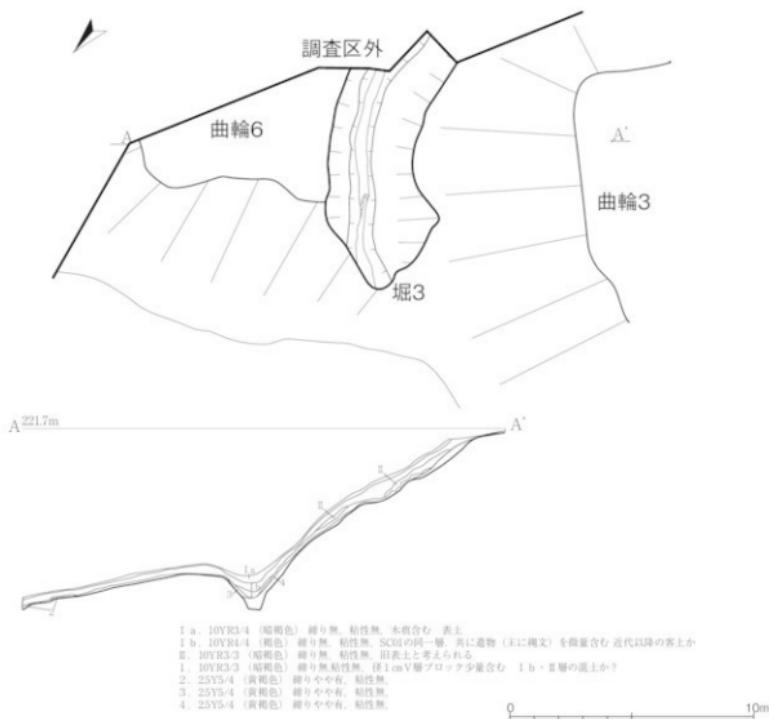
〈時期〉 検出状況から曲輪3に帰属する中世の遺構であると考えられる。

#### 溝4（第57図、写真図版63）

〈位置・検出状況〉 曲輪3北側に位置し、VI層上面で検出した。

〈重複状況〉 NP93と重複し、本遺構が切る。

〈平面形・規模〉 曲輪3縁辺沿いの直線的なもので、確認できる範囲では約5mである。



第75図 堀3

〈埋土〉 層高最大20cmの黒褐色シルトの単層である。底面には凹凸がある。

〈遺物〉 時期を特定するような遺物は出土していない。

〈時期〉 曲輪1で確認された溝1・2と類似しており、これらと同時期の遺構の可能性が想定される。

(北村)

#### d) 曲輪4・5

〈位置・検出状況〉 調査区西側、曲輪2の西に広がる曲輪である。堀4に接する平坦面が曲輪4、その西側一段低い位置にある緩斜面を曲輪5とした。曲輪4は近現代の盛土により東半は埋められている。これは曲輪2の削平時にその堆土を用いて曲輪2平坦面を拡張し、畑として利用したものである。

〈形態・規模〉 曲輪4・5ともには平面長方形を呈する。

〈造成・埋土〉 曲輪4は切土によって平坦面が造成されているが、曲輪5にその痕跡はない。

〈作事的遺構〉 いずれの曲輪も縄文時代の陥し穴がみられるのみで作事の痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

(福島)

#### e) 曲輪6

〈位置・検出状況〉 調査区東側、遺跡全体では主郭曲1の東側斜面の南側下位に位置し、棚状に張り出した狭小な平坦地で、西側山裾は堀3で堀切られていた。南側は調査区外のため詳細は不明であるが、確認された部分からみて東の沢側は急傾斜の切岸4とされているものと思われる。

〈形態・規模〉 平面形は、南側が調査区外のため全容は不明であるが、調査成果と現況地形状況から見て、西側は地形に沿って掘られた堀3により屈曲しているが、直角二等辺三角形状を呈するものと思われる。推定される規模は、東西長約8m、南北最大幅約7m、面積は約35m<sup>2</sup>ほどである。このうち調査は、およそ四分の三程度の範囲について行った。

〈造成・埋土〉 平坦地の造成はすべて削平によっており、東側に下り勾配となっているが、概ねフラットで標高は215.7mから214.7mほどである。中世の整地面上の層序は、10cmほど現表土下に近代の客土と考えられる厚さ約30cmの山砂という状況であった。

〈作事的遺構〉 作事の痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

#### f) 曲輪7

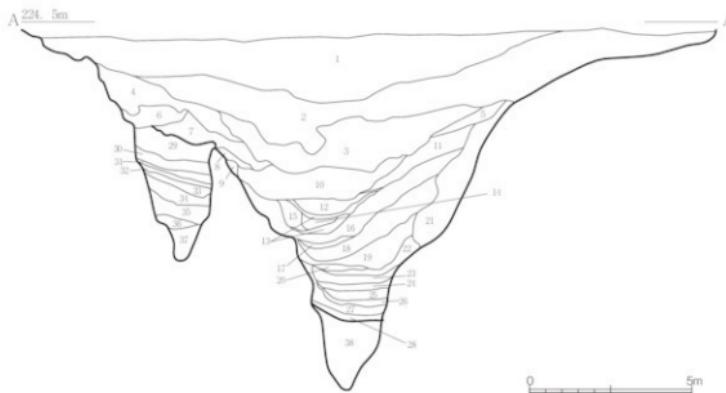
〈位置・検出状況〉 調査区東側、遺跡全体では曲輪1の東側斜面の北側下位に位置する細長い平坦地で、北側は調査区外のため詳細は不明であるが、調査の結果、約1mの高低差で南北二つの平坦地を緩い斜面が結ぶ帯状を呈し、北側の斜面上位には犬走り状の細い平坦地も認められた。北側に延びるやせ尾根の斜面中腹に続く葛折れの武者走りか犬走りの可能性も考えられる。

〈形態・規模〉 平面形・規模は、北側が調査区外のため全容は不明であるが、南側が高く長さ約6m、幅約2.2m、北側は確認できた範囲から長さは5m以上、幅は約2.5mで、二つの平坦地をやや勾配のある斜面が結ぶ帯状を呈し、北側の斜面上位の犬走り状の平坦地は幅1m、長さは2m以上となるが、北側調査区外の現地表面観察では繋がりは不明瞭であった。規模的には曲輪というには幅が狭く、武者走りか犬走りの性格のものと思われる。

平坦地の造成は基本的には削平によるが、一部雨裂と思われる部分には土を充填していた。全体的に

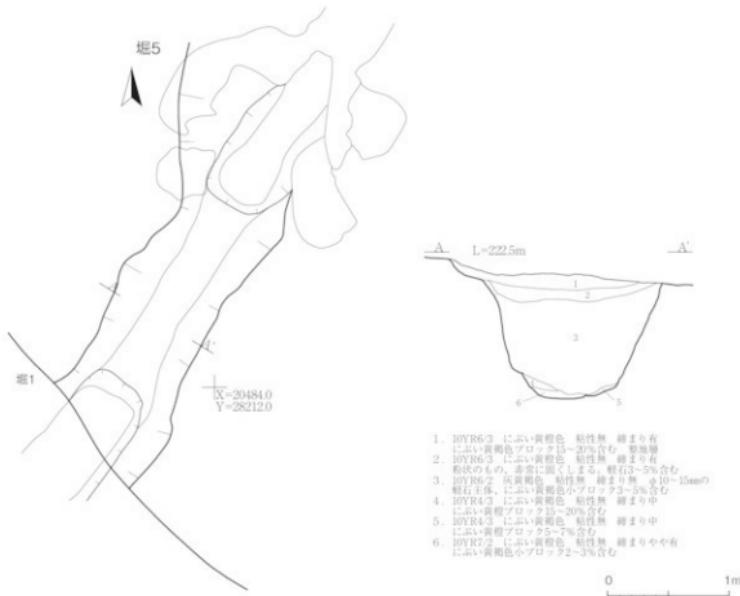


第76図 堀4



1. IOYR3-4 黒褐色シルト（粗粒砂・軽石粒少々混じる）
2. IOYR4-1 黒褐色シルト（粗粒砂・軽石粒少々混じる）
3. IOYR2-1 黒色シルト（粗粒砂・軽石粒少々混じる）
4. IOYR4-4 黒褐色シルト（中粗粒・軽石粒少々混じる）
5. IOYR3-3 黒褐色シルト（粗粒砂・軽石粒少々混じる）
6. IOYR6-3 にひび 黃褐色シルト（八戸大山床プロック多量に混じる）
7. IOYR4-4 黒褐色シルト（中微小山床多量に混じる）
8. IOYR7-1 にひび 黄褐色シルト（八戸大山床プロック少量化混じる）
9. IOYR7-2 にひび 黄褐色シルト（軽石粒少々混じる）
10. IOYR4-3 黒褐色シルト（八戸大山床・中粗粒砂・軽質土ブロック多量に混じる）
11. IOYR3-2 黒褐色シルト（粗粒砂・礫物粒少々混じる）
12. IOTR4-4 黒色シルト（粗粒砂・礫物粒少々混じる）
13. IOTR5-1 黑褐色粘質シルト（ややグライ化）一済水堆積
14. IOYR4-3 黑褐色粘質シルト（灰化物粒少々混じる）一済水堆積
15. IOYR3-3 黑褐色粘質シルト（輕石粒少々混じる）一済水堆積
16. IOYR4-4 黒色シルト（大山床プロック混じる）一崩落土
17. N5-0 黄褐色粘土（グライ化）一済水堆積
18. IOYR3-4 黑褐色粘土（八戸大山床・中粗大山床・軽質土ブロック多量に混じる）一崩落土
19. IOYR4-3 黄褐色粘土（八戸大山床・中粗大山床・軽質土ブロック多量に混じる）一崩落土
20. IOYR5-8 黄褐色シルト（軽石粒少々混じる）一崩落土
21. IOYR4-3 にひび 黄褐色シルト（礫まり無し）一崩落土
22. IOYR4-2 黒褐色シルト（粗粒砂少々・次山床プロック多量に混じる）一済水堆積
23. IOYR4-4 シルト質砂（粗粒砂兩端少々入る）一済水堆積
24. N7-0 黄褐色粘土（軽石粒多量に混じる）一済水堆積
25. N4-0 黄褐色粘土（軽石粒微量に混じる）一崩落土
26. IOYR5-5 黄褐色粘土質砂（灰化物少々混じる）一済水堆積
27. IOYR4-6 シルト質砂（英分沈着、ミテ穴）一済水堆積
28. N5-0 黄褐色粘土（軽石粒少々混じる）一済水堆積
29. IOYR4-4 黑褐色シルト（八戸大山床多量に混じる）一崩落土
30. IOYR3-2 黑褐色シルト（八戸大山床プロック混じる）一崩落土
31. IOYR2-1 黑褐色粘質シルト（土壤化層）
32. N8-0 黄褐色シルト（八戸大山床起原）一崩落土
33. IOYR4-4 黑褐色粘質シルト（灰化物粒少々混じる）
34. N8-0 黄褐色シルト（八戸大山床起原）一崩落土
35. IOYR4-4 にひび 黄褐色シルト（礫まり無し・八戸大山床プロック少量化混じる）一崩落土
36. N8-0 黄褐色シルト（八戸大山床起原、硬化顕著）一崩落土
37. IOYR4-1 黑褐色粘質シルト（軽石粒少々混じる）一済水堆積
38. IOYR2-1 黑褐色粘質シルト（粗粒砂少々混じる）一済水堆積

第77図 堀4断面



北側に下る傾斜となっていて、少し広めの緩斜面と狭い斜面が連続している。標高は南側と北側上位平坦地が約217.5m、北側下位は216.2m前後である。中世の整地面上の層序は、10cmほどの現表土下に近代の客土と考えられる厚さ約40cm~60cmの山砂、一部旧表土と切岸斜面の崩落土という状況であった。

〈作事的遺構〉作事の痕跡としては、南側の高い平坦部で土坑2基と柱穴8個が検出されている。

〈出土遺物〉遺物は整地面から和鉢1点が出土した。

(小山内)

## (2) 堀・土壘・切岸

### 堀1・切岸3・土壘1 (第70図、写真図版13・26~28)

〈位置・検出状況〉堀1は台地北側端部の曲輪1を区画防御する空堀(内堀)で、台地を掘切った南側から東側の沢斜面中腹を巡らせ、北端は北東側に延びるやせ尾根も区切っていた。南側の中央部分が調査区外のため全容は不明であるが、並行する堀2(外堀)を隔てる塁壁がこの部分で途切れおり、曲輪1の出入り通路1との位置関係から見て虎口と考えられる。

堀1東部の曲輪1側斜面上位の人工的急傾斜部分が切岸3で、斜面中腹の曲輪3とした帶曲輪に至る塁壁である。土壘1は、堀1東南部の外側に伴うもので、曲輪3造成において斜面南側が削り残され、一部沢筋を埋め立てて構築されていた。現況で調査区内の土壘1南端付近(土壘1全体では中央付近)に浅く窪んでいる部分が確認されていた。土壘の状況確認も兼ねて、断ち割りを行ったところ

ろ、土壘を掘りきっている部分が確認された。実効堀幅は5.50m、垂直壁高2.72m、法高3.37m、垂直高2.26m、断面形は逆台形状を呈する。地山を起源とする堆積土を十数cm単位の厚さでほぼ水平に埋めた、版築状の構築物である。最終的には南北を繋ぎ、一連の土壘となっている。この部分は通路状の構築物から土壘への機能変化が推察できる部分である。

〈形態・規模〉堀1は安比川に面する北西側崖に繋げて馬蹄形に掘り巡らされ、断面形はおよそ薬研状を呈するが、底面は降雨等の流水による雨裂ができる、崩落を繰り返しているようであった。切岸1は堀1と2を隔てる壁壁の延長であり、調査部分が丁度東側斜面に低く舌状に張り出す土壘状となっているもので、総長は約26mを測り、横断面形は蒲鉾型を呈する。堀1の総延長は約120m、実効堀幅は、東部の堀1～切岸3～曲輪3間で約14m、南部の曲輪1～土壘1間で約11m、西部の二重堀部分では約16m、垂直壁高は、東部約8.5m、南部約8.4m、西部約8.7m、実効法高は、東部約12m、南部約10.4m、西部約12m、垂直高は、東部約2.5m、南部約2.3m、西部約7.9m、外壁法高は、東部約3.3m、南部約2.6m、西部約10mを測る。堀底の標高は、虎口付近で約223m前後と高く、西側で高低差は約2m、東側では約4mと虎口から東西両側に向かい下り勾配となっていた。

〈埋土〉10cmほどの現表土下には近代の客土と考えられる山砂があり、斜面上位の20cmくらいから堀底では1mを超える。この山砂は下層は人為的様相を呈するが、上層は曲輪1からの崩落の繰り返しによる堆積と見て取れた。山砂以下は壁壁面の崩落と流水による水成堆積の繰り返しの状況を呈しており、底面以下は雨裂と地割れが認められた。

〈出土遺物〉曲輪1東側の埋土上位では主郭からの流れ込みと思われる鉄滓が少量と南側最下層から板状の鉄製品1点、東側の底面雨裂から石臼が1点出土した。また、切岸3の斜面上位でも主郭からの流れ込みと思われる鉄鎌1点が根ビットからと客土中から鉄製蓋1点が出土した。

## 堀2（第72図、写真図版16）

〈位置・検出状況〉堀2は、台地北側端部の曲輪1を区画防御する堀1（内堀）と並行する二重堀の所謂外堀となる掘切の空堀である。検出時には底面幅の広い箱堀状を呈していた。東側が半分以上調査区外のため全容は不明であるが、調査の結果、西端は曲輪2西側の堀4と繋がっていた。

〈形態・規模〉堀2は安比川に面する西側崖から東側の沢までやや弓なりに台地を堀切っており、調査により確認できた部分では、断面形はおよそ薬研状を呈する。堀の最低面は流水により雨裂状となつておらず、調査中もひっきりなしに水が流れている状態であった。調査区東側の虎口に近い部分では、堀1側の斜面下位に長さ15m以上で東側調査区外に続く、幅1m未満の細長い平場が確認され、またこの部分の対面となる曲輪2側斜面中位では長さ6m以上で東側調査区外に続く、幅約2m前後のテラス状の平場も確認された。断面と覆土の観察からは堀1側の下位の平場は最も古い堀底で、壁壁の崩落後に曲輪2側により部分的に掘り直しと修復を2度行ったものと考えられる。曲輪2側のテラス状の平場は、出入口あるいは武者溜まりの機能のものの可能性が考えられる。

総延長は約90m、実効堀幅は、曲輪2が削平されているため参考値となるが、12mほどと推測され、垂直壁高は6m、実効法高は5.2m、垂直高は5.8m、外壁法高は7mを測る。堀底の標高は、虎口付近の東側で約12m前後と高く、西側に下り勾配で高低差は約4mを測る。

〈埋土〉埋土は25層に細分されるが、最上層は曲輪2側に厚い昭和の開田時の流れ込みや崩落等の黒ボク土、中層は堀1側の斜面から堀中位に経年により比較的厚く堆積した旧表土、壁壁下位にはV層の崩落土、堀の下層はV層の上層と下層が互層となった水成堆積の4層に大別できる。堀底は水流により雨裂状になっていた。

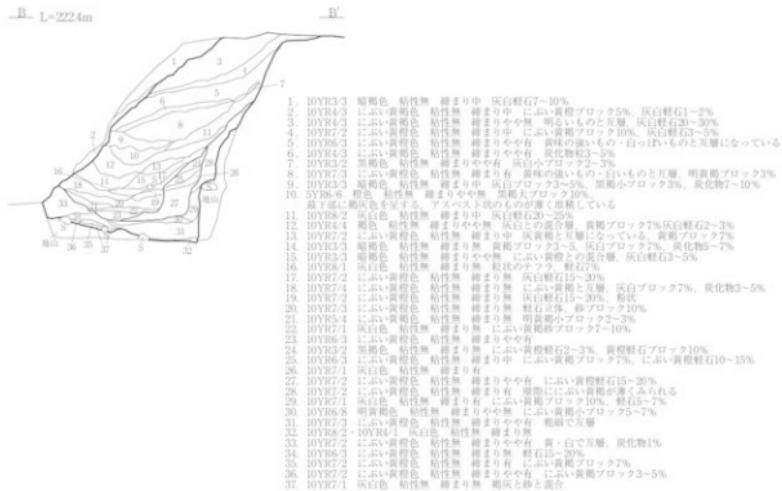


第79図 堆6

—A L=2228m

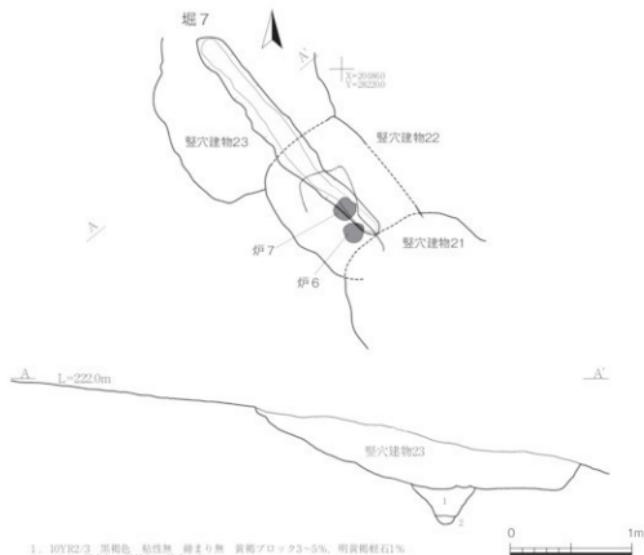


—B L=2224m

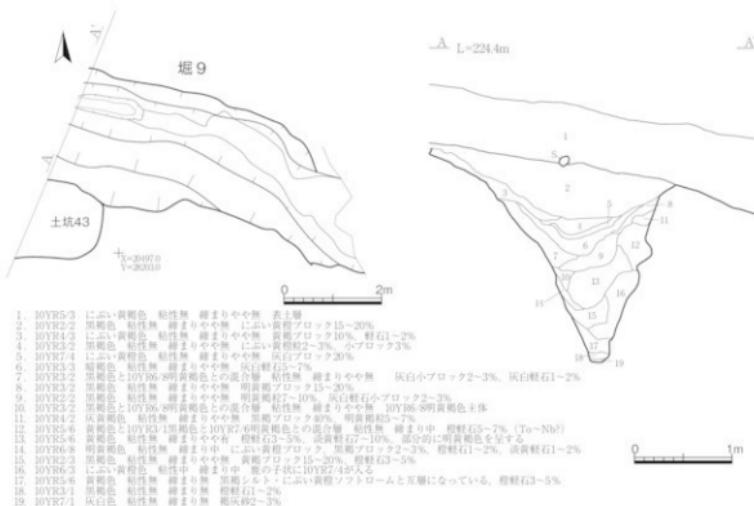


第80図 堀6断面

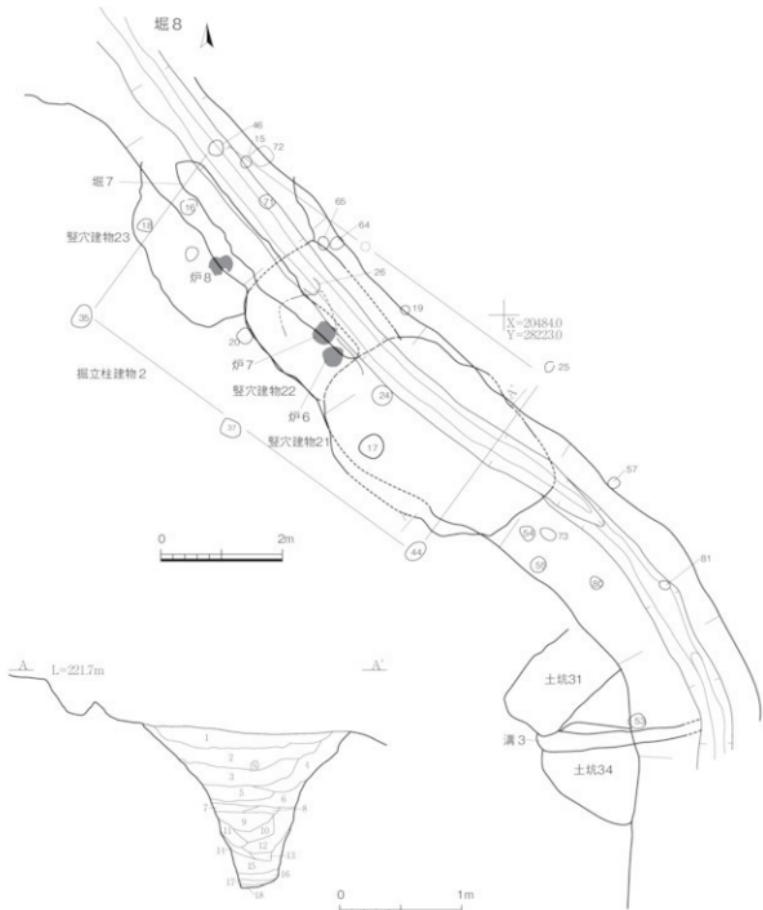
0 1m



第81図 堀7



第82図 堀9



〈出土遺物〉 遺物は埋土上位から礫石器2点、縄文土器が出土した。

(小山内・福島)

#### 堀5 (第78図、写真図版20)

〈位置・検出状況〉 堀5は、堀1と直交するように構築された空堀である。検出時は完全に軽石主体の堆積土で埋没していた。

〈形態・規模〉 堀5は曲輪3を最短距離で掘切っており、確認できた長さは約4.8mである。北東側は流水等により浸食を受けて大規模に抉られている。断面形は箱堀状を呈する。実効堀幅は1.76m、垂直壁高は1.16m、実効法高は1.39m、垂直高は0.95m、外壁法高は0.93mを測る。

〈埋土〉 最上部には10cm程の中世の整地層が見られる。堀の大部分は灰黄褐色を呈する軽石主体の堆積土で人為的に埋め戻されている。最下部には壁の崩落土が観察される。

〈出土遺物〉 堀8との合流付近の混合層から常滑、鍋、銭貨、鍛造剥片が出土した。

#### 堀6 (第79・80図、写真図版21・22)

〈位置・検出状況〉 堀6は、堀1とはほぼ同位置に構築された堀1以前の空堀である。北東側の一部が残存している。

〈形態・規模〉 堀6は堀1とはほぼ同位置の曲輪3側を巡る。断面形は堀1とは異なり、歪な逆台形状を呈しているが、降雨等の流水に伴う崩落が繰り返されていたようで、修復（掘り返し）が行われていたようである。確認できた長さは約20.2mである。堀5よりも古く、特に古い段階の堀の可能性が高い。堀の北東側しか残存しないため、詳細な規模は不明と言わざるをえないが、確認できた範囲では、垂直高は2.17m、外壁法高は2.23mを測る。

〈埋土〉 最上部は曲輪3を覆う盛土整地層と同じ堆積土で人為的な埋め戻しを行っているが、それより下部は曲輪3側からの崩落と流水等による水成堆積の繰り返しの状況を呈している堆積と見て取れた。10層には廃棄焼土層が確認でき、曲輪3の鍛冶関係の遺構との関連が想定される。

〈出土遺物〉 底面直上から鉄錆、埋土から鉄錆・鉄釘、鋳型片と考えられる資料、石臼が出土した。

#### 堀7 (第81図、写真図版23)

〈位置・検出状況〉 堀7は曲輪3の北東寄り中央付近、堅穴建物21~23の床面で確認した空堀である。

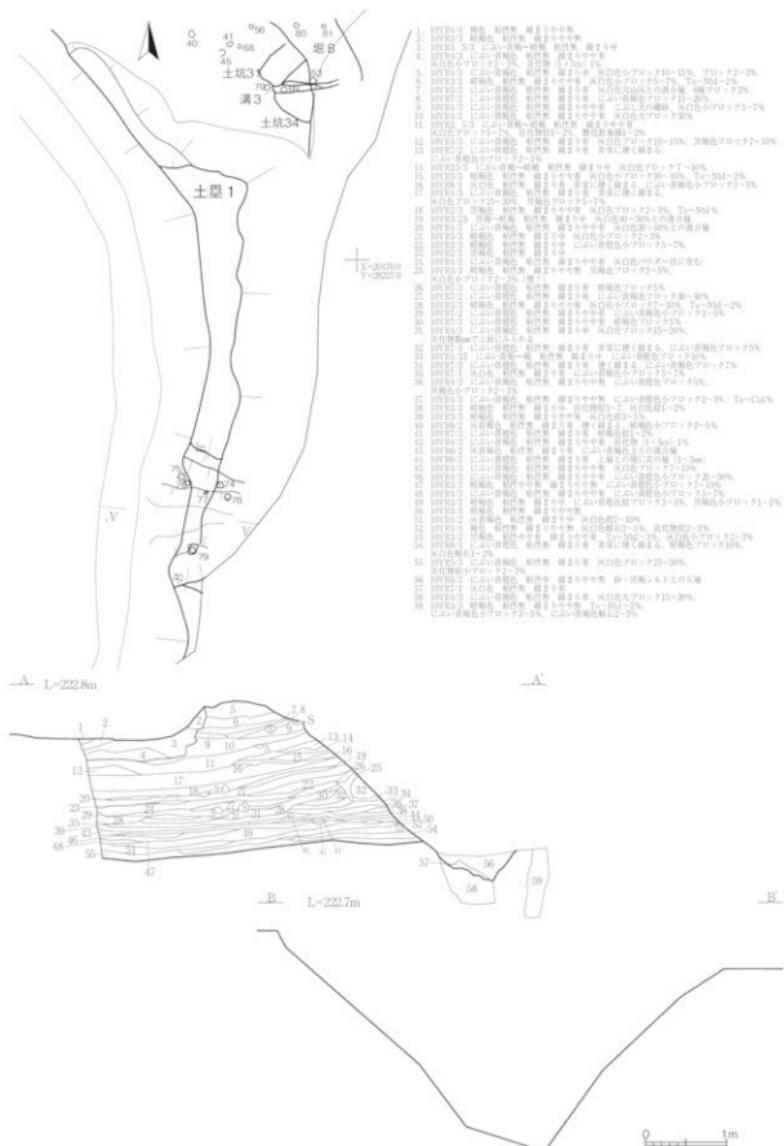
〈形態・規模〉 堅穴建物構築により本遺構の大部分が壊されており、詳細は不明である。断面形は薬研状を呈している。確認できた長さは約4.4mである。

〈埋土〉 最下層に壁崩落土と考えられる灰白色土が薄く堆積し、大半が黒褐色シルトで埋没している。

#### 堀8 (第83図、写真図版24)

〈位置・検出状況〉 堀8は曲輪3を区画防御する最古段階の空堀である。曲輪3北東隅周辺へ屈曲しているが、その部分の底面標高が最も高く、北西方向、南方向へそれぞれ傾斜している。最上部は堅穴建物の貼床や盛土整地層で完全に埋没しており、現況で確認はできなかった。南東～東側は調査区外へと延びている。

〈形態・規模〉 堀8は曲輪3に沿って掘り巡らされ、確認できた長さは16.8mである。北西端は流水等により浸食を受けて大規模に抉られている。断面形は薬研状を呈するが、底面幅が60cm程と人一人が通れるサイズである。実効堀幅は1.70m（残存）、垂直壁高は1.37m（残存）、実効法高は1.58m（残存）、垂直高は1.29m（残存）、外壁法高は1.36m（残存）を測る。



《埋土》最上部には堅穴建物の貼床や盛土整地層で人為的に埋め戻されている。それより下層は黒褐色土層とし、黄橙色土層との互層となっており、堀壁面の崩落と流水等による堆積の繰り返しの状況を看取される。

### 堀9（第82図、写真図版25）

《位置・検出状況》堀9は曲輪3北側の北向き緩斜面を横断するように構築された空堀である。検出時には完全に埋没しており、堀の存在を確認できなかった。

《形態・規模》堀9は曲輪3の北側を最短距離で掘切っており、確認できた長さは約6.7mである。東側は流水等により浸食を受けて大規模に抉られている。断面形はおよそ薺研状を呈するが、底面は降雨等の流水による雨裂ができ、崩落を繰り返していたようである。実効堀幅は2.57m、垂直壁高は4.27m、実効法高は5.44m、垂直高は3.65m、外壁法高は3.93mを測る。

《埋土》最上部は地山ブロックが多く見られ、人為的な埋め戻しを行っているが、それより下部は崩落と流水等による水成堆積の繰り返しの状況を呈している堆積と見て取れた。

（北村）

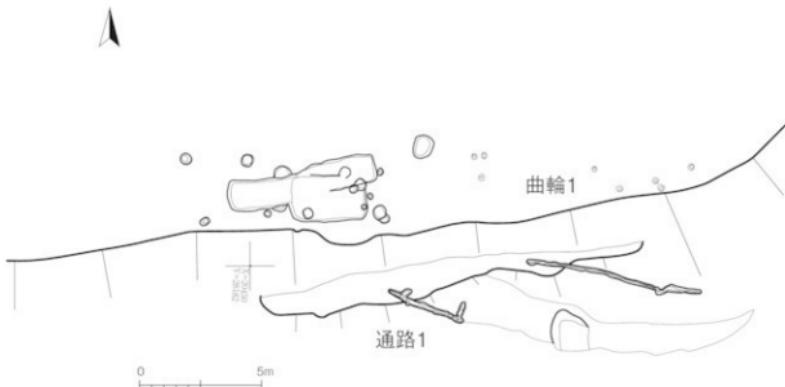
### （3）通 路

#### 通路3（第76図、写真図版31）

《位置・検出状況》曲輪3の中央部分にあり、上記のとおり段差のある南北平坦地を結ぶ、葛折れの細長い通路となっていた部分である。

《形態・規模》曲輪3南側平坦地から北側に切岸4の縁沿いに長さ約6m、幅約1.5mの犬走り状とし、緩い登りの坂道として長さ約7.6m、幅約1.2mほどの折り返しとしていた。南北の平坦地の高低差は約1m強あるが、直線的に上り下りできる程度であり、現状で葛折れの通路としてはあまり意味をなしていない。前記のとおり、畑作による人工改変による段差の可能性も考えられる。

《造成・埋土》造成は基本的に削平によっているが、曲輪3北側平坦地に接続するあたりはV層をベースとした盛り土がされており、沢部分の雨裂の補修等が部分的に見受けられた。埋土は上層は整



第85図 通路1

地盛土の流入、下層は壁の崩落土で、中位は黒ボク土の自然堆積である。

《作事的遺構》門跡等の柱穴や柵列などの作事的痕跡は検出されなかった。

(小山内)

#### (4) 繩文時代の遺構

##### 貯蔵穴1 (第86図、写真図版60)

《位置・検出状況》曲輪3の北側の北向き斜面に位置し、VI層上面で検出した。

《重複状況》なし。

《平面形・規模》削平や土砂の流出等で大部分が失われており、詳細は不明である。

《埋土》混入物の違いにより11層に細分されるが、しまりのあまりない地山層で埋没している。繰り返し壁の崩落や地表面の流入により埋没したものと考えられる。

《壁・底面》遺構の極一部のみ確認できたが、壁はオーバーハングオーバーハングしている。断面観察から確認できる深さは約1.0mである。底面は概ね平坦である。

《時期》遺構の形態的特徴から縄文時代に帰属する貯蔵穴と考えられる。

##### 陥し穴1 (第87図、写真図版66)

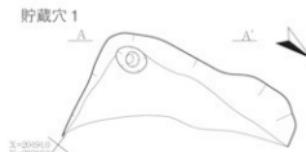
《位置・検出状況》曲輪1中央に位置し、IV層面で検出した。

《平面形・規模》開口部約225×50~60cm、底部約215×10~30cmの長楕円形を呈する。

《埋土》5層に細分される。下位に黒褐色土が堆積する自然堆積と判断される。

《壁・底面》壁は直立するものの底面からは緩やかに立ち上がり、横断面形状はU字形を呈する。深さは約40cmが残存する。城館構築時に上部がかなり削平されたものと推察される。底面は中心部がやや低く、全体的に高低がある。中心より北側と南側に逆茂木痕と思しき痕痕が確認された。

《時期》遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。



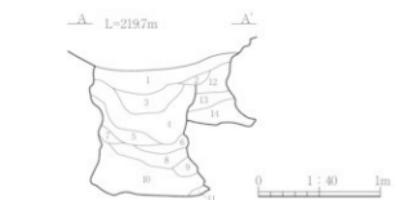
##### 陥し穴2 (第87図、写真図版66)

《位置・検出状況》曲輪1中央に位置し、IV層面で検出した。

《重複状況》一部土坑4と重複するが、本遺構の認識が土坑4掘削後であったため、実際的な新旧については不明である。しかし、状況的には本遺構が切られるものと推察される。

《平面形・規模》開口部約190×50cm、底部約170×30cmの長楕円形を呈する。

《埋土》11層に細分されるが、上位の褐色土系、中位のにぶい黄橙色土、下位の黒褐色土に大別でき、自然堆積と



- |             |          |     |              |
|-------------|----------|-----|--------------|
| 1. 10YR7'2  | にぶい 黄褐色土 | 粘性無 | 締まりやや無       |
| 2. 10YR7'2  | にぶい 黄褐色土 | 粘性無 | 締まりやや無       |
| 3. 10YR7'2  | にぶい 黄褐色土 | 粘性無 | 締まり 中        |
| 4. 10YR7'2  | にぶい 黄褐色土 | 粘性無 | にぶい 黄褐色土との混合 |
| 5. 10YR7'2  | にぶい 黄褐色土 | 粘性無 | 締まり 中        |
| 6. 10YR5'3  | にぶい 黄褐色土 | 粘性無 | 締まり 中        |
| 7. 10YR7'2  | にぶい 黄褐色土 | 粘性無 | 締まり 中        |
| 8. 10YR7'2  | にぶい 黄褐色土 | 粘性無 | 締まり 中        |
| 9. 10YR7'1  | 灰白色      | 粘性無 | 締まり 中        |
| 10. 10YR5'4 | にぶい 黄褐色土 | 粘性無 | 締まりやや無       |
| 11. 10YR5'4 | 灰白色      | 粘性無 | 締まり 中        |
| 12. 10YR7'1 | 灰白色      | 粘性無 | 締まりやや無       |
| 13. 10YR7'1 | 灰白色      | 粘性無 | 締まり 中        |
| 14. 10YR4'3 | にぶい 黄褐色土 | 粘性無 | 締まりやや無       |

第86図 貯蔵穴

判断される。

〈壁・底面〉 壁は底面からほぼ直立し、横断面形状は箱形を呈する。深さは約30cmが残存する。城館

構築時に上部がかなり削平されたものと推察される。底面は所々高低があるものの、概ね平坦である。

〈時期〉 遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

#### 陥し穴3（第87図、写真図版67）

〈位置・検出状況〉 曲輪1中央に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 一部堅穴建物16と重複するが、本遺構の認識が堅穴建物16精査後であったため、実際的新旧については不明である。状況的には本遺構が切られるものと推察される。

〈平面形・規模〉 開口部約230×50cm、底部約200×30cmの長楕円形を呈する。

〈埋土〉 10層に細分されるが、上位の褐色土系、中位の黄褐色土、下位の黒褐～暗褐色土に大別でき、自然堆積と判断される。

〈壁・底面〉 壁は直立するものの底面からは緩やかに立ち上がり、横断面形状はU字形を呈する。深さは約40cmが残存する。城館構築時に上部がかなり削平されたものと推察される。底面は所々高低があるものの、概ね平坦である。

〈時期〉 遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

#### 陥し穴4（第88図、写真図版67）

〈位置・検出状況〉 曲輪1北側に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 堅穴建物2・3と重複し、本遺構がこれらに切られる。

〈平面形・規模〉 開口部約360×25～40cm、底部約390×8～15cmの溝状を呈する。

〈埋土〉 5層に細分されるが、上位に黒褐色土、中位にぶい黄橙色土、下位の暗褐色土が堆積する。

〈壁・底面〉 壁は直立するが、中位で歪に内・外傾し、横断面形状は角張ったU字状となる。また、北東・南西壁の両端はオーバーハングして立ち上がる。深さは約90cmを測る。陥し穴1～3周辺ほどではないにせよ、この周辺も城館造営時に削平されているものと考えられる。底面は中央に向かって両端が傾斜している。

〈時期〉 遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

#### 陥し穴5（第88図、写真図版67）

〈位置・検出状況〉 曲輪1南西側に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 状況的に堅穴建物6と重複し、本遺構がこれらに切られるものと思われる。

〈平面形・規模〉 開口部約160×60～70cm、底部約120×30cmの楕円形を呈する。

〈埋土〉 10層に細分されるが、全体的に暗褐～黒褐色土を主体とする自然堆積と考えられる。

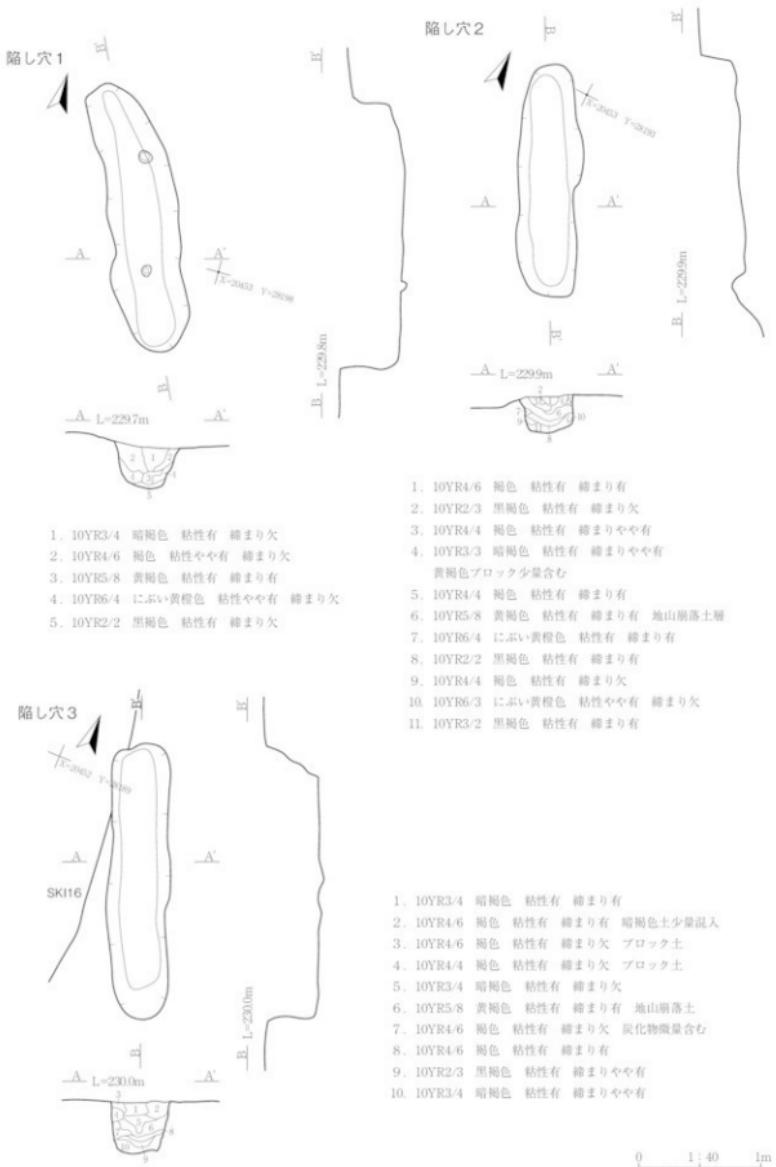
〈壁・底面〉 壁は直立し、横断面形状は箱形となる。残存する深さは約65cmを測る。こちらも上部は城館造営時に削平されているものと思われる。底面は平坦である。

〈時期〉 遺構の特徴から考えて縄文時代の土坑陥し穴であると考えられる。

#### 陥し穴6（第89図、写真図版67）

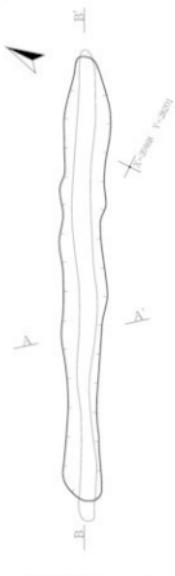
〈位置・検出状況〉 曲輪1南西側に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉 土坑2と重複し、これに切られる。

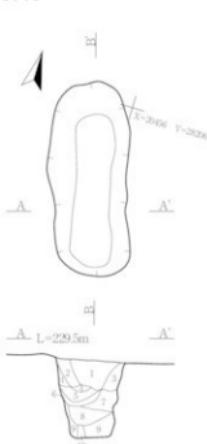


第87図 階し穴1～3（曲輪1）

## 陥し穴 4



## 陥し穴 5

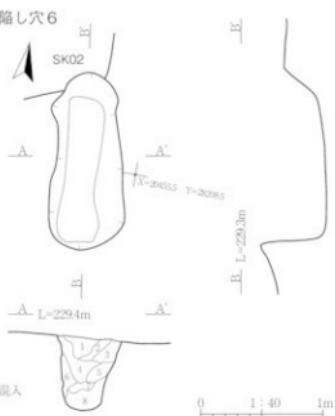


1. 10YR2/3 黒褐色 粘性有 繊まりやや有
2. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 繊まり欠
3. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 繊まりやや有 黄褐色土混入
4. 10YR4/4 暗褐色 粘性有 繊まり有 崩落土
5. 10YR3/4 暗褐色 粘性有 繊まり欠
6. 10YR4/4 暗褐色 粘性有 繊まり有 ブロック土
7. 10YR3/2 黒褐色 粘性有 繊まりやや有
8. 10YR2/2 黒褐色 粘性有 繊まり有 棕色土粒少量含む
9. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 繊まり有
10. 10YR5/6 黄褐色 粘性有 繊まり有 混乱?

1. 10YR2/2 黒褐色 粘性有 繊まり有
2. 10YR5/8 黄褐色 粘性有 繊まりやや有
3. 10YR6/3 にぶい黄褐色 粘性有 繊まりやや有
4. 10YR7/4 にぶい黄褐色 粘性有 繊まり有
5. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 繊まりやや有

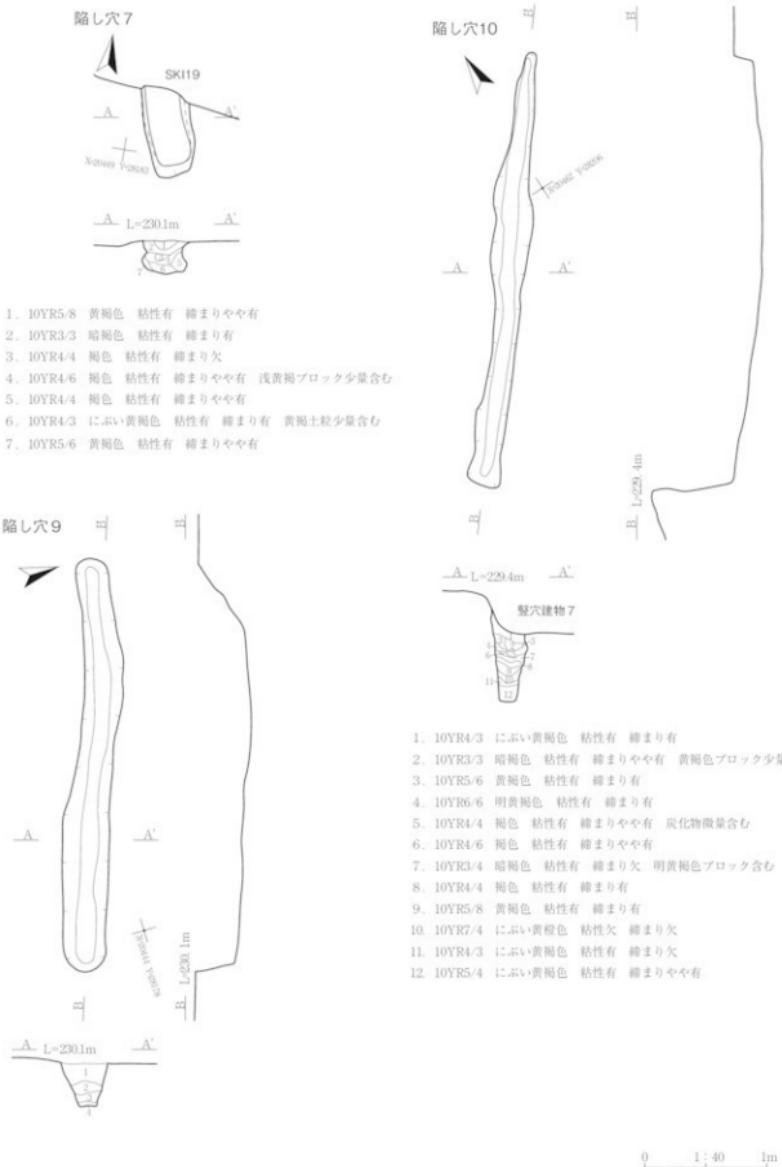
1. 10YR2/2 黒褐色 粘性有 繊まり欠
2. 10YR4/6 暗褐色 粘性有 繊まり有
3. 10YR4/4 暗褐色 粘性有 繊まり有
4. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 繊まり有 明褐色粒少量含む
5. 10YR4/6 暗褐色 粘性有 繊まり有
6. 10YR4/4 暗褐色 粘性有 繊まり有
7. 10YR2/3 黒褐色 粘性有 繊まり欠
8. 10YR3/4 暗褐色 粘性有 繊まりやや有 にぶい黄褐色土混入

## 陥し穴 6

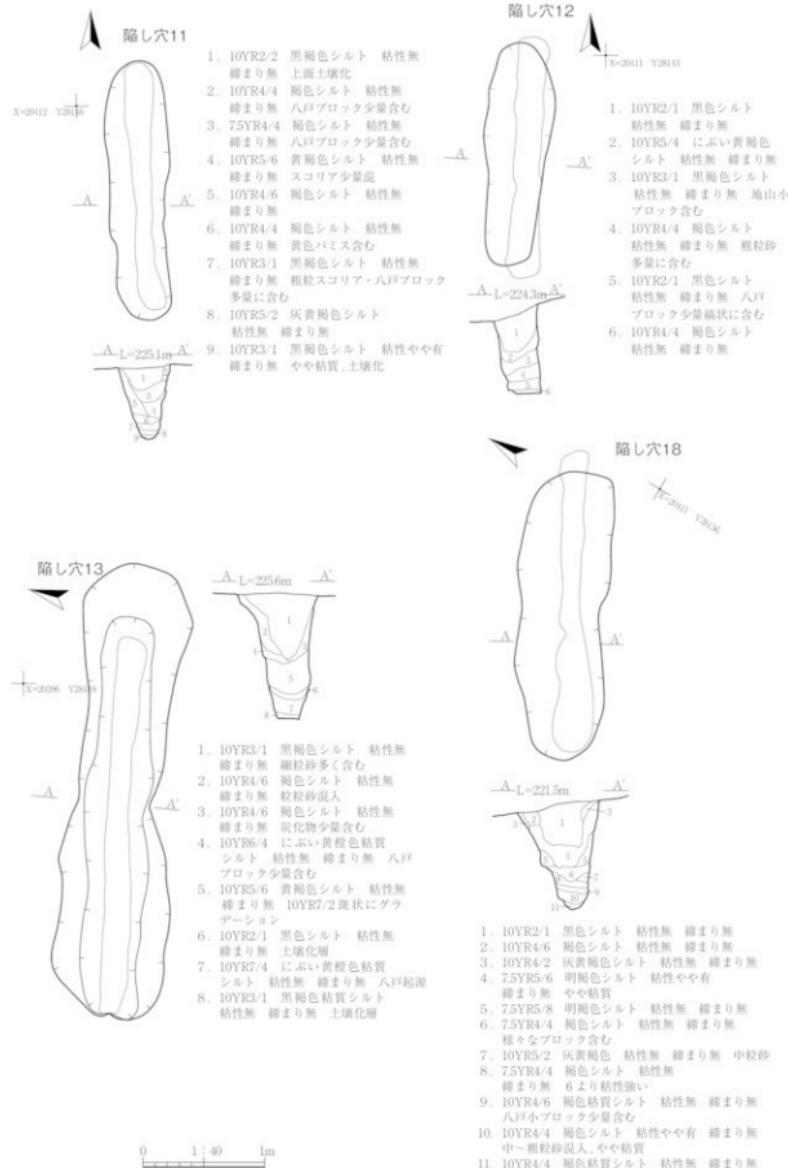


0 1 : 40 1m

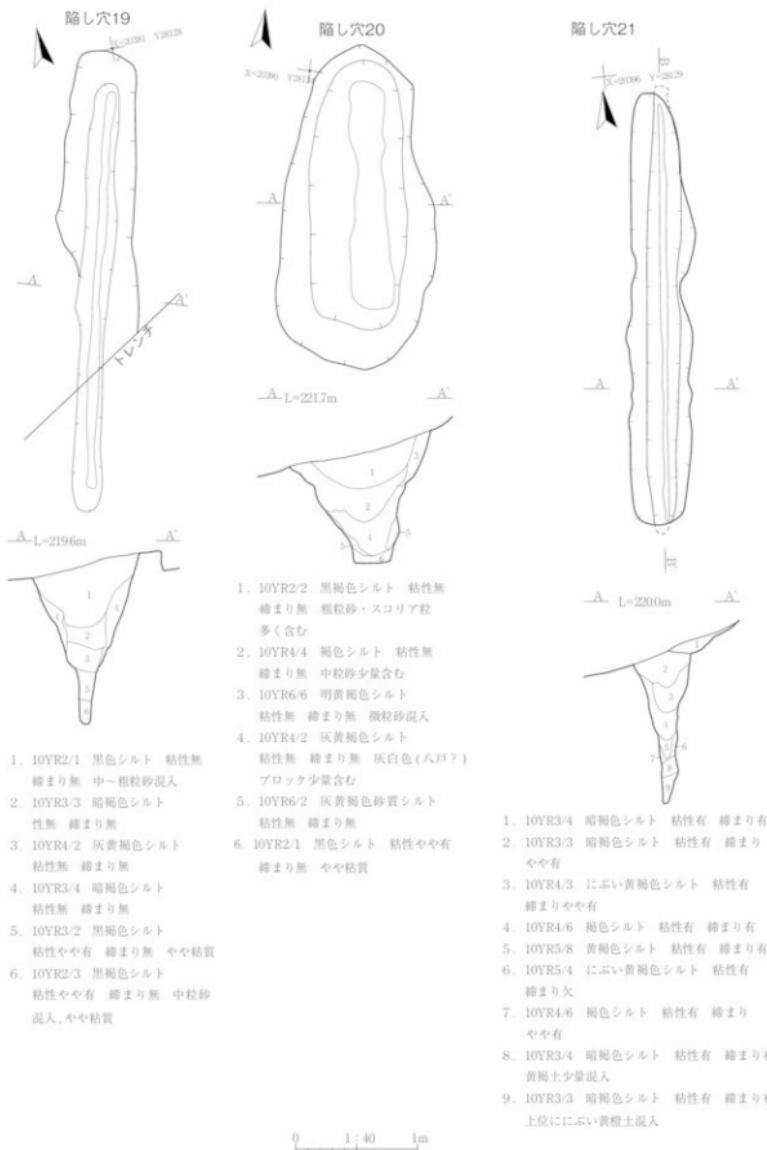
第88図 陥し穴 4～6 (曲輪 1)



第89図 隠し穴7・9・10（曲輪1）



第90図 陥し穴11～13・18（曲輪4）



第91図 路し穴19~21 (曲輪5)

〈平面形・規模〉開口部約145×50cm、底部約120×30cmの楕円形を呈する。

〈埋土〉8層に細分されるが、全体的に暗褐～黒褐色土を主体とする自然堆積と考えられる。土坑5と埋土の状況は近似する。

〈壁・底面〉壁は直立するものの、底面からは丸みを帯びて繋がり、横断面形状はU字状を呈する。残存する深さは約60cmである。残存する深さは約65cmを測る。こちらも上部は城館造営期に削平されているものと思われる。底面はほぼ平坦である。

〈時期〉遺構の特徴から考えて縄文時代の土坑状陥し穴であると考えられる。

#### 陥し穴7（第89図、写真図版68）

〈位置・検出状況〉曲輪1西側に位置し、検出面はIV層である。

〈重複状況〉堅穴建物19と重複し、これに切られる。

〈平面形・規模〉遺構重複により全容は不明であるが、残存部から開口部80cm以上×40cm、底部60cm以上×30cmの長方形形状を呈するものと思われる。

〈埋土〉7層に細分される。上位は褐色土、下位には黄褐色土が堆積する。

〈壁・底面〉壁は底面からは丸みを帯びて繋がり、中位で一旦すぼみ、上位で外傾する。残存する深さは約25cmを測る。底面は凹凸が見られる。

〈時期〉遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

#### 陥し穴9（第89図、写真図版68）

〈位置・検出状況〉曲輪1最南西に位置し、IV層面で検出した。



第92図 遺物包含層

〈平面形・規模〉開口部約340×30cm、底部約325×10~15cmの溝状を呈する。

〈埋土〉4層に細分され、上～中位にかけては明黄褐～褐色土、最下層に暗褐色土が堆積する。

〈壁・底面〉壁はやや外側に傾斜して立ち上がり、横断面形は箱形を呈する。深さは約35cmが残存するが、この区域周辺も城館造営時に大きく削平されたことが窺える。底面はほぼ平坦である。

〈時期〉遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

#### 陥し穴10（第89図、写真図版68）

〈位置・検出状況〉曲輪1東側に位置し、IV層面で検出した。

〈重複状況〉堅穴建物7・8と重複し、これに切られる。

〈平面形・規模〉開口部約360×10~30cm、底部約340×5~15cmの溝状を呈する。

〈埋土〉12層に細分される。上位は様々な土層に細分されるが、中位は暗褐～褐色土、下位は黄褐色土系に大別できる。自然堆積と思われる。

〈壁・底面〉壁はほぼ直立し、横断面形はU字状を呈する。深さは約80cmが残存するが、この区域周辺も城館造営時にある程度削平されたものと推察される。底面はほぼ平坦である。

〈時期〉遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

(小林)

#### 陥し穴11（第90図、写真図版69）

〈位置・検出状況〉曲輪4のIV層面で検出した。

〈重複状況〉上部はいくらか削平を受けているが、他の遺構との切り合いはない。

〈平面形・規模〉開口部の短軸52cm、長軸215cmの細い楕円を呈する。

〈埋土〉地山起源の崩落堆積層が互層になり堆積している。

〈壁・底面〉壁は直立気味に立ち上がり、深さ62cmを測る。

〈時期〉遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

#### 陥し穴12（第90図、写真図版69）

〈位置・検出状況〉曲輪4のIV層面で検出した。

〈重複状況〉上部はいくらか削平を受けているが、他の遺構との切り合いはない。

〈平面形・規模〉開口部の短軸55cm、長軸183cmの細い楕円を呈する。

〈埋土〉地山起源の崩落堆積層が互層になり堆積している。

〈壁・底面〉壁は直立気味に立ち上がり、深さ103cmを測る。

〈時期〉遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

#### 陥し穴13（第90図、写真図版69）

〈位置・検出状況〉曲輪4のIV層面で検出した。

〈重複状況〉上部はいくらか削平を受けているが、他の遺構との切り合いはない。

〈平面形・規模〉開口部の短軸92cm、長軸375cmの細い楕円を呈する。

〈埋土〉地山起源の崩落堆積層が互層になり堆積している。

〈壁・底面〉壁は直立気味に立ち上がり、深さ103cmを測る。

〈時期〉遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

陥し穴14（第90図、写真図版70）

〈位置・検出状況〉 曲輪5のⅣ層面で検出した。

〈重複状況〉 上部はいくらか削平を受けているが、他の遺構との切り合いはない。

〈平面形・規模〉 開口部の短軸76cm、長軸237cmの細い楕円を呈する。

〈埋土〉 地山起源の崩落堆積層が互層になり堆積している。

〈壁・底面〉 壁は直立気味に立ち上がり、深さ89cmを測る。

〈時期〉 遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

陥し穴15（第92図、写真図版71）

〈位置・検出状況〉 曲輪5のⅣ層面で検出した。

〈重複状況〉 上部はいくらか削平を受けているが、他の遺構との切り合いはない。

〈平面形・規模〉 開口部の短軸32cm、長軸185cmの細い楕円を呈する。

〈埋土〉 地山起源の崩落堆積層が互層になり堆積している。

〈壁・底面〉 壁は直立気味に立ち上がり、深さ56cmを測る。

〈時期〉 遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

陥し穴16（第92図、写真図版71）

〈位置・検出状況〉 曲輪5のⅣ層面で検出した。

〈重複状況〉 上部はいくらか削平を受けているが、他の遺構との切り合いはない。

〈平面形・規模〉 開口部の短軸63cm、長軸133cmのやや不整な楕円を呈する。

〈埋土〉 地山起源の崩落堆積層が互層になり堆積している。

〈壁・底面〉 壁は直立気味に立ち上がり、深さ47cmを測る。

〈時期〉 遺構の特徴から考えて縄文時代の土坑状陥し穴であると考えられる。

陥し穴17（第91図、写真図版71）

〈位置・検出状況〉 曲輪4のⅣ層面で検出した。

〈重複状況〉 上部はいくらか削平を受けているが、他の遺構との切り合いはない。

〈平面形・規模〉 開口部の短軸30cm、長軸176cmの細い楕円を呈する。

〈埋土〉 地山起源の崩落堆積層が互層になり堆積している。

〈壁・底面〉 壁は直立気味に立ち上がり、深さ55cmを測る。

〈時期〉 遺構の特徴から考えて縄文時代の溝状陥し穴であると考えられる。

(福島)

遺物包含層（第92図）

曲輪3の北側、堀8周辺で基本層序Ⅲ層に相当する堆積土中でまとまって縄文土器が出土している。いわゆる「捨て場」ではなく、縄文土器が包含する自然堆積層である。遺物が出土する層がⅢ層に相当する黒褐色シルト層の単層である。遺物は第92図の通り、北西側からA～Dとして取り上げた。

(北村)

### 3 出土遺物

出土遺物は城館としての不動館に關係する中世の遺物として、陶磁器・各種金属製品・石製品が挙げられる。これら遺物の多くは、曲輪1堅穴建物および土坑より出土した。遺構の説明でも記述した通り、遺構は複雑に切り合っており、原位置を保つような出土状況はみられない。しかし、これらは城館の期間幅や機能について類推する数少ない資料である。

#### (1) 陶磁器

出土した陶磁器類はほとんど中世のものに限られるが、遺物の帰属時期には幅がある。掲載した陶磁器類は20点である。輸入磁器(1~3・8)と国産陶器(4~7・9~20)に分けられる。これら出土陶磁器類は、古くは鎌倉時代初期の古瀬戸から戦国時代前半の資料まで存在する。出土傾向として、曲輪1出土のものが大半を占めている。

1は曲輪1帰属の堅穴建物13床面より出土した白磁の碗X類である。器壁は薄く、内面には精巧で流麗な植物の文様とその上部に2条の平行線がみられる。平行線文の位置からそれほど遠くない位置に口縁端部がくるものと思われ、口縁部はやや外反気味である。内面の文様はいずれも浮文で、型押しの可能性が考えられる。素地は白色で透明釉が掛かっている。体部片であるため口縁形態および底部形態は不明であるが、その特徴から13世紀中葉~14世紀初頭頃のものとみられる。

2は曲輪1のII層より出土した白磁碗である。無文の体部下半片である。表面はやや青み掛かっており、青白磁の可能性も考えられる。器形および器種不明であり、時期も不明である。

3は曲輪3下部の整地盛土層より出土した青磁碗である。体部のみの破片であるが、外面には明瞭な鎬連弁文がみられる。鎬連弁文は幅広の連弁で中心に鎬の棱線が明瞭なものであり、蓮弁は1枚毎独立して刻まれている。文様の意匠は古相を示している。龍泉窯系の製品で13世紀のものである可能性が高い。

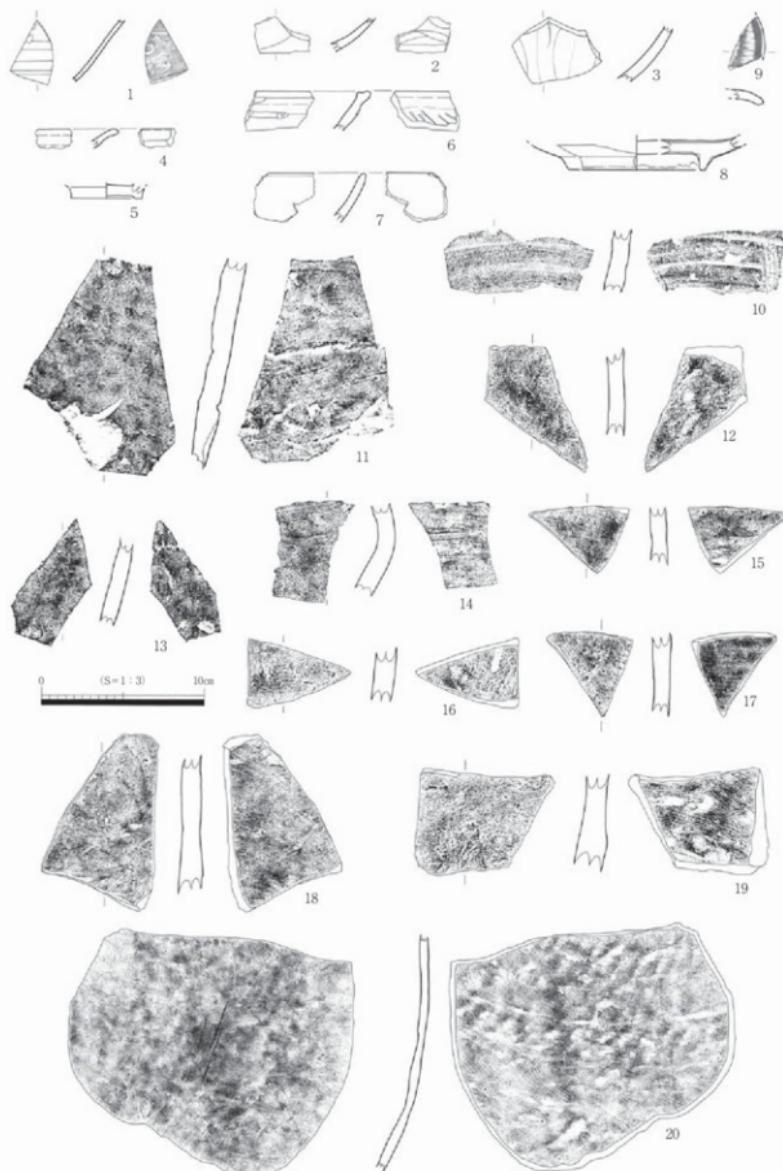
4は曲輪1の焼土遺構3より出土した瀬戸・美濃産の皿である。外反する口縁部のみの小破片である。表面の灰釉は薄いが細かなひび割れが認められる。大窯期の製品であると思われ、時期は大窯前半期の15世紀後半~16世紀前半と位置付けられる。

5は曲輪1のII層より出土した瀬戸・美濃産の小天目茶碗である。底部のみの破片で全容不明であるが、底径より小天目に分類されるものである。素地は破断面で黄褐色を呈し、内面は施釉され黒褐色である。高台部は低く削り出されており、大窯古段階のものである可能性が高く、時期は概ね15世紀後半頃であると思われる。

6は曲輪1に付随する虎口付近、通路1より出土した古瀬戸卸皿の口縁部片である。口縁端部は端面を持つが中心部がやや凹む。外面および口縁部内面にかけて鮮やかな緑黄色の灰釉が施釉されており、内面無釉範囲には斜位の卸目刻みが認められる。口縁部の形態から古瀬戸藤澤編年中期様式のIII期に該当するとみられ、14世紀前葉~中葉の所産であると考えられる。

7は曲輪1のII層より出土した瀬戸・美濃産丸椀の破片である。口縁が内彎気味で、口縁端部は丸く収められる。無文で全面に施釉されており、色調は浅い緑色を呈する。やや厚みを持っており、口クロ目も不明瞭である。大窯期の製品であると考えられ、時期は16世紀頃であると思われる。

8は曲輪1帰属の堅穴建物3埋土上層より出土した青磁碗である。高台疊付部以外は青磁釉が施されている。高台疊付部は釉の搔き取りがおこなわれたものとみられる。器壁および釉はそれぞれ厚く、



第93図 陶磁器

高台端部は焼成により赤褐色に変色している。残存部に文様は認められない。龍泉窯系の製品で16世紀頃のものであると考えられる。

9は曲輪1堅穴建物1埋土上層より出土した陶器片である。古瀬戸の蓋である。外面に斜格子目の刻みの文様が認められ、暗い黄褐色から黒褐色を呈する鉄軸がグラデーションで施されている。形態から考慮すると上部につまみが取り付き、壺形を呈する合子の蓋であると考えられる。合子身も同様の斜格子文が施されているのであろう。蓋内面には、ほぼ全面にぶい赤色の付着物が薄く認められる。この付着物が紅である可能性も考えられ、そうであれば身となる壺は紅の容器として利用されたと思われる。古瀬戸藤澤編年によれば、中期様式I～II期の所産であると考えられる。13世紀末～14世紀前半(第1四半期)のものと判断でき、生産量もさほど多くない優品である。

10は調査区東側曲輪3より出土した陶器片口擂鉢片である。珠洲系のものであると思われる。胎土に砂粒を含み、青灰色を呈する。内面は使用による摩滅著しく、10数条1単位の細やかな擂り目が認められる。外面はロクロ目が明瞭である。出土遺物の中で同様の陶器片を探したが、古代の須恵器片が数点認められるのみでほかに見当たらなかった。細片のため時期は不明であるが、擂り目の細かさと密度から考えて13～14世紀のものであると推定される。

11～20は様々な遺構から出土した常滑産甕の破片である。いずれも胎土色調が酷似するため同一個体の可能性も考えられる。外面は光沢のある茶褐色を呈する。どの破片も押印は認められない。口縁部等が存在しないため時期判定困難であるが、外面の色調等から中世後半段階のものであると考えられる。

## (2) 金属製品

出土した金属製品(21～120)の大半が鉄製品である。これら金属製品を大まかに分けると、武器・武具類、工具類、仏事遺物類、鉄鍋、鉄釘・鉢類、錢貨類、その他不明製品という内訳になる。今回の調査では、出土した金属製品の大半が陶磁器と同様曲輪1で出土している。

21～42は鉄鎌である。大半が欠損しているが、長茎のものが多い傾向である。形態的特徴から中世でもやや古段階のもので占められている。

21は曲輪1堅穴建物3埋土中位より出土した鉄鎌である。茎部先端がわずかに欠損するものほぼ完形の平根鎌である。長三角形の鎌身部を有し、その断面は概ね扁平であるが、片面に中心部に綫方向のわずかな稜線が認められ、これが鎌になる可能性が高い。鎌身関部には、逆刺が無く頭部から綫やかな弧線を描く。頭部は断面正方形を基調とするが、笠被関部のみ4つの角を潰したような八角形となっている。茎部は関部から先端に向け徐々に細くなり、断面正方形である。笠被関部の段は明瞭で、わずかに末広がりとなっている。形態から古代～中世初頭のものであると考えられる。

22は切岸1より出土した。本来曲輪1に所在したもののが流出した可能性も考えられる。鎌身部付近が大きく折れ曲がり、鎌身そのものが欠損する。全体形状から小形三角形の鎌身部が備わるものと想定される。頭部は断面方形から隅丸方形を基調とするが、笠被関部のみ4つの角を潰したような八角形となっている。茎部は頭部よりやや長く、関部から先端に向け徐々に細くなり、断面正方形である。笠被関部の段は明瞭で、末広がりとなっている。先端部で折れ曲がり、鎌身部が欠損していることから弓により発射され、硬い対象物に当たった結果とみることができる。形態から古代末～中世初頭のものであると考えられる。

23は通路1検出面で出土した。これも曲輪1から流出した可能性が考えられる。両先端部がわずかに欠損するものはほぼ完形の平根鎌である。全体的に他の出土鎌よりも短い。鎌身部は長三角形両刃

で断面は扁平である。頭部・頸部ともに断面方形を基調とする。箆被関部は明瞭な段を有し、なおかつ外方へ突出する。形態から古代末～中世のものであると考えられる。

24は堀1埋土中位～下位で出土した。これも本来曲輪1に所在するものが流出した可能性が考えられる。両先端がわずかに欠損する平根鐵である。小形で三角形の鐵身を有し、断面は扁平である。頭部は長いが、基部は不明であるが、断面は方形であると思われる。形態から中世前半頃のものである可能性が考えられる。

25は曲輪1堅穴建物5埋土上位より出土した。鐵身部および茎先端部が欠失している。箆被関部に明瞭な段を有し、なおかつ外方へ突出する。頭部の断面形状は扁平長方形であるが、茎部は断面方形を呈する。形態から中世前半頃のものである可能性が考えられる。

26は曲輪1堅穴建物6貼床より出土した。埋土上位より出土した。頭部途中から鐵身部までと茎先端部が欠失している。やや曲がっており、関部も鎧によって不明瞭である。頭部・茎部ともに断面方形を呈する。形態から中世前半頃のものである可能性が考えられる。

27は曲輪1堅穴建物6埋土より出土した。頭部途中から鐵身部までと茎先端部が欠失している。箆被関部に突出する段がみられるが、台形ではなく、菱形を呈する。頭部の断面形状は方～長方形であるが、茎部は断面方形を呈する。比較的頭部の長い鉄鐵であると考えられる。形態から中世前半頃のものである可能性が考えられる。

28は曲輪1堅穴建物14埋土上位より出土した。頭部途中から鐵身部までと茎部の大半が欠失している。箆被関部は台形で頭部と茎部を明確な段差で分けている。頭部断面は扁平な長方形、茎部断面は概ね方形を指向しているものと考えられる。比較的頭部の長い鉄鐵であると考えられる。形態から中世前半頃のものである可能性が考えられる。

29は曲輪1堅穴建物8埋土下位より出土した。その他の鉄鐵に比べるとやや大きく、鉄鐵ではない可能性もあるが、平たく板状であるため頭部の可能性を考えた。形態から中世前半頃のものである可能性が考えられる。

30は曲輪1堅穴建物13埋土より出土した。頭部途中から鐵身部までと茎部の大半が欠失している。箆被関部は台形で頭部と茎部を明確な段差で分けている。頭部断面は扁平な長方形、茎部断面は概ね方形を指向しているものと考えられる。

31は通路1で出土した。これも曲輪1から流出した可能性が考えられる。箆被関部が不明瞭であるが、頭部と思われる箇所は断面長方形、茎部と思われる箇所は断面方形である。形態から中世前半頃のものである可能性が考えられる。

32は曲輪1堅穴建物3埋土上位より出土した。頭部途中から鐵身部までと茎部の大半が欠失している。箆被関部は台形で頭部と茎部を明確な段差で分けている。頭部断面は扁平な長方形、茎部断面は概ね方形を指向しているものと考えられる。

33は堀2と堀4の合流点付近の埋土上位より出土した。頭部先端および鐵身部が欠失している、頭部は関部付近では断面方形であるが、鐵身側へ向かうにつれ徐々に平坦になり、断面長方形となる。箆被関部は外への開きはさほど大きくないが、明瞭な段を有する。全体的にかなりの長さとなる鉄鐵である。形態から中世前半頃のものである可能性が考えられる。

34は曲輪1堅穴建物3埋土中位より出土した。断面長方形の頭部であると考えられる。やや小形のものであると推測される。

35は曲輪1の客土層であるⅡ層中より出土した。頭部途中から鐵身部までと茎先端部が欠失している。頭部および茎部ともに残存範囲では断面方形を呈する。箆被関部は大きく外へ開く台形である。

形態から中世前半頃のものである可能性が考えられる。

36は曲輪1堅穴建物3床面より出土した。籠被関部と茎部のみの破片である。関部には明瞭な段があり台形状を呈する。茎部断面は方形、頭部断面は関部近いながらも長方形を指向する。形態から中世前半頃のものである可能性が考えられる。

37は堅穴建物4埋土より出土した。茎部片であると考えられるが、小片であるため不明な点が多い。細い形状であるため鉄鍔ではなく、鉄釘の可能性も考えられる。

38は堀6より出土した。断面長方形を呈する頭部片であるとみられるが、頭部のみであるためその他不明な点が多く、全体形状も不明である。

39は堀1最下層より出土した。鍔に覆われた小片のため形状等不明である。頭部から茎部にかけての部位である可能性が考えられる。

40は堀6埋土より出土した。断面長方形を呈する頭部片であるとみられるが、頭部のみであるためその他不明な点が多く、全体形状も不明である。

41は堅穴建物9床面より出土した。頭部途中から籠身部までと茎先端部が欠失している。籠被関部に突出する段がみられるが、台形ではなく、菱形を呈する。頭部の断面形状は方～長方形であるが、茎部は断面方形を呈する。比較的頭部の長い鉄鍔であると考えられる。形態から中世前半頃のものである可能性が考えられる。

43は堅穴建物5埋土下位より出土した小刀、44は堅穴建物3より出土した刀子である。いずれも反りはなく直線的な形態である。両者とも全体的に鍔で覆れている。古代～中世のものであるが、詳細な時期は不明である。

45は堅穴建物14埋土下位、46は堅穴建物5埋土下位よりそれぞれ出土した鉄鋸であると考えられる鉄製品である。板状のものを筒状に丸めた形態である。舌はみられないが、その大きさや形態から古代の錫杖形鉄製品に付属するものである可能性が考えられる。

47は土坑45埋土より出土した銅丸鎧付属杏葉である。同一遺構内で48の小札が共伴している。47の本体は鉄製であるが、覆輪は金銅製であると考えられる。本体は緩やかな曲線を有しており、薄手であることから鍛造品であるとみられる。外形は覆輪によって縁取られており、左右ともに弧状の曲線によって形作られている。覆輪は銅製であるが、微かに鍍金が認められる箇所があり、本来は覆輪全面に金が施されていたと考えられる。本体と覆輪との間にはいくらかの隙間が存在しており、特に表側において顕著である。これは本体に革張り等の細工が施され、その細工によって隙間を埋めていた可能性が考えられる。南北朝期以降において隆盛する杏葉は、通常銅丸鎧の肩部前面に装着され、高紐を保護する役割を担うが、この47杏葉は型式が異なることが判明した。その型式差がみられる特徴として、非常に大ぶりであることが第一に挙げられる。次に、覆輪および本体を含め上端部が水平に切れており、特に覆輪は破断面が整えられている。これは上下2枚を蝶番で留めた作りであることを示している。出土した杏葉は、そのうち下部であり、上端部できれいに破損し削れているのではなく本来の形状そのものである。上下2枚作りであるため、2枚は蝶番で留められているはずであるが、この杏葉は蝶番部分が丸ごと欠失している状況である。欠失部からみて蝶番の位置は中心よりやや左寄りに取り付けられていたものとみることができる。さらに、覆輪が上端部よりやや下の位置で左右それぞれ本体を挟み込むように鉢留めされている。この位置での鉢留めは1枚作りにはみられないものであるため、複数枚作りの杏葉である証拠として非常に重要である。この型式の杏葉は、南北朝期以降の付属位置とは異なり、高紐前面ではなく肩上部に取り付けられるようである。これは、絵巻物等でも表現されているようである。肩上部に取り付けられるため、肩の上げ下げにある程度の可動域

が必要であるため2枚作り蝶番留めでそれを可能にしている。大鎧ではなく銅丸鎧に付属することから、おもに徒武者（徒侍）が着用したものであると言われている。日本全国で唯一伝世しているこの型式の杏葉は、鹿児島県鶴嶺（つるがね）神社所蔵のものが知られている。この鶴嶺神社杏葉は国指定重要文化財であり、大鎧（赤糸威）に合わせてあるため本来のセット関係ではないが、大鎧は島津忠久（平安時代末期から鎌倉時代前半）奉納のものと伝えられており、伝承と大鎧に時代的な齟齬はないようである。一方、出土資料としては、東北大学蔵（北海道出土）、余市水産博物館蔵（同町出土）、留萌市教育委員会蔵（留萌市塙見町出土）の3点が確認できるのみであり、稀少な遺物であることは間違いない。今回出土した杏葉は、現存するものとして全国5例目、出土品では全国4例目、本州では初例となる。この型式の杏葉は、先述した通り、南北朝期より先行し、平安時代末から鎌倉時代後半頃に用いられていたようである。図や写真等で確認できた類例と比較しても個体差はあるものの形態や大きさは似通っており、今回出土したこの杏葉もその時期（12～13世紀）の所産である可能性が非常に高い。

48は土坑45出土の小札である。47の杏葉と同一遺構で共伴している。おおむね短冊形であり、上端部である札頭は緩やかな山形となっている。部分的に塗布された漆が内外面に残存しており、かすかに威糸の痕跡も確認でき、少なくとも一度は鎧に装着されたようである。漆は数mmの厚みであり、盛上小札ではなく平小札である。穴は、6箇所、7箇所の2列構成計13個で、いわゆる並小札と呼ばれるものに分類できる。また、その穴の配置は緘（からみ）の穴、毛立（けだて）の穴、下緘（したがらみ）の穴の区分が間隔を空けることによって明瞭に区分されている。最上段に位置する緘の穴は3個、次の段に位置する毛立の穴は2個、最下段に位置する4個2列の下緘の穴は8個がそれぞれ該当する。大きさや形態からみて鎌倉初期のものと推定される。

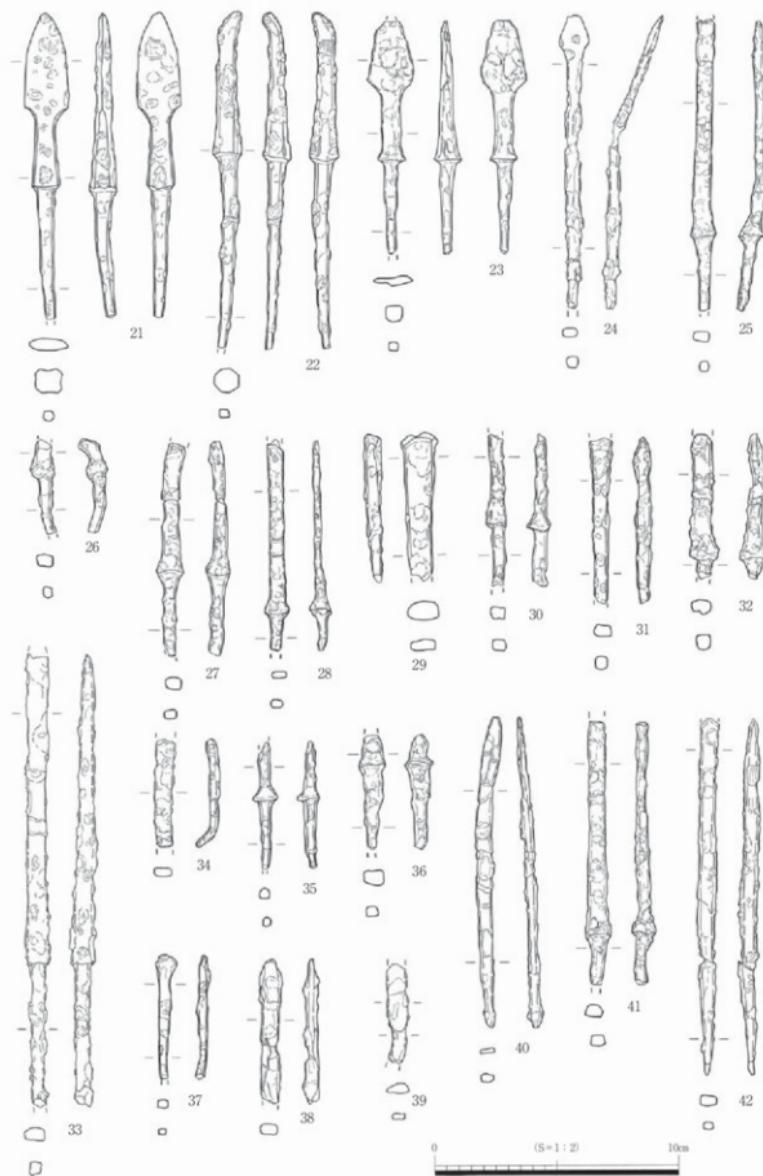
49は土壙1盛土より出土した小札である。おおむね短冊形であり、上端部である札頭は緩やかな山形となっている点で48の小札と共通するが、48の小札よりも札幅が狭い。部分的に塗布された漆が内外面に残存しており、かすかに威糸の痕跡も確認でき、少なくとも一度は鎧に装着されたようである。漆は48の小札より少量しか残存しておらず、盛上小札か平小札か判断できない。穴は、6箇所、7箇所の2列構成計13個で、いわゆる並小札と呼ばれるものに分類できる。また、その穴の配置は緘（からみ）の穴、毛立（けだて）の穴、下緘（したがらみ）の穴からなると考えられる。最上段に位置する緘の穴は3個、次の段に位置する毛立の穴は2個、最下段に位置する4個2列の下緘の穴は8個がそれぞれ該当すると考えられるが、それぞれの単位同士の間隔がほぼ一定であるためその区分は不明確である。48の小札と比べ簡素で幅狭であり、穴の配置も崩れていることから後出するものであると考えられる。大きさや形態からも南北朝期のものであると考えられる。

50は曲輪7出土の和鉢である。握り部と刃部の一体のものである。鋒が進行しており、脆弱である。持ち手である握り部は「U」字形に成形されている。時期不明であるが、中世のものである可能性が考えられる。

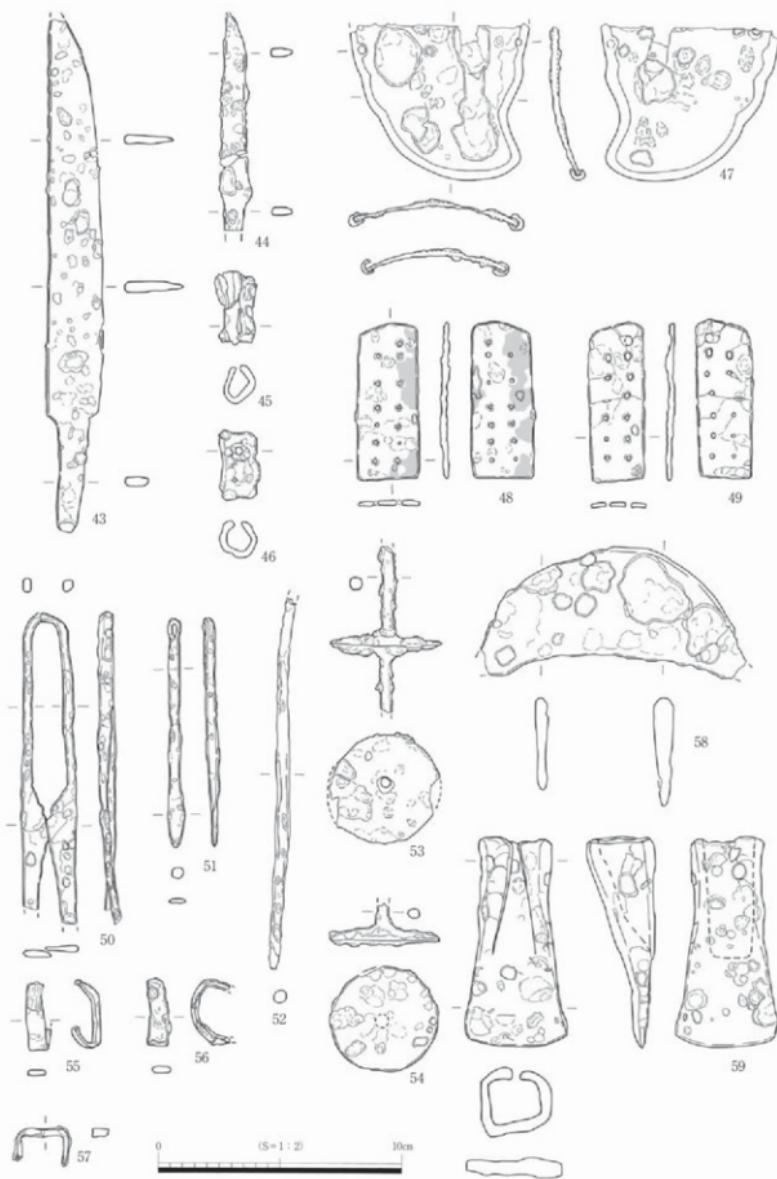
51は曲輪1の土坑2埋土上位より出土した鉄製針である。先端部は平たく潰れたような形態であるが先端は尖っている。他の部分は方形の断面形状である。糸を通すと思われる針穴は長楕円形に曲げられて作られている。通常の縫い針とは異なる使用法であることは大きさから推測可能であるが、どのような対象物を意識しているのか不明である。同様に時期も不明であるが、遺構出土であるため中世のものである可能性が考えられる。

52～54は紡錘車片である。52は曲輪3整地層より出土した。紡錘車の軸棒であると考えられる。

53・54はいずれも曲輪1堅穴建物3より出土した。いずれも軸棒がわずかに残存する。



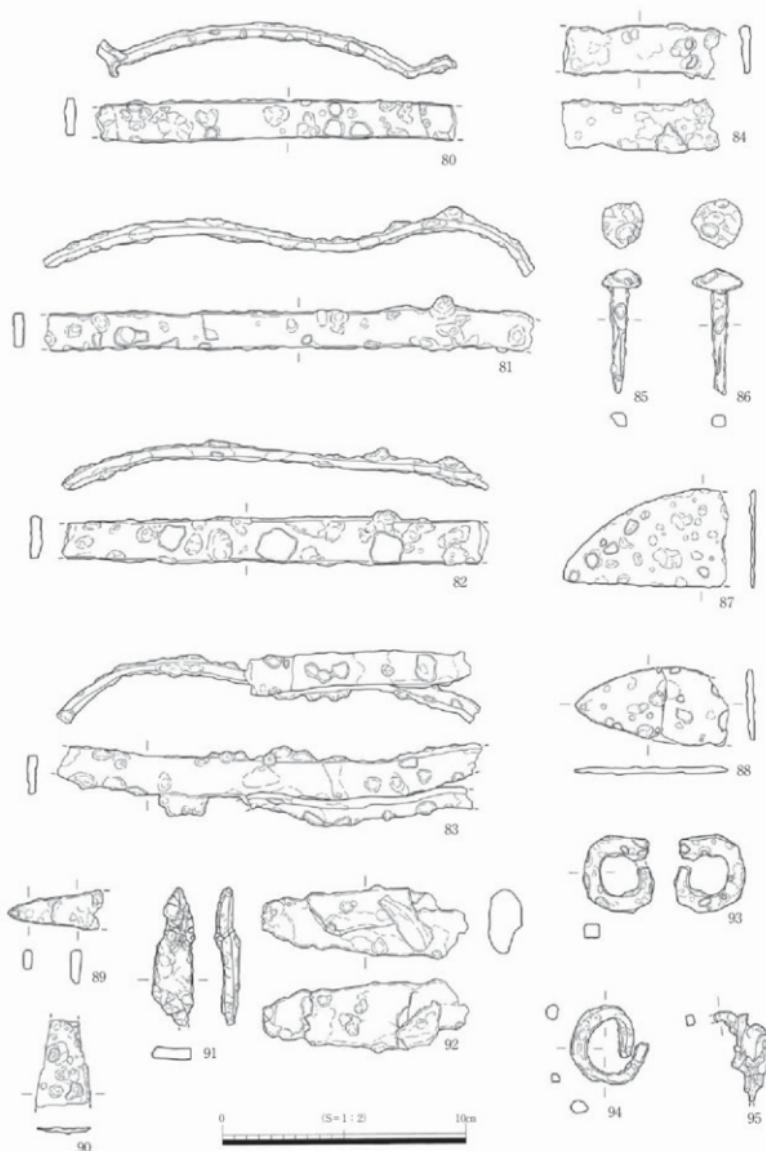
第94図 金属製品（その1）



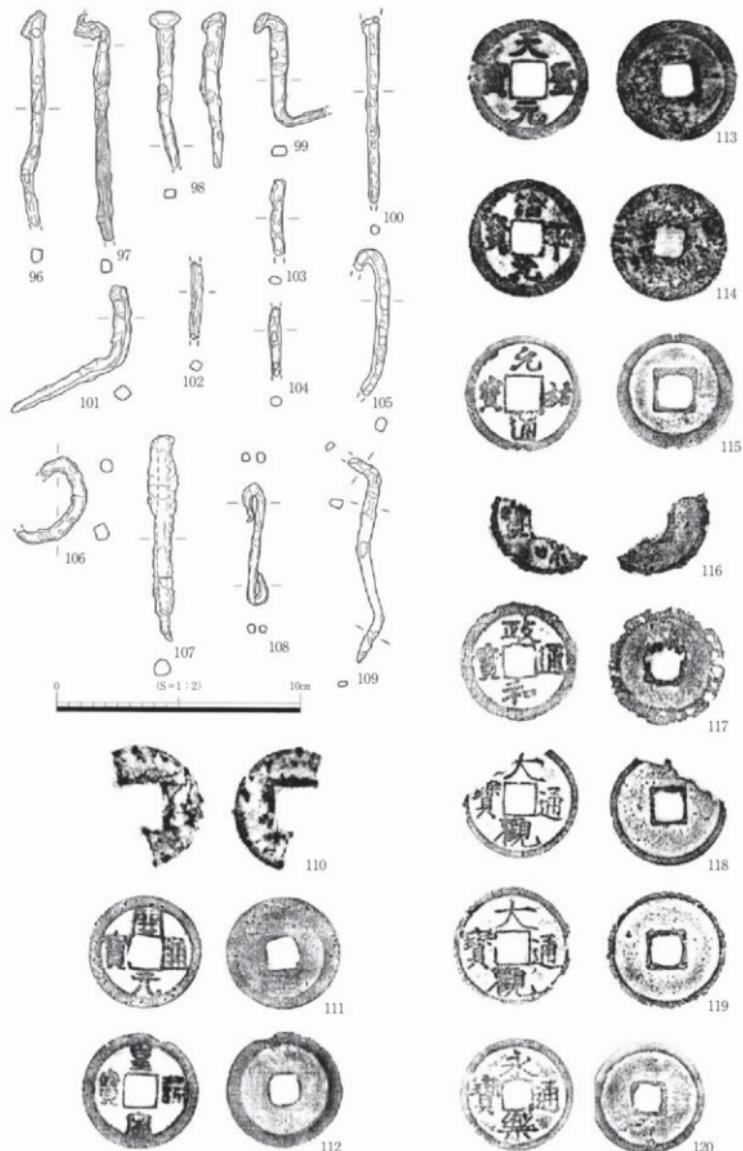
第95図 金属製品（その2）



第96図 金属製品（その3）



第97図 金属製品（その4）



第98図 金属製品（その5）

55~57は鉄製の金具であるが、用途・機能は不明である。いずれも板状のものの両端部を折り曲げ、「コ」の字形に成形している。

58は残存する形態から推測して鎌の刃部であると考えられる。三日月形の形態であるが、基部は残存していない。

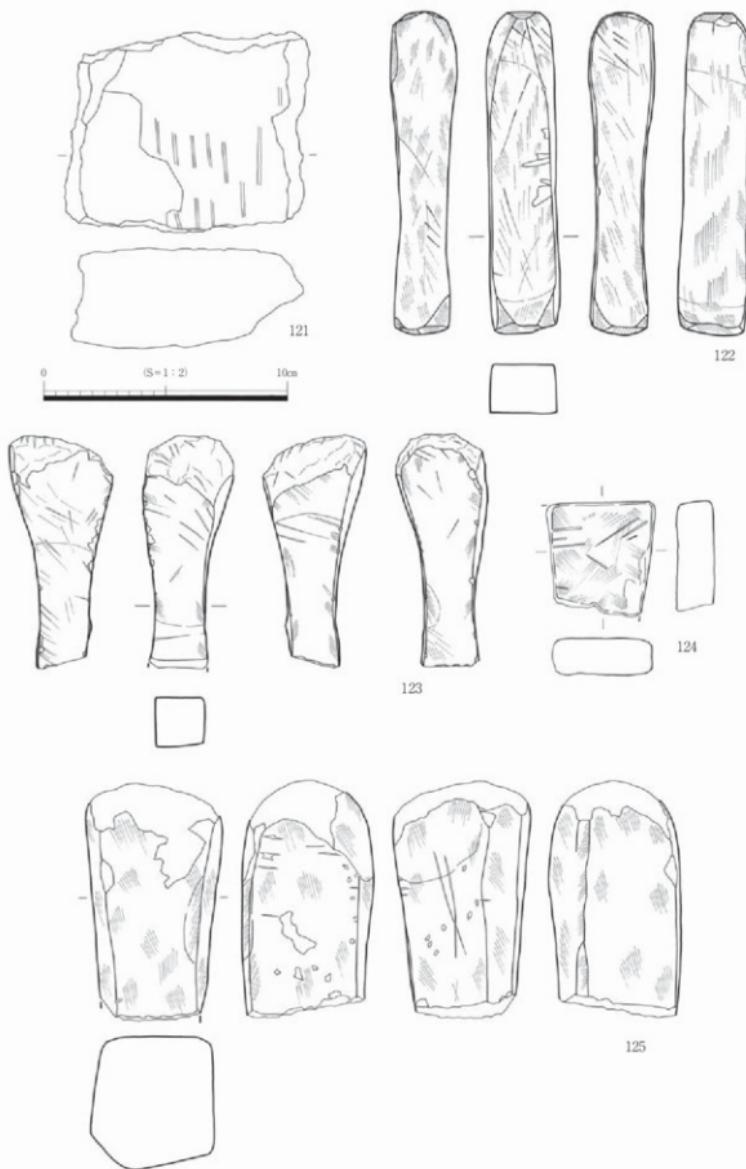
59は曲輪1土坑2底面より出土した鉄製の手斧である。柄を装着する基部は折り返しによって成形されている。基部から刃部にかけて緩やかにカーブする形態である。刃部先端はやや幅広になっている。

60は切岸1のI b層出土、61は堅穴建物6貼床出土、71は曲輪1のI b層出土の経筒蓋であると考えられる鋳造鉄製品である。71はその厚みや質感から60と同一個体であるとみられる。60は天井部から明瞭に屈曲し端部へと続く形状である。端部は端面を持ち、外方へ銳く突出する。上部屈曲付近には2条の圓線が巡っているものと推測される。全体が鏡に覆われているが、本来の質感は大きく損なわれていない。推定される口径は10~15cmであり、その大きさと形状から経筒の蓋であると考えた。61もその大きさと形状ともに前出60と類似しており、経筒蓋であると考えられる。60の蓋と異なるのは、口縁部から天井部への立ち上がりが低く、屈曲や端部の仕上げもやや粗雑である。また、口縁部に亀裂が生じており、そのため口縁の曲線が歪である。蓋天井部には、圓線等の意匠は認められず、簡素な作りである。調査では経塚のような遺構はみられなかったが、城館以前周辺に経塚があり、普請行為等で破壊した可能性もある。もう一つの可能性として、他所から鋳潰し用の素材として持ち込まれたことも考えられる。

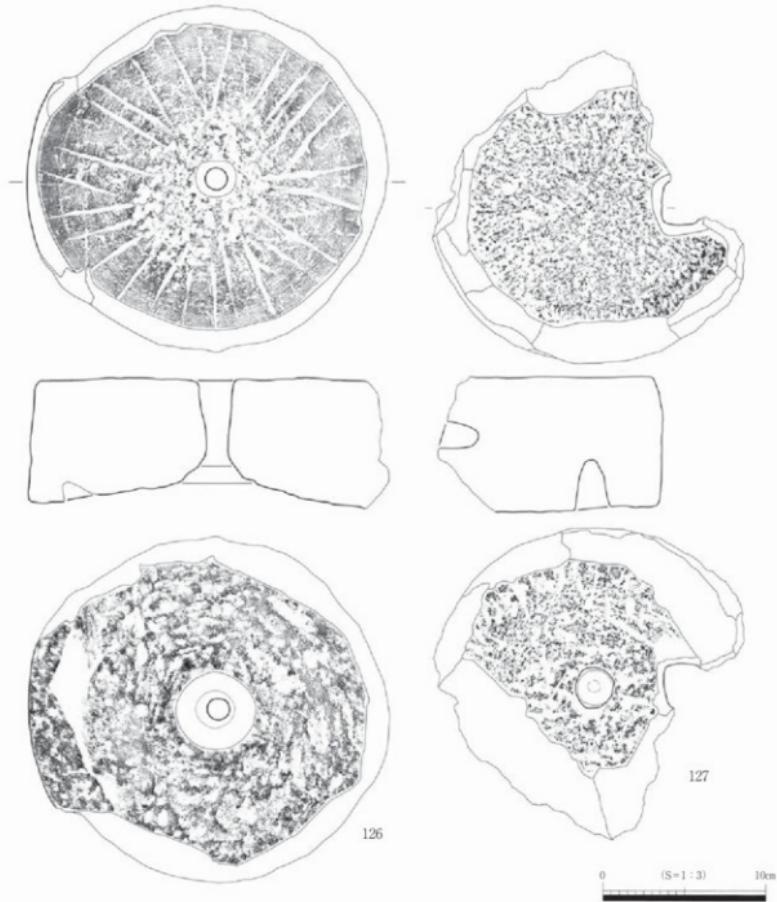
62・65・69・72・73は鋳造鉄片である。どのような器物であるかは不明であるが、鉄鍋のような薄さではなく、比較的厚みがある。ほとんどが板状であるが、65はやや丸みを有している。また、直線のような意匠を持つものもある。

63は土坑15埋土下層出土の鉄磬である。鋳造品であり、全体のほぼ半分が残存するものとみられる。磬は半円形で半円部のみが外方へ突出し、縁は2条の突出する圓線が巡る。図文は片面のみに鋳出されており、もう一方の面は平滑無文である。このため表裏の別が明確である。したがって、縁部の断面形状は圓線による2つの山に連続して端面が認められ、裏面側断面は水平で起伏が無い。側縁に反りが無く直線的であり、股頂は山形を呈する。図文は細部不明瞭であるが、嘴や尾と思われる像から鳥類であると考えられる。これは磬中心部に向いて嘴を伴う頭部があり、下り尾の鳥類であるとみられる。通常、鉄磬・銅磬に限らず磬の左右には鳥類の図文が多用されるようであり、鳳凰や孔雀などがその代表である。この鉄磬は不明瞭ながらも下り尾であることから鳳凰の可能性が高い。中央の撞座部分は欠損しているが、左右両側に鳳凰が向き合い、中心部に蓮華文の撞座が表現されているものと推測される。また、股頂部までが残存していることを考えると、その上部に位置する撞座蓮華文は径の小さいものであると考えられる。文様は片面のみであること、形態的特徴から平安時代後期から末期にかけての特徴を有している。なお、縁には「ぱり」が残存しており、磬表面も「肌荒れ」がみられることから鋳放し品の可能性も考えられ、表面の経年劣化等ではなく元々鳥類図文も細部まで鋳出せなかつたのかもしれない。図文はレントゲン写真でも細やかな線が認められないのはこのためであるのかもしれない。時期は不明であるが、形態的特徴等から中世初頭のものである可能性が考えられる。これは、兵庫県養父郡野村町経塚出土の鉄磬が形態的に近いと考えるためである。この鉄磬は平安末期のものであるとされており、今回出土した63もそれほど遠くない時期の所産である可能性が考えられる。

64・66は不明銅製品である。64は牛板状を呈し、端部は断面三角形である。66は中央に1箇所、中



第99図 石製品



第100図 石臼

央からやや外れた部分に1箇所の計2箇所に孔が存在する。

74～78は鉄鍋片であると考えられる。74は口縁部に内耳部分が認められ、75は体部と口頭部との境の稜線が認められる。また、78は体部下半から底部にかけての部位であるとみられ、極端な稜線は認められないが、緩やかに屈曲している。

79は板状鉄製品に割りビン状の金具が装着されている。板部は鉄鍋のように薄く、わずかに彎曲がみられる。金具は外側では環状を呈する。何らかの摘込みにもみえるが、その用途は不明である。武具の部品の可能性もあるが、作りがやや粗雑な印象を受ける。

80～84は細板状の鉄製品である。全てが束状にまとまって出土した。いずれも度合いは異なるが曲線を描いている。この形状は意図的なものかどうかは不明である。80は側面からみると片側先端部が二又になっており、一方は明確に屈曲部を有する。これとは別の何かと一緒に用いられたことが想定されるが、詳細は不明である。

85・86は鉄製の鉗である。頭部は円形を呈し、傘のようになっている。断面は方形であり、鉄釘と同じような形態である。

93～109は鉄釘であると考えられる。93・94は丸く曲がり、95は複数本が溶着したような状態である。その他のものも破損しており、溶かして再利用するために集められたものである可能性が考えられる。

110～120は銭貨である。110は後漢代の五銖銭である。中世日本において他の渡来銭に混じて輸入され、流通していたようである。120明銭の永楽通寶である。初鑄年1411年であるため、日本では15世紀半ば以降に流通する。その他銭貨は北宋銭ばかりが目立つが、曲輪1のII層出土とはいえ、この銭貨の存在は戦国期に城館が使用されたことを示唆している。

### (3) 石製品・鋳造および鍛冶関連遺物

121は鋳型片である。凝灰岩を加工したものと考えられるが、粗い土を焼き固めたものである可能性もある。どのようなものを鋳出すために使われたものかは不明であるが、ここで鋳造がおこなわれていた可能性を示唆するものである。

122～125は砥石である。板状である124を除き、角棒状を呈する。いずれも損耗度合いからかなり使い込まれたものと判断される。目の細かいことを考慮すると、より仕上げ砥石のような使用法が想定できる。

126・127は石臼である。126は下臼である。上面ふくみ部分には放射状の掘り目があり、中央には軸受け孔が貫通している。掘り面の表面は一部で光沢を持つほど使用されている。127は上臼である。中央に貫通しない軸受けがあり、側面には挽木用の孔が存在する。また、平面角形のもの入れが貫通している。両者が上下セットとなる可能性もあるが、断定できない。

図化はしていないが、鉄滓・鍛造剥片・粒状滓も出土している。おもなものは写真図版107に掲載した。231～233は鍛造剥片である。曲輪3鍛冶炉に伴うものである。大小多くの剥片が鍛冶炉周辺の土壤から得られた。234は粒状滓である。鍛冶作業で生じた湯玉となった滓である。235は鉄滓である。全て鍛冶滓である。なお、出土した鉄滓の一部は鉄滓一覧にて観察結果を掲げている(表8)。

### (4) 繩文時代の遺物

128～187は繩文時代晩期の土器である。大半が曲輪3およびその平坦面から東に下る斜面部遺物包含層で出土した。主体となる土器型式は、大洞C2式段階のものである。

128～147は口頭部が屈曲する土器である。大半のものが口頭部に無文帶を有しているが、137は沈

線による文様が認められる。口縁端部は工具による刻み、あるいは貼り付け等で小波状を呈するものが多く、三角状の突出部を有するものも存在する。体部は下地に縄文、その上から沈線で文様が描かれている。ただし、128・129のように地文の認められないものも存在する。

149～162は深鉢である。器形および文様はそれぞれ異なるが、精製のもののみで構成されているが、154のように単純な沈線のみで体部大半が地文のみのものもある。149・151は平坦な底部を持ち、器形も浅い皿形を指向している。

163は小形壺の口縁部であると考えたが、台付き土器の脚部である可能性もある。外面は地文に水鑓部近くに平方向の沈線が1条巡っている。

164～171は台付き土器である。土器上部が欠損している個体が多いため、これらの全体形状は不明である。ただし、体部の開きが大きくなることから台付きの浅鉢の形状を採用しているものは少ないものとみられる。その中で、164は概ね全体形状を知ることができる。この土器の口部は緩やかに屈曲しており、口縁部はわずかに外へ開く。

172～178・181・183・184は、比較的小形の深鉢である。外面には縄文のみが施される粗製土器であるが、口縁部が残存する個体(176・184)は小波状となっている。

180は小形の皿形を呈する。内外面とも無文である。

179・182・187は中～大形の深鉢である。やはり地文のみの粗製土器である。

185は注口土器の注口部片である。器表面は丁寧にミガキ調整されている。

186は小形の壺の口縁部であると考えられる。全体の形状は不明であるが、器表面を丁寧なミガキによって調整されている精製土器である。

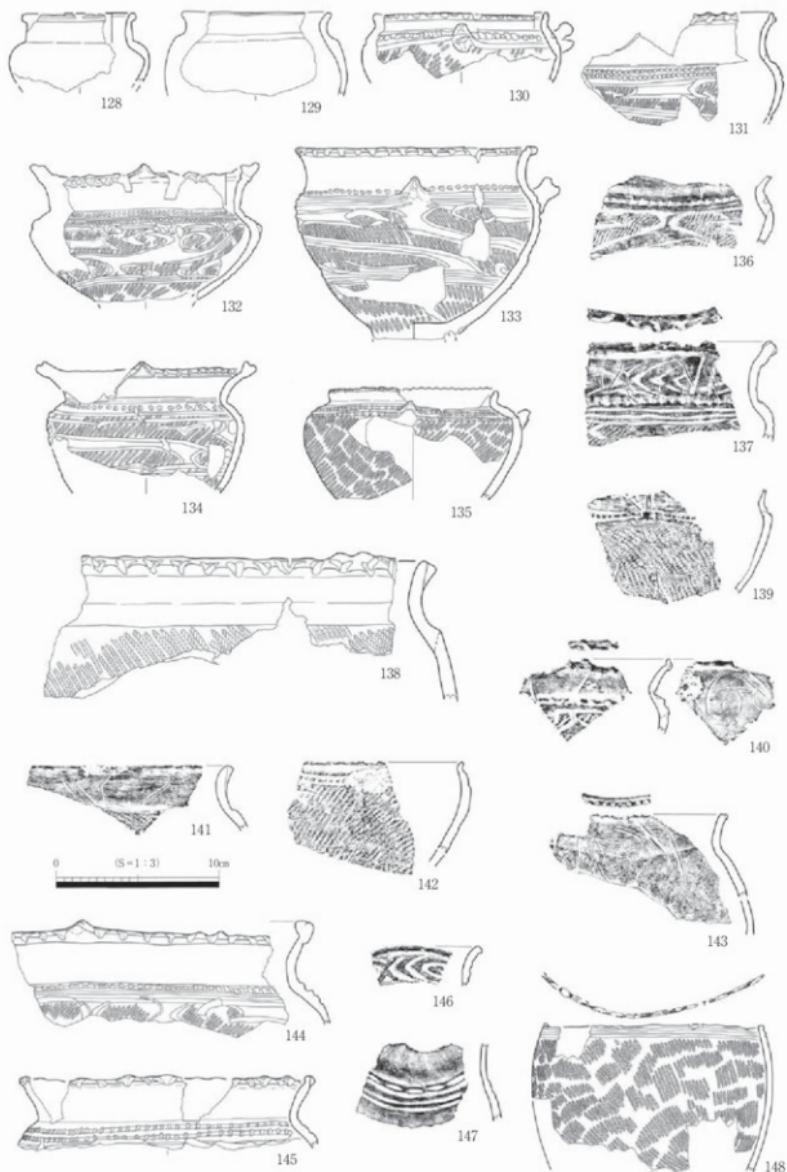
188～214は縄文時代の石器である。縄文時代晩期の遺物包含層出土のものが多く、時代も土器と隔たりのないものと考えている。

188～199は剥片石器である。定型の石器は石鎌(188～195)、石匙(197・199)などである。石鎌は無茎のものと有茎のもの両方がみられる。

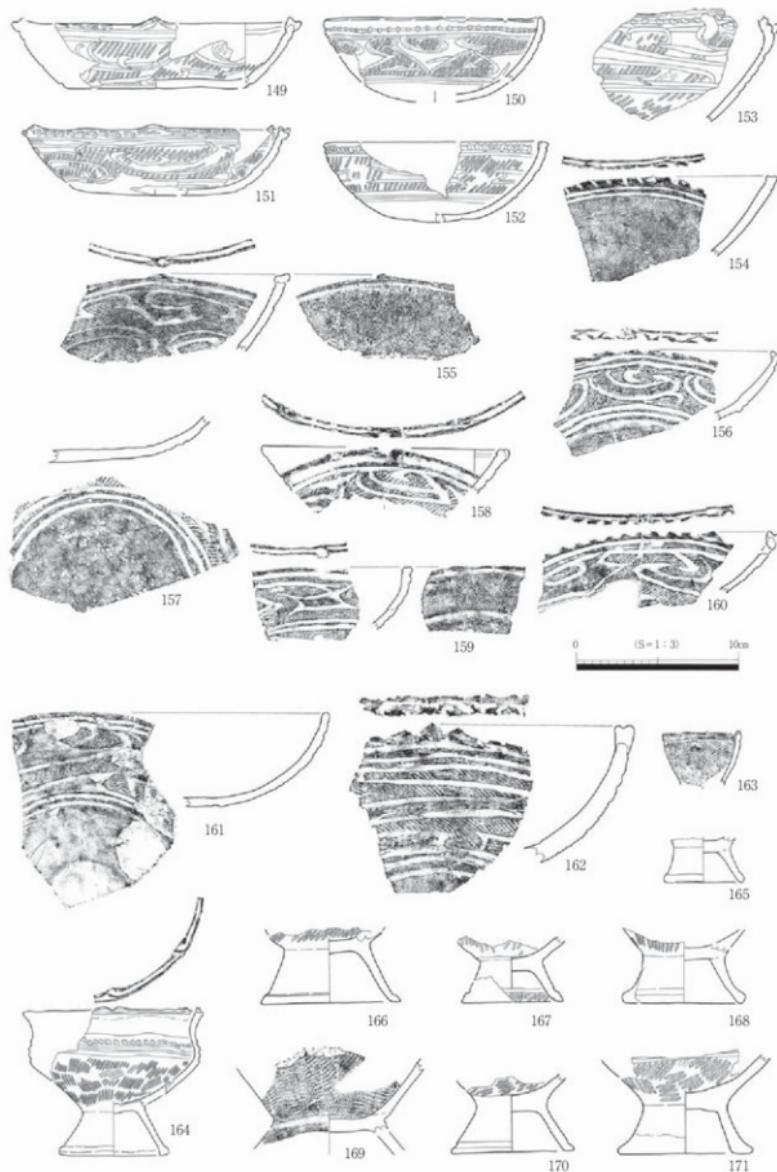
200～203は磨製石斧であるが、いずれも欠損している。

203～214は砾石器である。これらは表面に擦痕がみられ、205は凹石と分類できる。

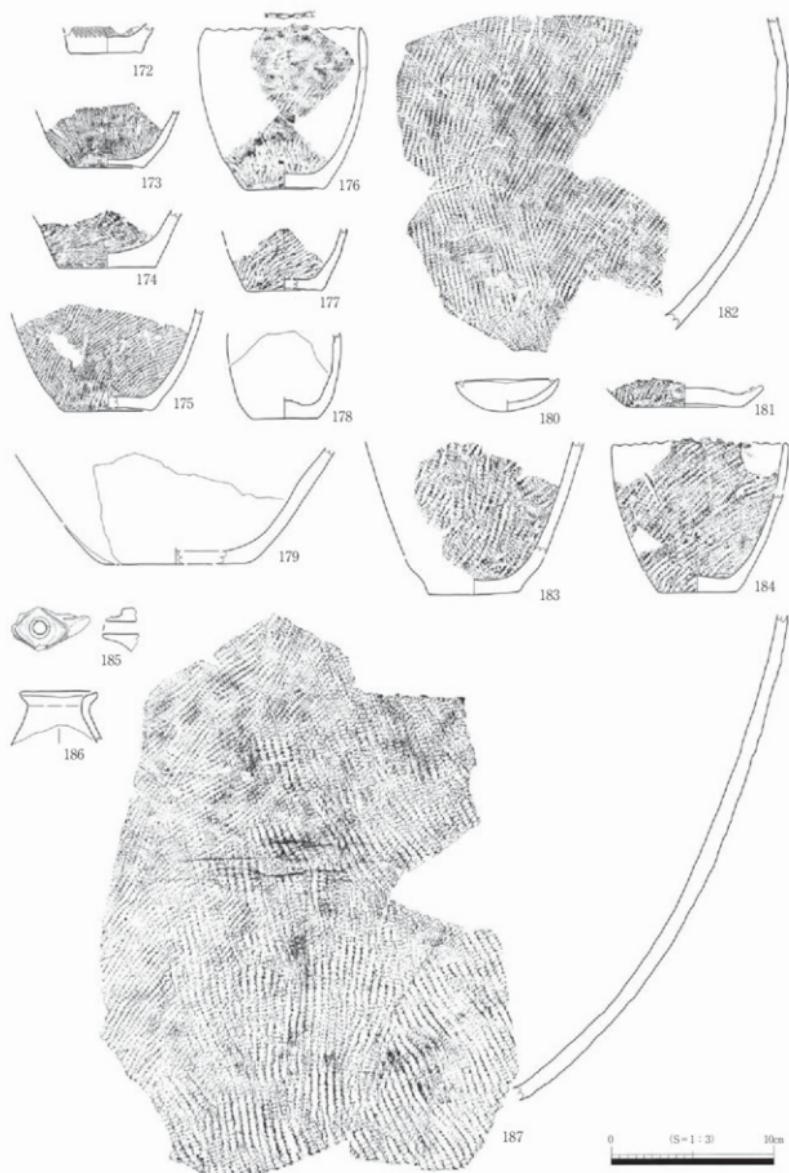
(福島)



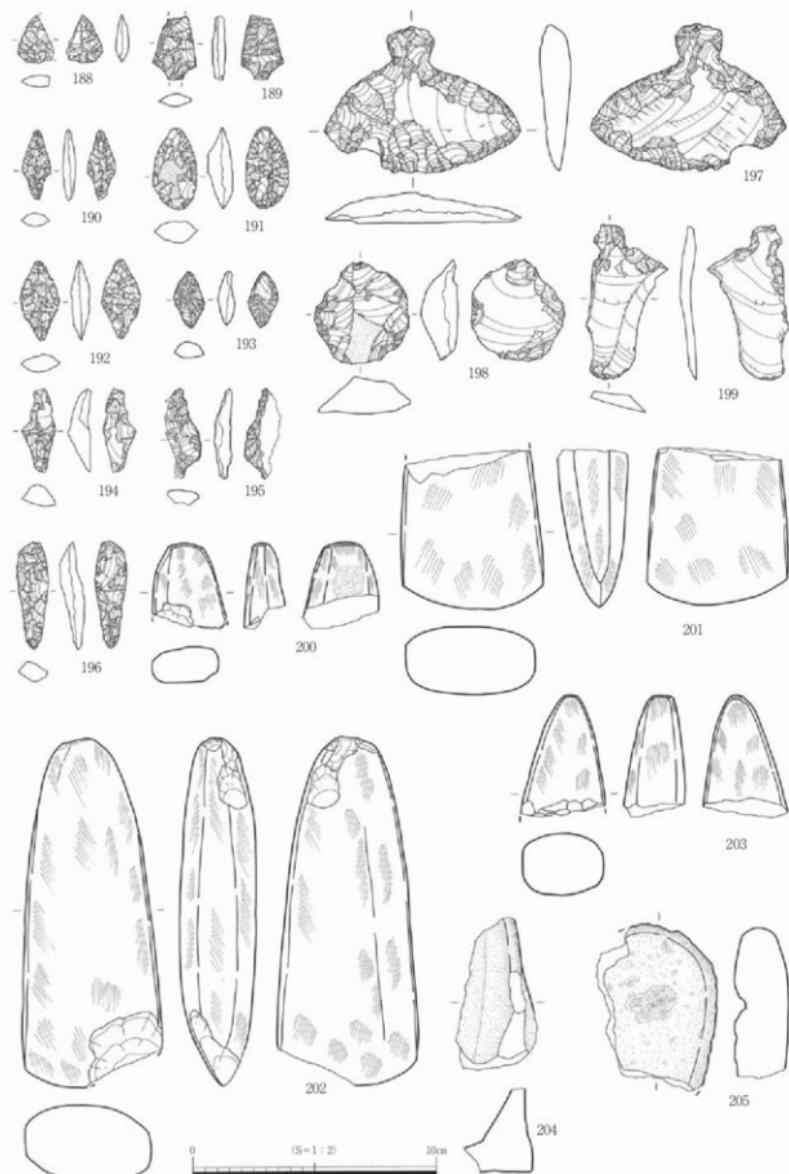
第101図 土器（その1）



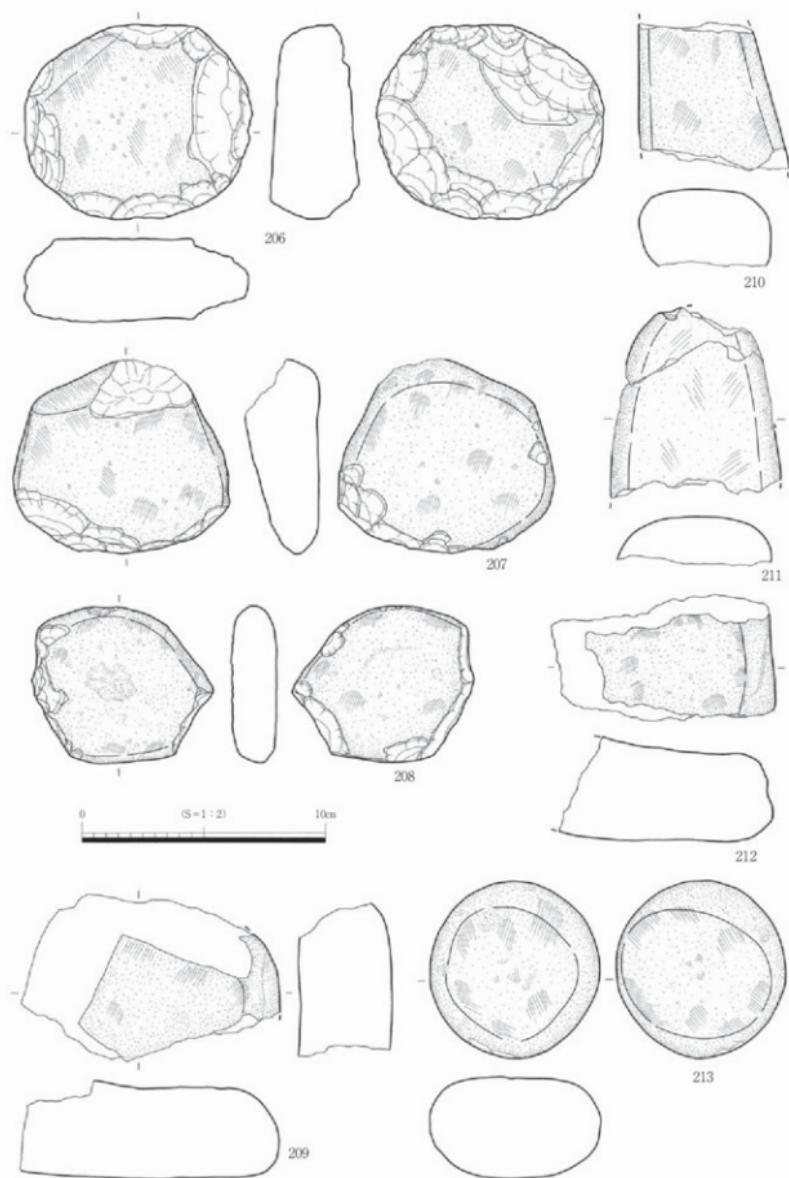
第102図 土器（その2）



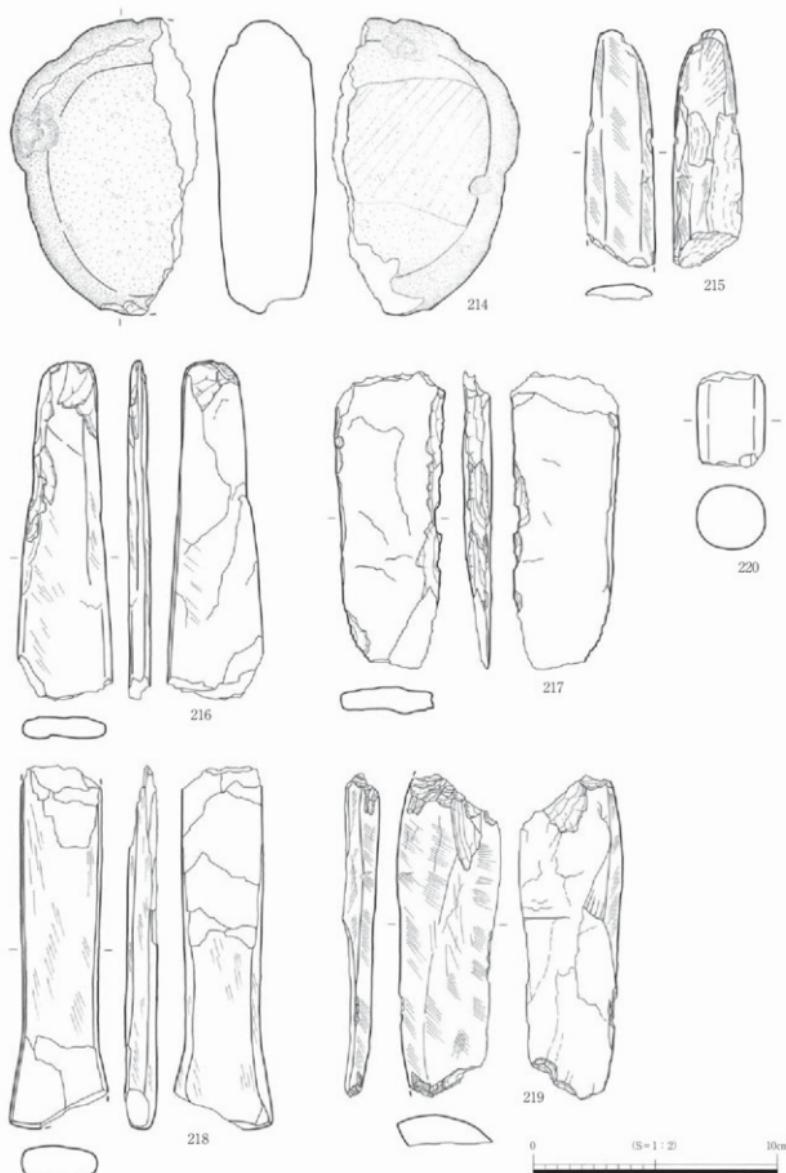
第103図 土器（その3）



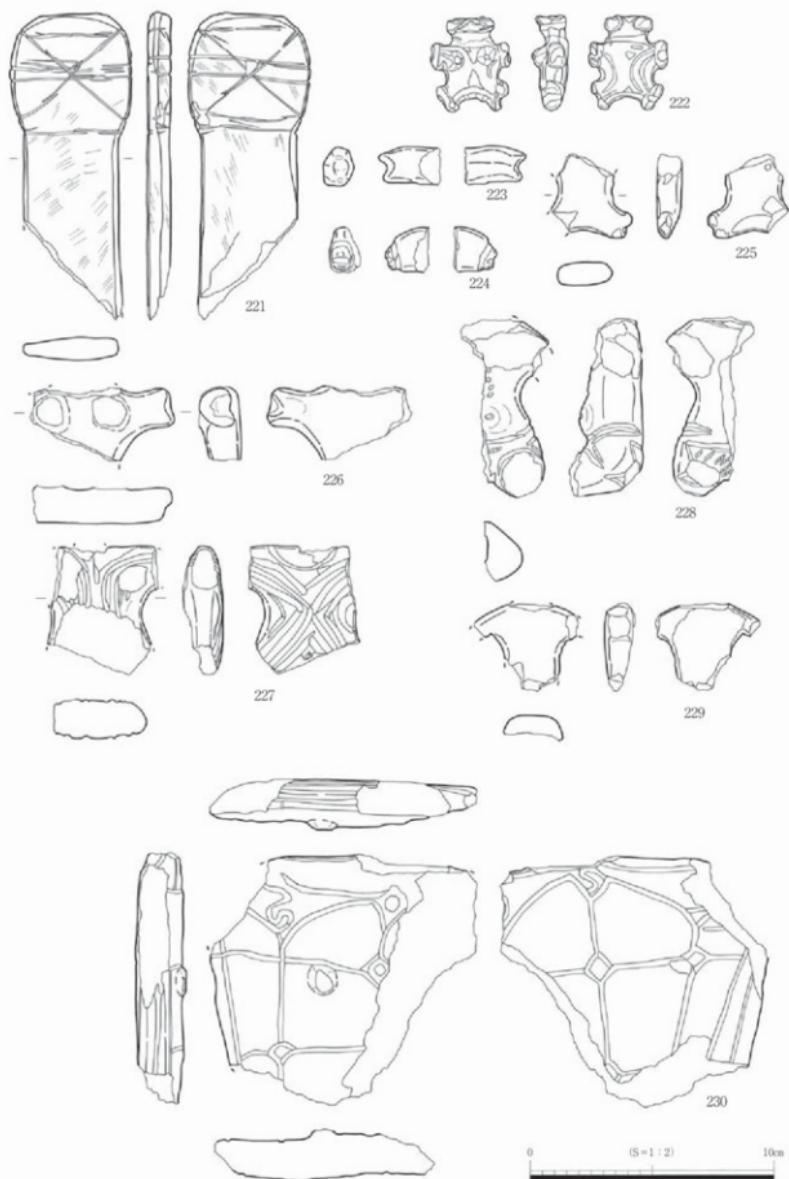
第104図 石器（その1）



第105図 石器（その2）



第106図 石器（その3）・石製品（その1）



第107図 石製品（その2）・土製品

第1表 不動館跡遺構名一覧

| 【普請】   |     |    | 【作事】   |         |     |        |       |     |
|--------|-----|----|--------|---------|-----|--------|-------|-----|
| 調査・整理時 | 報告時 | 位置 | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | 調査・整理時 | 報告時   | 帰属  |
| SC01   | 曲輪1 | 中央 | SKJ01  | 堅穴建物1   | 曲輪1 | SK01   | 土坑1   | 曲輪1 |
| SC02   | 曲輪2 | 西  | SKJ02  | 堅穴建物2   | 曲輪1 | SK02   | 土坑2   | 曲輪1 |
| SC03   | 曲輪3 | 東  | SKJ03  | 堅穴建物3   | 曲輪1 | SK03   | 土坑3   | 曲輪1 |
| SC04   | 曲輪4 | 西  | SKJ04  | 堅穴建物4   | 曲輪1 | SK04   | 土坑4   | 曲輪1 |
| SC05   | 曲輪5 | 西  | SKJ05  | 堅穴建物5   | 曲輪1 | SK05   | 土坑5   | 曲輪1 |
| SC06   | 曲輪6 | 東  | SKJ06  | 堅穴建物6   | 曲輪1 | SK06   | 土坑6   | 曲輪1 |
| SC07   | 曲輪7 | 東  | SKJ07  | 堅穴建物7   | 曲輪1 | SK07   | 土坑7   | 曲輪1 |
| 調査・整理時 | 報告時 | 位置 | SKJ08  | 堅穴建物8   | 曲輪1 | SK08   | 土坑8   | 曲輪1 |
|        |     |    | SKJ09  | 堅穴建物9   | 曲輪1 | SK09   | 土坑9   | 曲輪1 |
| SD01   | 塀1  | 中央 | SKJ10  | 林消      | 曲輪1 | SK10   | 土坑10  | 曲輪1 |
| SD02   | 塀2  | 西  | SKJ11  | 堅穴建物11  | 曲輪1 | SK11   | 土坑11  | 曲輪1 |
| SD03   | 塀3  | 東  | SKJ12  | 林消      | 曲輪1 | SK12   | 土坑12  | 曲輪1 |
| SD04   | 塀4  | 西  | SKJ13  | 堅穴建物13  | 曲輪1 | SK13   | 土坑13  | 曲輪1 |
| SD05   | 塀5  | 東  | SKJ14  | 堅穴建物14  | 曲輪1 | SK14   | 土坑14  | 曲輪1 |
| SD06   | 塀6  | 東  | SKJ15  | 堅穴建物15  | 曲輪1 | SK15   | 土坑15  | 曲輪1 |
| SD08   | 塀7  | 東  | SKJ16  | 堅穴建物16  | 曲輪1 | SK16   | 土坑16  | 曲輪1 |
| SD11   | 塀8  | 東  | SKJ17  | 堅穴建物17  | 曲輪1 | SK17   | 土坑17  | 曲輪1 |
| SD12   | 塀9  | 東  | SKJ18  | 堅穴建物18  | 曲輪1 | SK18   | 土坑18  | 曲輪1 |
| 調査・整理時 | 報告時 | 位置 | SKJ19  | 堅穴建物19  | 曲輪1 | SK19   | 土坑19  | 曲輪1 |
|        |     |    | SKJ20  | 堅穴建物20  | 曲輪1 | SK20   | 土坑20  | 曲輪1 |
| SF01   | 土壘1 | 東  | SKJ21  | 堅穴建物21  | 曲輪3 | SK21   | 土坑21  | 曲輪1 |
| 調査・整理時 | 報告時 | 位置 | SKJ22  | 堅穴建物22  | 曲輪3 | SK22   | 林消    |     |
|        |     |    | SKJ23  | 堅穴建物23  | 曲輪3 | SK23   | 林消    |     |
| SF03   | 切岸1 | 中央 | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SK24   | 土坑24  | 曲輪1 |
|        |     |    |        |         |     | SK25   | 土坑25  | 曲輪3 |
| SF04   | 切岸2 | 東  | SB01   | 掘立柱建物1  | 曲輪3 | SK26   | 林消    | 曲輪1 |
| SF05   | 切岸3 | 西  | SB02   | 掘立柱建物2  | 曲輪3 | SK27   | 土坑27  | 曲輪3 |
| 調査・整理時 | 報告時 | 位置 | -      | 掘立柱建物3  | 曲輪1 | SK28   | 土坑28  | 曲輪3 |
|        |     |    | -      | 掘立柱建物4  | 曲輪1 | SK29   | 林消    |     |
| SM01   | 通路1 | 中央 | -      | 掘立柱建物5  | 曲輪1 | SK30   | 土坑30  | 曲輪1 |
| SM02   | 通路2 | 中央 | -      | 掘立柱建物6  | 曲輪1 | SK31   | 土坑31  | 曲輪3 |
| SM03   | 通路3 | 東  | -      | 掘立柱建物7  | 曲輪1 | SK32   | 土坑32  | 曲輪1 |
| 調査・整理時 | 報告時 | 位置 | -      | 掘立柱建物8  | 曲輪1 | SK33   | 土坑33  | 曲輪3 |
|        |     |    | -      | 掘立柱建物9  | 曲輪1 | SK34   | 土坑34  | 曲輪3 |
| SM04   | 通路4 | 東  | -      | 掘立柱建物10 | 曲輪1 | SK35   | 土坑35  | 曲輪1 |
|        |     |    | -      | 掘立柱建物11 | 曲輪1 | SK36   | 土坑36  | 曲輪1 |
| SM05   | 通路5 | 東  | -      | 掘立柱建物12 | 曲輪1 | SK37   | 土坑37  | 曲輪1 |
|        |     |    | -      | 掘立柱建物13 | 曲輪1 | SK38   | 土坑38  | 曲輪1 |
| SM06   | 通路6 | 東  | -      | 掘立柱建物14 | 曲輪1 | SK39   | 林消    | 切岸2 |
|        |     |    | -      | 掘立柱建物15 | 曲輪1 | SK40   | 林消    | 切岸2 |
| SM07   | 通路7 | 東  | -      | 掘立柱建物16 | 曲輪1 | SK41   | 林消    | 切岸2 |
|        |     |    | -      | 掘立柱建物17 | 曲輪1 | SK42   | 土坑42  | 曲輪4 |
| SM08   | 通路8 | 東  | -      | 掘立柱建物18 | 曲輪1 | SK43   | 土坑43  | 曲輪3 |
|        |     |    | -      | 掘立柱建物19 | 曲輪1 | SK44   | 土坑44  | 曲輪1 |
| SM09   | 通路9 | 東  | -      | 掘立柱建物20 | 曲輪1 | SK45   | 土坑45  | 曲輪1 |
|        |     |    | -      | 掘立柱建物21 | 曲輪1 | SK46   | 土坑46  | 曲輪1 |
| SKT01  | 塎1  | 中央 | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SKT1   | 塎し穴1  | 曲輪1 |
|        |     |    |        |         |     | SKT2   | 塎し穴2  | 曲輪1 |
| SKT02  | 塎2  | 東  | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SKT3   | 塎し穴3  | 曲輪1 |
|        |     |    |        |         |     | SKT4   | 塎し穴4  | 曲輪1 |
| SKT03  | 塎3  | 東  | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SKT5   | 塎し穴5  | 曲輪1 |
|        |     |    |        |         |     | SKT6   | 塎し穴6  | 曲輪1 |
| SKT04  | 塎4  | 東  | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SKT7   | 塎し穴7  | 曲輪1 |
|        |     |    |        |         |     | SKT8   | 塎し穴8  | 曲輪1 |
| SKT05  | 塎5  | 東  | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SKT9   | 塎し穴9  | 曲輪1 |
|        |     |    |        |         |     | SKT10  | 塎し穴10 | 曲輪1 |
| SKT06  | 塎6  | 東  | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SKT11  | 塎し穴11 | 曲輪4 |
|        |     |    |        |         |     | SKT12  | 塎し穴12 | 曲輪4 |
| SKT07  | 塎7  | 東  | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SKT13  | 塎し穴13 | 曲輪4 |
|        |     |    |        |         |     | SKT14  | 塎し穴14 | 曲輪5 |
| SKT08  | 塎8  | 東  | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SKT15  | 塎し穴15 | 曲輪5 |
|        |     |    |        |         |     | SKT16  | 塎し穴16 | 曲輪5 |
| SKT09  | 塎9  | 東  | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SKT21  | 塎し穴17 | 曲輪5 |
|        |     |    |        |         |     | SD04   | 溝1    | 曲輪1 |
| SD05   | 溝2  | 東  | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SD07   | 溝2    | 曲輪1 |
|        |     |    |        |         |     | SD09   | 溝3    | 曲輪3 |
| SD06   | 溝4  | 東  | 調査・整理時 | 報告時     | 帰属  | SD10   | 通路1付属 | 曲輪1 |
|        |     |    |        |         |     | SD13   | 溝4    | 曲輪3 |

第2表 掘戻遺物一覧(陶磁器)

1~20

| 掲載<br>No | 写真<br>図版 | 種別 | 器種    | 出土状況  |        | 寸法(cm) |      | 重量<br>(g) | 備考  |                           |
|----------|----------|----|-------|-------|--------|--------|------|-----------|-----|---------------------------|
|          |          |    |       | 位置・遺構 | 層位     | 器高     | 底径   |           |     |                           |
| 1        | 72       | 磁  | 白磁    | 碗     | 堅穴建物13 | 床面     | 4.0  | —         | 0.3 | 4.4 白磁碗X類相当。内面型押し植物文。鎌倉期。 |
| 2        | 72       | 磁  | 白磁    | 碗     | 曲輪1    | Ⅱ層     | 2.1  | —         | 0.5 | 7.0 無文。時期不明。              |
| 3        | 72       | 磁  | 青磁    | 碗     | 曲輪3    | 整地盛土   | 3.5  | —         | 0.7 | 24.8 龍泉窯系。外腹鋸彎文。鎌倉期。      |
| 4        | 72       | 陶  | 瀬戸・美濃 | 皿     | 焼土3    | 検出面    | 1.2  | —         | 0.4 | 2.8 仄軸接皿か反皿。大室前半期。戦国期。    |
| 5        | 72       | 陶  | 瀬戸・美濃 | 小天目   | 曲輪1    | Ⅱ層     | 0.9  | 4.4       | 0.7 | 6.7 鉄軸、大窯古段階。室町～戦国期       |
| 6        | 72       | 陶  | 古瀬戸   | 鉢皿    | 通路1    | 検出中    | 2.5  | —         | 0.5 | 10.8 仄軸、古瀬戸Ⅲ期。鎌倉期。        |
| 7        | 72       | 陶  | 瀬戸・美濃 | 丸碗    | 曲輪1    | Ⅱ層     | 3.0  | —         | 0.5 | 9.2 大室期。戦国期。              |
| 8        | 73       | 磁  | 青磁    | 碗     | 堅穴建物3  | 埋土上位   | 2.1  | 8.3       | 0.8 | 29.9 龍泉窯系。戦国期。            |
| 9        | 73       | 陶  | 古瀬戸   | 蓋     | 堅穴建物1  | 埋土上位   | 2.6  | —         | 0.5 | 4.3 鉄軸、古瀬戸Ⅰ～Ⅱ期、鎌倉期。       |
| 10       | 73       | 陶  | 珠洲系   | 擂鉢    | SC08   | 耕土一括   | 3.9  | —         | 1.1 | 57.2 鎌倉期？                 |
| 11       | 73       | 陶  | 常滑    | 甕     | T1     | 埋土上部   | 12.9 | —         | 1.3 | 217.0 戦国期？                |
| 12       | 73       | 陶  | 常滑    | 甕     | 曲輪1～掘1 | Ⅱ層     | 5.8  | —         | 1.0 | 51.7 戦国期？                 |
| 13       | 73       | 陶  | 常滑    | 甕     | 堀5・掘8  | 混合層    | 5.5  | —         | 1.0 | 38.0 戦国期？                 |
| 14       | 73       | 陶  | 常滑    | 甕     | 堅穴建物17 | 埋土中位   | 5.7  | —         | 1.1 | 47.6 戦国期？                 |
| 15       | 74       | 陶  | 常滑    | 甕     | 曲輪1    | I b層   | 4.1  | —         | 1.1 | 27.8 戦国期？                 |
| 16       | 74       | 陶  | 常滑    | 甕     | 堅穴建物14 | 埋土     | 4.2  | —         | 1.3 | 37.2 戦国期？                 |
| 17       |          | 陶  | 常滑    | 甕     | 堀1・土壠1 | 検出面    | 5.1  | —         | 1.2 | 27.0 戦国期？                 |
| 18       | 74       | 陶  | 常滑    | 甕     | 曲輪1～掘1 | 1 b層   | 10.3 | —         | 1.5 | 133.5 戦国期？                |
| 19       | 74       | 陶  | 常滑    | 甕     | 堅穴建物14 | 南東埋土   | 6.5  | —         | 1.8 | 109.1 戦国期？                |
| 20       | 74       | 陶  | 常滑    | 甕     | 堅穴建物13 | 埋土下層   | 30.3 | —         | 1.0 | 1762.0 戦国期？               |

21~50

第3表 掘出遺物一覧(金属製品)

| 掘出<br>No. | 写真<br>図版 | 種別  | 出土状況   |         | 寸法(cm) |     |     | 重量<br>(g) | 備考          |
|-----------|----------|-----|--------|---------|--------|-----|-----|-----------|-------------|
|           |          |     | 位置・遺物  | 層位      | 長さ     | 幅   | 厚さ  |           |             |
| 21        | 75       | 鉄鋤  | 堅穴建物3  | 中位      | 12.4   | 1.8 | 1.1 | 29.5      |             |
| 22        | 75       | 鉄鋤  | 切岸1    |         | 13.8   | 1.1 | 1.1 | 23.3      |             |
| 23        | 75       | 鉄鋤  | 通路1    | 検出中     | 9.5    | 1.8 | 1.1 | 16.0      |             |
| 24        | 75       | 鉄鋤  | 堀1     | 8層      | 12.0   | 1.2 | 0.5 | 11.9      |             |
| 25        | 75       | 鉄鋤  | 堅穴建物5  | 埋土上位    | 12.0   | 1.0 | 1.1 | 13.2      |             |
| 26        | 75       | 鉄鋤  | 堅穴建物6  | 貼床      | 3.8    | 1.0 | 0.9 | 4.9       |             |
| 27        | 75       | 鉄鋤  | 堅穴建物5  | 埋土      | 8.8    | 1.2 | 1.0 | 10.3      |             |
| 28        | 75       | 鉄鋤  | 堅穴建物14 | 埋土上位    | 8.5    | 1.0 | 0.9 | 7.7       |             |
| 29        | 76       | 鉄鋤  | 堅穴建物8  | 埋土下位    | 6.1    | 1.5 | 0.7 | 15.8      |             |
| 30        | 76       | 鉄鋤  | 堅穴建物13 | 埋土      | 6.2    | 0.9 | 1.0 | 6.6       |             |
| 31        | 76       | 鉄鋤  | 通路1    | I b層    | 6.7    | 0.8 | 0.7 | 7.3       |             |
| 32        | 76       | 鉄鋤  | 堅穴建物3  | 埋土上位    | 5.9    | 1.2 | 1.1 | 8.8       |             |
| 33        | 76       | 鉄鋤  | 堀4     | 埋土上位    | 18.6   | 1.2 | 1.0 | 38.1      |             |
| 34        | 76       | 鉄鋤  | 堅穴建物3  | 埋土中位    | 4.4    | 0.7 | 0.4 | 3.3       |             |
| 35        | 76       | 鉄鋤  | 曲輪1    | 2層      | 5.1    | 1.0 | 0.8 | 4.0       |             |
| 36        | 76       | 鉄鋤  | 堅穴建物3  | 床面      | 4.6    | 1.1 | 1.2 | 4.4       |             |
| 37        | 76       | 鉄鋤  | 堅穴建物4  | 埋土      | 5.1    | 0.5 | 0.3 | 3.1       |             |
| 38        | 76       | 鉄鋤  | 堀6     | 床面直上    | 5.9    | 1.0 | 0.4 | 7.3       |             |
| 39        | 76       | 鉄鋤  | 堀1     | 最下層     | 4.1    | 1.0 | 0.5 | 3.1       |             |
| 40        | 76       | 鉄鋤  | 堀6     | 埋土      | 12.7   | 0.8 | 0.4 | 8.6       |             |
| 41        | 76       | 鉄鋤  | 堅穴建物9  | 床面      | 10.8   | 1.0 | 1.1 | 12.8      |             |
| 42        | 77       | 鉄鋤  | 堀4     | 下層      | 14.6   | 0.8 | 0.4 | 18.0      |             |
| 43        | 77       | 小刀  | 堅穴建物5  | 埋土下位    | 20.9   | 2.4 | 0.4 | 47.2      |             |
| 44        | 77       | 刀子  | 堅穴建物3  | 床面      | 8.7    | 1.4 | 0.3 | 7.1       |             |
| 45        | 77       | 鉄鐸  | 堅穴建物14 | 埋土下位    | 3.2    | 1.7 | 0.3 | 6.9       |             |
| 46        | 77       | 鉄鐸  | 堅穴建物5  | 埋土下位    | 2.9    | 1.5 | 0.3 | 6.8       |             |
| 47        | 77       | 杏葉  | 土坑45   | 埋土中位    | 6.3    | 7.3 | 0.6 | 34.2      | 金銅製覆輪、蝶番欠損。 |
| 48        | 78       | 小札  | 土坑25   | 埋土中位    | 6.4    | 2.6 | 0.2 | 14.7      | 漆付着、鐵紐痕跡あり。 |
| 49        | 78       | 小札  | T1     | 30~40cm | 6.5    | 2.1 | 0.2 | 10.9      | 漆付着、鐵紐痕跡あり。 |
| 50        | 78       | 鉄製鉢 | 曲輪7    | 底面      | 12.5   | 2.3 | 0.6 | 16.4      |             |

第3表 掘戻遺物一覧(金属製品)

51~80

| 掲載<br>No. | 写真<br>図版 | 種別    | 出土状況     |      | 寸法(cm) |      |     | 重量<br>(g) | 備考            |
|-----------|----------|-------|----------|------|--------|------|-----|-----------|---------------|
|           |          |       | 位置・遺物    | 層位   | 長さ     | 幅    | 厚さ  |           |               |
| 51        | 78       | 鉄製釘   | 土坑2      | 埋土上位 | 9.3    | 0.7  | 0.5 | 6.4       | 通し孔は折り曲げ。     |
| 52        | 78       | 鉄製鍔鍤車 | 曲輪3      | 整地層中 | 15.3   | 1.0  | 0.5 | 12.4      | 軸棒のみ。         |
| 53        | 78       | 鉄製鍔鍤車 | 堅穴建物3    | 埋土中位 | 6.6    | 4.6  | 0.2 | 25.9      |               |
| 54        | 78       | 鉄製鍔鍤車 | 堅穴建物3    | 埋土上位 | 1.4    | 4.5  | 0.2 | 18.1      |               |
| 55        | 79       | 不明金具  | 堅穴建物1    | 床面   | 2.7    | 0.9  | 0.2 | 3.0       |               |
| 56        | 79       | 不明金具  | 土坑15     | 埋土   | 2.7    | 0.9  | 0.3 | 3.1       |               |
| 57        | 79       | 不明金具  | か6・7     | 盛土   | 1.6    | 2.4  | 3.5 | 2.6       |               |
| 58        | 79       | 鍬     | 土坑15     | 検出面  | 10.8   | 5.1  | 0.8 | 94.2      |               |
| 59        | 79       | 鉄製手斧  | 土坑2      | 底面   | 8.6    | 4.3  | 2.7 | 126.6     |               |
| 60        | 79       | 経筒蓋   | 切岸1      | I b層 | 5.0    | 4.2  | 0.4 | 29.5      | 二重圓線あり。       |
| 61        | 79       | 経筒蓋   | 堅穴建物6    | 貼床   | 3.5    | 3.3  | 0.4 | 19.4      | 圓線なし。         |
| 62        | 79       | 鋳造鉄片  | 堀5と堀8の合流 | 混合層  | 5.3    | 3.9  | 0.5 | 36.4      | 細い突線あり。       |
| 63        | 80       | 鉄幣    | 土坑15     |      | 8.7    | 11.6 | 0.6 | 149.9     | 二重圓線、鳥図文、縁あり。 |
| 64        | 80       | 不明銅製品 | 堅穴建物19   | 埋土上位 | 3.6    | 2.2  | 0.3 | 4.2       |               |
| 65        | 80       | 鋳造鉄片  | 曲輪1      | I b層 | 3.5    | 5.8  | 0.6 | 44.8      |               |
| 66        | 81       | 不明銅製品 | 堅穴建物7    | 埋土上位 | 3.3    | 3.2  | 0.7 | 2.8       |               |
| 67        | 81       | 不明    | SK40     | 埋土一括 | 1.7    | 2.3  | 0.3 | 5.3       |               |
| 68        | 81       | 鋳造鉄片  | 曲輪1      | II層  | 5.2    | 5.0  | 1.1 | 69.1      | 突綫あり。         |
| 69        | 81       | 鋳造鉄片  | WP141    | 埋土   | 4.8    | 6.6  | 1.1 | 99.3      |               |
| 70        | 81       | 鋳造鉄片  | 土坑12     | 埋土上位 | 11.0   | 6.5  | 0.6 | 147.0     |               |
| 71        | 81       | 経筒蓋   | 曲輪1      | I b層 | 3.6    | 3.1  | 0.4 | 12.1      | 60と同一個体?      |
| 72        | 81       | 鋳造鉄片  | 堅穴建物1    | 床面   | 4.9    | 3.9  | 0.7 | 35.9      |               |
| 73        | 81       | 鋳造鉄片  | 堅穴建物5    | 検出面  | 5.7    | 2.5  | 0.7 | 20.3      |               |
| 74        | 81       | 鍋     | 土坑15     | 埋土中位 | 3.8    | 5.2  | 0.4 | 20.6      | 内耳部あり。        |
| 75        | 82       | 鍋     | 土坑15     |      | 4.7    | 3.7  | 0.5 | 10.9      |               |
| 76        | 82       | 鍋     | 土坑1      | 底面   | 5.2    | 5.2  | 0.5 | 17.7      |               |
| 77        | 82       | 鍋     | 堀5・堀8    | 混合層  | 5.8    | 6.1  | 4.5 | 30.7      |               |
| 78        | 82       | 鍋     | 堀5       | 混合層  | 6.2    | 6.3  | 0.3 | 54.6      |               |
| 79        | 82       | 不明    | 堅穴建物22   | 埋土上部 | 8.6    | 4.8  | 1.8 | 28.6      | 環状把手。         |
| 80        | 83       | 板状鉄製品 | 堅穴建物3    | 埋土下位 | 14.7   | 1.6  | 0.5 | 41.9      | 80~84は来て出土。   |

第3表 掘査遺物一覧(金属製品)

81~110

| 掘査<br>No | 写真<br>図版 | 種別    | 出土状況   |      | 寸法(cm) |     |     | 重量<br>(g) | 備考            |
|----------|----------|-------|--------|------|--------|-----|-----|-----------|---------------|
|          |          |       | 位置・遺物  | 層位   | 長さ     | 幅   | 厚さ  |           |               |
| 81       | 83       | 板状鉄製品 | 堅穴建物3  | 埋土下位 | 20.0   | 1.6 | 0.5 | 51.9      | 80~84は東で出土。   |
| 82       | 83       | 板状鉄製品 | 堅穴建物3  | 埋土下位 | 17.4   | 1.7 | 0.5 | 53.2      | 80~84は東で出土。   |
| 83       | 83       | 板状鉄製品 | 堅穴建物   | 埋土下位 | 17.3   | 2.6 | 0.6 | 70.6      | 80~84は東で出土。   |
| 84       | 84       | 板状鉄製品 | 軸1     | 最下層  | 6.2    | 1.9 | 0.4 | 11.3      | 80~84は東で出土。   |
| 85       | 84       | 鉄     | 土器1    | 断剣下部 | 5.1    | 1.6 | 0.6 | 9.3       | 85~86は密着して出土。 |
| 86       | 84       | 鉄     | 土器1    | 断剣下部 | 5.1    | 2.0 | 0.4 | 10.7      | 85~86は密着して出土。 |
| 87       | 84       | 鉄製鍵?  | 堅穴建物14 | 埋土下位 | 6.7    | 4.0 | 0.2 | 13.5      |               |
| 88       | 84       | 不明    | 堅穴建物14 | 埋土上位 | 6.3    | 3.1 | 0.3 | 8.4       |               |
| 89       | 84       | 不明    | 堅穴建物22 | 埋土上位 | 3.4    | 1.5 | 0.4 | 5.1       |               |
| 90       | 84       | 不明    | 土坑18   | 埋土   | 3.5    | 2.2 | 0.2 | 4.3       |               |
| 91       | 84       | 不明    | 堅穴建物4  | 床面   | 5.6    | 1.7 | 0.6 | 12.6      |               |
| 92       | 84       | 不明    | 軸1     | 最下層  | 9.4    | 2.9 | 1.3 | 31.9      |               |
| 93       | 84       | 鉄釘?   | 堅穴建物15 | 埋土上位 | 3.1    | 2.9 | 0.7 | 12.9      |               |
| 94       | 84       | 鉄釘?   | 軸6     | 埋土   | 3.2    | 3.2 | 0.6 | 8.2       |               |
| 95       | 84       | 鉄釘?   | 堅穴建物1  | 埋土上位 | 3.6    | 2.5 | 0.3 | 8.0       | 溶融した複数個体が結合。  |
| 96       | 85       | 鉄釘    | 曲輪1    | Ⅱ層   | 8.8    | 0.9 | 0.5 | 1.2       |               |
| 97       | 85       | 鉄釘    | 堅穴建物5  | 埋土下位 | 9.3    | 0.7 | 0.9 | 12.4      |               |
| 98       | 85       | 鉄釘    | 曲輪7    | 平坦面  | 6.4    | 0.6 | 0.6 | 9.8       |               |
| 99       | 85       | 鉄釘    | 堅穴建物7  | 埋土下位 | 4.6    | 0.7 | 0.4 | 7.1       |               |
| 100      | 85       | 鉄釘    | 堅穴建物3  | 埋土上位 | 7.6    | 0.8 | 0.4 | 4.7       |               |
| 101      | 85       | 鉄釘    | 曲輪1    | Ⅱ層   | 5.1    | 0.7 | 0.6 | 7.1       |               |
| 102      | 85       | 鉄釘    | WP161  | 埋土   | 3.2    | 0.5 | 0.4 | 1.5       |               |
| 103      | 85       | 鉄釘    | 堅穴建物2  | 北床炉面 | 4.1    | 0.5 | 0.4 | 1.3       |               |
| 104      | 85       | 鉄釘    | 堅穴建物15 | 埋土下位 | 2.8    | 0.5 | 0.4 | 6.5       |               |
| 105      | 85       | 鉄釘    | 堅穴建物4  | 床面   | 6.0    | 1.2 | 0.5 | 6.7       |               |
| 106      | 85       | 鉄釘    | 土坑25   | 埋土下部 | 3.5    | 2.8 | 0.5 | 5.6       |               |
| 107      | 85       | 鉄釘    | 軸6     | 埋土下部 | 8.4    | 1.2 | 0.6 | 10.0      |               |
| 108      | 85       | 鉄釘    | WP165  | 埋土   | 5.0    | 0.9 | 0.4 | 2.5       |               |
| 109      | 85       | 鉄釘    | 軸6     | 埋土下部 | 8.4    | 1.4 | 0.4 | 4.1       |               |
| 110      | 86       | 錢貨    | 土坑25   | 埋土上位 | 2.6    | 1.6 | 0.1 | 0.9       | 五銖銭(後漢)       |

第3表 掘載遺物一覧(金属製品)

111~120

| 掘載<br>No | 写真<br>図版 | 種別 | 出土状況     |        | 寸法(cm) |    |     | 重量<br>(g) | 備考          |
|----------|----------|----|----------|--------|--------|----|-----|-----------|-------------|
|          |          |    | 位置・遺構    | 層位     | 長さ     | 幅  | 厚さ  |           |             |
| 111      | 86       | 銭貨 | 堅穴建物1    | 埋土下位   | 24     | 24 | 0.1 | 27        | 開元通寶(唐)     |
| 112      | 86       | 銭貨 | 堅穴建物16   | 埋土下位   | 24     | 24 | 0.1 | 3.3       | 皇宗通寶(北宋)    |
| 113      | 86       | 銭貨 | 軸8と轍5の合流 | 小ピット内  | 24     | 24 | 0.1 | 3.7       | 天聖元寶(北宋)    |
| 114      | 86       | 銭貨 | 堅穴建物18   | 埋土中位   | 24     | 24 | 0.1 | 3.1       | 治平元寶(北宋)    |
| 115      | 86       | 銭貨 | 曲輪1      | Ⅱ層下    | 25     | 25 | 0.1 | 2.9       | 元祐通寶(北宋)    |
| 116      | 86       | 銭貨 | 堅穴建物?    | 検出面    | 13     | 16 | 0.1 | 1.2       | 政和通寶(北宋・篆書) |
| 117      | 86       | 銭貨 | 堅穴建物16   | 埋土下位   | 25     | 25 | 1.0 | 3.1       | 政和通寶(北宋)    |
| 118      | 86       | 銭貨 | 堅穴建物7    | 埋土下位   | 21     | 23 | 0.1 | 1.9       | 大觀通寶(北宋)    |
| 119      | 86       | 銭貨 | 曲輪1      | I b層   | 25     | 25 | 0.2 | 2.9       | 大觀通寶(北宋)    |
| 120      | 86       | 銭貨 | 曲輪1      | I b～Ⅱ層 | 24     | 24 | 0.1 | 1.9       | 永樂通寶(明)     |

第4表 掘載遺物一覧(石製品)

121~127

| 掘載<br>No | 写真<br>図版 | 種別   | 出土状況     |       | 寸法(cm) |      |      | 重量<br>(g) | 備考    |
|----------|----------|------|----------|-------|--------|------|------|-----------|-------|
|          |          |      | 位置・遺構    | 層位    | 長さ     | 幅    | 厚さ   |           |       |
| 121      | 87       | 鉢型片? | 轍6       | 埋土    | 82     | 100  | 4.1  | 3423      | 凝灰岩   |
| 122      | 87       | 砥石   | 堅穴建物3    | 埋土下位  | 13.2   | 2.8  | 2.7  | 1432      | 凝灰岩   |
| 123      | 88       | 砥石   | 曲輪7      | 埋土    | 9.5    | 4.2  | 3.2  | 108.9     | 凝灰岩   |
| 124      | 88       | 砥石   | 堅穴建物15   | 埋土    | 4.5    | 4.2  | 1.5  | 35.0      | 凝灰岩   |
| 125      | 88       | 砥石   | 焼土3      | 検出面   | 9.7    | 5.6  | 5.4  | 423.6     | 流紋岩   |
| 126      | 89       | 石臼   | 轍1-SQ1・2 | 埋土最下層 | 31.2   | 29.2 | 10.2 | 12500.0   | 安山岩   |
| 127      | 90       | 石臼   | 轍6       | 埋土    | 25.5   | 25.4 | 12.7 | 7100.0    | デイサイト |

第5表 掘出遺物一覧(縄文土器)

128~157

| 掘出<br>No. | 写真<br>図版 | 器種 | 出土状況         |     | 寸法(cm) |      |      | 備考 |
|-----------|----------|----|--------------|-----|--------|------|------|----|
|           |          |    | 位置・遺構        | 層位  | 口径     | 器高   | 底径   |    |
| 128       | 91       | 深鉢 | 堅穴建物21・22    | 理土  | 6.8    | 4.8  | —    |    |
| 129       | 91       | 深鉢 | 堅穴建物23       | 理土  | 9.2    | 5.1  | —    |    |
| 130       | 91       | 深鉢 | 塚8・7・堅穴建物23  | 理土  | 10.8   | 4.3  | —    |    |
| 131       | 91       | 深鉢 | 塚4           | 理土  | 6.9    | 6.9  | —    |    |
| 132       | 91       | 深鉢 | 堅穴建物5・塚6     | 理土  | 14.2   | 8.5  | —    |    |
| 133       | 91       | 深鉢 | 塚5           | 理土  | 14.8   | 11.7 | —    |    |
| 134       | 91       | 深鉢 | 堅穴建物22・23・塚8 | 理土  | 13.5   | 8.1  | —    |    |
| 135       | 91       | 深鉢 | 包含層C         | Ⅲ層A | 10.4   | 6.7  | —    |    |
| 136       | 91       | 深鉢 | 不明遺構1        | 理土  | —      | 4.2  | —    |    |
| 137       | 91       | 深鉢 | 塚8           | 理土  | —      | 6.3  | —    |    |
| 138       | 92       | 深鉢 | 包含層C         | Ⅲ層A | —      | 8.8  | —    |    |
| 139       | 92       | 深鉢 | 塚8           | 理土  | —      | 6.4  | —    |    |
| 140       | 92       | 深鉢 | 塚8           | 理土  | —      | 4.6  | —    |    |
| 141       | 92       | 深鉢 | 塚9           | 理土  | —      | 4.0  | —    |    |
| 142       | 92       | 深鉢 | 塚5           | 理土  | —      | 6.4  | —    |    |
| 143       | 92       | 深鉢 | 塚8           | 理土  | —      | 7.4  | —    |    |
| 144       | 92       | 深鉢 | 塚5と塚8の合流     | 理土  | —      | 7.2  | —    |    |
| 145       | 92       | 深鉢 | 塚9           | 理土  | 18.2   | 4.6  | —    |    |
| 146       | 92       | 深鉢 | 塚6           | 理土  | —      | 2.4  | —    |    |
| 147       | 92       | 甕  | 塚5と塚8の合流     | 理土  | —      | 4.8  | —    |    |
| 148       | 93       | 深鉢 | 包含層C         | Ⅲ層A | 13.5   | 9.0  | —    |    |
| 149       | 93       | 浅鉢 | 塚8・炉8        | 理土  | 14.9   | 4.3  | 10.6 |    |
| 150       | 93       | 浅鉢 | 塚9           | 理土  | 13.3   | 5.1  | —    |    |
| 151       | 93       | 浅鉢 | 堅穴建物23       | 理土  | 16.3   | 4.4  | 丸底   |    |
| 152       | 93       | 浅鉢 | 堅穴建物22       | 理土  | 13.8   | 4.9  | 丸底   |    |
| 153       | 93       | 浅鉢 | 塚8           | 理土  | —      | 6.9  | —    |    |
| 154       | 93       | 浅鉢 | 堅穴建物23       | 理土  | —      | 4.9  | —    |    |
| 155       | 93       | 浅鉢 | 塚3           | 理土  | —      | 4.7  | —    |    |
| 156       | 93       | 浅鉢 | 曲輪1 撥乱       |     | —      | 4.3  | —    |    |
| 157       | 93       | 浅鉢 | 塚4           | 理土  | —      | 2.7  | —    |    |

第5表 掘載遺物一覧(縄文土器)

158~187

| 掘載<br>No. | 写真<br>図版 | 器種  | 出土状況    |     | 寸法(cm) |      |     | 備考 |
|-----------|----------|-----|---------|-----|--------|------|-----|----|
|           |          |     | 位置・遺構   | 層位  | 口径     | 器高   | 底径  |    |
| 158       | 94       | 浅鉢  | 堅穴建物23  | 理土  | 152    | 27   | -   |    |
| 159       | 94       | 浅鉢  | 塚8      | 理土  | -      | 38   | -   |    |
| 160       | 94       | 浅鉢  | 塚3      | 理土  | -      | 37   | -   |    |
| 161       | 94       | 浅鉢  | 塚8      | 理土  | -      | 58   | -   |    |
| 162       | 94       | 浅鉢  | 塚と塚8の合流 | 理土  | -      | 84   | -   |    |
| 163       | 94       | 壺   | 塚8      | 理土  | 48     | 33   | -   |    |
| 164       | 94       | 台付鉢 | 塚8      | 理土  | 112    | 92   | 68  |    |
| 165       | 94       | 台付鉢 | 包含層C    | Ⅲ層A | -      | 28   | 50  |    |
| 166       | 94       | 台付鉢 | 塚9      | 理土  | -      | 4.6  | 8.6 |    |
| 167       | 94       | 台付鉢 | 堅穴建物23  | 理土  | -      | 4.0  | 6.2 |    |
| 168       | 94       | 台付鉢 | 不明遺構1   | 理土  | -      | 4.6  | 7.2 |    |
| 169       | 95       | 台付鉢 | 塚9      | 理土  | -      | 6.0  | -   |    |
| 170       | 95       | 台付鉢 | 包含層C    | Ⅲ層A | -      | 4.8  | 7.5 |    |
| 171       | 95       | 台付鉢 | 包含層C    | Ⅲ層A | -      | 6.3  | 8.2 |    |
| 172       | 95       | 深鉢  | 塚5      | 理土  | -      | 1.6  | 4.3 |    |
| 173       | 95       | 深鉢  | 曲輪3     | 理土  | -      | 3.5  | 4.6 |    |
| 174       | 95       | 深鉢  | 東側      | 表土  | -      | 3.3  | 6.0 |    |
| 175       | 95       | 深鉢  | 塚8      | 理土  | -      | 6.1  | 5.4 |    |
| 176       | 95       | 深鉢  | 塚6・曲輪1  | 理土  | 9.6    | 9.9  | 5.0 |    |
| 177       | 95       | 深鉢  | 塚8      | 理土  | -      | 3.8  | 4.7 |    |
| 178       | 95       | 深鉢  | 堅穴建物23  | 理土  | -      | 5.2  | 4.0 |    |
| 179       | 95       | 深鉢  | 包含層C    | Ⅲ層A | -      | 7.1  | 8.8 |    |
| 180       | 95       | 浅鉢  | 塚8      | 理土  | 6.3    | 2.0  | -   |    |
| 181       | 95       | 深鉢  | 塚4      | 理土  | -      | 19.2 | -   |    |
| 182       | 96       | 深鉢  | 包含層C    | Ⅲ層A | -      | 1.1  | 7.2 |    |
| 183       | 96       | 深鉢  | 包含層C    | Ⅲ層A | -      | 9.5  | 5.7 |    |
| 184       | 96       | 深鉢  | 包含層C    | Ⅲ層A | 10.8   | 4.9  | 9.1 |    |
| 185       | 96       | 注口  | 包含層C    | Ⅲ層A | -      | 2.7  | -   |    |
| 186       | 96       | 壺   | 堅穴建物23  | 理土  | 4.7    | 3.3  | -   |    |
| 187       | 97       | 深鉢  | 包含層C    | Ⅲ層A | -      | 29.8 | -   |    |

188~214

第6表 掘載遺物一覧(石器)

| 掲載<br>No. | 写真<br>図版 | 器種  | 出土状況     |         | 寸法(cm) |      |     | 重量<br>(g) | 備考          |
|-----------|----------|-----|----------|---------|--------|------|-----|-----------|-------------|
|           |          |     | 位置・遺構    | 層位      | 長さ     | 幅    | 厚さ  |           |             |
| 188       | 98       | 石鏡  | 堅穴建物23   | 埋土一括    | 20     | 15   | 0.5 | 1.3       | 頁岩          |
| 189       | 98       | 石鏡  | 堀8       | 埋土一括    | 26     | 17   | 0.6 | 2.6       | 頁岩          |
| 190       | 98       | 石鏡  | 包含層c     | Ⅲ層①     | 29     | 12   | 0.5 | 1.4       | 頁岩          |
| 191       | 98       | 石鏡  | 堀8       | 埋土一括    | 34     | 18   | 1.0 | 5.2       | 頁岩          |
| 192       | 98       | 石鏡  | 堅穴建物9    | 埋土      | 33     | 16   | 0.8 | 3.1       | 頁岩          |
| 193       | 98       | 石鏡  | 堀1       | 埋土下部    | 22     | 12   | 0.7 | 2.0       | 頁岩          |
| 194       | 98       | 石鏡  | 堅穴建物18   | 南西埋土    | 34     | 14   | 0.9 | 2.0       | 頁岩、未成品?     |
| 195       | 98       | 石鏡  | 曲輪1      |         | 37     | 15   | 0.7 | 1.7       | 凝灰岩、未成品?    |
| 196       | 98       | 石錐? | 不明遺構1    | 埋土      | 4.4    | 1.3  | 1.0 | 4.3       | 赤色頁岩        |
| 197       | 98       | 石匙  | 堅穴建物2    | 埋土下部    | 6.0    | 8.0  | 1.2 | 41.9      | 頁岩          |
| 198       | 99       | 搔器  | 堀8       | 埋土上部    | 4.1    | 3.8  | 1.6 | 23.1      | 頁岩          |
| 199       | 99       | 石匙  | 堀6       | 埋土一括    | 6.0    | 3.4  | 0.8 | 9.7       | 頁岩          |
| 200       | 99       | 石斧  | 堀9       | 埋土一括    | 3.5    | 3.0  | 1.4 | 23.7      | 蛇紋岩(旱池峰周辺?) |
| 201       | 99       | 石斧  | 堀5       | 混合層     | 6.4    | 5.7  | 2.8 | 186.3     | ヒン岩         |
| 202       | 100      | 石斧  | T1       | 埋土最下部   | 14.2   | 5.7  | 3.0 | 405.8     | 閃綠岩         |
| 203       | 100      | 石斧  | 堀5と堀8の合流 | 褐色土含層   | 5.0    | 3.5  | 2.5 | 61.7      | 閃綠岩         |
| 204       | 100      | 石皿? | 曲輪3      | 盛土直下黒褐色 | 6.3    | 3.3  | 3.4 | 62.1      | デイサイト       |
| 205       | 100      | 凹石  | 堀5と堀8の合流 | 混合層     | 6.8    | 4.9  | 2.3 | 55.5      | 安山岩         |
| 206       | 101      | 磨石  | 包含層c     | Ⅲ層①     | 8.1    | 9.3  | 3.5 | 430.1     | デイサイト       |
| 207       | 101      | 磨石  | 包含層c     | Ⅲ層①     | 7.9    | 8.8  | 3.0 | 299.9     | デイサイト       |
| 208       | 101      | 磨石  | 包含層c     | Ⅲ層①     | 6.4    | 7.5  | 1.9 | 154.0     | デイサイト       |
| 209       | 102      | 磨石  | 包含層c     | Ⅲ層①     | 6.8    | 10.6 | 3.9 | 380.9     | デイサイト       |
| 210       | 102      | 磨石  | 堀6       | 埋土下層(鉗) | 5.9    | 6.1  | 3.1 | 208.2     | デイサイト       |
| 211       | 102      | 磨石  | 堀6       | 廃棄焼土    | 7.8    | 6.9  | 2.5 | 163.7     | デイサイト       |
| 212       | 102      | 磨石  | 堀6       | 埋土下層(鉗) | 5.2    | 9.2  | 4.1 | 327.2     | デイサイト       |
| 213       | 102      | 磨石  | T1       | 埋土一括    | 7.2    | 6.9  | 4.2 | 350.4     | デイサイト       |
| 214       | 103      | 磨石  | 堀6       | 埋土下層(鉗) | 12.1   | 7.6  | 4.1 | 534.0     | 安山岩         |

第7表 掘載遺物一覧(石製品)

215~221

| 掲載<br>No. | 写真<br>図版 | 器種  | 出土状況     |       | 寸法(cm) |    |     | 重量<br>(g) | 備考         |
|-----------|----------|-----|----------|-------|--------|----|-----|-----------|------------|
|           |          |     | 位置・遺構    | 層位    | 長さ     | 幅  | 厚さ  |           |            |
| 215       | 103      | 石刀? | 曲輪3      | 埋土一括  | 97     | 28 | 0.6 | 27.1      | 頁岩         |
| 216       | 103      | 石刀? | 堀5と堀8の合流 | 混合層   | 138    | 39 | 0.9 | 62.2      | 頁岩         |
| 217       | 104      | 石刀? | 堀7       | 埋土中～下 | 121    | 45 | 1.2 | 74.8      | 頁岩         |
| 218       | 104      | 石刀? | 堀8       | 埋土一括  | 148    | 40 | 1.3 | 105.4     | 頁岩         |
| 219       | 104      | 石刀? | 堀4       | 埋土一括  | 132    | 42 | 1.2 | 87.0      | 頁岩         |
| 220       | 104      | 石棒  | 包含層c     | Ⅲ層①   | 39     | 28 | 2.7 | 53.4      | 頁岩         |
| 221       | 104      | 石刀  | 堀5と堀8の合流 | 混合層   | 126    | 50 | 1.0 | 80.8      | 細粒花崗閃綠岩、線刻 |

第8表 掘載遺物一覧(土製品)

222~230

| 掲載<br>No. | 写真<br>図版 | 器種 | 出土状況      |         | 寸法(cm) |      |     | 重量<br>(g) | 備考       |
|-----------|----------|----|-----------|---------|--------|------|-----|-----------|----------|
|           |          |    | 位置・遺構     | 層位      | 長さ     | 幅    | 厚さ  |           |          |
| 222       | 105      | 土偶 | 竪穴建物2     | 貼床      | 37     | 33   | 14  | 13.7      |          |
| 223       | 105      | 土偶 | 堀4        | 埋土一括    | 16     | 26   | 1.3 | 4.0       |          |
| 224       | 105      | 土偶 | 竪穴建物22・23 | 盛土整地直下層 | 19     | 18   | 1.3 | 2.8       |          |
| 225       | 105      | 土偶 | 曲輪5       | 棟出面     | 35     | 33   | 1.0 | 8.6       |          |
| 226       | 105      | 土偶 | 堀5        | 混合層     | 30     | 5.9  | 1.7 | 23.2      |          |
| 227       | 105      | 土偶 | 曲輪3       | 盛土整地層   | 53     | 45   | 1.7 | 35.3      |          |
| 228       | 105      | 土偶 | 西側耕土中     |         | 73     | 34   | 2.9 | 46.1      | アスファルト付着 |
| 229       | 105      | 土偶 | 堀8        | 埋土中～下層  | 12     | 43   | 1.2 | 11.7      |          |
| 230       | 106      | 土偶 | 曲輪4と5の間   | 表土      | 108    | 10.2 | 2.0 | 182.9     | 板状土偶。    |

第9表 掘載遺物一覧(鉄滓)

| 件名 | 写真 | 種類       | 出土状況   |              | 重量(g) | 磁着度合い      | 外貌状態              |
|----|----|----------|--------|--------------|-------|------------|-------------------|
|    |    |          | 通構名    | 位置・層位        |       |            |                   |
| 23 |    | 鐵治滓      | 堅穴建物1  | 北東 埋土上位      | 12.5  | 着なし メタルなし  | 一部青黒の赤褐色 木炭かみこみ瘤? |
| 24 |    | 流状鐵治滓    | 堅穴建物3  | 南西 埋土上位      | 7.1   | 着なし メタルなし  | 青黒 一部光沢有り         |
| 25 |    | 鐵治滓      | 堅穴建物6  | 北東 埋土        | 23.7  | 着なし メタルなし  | 赤褐色 ザラザラ          |
| 26 | ○  | 鐵治滓      | 堅穴建物7  | 南西 埋土        | 48.9  | 着なし メタルなし  | 表面赤褐色 木炭喰込み込み     |
| 27 | ○  | 鐵治滓(含鉄少) | 堅穴建物8  | 南 埋土下位       | 81.3  | 一部着 一部メタル  | 青黒 表面一部サビ         |
| 30 | ○  | 流状鐵治滓    | 堅穴建物13 | 北西 埋土        | 9.7   | 着なし メタルなし  | 青黒光沢 アメ状          |
| 31 | ○  | 鐵塊系遺物    | 堅穴建物14 | 中北 埋土        | 22.0  | 強着 メタルあり   | 全体錆 赤褐色           |
| 32 |    | 流状鐵治滓    | 堅穴建物15 | 中南ベルト 埋土     | 12.0  | 着なし メタルなし  | 青黒 孔隙有            |
| 43 |    | 鐵治滓(含鉄少) | 土坑2    | 東 埋土         | 5.4   | 着有 メタルなし   | 赤黒 表面錆            |
| 44 |    | 発泡滓      | 土坑2    | 東 埋土         | 10.9  | 着なし メタルなし  | 孔隙多               |
| 45 |    | 鐵治滓(含鉄少) | 土坑2    | RM2 埋土上位     | 52.2  | 着有 メタルなし   | 一部青黒の赤褐色 表面錆 ザラザラ |
| 38 | ○  | 鐵治滓(含鉄少) | 堀1     | T1 II層       | 39.7  | 弱着 一部メタル   | 表面赤褐色 やや滑らか       |
| 41 |    | 鐵治滓(含鉄少) | 堀1     | 埋土 下半        | 47.9  | 一部弱着 一部メタル | 一部青黒の赤褐色(椀形?)     |
| 42 |    | 流状鐵治滓    | 堀1     | 検出面          | 211.9 | 着なし メタルなし  | 一部赤味の青黒 流状        |
| 33 | ○  | 椀形鐵治滓    | 曲輪1    | I b 層        | 160.5 | 着なし メタルなし  | 底面やや滑らか           |
| 35 | ○  | 流状鐵治滓    | 曲輪1    | II層          | 44.3  | 着なし メタルなし  | 青黒                |
| 47 |    | 流状鐵治滓    | 曲輪1    | II層          | 58.7  | 着なし メタルなし  | 部分赤味の青黒           |
| 28 |    | 流状鐵治滓    | 曲輪1    | SKI10 埋土     | 18.0  | 着なし メタルなし  | 部分赤味の青黒           |
| 29 |    | 流状鐵治滓    | 曲輪1    | SKI11の北側 検出面 | 16.4  | 着なし メタルなし  | 青黒 孔隙やや有り         |
| 36 |    | 流状鐵治滓    | 曲輪1    | 北東 検出面       | 7.2   | 着なし メタルなし  | 一部赤味の青黒           |
| 46 |    | 流状鐵治滓    | 曲輪2    | 盛土           | 40.0  | 着なし メタルなし  | 表面一部錆の青黒          |
| 39 | ○  | 流状鐵治滓    | 曲輪3    | I b層         | 12.4  | 着なし メタルなし  | 青黒                |
| 40 |    | 鐵治滓(含鉄多) | 曲輪3    | 南側           | 501.3 | 一部強着 一部メタル | 赤黒 ザラザラ           |

## V 総括

### 1 中世の遺構と遺物

今回の発掘調査では、不動館が中世に成立した城館であることがより確かなものとなった。調査によって城館を構成する普請および作事に関する遺構を検出し、それらに関連して陶磁器類や多くの金属製品が出土したことがこれを如実に物語っている。ここでは、この調査成果をもとに分析をおこない、不動館という城館の実態について検証する基礎的な材料を提示してみたいと思う。

#### (1) 普請遺構

今回の調査で検出したおもな普請遺構は、曲輪7箇所、堀9条、切岸3箇所、土塁1箇所、通路3箇所である。

曲輪配置は曲輪1を中心安比川に面する方向以外は大小様々な曲輪が付随して存在する。それぞれが有機的に結びついて構成されていると考えられるが、調査区外にも曲輪が存在するため全容不明である。

曲輪1については最高所に位置しており、各種作事遺構が隙間無く検出できたため、この城館の中心的な曲輪であったことが明らかになった。残念ながらこの曲輪1北側は安比川へ続く崖に面しており、近世以降大規模な崩落に見舞われ、かなりの平坦面が失われたものと考えられる。これは、安比川の流れが直線的に描かれている近世の絵図と、不動館の位置する場所で曲線として描かれている近世以降の絵図の両者が存在している点からも推測され、近世以降の水害で流路が不動館側に変動した結果、曲輪1北側のかなりの部分が消失した可能性が指摘できる。また、この曲輪1の想定される中心域は建物の平面的な連続性を考えると崩落部分に該当すると思われ、中心域は掘立柱建物で構成される建物群が存在した可能性が高い。さらに、曲輪1の堅穴建物には特に東側縁辺部を中心に現状曲輪1範囲の外方へ展開する様子がみられ、ある段階では曲輪1平坦面が、より東側・南側へ広がっていたようである。調査で検出した曲輪1の平面形態は最終段階の形態であって、この曲輪1改变は普請遺構の配置を考えると堀1の開削と密接に関係していると想定される。また、検出した堅穴建物群はいずれも重複が著しく、しかも埋土は、自然堆積ではなくほんんど人が堆積であることから度重なる作り替えがなされていたものと考えられる。掘立柱建物群は、曲輪北側と東側にそれぞれ展開するが、これらも堅穴建物同様に平面プランの重複が著しく、なおかつ類似形態、類似軸方向、類似規模が同一エリアに集中してみられる。これも度重なる建て替えの結果であるとみられる。この曲輪1が長期間にわたって使用された証拠であろう。

曲輪2は、現代の削平により中世の遺構面は残存していないことが判明したが、平面形態は概ね中世の姿を留めているものと考えられる。この削平のためか調査では作事遺構が検出できなかった。しかし、曲輪西側に堀4の存在が調査で初めて明らかとなり、周囲を堀で囲まれている防御性の高い曲輪であったと考えられる。したがって、作事遺構は残存していなかったが、本来はこの曲輪にもある程度の建物が存在した可能性が高い。

曲輪3は、中心となる曲輪1の東側に堀を隔てて取り付く帶曲輪であるとみられる。ただし、発掘調査によって、この城館を語るうえで非常に重要な曲輪であることが判明した。これは、この曲輪の形態があくまでも城館最終段階の姿であり、その下層には各種時期差のある遺構が眠っていた点であ

る。詳細は後節に譲るが、この曲輪は重層構造となっており、各種普請遺構と作事遺構と錯綜しながら長期間利用されてきたようである。特に、検出した最終段階の曲輪形状は、最も平面積が拡張されたものとみられ、堀1の底面よりも古い段階の底面が曲輪3側で検出されたことからもわかる。さらに、東谷側の面も盛土によって、より広い平坦面を造成している状況も加わっている。この最も広くなった曲輪では検出した2棟の掘立柱建物が建てられたものと考えられる。一方、この曲輪最古段階の普請遺構として堀8を検出した。この堀は埋め戻されており、さらにその上を盛土整地されている。その盛土整地にも段階があり、堅穴建物の構築、それを埋めた後で構築された鍛冶炉の検出と複数段階間に挟み込んでいる。したがって、この曲輪はこの長期間利用状況を変えながら変遷したものとみることができ、この城館の変遷を凝縮したような曲輪である点で非常に重要である。

曲輪4は西側堀4に接する帯曲輪である。平坦地が造成されていることは明らかであるが、いつの段階で造成されたものか不明である。本来なら堀4外側に位置しているためここに土塁が構築されていてもおかしくないが、調査では検出されなかった。また、中世の遺構も認められないため全体の縄張を考えた場合、その曲輪機能が想定されにくい曲輪である。

曲輪5は西側に位置し比較的緩斜面となっており、曲輪機能を持っていないものと考えられる。これは、緩斜面に造成するような普請痕跡が皆無である点からも納得できる。特に、ここで検出した绳文時代の陥し穴群がその深さを保持しており、表土直下で検出できしたことからも、後世ほとんど人工的な造成がおこなわれていなかつた裏付けとなろう。

曲輪6は最も東側に突出する腰曲輪である。本来の地形から推測すると舌状に張り出した小規模の尾根鞍部を切り土により造り出した曲輪である。背面は堀3によって掘り切られている。

曲輪7は東端で検出した腰曲輪である。切り出された平坦面は狭小な棚状となっており、通路やその他の機能を有するものかもしれないが、調査区外へ続いているため全容不明である。

堀は全部で9条であるが、その規模は大小様々である。いずれの堀も空堀であり、切岸や土塁と複合してその防御性を高めている。

堀1は曲輪1を開む2重堀のうち内側に位置する堀である。堀は長大で深く、その防御性は非常に高い。これに付随する切岸1は曲輪1への進入をさらに困難にしている。この堀1には、東側の一部で位置をわずかにずらした掘り直しの痕跡が確認できた。これは東側曲輪3に接する地点底面の改変痕跡であり、この古い段階の堀底面を堀8とした。当然のことながら、両者は別の堀ではなく同一のものであるという認識である。この改変については曲輪3側に寄っていたものを曲輪1側へ改変した普請である。なお、曲輪3寄りに走っていた段階の堀6は、人為的に埋め戻されていたため結果的に曲輪3の平坦面がその分わずかに拡大したことになる。堀1は最終形態のまま機能停止後自然に埋没したようであり、破却の痕跡は認められない。

堀2は曲輪1南側の2重堀外堀であると同時に曲輪2および南側調査区外の曲輪にそれぞれ接する。これも比較的大長大な堀で底面レベルは堀1と大きく変わらない。この堀2も堀1同様、機能停止後自然に埋没したようであり、破却の痕跡は認められない。また、堀1と埋没過程に共通性が認められることから両者が併存したものとみられる。これは堀4も同様である。

堀3はその他の堀と異なり、尾根筋を分断する堀切の役割をするものである。調査前の現況でも凹みが確認できていたのでこれも最終段階まで開口していたものとみられる。曲輪6平坦面の背面に位置するためこの腰曲輪よりも上位にある曲輪3の防御が考えられる。

堀4は堀2と安比川に面する箇所で合流する。この堀によって曲輪2西側は防御されており、堀2と協調関係にある。両者の切り合いは認められず、同時に開削され同時に埋没したものと考えられ、

のことから曲輪2の普請も軌を一にするものと考えて間違ひなさそうである。

堀5は曲輪3を南北に2分する短い堀切である。この機能については不明であるが、人為的に埋め戻され、整地されていることから堀1の新段階には姿が見えていなかった可能性が考えられる。

堀6は先述した通り、堀1古段階の痕跡である。人為的に埋め戻されており、その埋め戻し土には廃棄焼土が多量に混入している。これは曲輪3での鍛冶炉の操業に起因する焼土である可能性が想定され、鍛冶炉のあった面を削平した際に生じた残土を利用して埋め戻されたのではないかと思われる。よって、この古段階の堀6から堀1への微妙な変化は曲輪3の削平と拡張も兼ねていた可能性が考えられる。

堀8は曲輪3東側急斜面に接して位置する最古段階の堀である。規模は小さいながらもV字形の断面を呈している。盛土整地層最下位よりも下位で検出された。遺構埋土は人為堆積であり、この部分は整地され、堅穴建物や鍛冶炉を構築するための平坦面として活用される。このことは、本来の地形であったと考えられる曲輪1からの斜面がこの堀近くまで続いている、その裾に狭小な平坦面を築いていたと思われる。したがって、堀1や広がった曲輪3は、この堀8存続時には存在していなかったと考えられる。

堀9についても堀8と同様で古段階の堀であると考えられる。規模や方向が堀8と共通していることから、谷状地形を間に挟んで両者は同一の堀であったと考えられる。この両者の間の谷状地形は堀が機能していた時期、現状より凹みが弱いかあるいはそれを補うための盛土がなされていたことも考えられる。この点については調査では判断できなかった。

土壘1は堀1外側に付随するもので、基本的に地山削り出しによって構築されている。現状で残存している箇所が限られているが、本来その機能を考えると曲輪3に沿って堀1外側に連続していた時期がある可能性が指摘できる。曲輪3で途切れている要因は、やはりこの曲輪3拡張や堀1の変更に伴って削り取られたものとみられ、その残土が堀1古段階の堀6を埋め戻し、曲輪3拡張整備される際に利用されたのではないかと推察される。

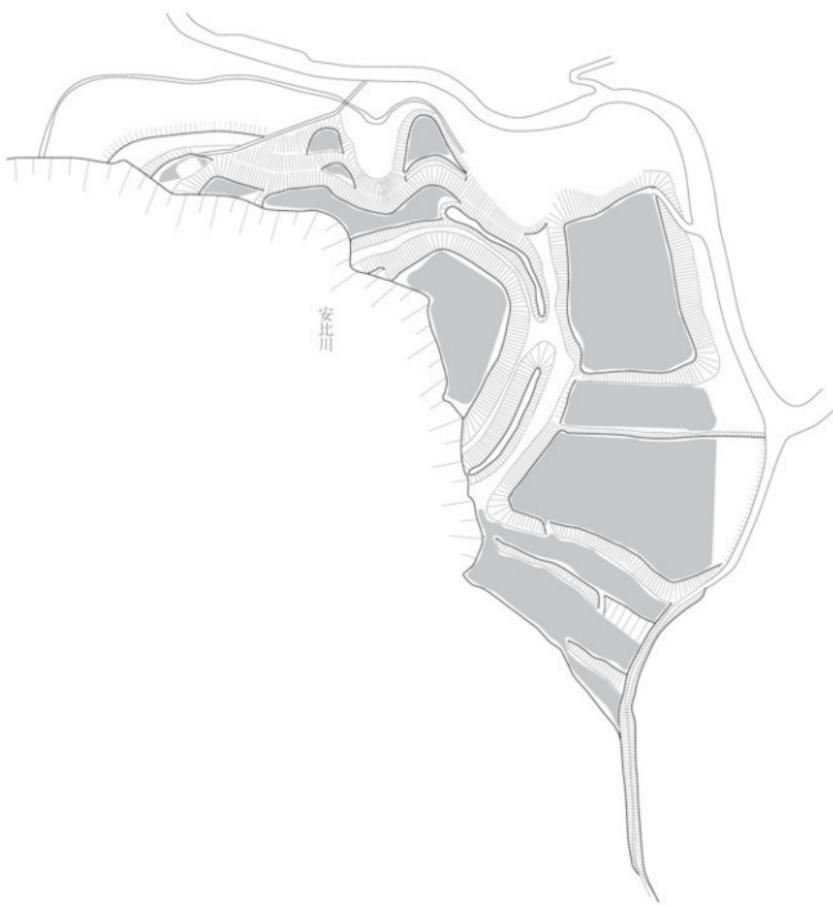
通路1～3はいずれも最終段階の普請で設置された普請遺構であり、通路1は曲輪1出入り口の虎口として活用されたものとみられる。この通路1の延長線上、曲輪1平坦面では門が想定される柱穴がみられ、冠木門のような簡素な構造を有する施設が付随すると思われる。

## (2) 作事遺構

今回の調査で検出した作事遺構は曲輪1、曲輪3で検出した掘立柱建物や堅穴建物を中心である。掘立柱建物は全部で22棟が想定され、それらは曲輪1の中央北側に14棟、東側縁辺部に8棟、曲輪3に2棟配置されている。曲輪1北側の14棟はおもに東西棟が中心となる建物群（以下、西掘立柱建物群とする）で、すべて一箇所に集中してみられる。いずれも平面長方形で梁間不明の物以外はすべて梁間1間の建物である。桁行は2～4間で多少異なるが、それぞれほぼ同一規模を有している。14棟のほとんどが、推定される平面プランが重なる位置にあり、例え重ならない建物同士でも非常に接近している。一部建て替えであると推測される複数棟もあり、この狭いエリア内で変遷すると見込まれる。同様に曲輪1東側縁辺部の8棟（以下、東掘立柱建物群とする）も狭い範囲内で近接・重複が著しく、かなりの変遷が見込まれる。両エリアでみられる掘立柱建物群の規模や形態等の特徴は、それ各自若干異なっており、東掘立柱建物群の軸方向はおよそ同一方向であるのに対して、西掘立柱建物群については比較的变化が認められる。また、西掘立柱建物群はいずれの掘立柱建物も堅穴建物と重複しており、堅穴建物を切って建てられていると考えられる。曲輪3に位置する2棟は曲輪南側平坦面を大



第10B図 調査前の想定縄張図



第109図 調査前の想定縦張図（不動館域）

きく占める規模である。これら2棟は同一軸方向、同一規模である。2棟とも曲輪3拡張以降のものであると考えられる。

堅穴建物は今回調査で20棟検出した。そのうち曲輪1に17棟、曲輪3に3棟という配置である。曲輪1の堅穴建物はすべて方形を基調とするが、大小様々な規模がみられ、張り出し施設の有無によって形態差が認められる。堅穴建物群は曲輪中央の空白域を境に東(以下、東堅穴建物群とする)と北(以下、西堅穴建物群とする)に分かれている。これら群中で多数の堅穴建物が重複しながら存在しており、長期間同一地点で営まれていたようである。これらを概観すると曲輪1の外形線に沿うような方向で建てられている。しかし、現況における曲輪外形線よりも外方へ続く堅穴建物も東群で多数みられるためまた、南北の群を分かつ空白域の存在は、建物以外の用地として活用されていたことを物語っている。一方、曲輪3で検出した堅穴建物は3棟である。これらはいずれも平面方形のものであると考えられる。曲輪3最終段階である拡張期の整地層よりも下層で検出され、さらに最古段階の堀8が埋められた上位で検出される。よって、曲輪3を中心とする東側中腹エリアの中間段階の遺構であることは間違いない。

溝は曲輪1東側縁辺部にある溝1が注目される。この遺構は細い溝であるが、その内部には多数の凹凸が確認でき、その配置から柵のような施設であると想定した。これは、曲輪1東側のみ柵が設置され、東側からの外敵の侵入の備えや外観を重視した結果であると考えられる。また、曲輪縁辺を縁取るように設置されていることから、この曲輪の平面形態に変更されて以降設置されたことがわかる。それと同時に、この曲輪の平面形態が、近世以降外方への崩落もなく最終形態を留めていると言及できる。さらに、この柵は、曲輪1最終段階において、東側から攻撃してくる敵を想定して設置されたと考えられる点で非常に重要である。

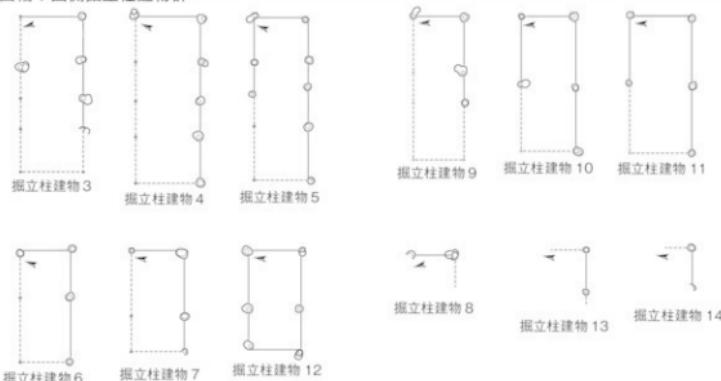
最後に、曲輪1・3では、焼土が検出されている。唯一焼土の性格が判明したのは曲輪3の鍛冶炉としたものである。堀8から曲輪3拡張期に至るまでの間のある段階で鍛冶作業がおこなわれていたことが判明した。曲輪1にも焼土がみられるが、鍛造剥片がみられないためその性格は不明であるが、曲輪1では多量の鉄製品や不明鑄造鉄片、複数が融着した鉄釘、鋳型などが出土しているため鑄造に関する焼土が含まれている可能性が考えられる。

以上、作事遺構は普請遺構よりもその変遷が複雑であり、この城館の様々な顔をのぞかせている。

### (3) 陶 磁 器

今回の調査で出土した陶磁器は、少ないながらも中世を通じて多種多様なものがみられる。磁器類は中国産とみられる青磁・白磁が出土しており、城館の時代やこの城館を築いた階層を考える材料である。これは、陶器類に関しても同様のことが言え、日本各地の産地からこの城館に持ち込まれたものである。中国産磁器は鎌倉・室町・戦国時代など鎌倉期のものが出土している。どちらも13世紀を中心時期とするものである。優品であるため伝世する可能性もあるが、碗であるためそれほど長期間伝世するものではないと思われる。これらを手にすることができる階層は、最低でも小地域支配者層であると考えられる。ほかにも青磁碗が出土しているが、16世紀を前後する時期のものであると考えられ、中国産磁器だけでもその帰属年代は長期である。一方、国産陶器は日常的に用いられる雑器を中心に出土している。古いものでは、古瀬戸鉄釉合子蓋と古瀬戸卸皿が出土している。合子蓋は雑器ではなく、非日常の製品で優品である。時期は14世紀のものである可能性が高く、これも一定の階層以上の人間が手にしていたものとみられる。他には詳細な時期を特定できない常滑焼や珠洲系擂鉢等がみられる。また、大窯前半期の瀬戸・美濃産陶器も皿、椀、小天目が出土しており、15世紀後半

## 曲輪1 西側掘立柱建物群



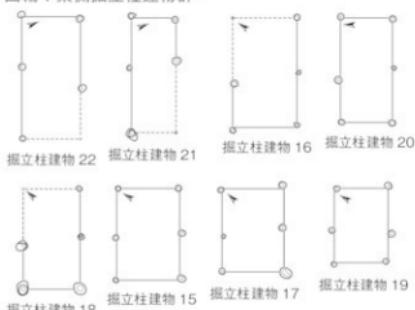
同一規模

|                     |          |         |
|---------------------|----------|---------|
| 掘立柱建物 3             | 掘立柱建物 4  | 掘立柱建物 5 |
| 掘立柱建物 10            | 掘立柱建物 11 |         |
| 掘立柱建物 7    掘立柱建物 12 |          |         |

同一軸角

|                    |          |          |
|--------------------|----------|----------|
| 掘立柱建物 7            | 掘立柱建物 9  | 掘立柱建物 10 |
| 掘立柱建物 11           | 掘立柱建物 12 | 掘立柱建物 13 |
| 掘立柱建物 14           |          |          |
| 掘立柱建物 4    掘立柱建物 5 |          | 掘立柱建物 6  |
| 掘立柱建物 3    掘立柱建物 8 |          |          |

## 曲輪1 東側掘立柱建物群



第110図 掘立柱建物集成

曲輪 1 壁穴建物



第111図 壁穴建物集成

～16世紀前半のものである。これら出土した陶磁器の時期は中世前半から後半にかけて認められ、特にこれらの集中する帰属時期は中世前半13～14世紀、中世後半15世紀後半～16世紀後半の2時期である。また、これら陶磁器を概観した場合、中世前半のものに優品が多く、後半に雑器が多い傾向にある。このことは、中世陶磁器のあり方を考えた時、列島全体で流通する陶磁器の優、雑の別が時代によつて変化することに一要因を求めることができ、一般的に流通する量の増加が、質の低下を招き、幅広い階層にまで及ぶ傾向を指向する。ただし、この流通傾向を差し引いたとしても中世前半段階において優品を手にすることができる階層は、その流通を掌握あるいはそのシステムに何らかの形で関与している可能性が高く、その階層を浮き彫りにしているものと思われる。この推測から不動館に関わった人々のうち、少なくとも中世前半段階には有力な階層の存在が見え隠れしている。

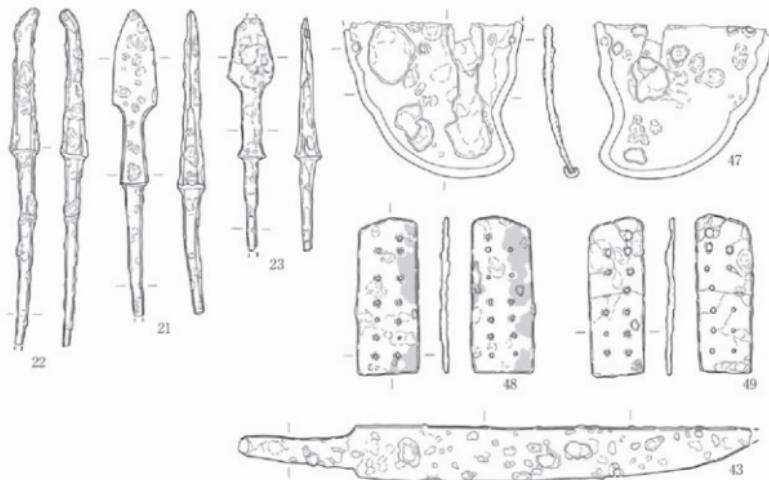
#### (4) 金属製品

今回の調査で出土した鉄製品は非常に多く、その内容も多種多様である。出土金属製品の種類を大別すると、武器・武具類、仏事関連品、農工具類、建築用品類、日用品類となる。

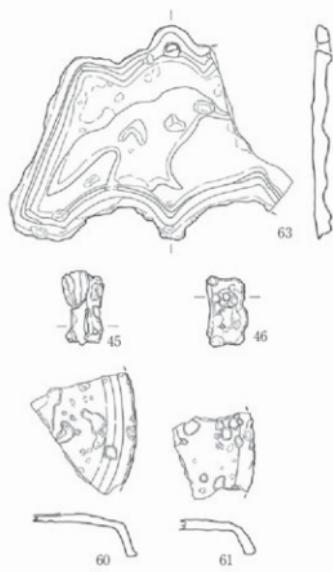
武器・武具類の出土は、これらから連想される戦のための城館であるとすればその具体像に迫る遺物である。しかし、この場での戦闘を示すことに限った見方は適当ではない。特に、これらは中世後半のものが含まれておらず、なおかつ破損品が目立っている。帰属時期については、陶磁器ほど詳細

| 時代 |       | 平安時代   |       |        | 鎌倉時代 |       | 南北朝時代 |      | 戦国時代  |  |
|----|-------|--------|-------|--------|------|-------|-------|------|-------|--|
|    | 時期    | 10c    | 11c   | 12c    | 13c  | 14c   | 15c   | 16c  |       |  |
| 陶器 | 古瀬戸   | 鉢皿     |       |        |      |       | □■□   |      |       |  |
|    |       | 蓋      |       |        |      |       | □■□   |      |       |  |
|    | 珠洲系   | 擂鉢     |       |        |      | □■□   | ■□    |      |       |  |
|    |       | 大窯灰釉皿  |       |        |      |       |       |      | □■□■□ |  |
|    | 瀬戸・美濃 | 大窯小天目  |       |        |      |       |       | □■□  | ■□    |  |
|    |       | 大窯灰釉碗  |       |        |      |       |       | □□□  | □□□   |  |
| 磁器 | 常滑    | 甕      |       |        |      |       | □□□□  | □□□□ | □□□□  |  |
|    |       | 青磁     | 鎌蓮弁文碗 |        |      | □■■□  |       |      |       |  |
|    |       | 碗      |       |        |      |       |       |      | □□□□  |  |
| 武器 | 白磁    | X類碗    |       |        |      | □■■□  |       |      |       |  |
|    |       | 鐵鎌     |       |        | □□   | ■■■■■ | ■■■■■ | □□   |       |  |
| 武具 |       | 杏葉     |       |        | □□   | ■■■■  | ■■■■  |      |       |  |
|    |       | 小札(48) |       |        | ■■■■ | ■■■■  | □□□   |      |       |  |
|    |       | 小札(49) |       |        |      | □■■■■ | ■■■■■ |      |       |  |
| 仏具 | 鐵鋸    | □□□□   |       |        |      |       |       |      |       |  |
|    | 鐵磬    |        |       |        | □■□  |       |       |      |       |  |
|    | 經筒蓋   |        |       | □□□□□□ |      |       |       |      |       |  |

第112図 出土遺物の時期



第113図 武器・武具集成



第114図 仏具集成

な時期を特定することは難しいが、鐵鎌1点が中世でもかなり古い時期のものである可能性が指摘でき、総じて鐵鎌類は鎌倉期を中心とするものであると考えられた。破損品については、先端部が欠損しているものが多く、中には実際に発射された結果、折れ曲がった可能性が考えられるものも含まれております。破損品を中心に集められたとみることもできる。鍛冶等がおこなわれていることが遺構から明らかになつたが、検出した鍛冶炉は、1次的な生産・加工を主とするのではなく、ここに破損品を集めしその修繕あるいは2次的な加工を施すための施設である可能性がより高い。武具についても、出土した2点の小札はいずれも漆の塗布と威痕跡から実際に鎧として仕立て上げられた経歴を有するものである。また、杏葉は徒步侍用ながらも金銅製覆輪であり、馬上の御家人に付き従う近習の郎党の所有するものであったと推測される。小札1点と杏葉は、同一の遺構から出土しており、共伴関係にある。製作時期は鎌倉期とみて相違ないため、鐵鎌類の時期とも重なる。残り1点の小札は、それよりもやや新しい可能性があるが、不動館出土の鐵製武器・武具類は13~

14世紀に集約されることになり、出土陶磁器との関連では古い方の一群と同じような時期である。

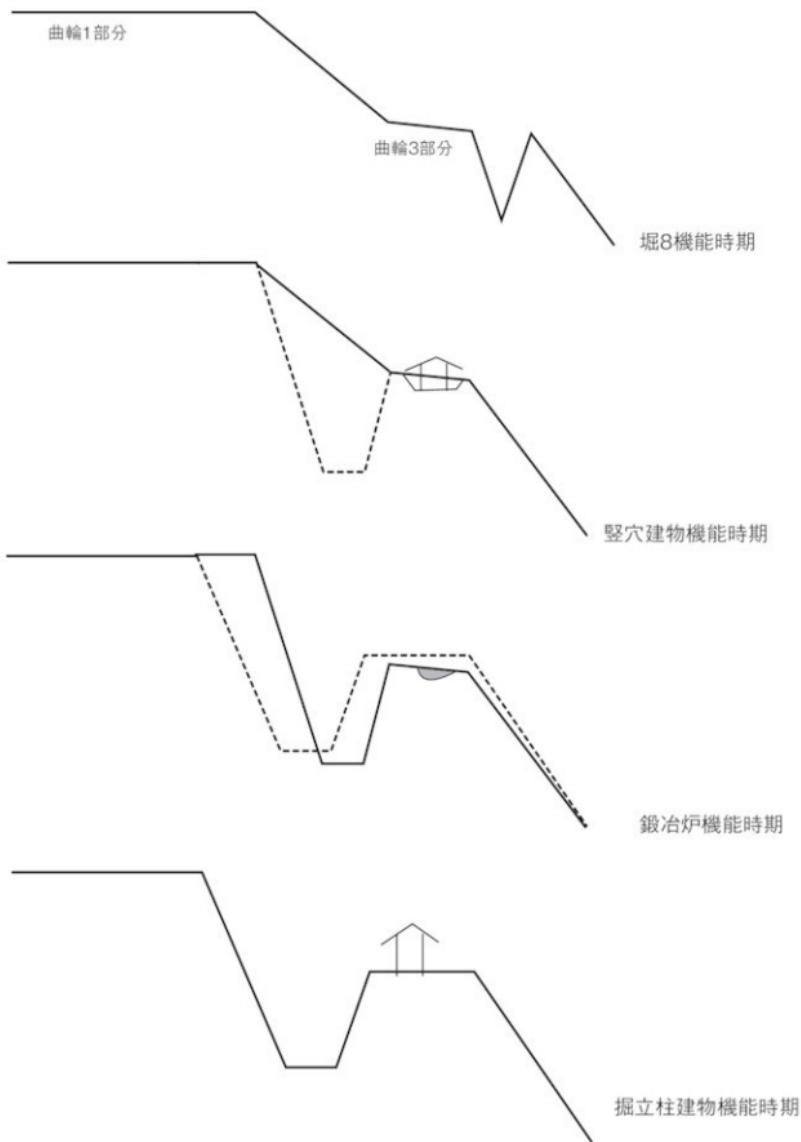
仏事関連の鉄製品として、鉄磬、鉄鐸、経筒蓋が出土した。鉄磬はおよそ半分の残存であり、その形態的特徴から12世紀後半～13世紀初頭のものであると推測される。土坑からの出土であり、出土理由については不明である。ただし、鉄磬の観察から未成品である可能性があるため、現段階では鋳潰す鉄素材として持ち込まれたものであると考えられる。鉄鐸は中世より遡る古代の遺物であると考えられ、これについても鉄磬と同様の理由で中世に持ち込まれた可能性が高い。経筒蓋は2個体分あり、これだけで詳細な時期を特定することは困難であるが、やはり古代末～中世前半のものであると考えられる。出土理由もその他のものと同様である可能性が考えられる。以上、仏事関連のものは、古代～中世前半に集約され、その時間幅が武器・武具類よりも長い。

その他の出土鉄製品に関する特記事項として挙げられるのは、出土した鉄製品の大半が曲輪1より出土すること、溶融・結合した鉄釘が出土したことである。この事象は、いずれも铸造に与する鉄製品の存在を示す証左となり、調査で铸造を示す遺構が不明確であったが、铸造型片の出土と併せて不動館において、ある時期に铸造がおこなわれたことを示している点で重要である。

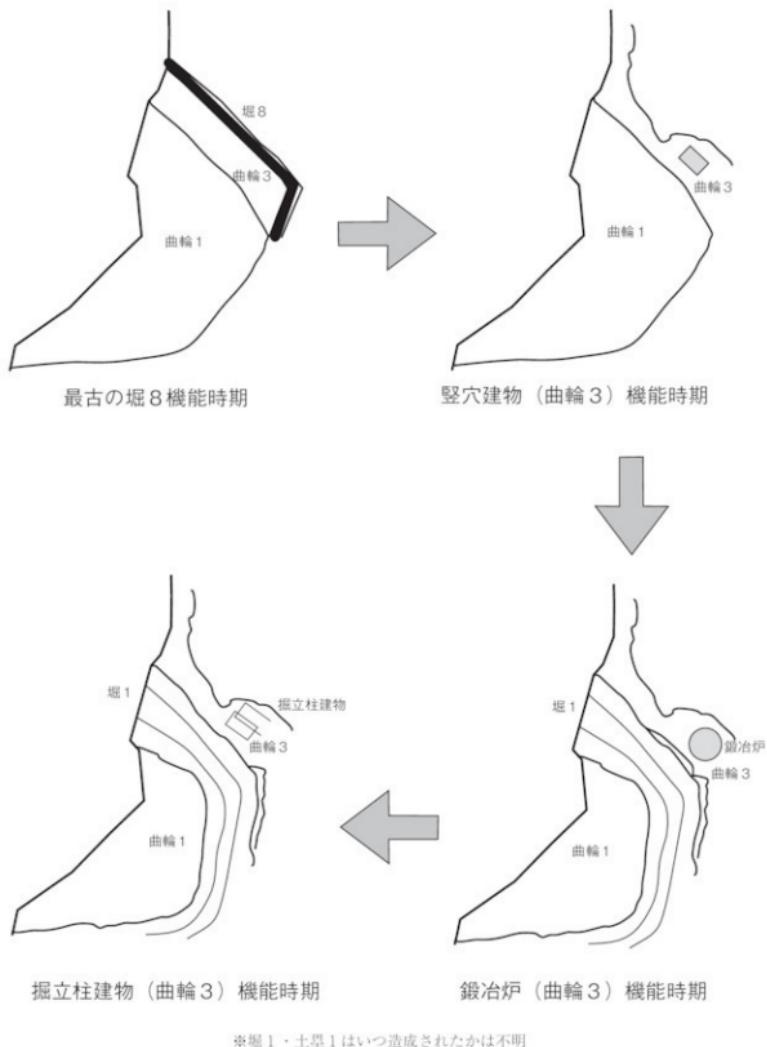
## 2 不動館の変遷と機能

### (1) 遺構の変遷

普請遺構の変遷過程は、堀・曲輪を中心に改変が認められる。もっとも大きく改変されるのは、曲輪3である。この曲輪については先にも述べたとおり、重層構造となっているためその変遷がもっとも細分可能である。また、この曲輪3の改変は、城館東側の諸施設の改変と連動しているものと考えられ、普請の変遷を考える基準となり得る。曲輪3を含む東側中腹のエリアでは、もっとも下層で検出した堀8・9が最古の普請痕跡であることが確認できており、これらは自然地形を半ば無視するかのように直線的なものである。平坦面は付随しないか、あるいは堀に沿って狭小な平面帯状、立面棚状のものが付随したのかもしれない。しかし、調査での痕跡は認められず、仮に存在していたとしてもその後の改変で失われている可能性が高い。この堀の規模はその他の堀よりも小規模であるが、掘り込み面および両側立ち上がり壁面上部が、次段階以降の平坦面造成によって失われた可能性が考えられる。また、谷側には堀に付隨する土壘があった可能性もあるが、これも同様に失われている可能性が高い。この堀は、その後完全に埋め戻されており、埋め戻された後に堀上面を含めた平坦面が築かれ、そこに堅穴建物が配置されるようである。この堅穴建物はその後人為的に埋め戻され、その埋め戻し土の上面に鍛冶炉が構築されており、その焼土面が遺構として検出できた。この鍛冶炉上面は整地盛土で覆われており、さらなる曲輪平坦面の造成土下に隠されることとなる。この造成盛土上面では、掘立柱建物を検出しているため、曲輪3の最終段階は掘立柱建物が建つ景觀となる。曲輪3はその変遷とともに西側曲輪1の方へ広がっていく傾向が看取され、掘立柱建物の段階で最大の拡張がなされたものと考えられる。以上のように、曲輪3の重層構造は最古段階から順に、堀8・9機能時期→堅穴建物機能時期→鍛冶炉機能時期→掘立柱建物機能時期となり、その形態は時間経過とともに大きく変容する。この変遷過程によって近接する普請遺構も連動して変遷していると考えられ、以下の遺構が連動する可能性が高い。それら遺構は、曲輪3東側に位置する曲輪1、曲輪1と曲輪3の間を縫うように走る堀1、曲輪3南側に残存する土壘1である。曲輪1は北側および東側縁辺部横列の区画より外方へ堅穴建物等の作事遺構が続いていることから、ある時期までは北側および東側へ平坦面が続いていたものとみられる。また、堀1は東側で古段階の底面および東側立ち上がりが確認で



第115図 曲輪1・3束側断面概念図



第116図 不動館東側変遷図

きた。これを堀6としたが、堀1と同一の遺構である。この堀6は埋め戻しによって新段階の堀1へと改変されており、より西側つまり曲輪1側へと移っている。曲輪1および堀8から堀1への改変は、総合的にみて曲輪3の西側への拡張を意図していると考えられ、それによって堀は西側へ移行し、曲輪1は東側平坦面が大幅に切り取られ、現況の姿になる。この改変によって帶曲輪である曲輪3の平坦面は東側斜面部から東側堀1までの面積を確保することとなる。そこで、ある疑問点が浮上する。それは、土壘1が果たしてどのような影響を受けたのかという点である。現況での土壘1は曲輪3へいくらか食い込むような形である。しかし、この地山削り出しの高まりは、本来の意味を考えれば、堀に連続付随してその深さを補う役割のはずである。したがって、土壘構築時には曲輪3の西側縁辺に沿うようなものであった可能性が考えられ、曲輪3拡張および堀6から堀1への改変によって削平されたとみることができる。これまで述べたように、これら一連の改変が結果として曲輪3の拡張を目的とするものであると考えるならば、より広い平坦面を確保する普請にとって土壘の高まりが続いている存在していると、その効果が期待できない。特に、堀6を埋め戻す土の確保として効率的なのはその傍らにある地山の高まりを利用しない手はない。それによって、曲輪3の平坦面拡張に都合が良い普請行為と言えよう。現況の土壘1にみられる曲輪3での中途半端な途切れ方は、このような改変工事がおこなわれた結果であると推察される。それほどまでに、城館最終段階では曲輪3の平坦面拡張整備が重要であったのだろう。

作事遺構の変遷については不明な部分が多いが、遺構変遷過程の中で確実視されるのは、曲輪1東側縁辺にみられる溝2が、曲輪1最終形に付随する遺構であるということである。すなわち、内堀である堀1が最終的な形態となり、曲輪1およびその眼下に位置する曲輪3の平面形態が整った段階である。掘立柱建物のうち $1 \times 4$ 間の類似規模のものは、掘立柱建物3・4・5の3棟である。軸方向も似たものが多く、同一地点にあることから同じ機能を有する建物の建て替えの結果であると考えられる。これらは比較的整然とした柱配置を採用しており、柱穴の掘り込みも深くしっかりとしていることから、建物群の中では古い一群であると推定され、柱穴も他のものに切られている結果の通りである。これら $1 \times 4$ 間建物は曲輪1東側縁辺部が縮小される以前のものであると推定したい。また、曲輪1に所在する堅穴建物は、埋め戻されている可能性が高いものが含まれることから古い段階の堅穴建物が含まれる可能性を示唆している。

## (2) 遺構の機能

先述した通り、検出した遺構には変遷過程がみられ、これら遺構の機能から分析する。まず、普請遺構については、曲輪1および曲輪3のあり方が注目される。曲輪1は、当初から平坦面として存在したかどうかは不明であるが、少なくとも平坦面を有してから以降は、堅穴建物中心から掘立柱建物中心へと変遷すると考えられるが、両者の機能変化まで言及できないのが現状である。しかし、堅穴建物が出土遺物や埋土に含まれる不純物等から、より工房的な性格を有していたと想定される。一方で、掘立柱建物は倉庫的な性格を想定したが、これは断定できる状況ではない。なお、両建物構造とともに居住に与する可能性は十分に考えられる。しかし、出土遺物に占める生活用の雑器が極めて少ないことから長期日常生活を営む空間であったとは考えられない。また、鍛冶および鋳造等の作業がおこなわれたものと考えられる。曲輪3平坦面の最終整備以前には、少なくとも鍛冶工房としての機能を有していたはずである。曲輪1での工房活動は不明確であるが、鍛冶あるいは鋳造(遺構は検出されていない)工房としての機能を有する段階は、やはり最終整備以前であると考えられる。これは、埋め戻された堅穴建物埋土に作業に起因する遺物が多く含まれていることからも推定できる。した

がって、不動館の古い段階は鍛冶あるいは鋳造等の鉄製品の加工作業がおこなわれ、中世後期の城館として機能がより具体化されると、何らかの攻防に備える機能へと変化していったと考えられる。この時間的なスパンについては以後検証を進めたい。

### (3) 不動館の画期

不動館の遺構には、時期的な変遷過程があり、その遺構や場の機能も異なっていることが判明した。では、この結果から導き出せる不動館の画期について述べる。時期の推定には、遺構の変遷と出土遺物の時期を参考にするが、これらが絶対的な関係性を持ってみられるわけではないため、あくまでも画期は、今回の調査結果をもとに推測に推測を重ねるようなものであることを断つておく。

不動館が成立する鎌倉期（13～14世紀頃）を初期段階、鍛冶工房がみられる南北朝期（14～15世紀前半頃）を中期段階、大規模な普請がなされ機能を停止するまでの戦国期（15世紀後半～16世紀前半頃）を終末期段階と設定することができる。

## 3 不動館の歴史的背景

前節において不動館の変遷とその画期について明らかにしたが、ここではこの結果がどのような歴史的背景によって生じるのか私見を交えながら大まかな段階順に述べてみたい。

### (1) 初期段階

不動館初期段階は鎌倉期（13～14世紀頃）である。周辺地域の様子は文献等からも不明な点が多いが、全国的にみて鎌倉幕府の支配によって配された地頭が所領を管理していたようである。不動館が所在する浄法寺を含む二戸地域は北奥最大の所領である糠部の領内である。この糠部は鎌倉時代後期には鎌倉幕府執権の北条氏の治めるところであったが、実際の支配は元々鎌倉御家人であった南部氏が代官としておこなっていたようである。『奥南指録』によると、1219（承久元）年に南部氏の祖である南部光行が鎌倉から糠部の地へ赴いているとあるが、これは定かではない。三戸への入部は時期不明ながら三戸南部氏2代目実光、3代目時実の頃（13世紀後半）には、地頭代職としてこの地域の本格的な支配を開始していると考えられ、当然13世紀後半には不動館も南部氏の支配下にあるものと考えられる。これを証明する鍵となるものが、不動館の約2km北にある天台寺の遺品の中に認められる。天台寺は、少なくとも11世紀には存在していたと考えられており、南部氏の支配以前からこの地にある古刹である。寺に伝世する太鼓の胴内面に、皮の張り替えや修理に際して書き残された多数の墨書が発見されており、判明する年号のうち古いものは、南朝最後の元号である「元中9（1392）年」である。製作時の銘文は消えており不明であるが、当然先の元中9（1392）年以前である。元中9年の銘には、「阿闍梨道尊」という字句がみられ、この頃の道尊という僧侶の存在が明らかとなった。ほかに、銅鐘にも「元中9年」銘があり、やはり「道尊」という名前があり、その名が一致する。ここで重要なのは、「大旦那源守行」の名前もあることである。源守行とは、おそらく甲斐源氏をルーツに持つ南部守行のことであるとみて間違いない。この銅鐘銘は後世に書かれたものであるが、太鼓銘の年号と道尊という名の符号からも大きな間違いはないものと考えられる。すなわち、元中年間である14世紀末頃、三戸南部氏の第13代当主である南部守行が天台寺大旦那であったということを示しており、天台寺を含む浄法寺は三戸南部氏が所領として直接的に支配していた可能性が高い。

南部氏は岩手郡から外ヶ浜まで実質勢力を握っていたが、その内容については不明な点が多い。し

かし、不動館の対岸に位置する淨法寺城は少なくとも14世紀の遺物がみられるようなので、この頃には淨法寺城が地域支配の一拠点となっていたものと考えられ、当然のことながらこの支配には南部氏が関与したと思われる。

### (2) 中期段階

不動館中期段階はおおむね南北朝期(14~15世紀前半頃)と想定した。この頃の地域情勢としてもっとも重要なものは、1432(永享4)年、南部氏が安東氏を攻める事件が勃発している。当時の中央政権である室町幕府は和睦を勧めるものの南部氏は軍事行動を貫き、勢力拡大を図っている。これはその後の安東氏の大きな撤退を考えれば、かなり大規模な軍事行動であるとみられ。郷部地域全体を挙げてのものであったと推測される。

この頃の不動館は、前段階で堀を有する単郭式で簡易な形態の館であったものが、堀が埋められ、整地された上に堅穴建物が営まれ、さらにそれらを埋め戻した後に鍛冶炉が構築されていると考えた。この時期については出土遺物による手掛かりが少なく詳細な時期を特定できないが、曲輪3の前身平坦地では鍛冶工房が展開されていた時期を想定した。このことは、上記の南部氏による安東氏攻めに際し、最前線へ軍事物資を送るための鉄製武器・武具類の加工工房が展開したのかもしれない。

### (3) 終末期段階

この終末期段階は15世紀後半~16世紀前半頃に該当し、戦国期を中心とする時期である。この頃には、全国各地で戦乱が起こり、「下克上」や「群雄割拠」と評される時代となる。不動館周辺では、大きな争乱はないもののそれに繋がるような小地域での小競り合いはあったものと考えられ、この地域でも大小の中世城館が整備され拡充される時期である。不動館も例に漏れず、大規模な切土や盛土等によって造成され、複数の曲輪と2重の堀が整備される。これにより不動館は戦国期の典型的な城館の姿へと変わる。当時の地域情勢の詳細は読み取れないが、奥羽を結ぶ街道筋を意識した立地であるため前身のものを大幅に造り替えることによってより防御性を高め、戦時に備えたものであると考えられよう。しかし、戦時に与した様子は発掘調査では確認できず、また、その後おこなわれる豊臣勢による九戸攻めの段階の遺物が確認できないため、現段階ではこのような情勢に直接左右されることがなかったものとみるべきである。また、奥州仕置き後の破却についても免れた可能性が高い。これは、普請造構の良好な残存状況が物語っている。

## 4 結語

これまで述べた通り、不動館跡は中世を通じて機能・形態が変遷した特異な城館であることが明らかになり、不動館には初段階とした鎌倉期、中段階とした鎌倉~南北朝期、終末期段階の戦国期と各時期によりその姿形や機能が変化することが考えられ、これは不動館を含めこの地域の歴史的な情勢に大きく関わっている可能性を指摘した。このような城館の時期的変容が看取できる例は数少なく、中世北日本の城館史を考えるうえで貴重な調査事例となったものと考えている。

日本の歴史上、重要な転機となった平泉藤原氏が滅亡する文治5(1189)年は、日本の古代から中世を有機的に繋ぐ瞬間である。近年その時代の研究成果はめざましいものがある。しかし、その後鎌倉御家人によって北奥の支配がなされる段階の様相については資料が増えつつあるが、未だ判然としない状況である。ちょうどその頃、不動館は単郭の簡素な城館として成立しており、これまで漠然と

考えられてきた北奥鎌倉期城館のイメージを変えるような調査成果である。これまでの発掘調査事例で鎌倉期に成立する北奥の館は交通利便な平地に方形の区画で囲まれた内部に建物を配し、地域支配の拠点として機能したと考えられており、不動館のような立地の館はそれよりも後出する形態の館であるとみられてきた。しかし、今回の調査成果では、堀を持ち自然地形を利用した台地・丘陵に立地する館が存在するという結果が得られた。調査中はこの成立時期に疑心を抱いていたが、中身を整理していくうちに半ば確信めたものが芽生え、本章で示した検証結果を提示するに至った。また、この城館成立には在地領主である浄法寺氏が密接に関わっているものと考えられる。これは対岸に位置する浄法寺の町、そして浄法寺城の存在を考えると、これと敵対あるいは希薄な関係性を考えるという理屈はない。浄法寺城は出土遺物から14世紀には機能している可能性が考えられ、不動館成立頃には存在しているものとみられる。この頃の浄法寺氏の動きは不鮮明であるが、氏がこの地を掌握していたのであれば、不動館においても直接関与している可能性が高い。さらに、不動館が鎌倉期に機能しており、その時期の優品を持ち合わせていたことから鎌倉御家人に通じるクラスの人間が深く関わっているものと推測される。浄法寺氏の出自については鎌倉御家人畠山氏が祖であるという伝承があるが、今回の不動館の調査成果を考えると、あながち虚構として排除するわけにもいかないのではないかと感じる。

鎌倉期より当地方糧部は南部氏が実質領有・管理していたものとみられている。したがって、不動館周辺の情勢は南部氏の動きと連動するものと考えられる。

不動館は、最終的にこの地域に乱立するする戦国期の城館の一つへと姿を変える。これは16世紀前半頃であると考えられる。不動館はこの段階で三郭式の構造になると思われるが、この時近接する城館である館II遺跡や通称陣場館も整備され、これらを含めた連郭構成となり、城域が拡大するものとみられる。不動館跡検出の掘立柱建物はこの時期の初産であると推測され、もっとも防御に備えた体を成す。また、近在する吉田館との連携も計られたものとみて間違いないが、吉田館の成立は16世紀であるため現時点の評価では不動館より後出する。これは、在地支配構造にいくらか変化があった結果なのかもしれない。吉田氏は浄法寺氏の家臣團の一氏族であるが、浄法寺氏の本拠よりみて安比川の対岸の一定地域の支配を吉田氏が担っていたのかもしれない。そして、平時の居館として吉田館を成立させ小地域の支配拠点とし、戦時の備えとして不動館を再整備、その他周辺城館を整備した可能性が考えられる。しかし、少なくとも戦国時代末期の様子が読み取れないため、九戸の乱等の攻勢に直接関与するものではなかったものと推測される。これは、不動館での破却痕跡が看取されないことからも窺える。したがって、推測の域は脱しないが、16世紀前半頃に不動館は吉田氏の手によって小地域の紛争等に備える城館として再整備されたものとみられ、その後戦国末期にはひっそりと機能を停止したものと想像される。これは、吉田館が近世に掘立柱建物で構成される屋敷地へと変貌するのと対照的である。

最後に、今回不動館跡の調査では縄文時代の遺構や遺物がみられた。縄文時代の遺構は、貯蔵穴と思われる土坑1基、陥穴20基を検出した。これらの所属時期は不明であり、詳細を述べることができないが、周辺遺跡の調査でも検出されており、周辺の台地は縄文時代のある時期には狩猟域として活用されていたものと思われる。また、調査区東側の斜面部には縄文時代の遺物包含層がみられ、主体となる時期は晩期である。竪穴住居等は検出されなかつたが、周辺に縄文時代晩期の集落が存在していたものと考えられる。これら集落に関する遺構は、その後の城館整備に伴う普請によって消失した可能性も考えられるが、包含層分布域周辺に適地がみられないため今回の調査範囲より外側のどこかに位置していたという可能性の方が高い。

## 引用・参考文献

- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書 -
- 2006 「館II遺跡」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第497集
  - 2008 「古田館遺跡」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第520集
  - 2008 「桂平I遺跡」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第538集
  - 吉田 欽 2012 「中世城館の成立」『中世やまがたの城館』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
  - 室野秀文 2006 「城館の発生とその機能 - 安倍氏、清原氏、奥州藤原氏の城館と系譜」『鎌倉時代の考古学』高志書院
  - 広瀬和雄 2006 「領主居館の成立と展開 - 西日本を中心として - 」『鎌倉時代の考古学』高志書院
  - 中澤克昭 2006 「居館と武士の職能 - 出土鉄鏃と狩獵をめぐって - 」『鎌倉時代の考古学』高志書院
  - 広瀬都賀 1943 「日本銅器の研究」清閑舎
  - 久山 埼 1964 「鳥津忠久の甲冑について」『甲冑武具研究第5・6合併号』
  - 細井 計一 1997 「浄法寺町史(上巻)」
  - 大矢邦宣 1995 「天台寺の太鼓」「図説 岩手県の歴史」

# 写 真 図 版





写真図版 1 遺跡遠景



写真図版2 航空写真調査前現況



写真図版3 航空写真調査終了時



写真図版4 曲輪1全景



東側全景



全景（北東から）



調査前現況（東から）



完掘全景（南から）



北側全景 (南から)



下部断面 (東から)



西侧全景（南西から）



西侧全景（南西から）



現況（西から）



全景（北から）



現況（東から）



全景（西から）



西側現況（東から）



西側全景（東から）



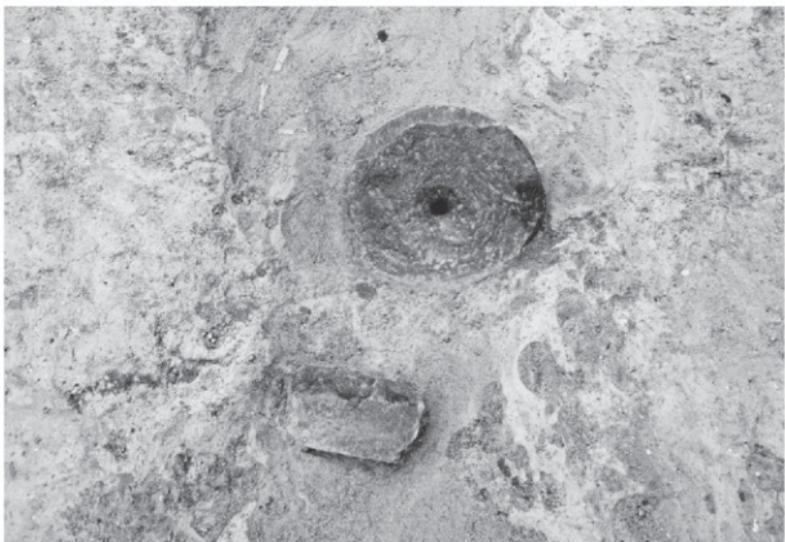
南側現状（西から）



南側全景（南から）



東側全景 (南から)



東側遺物出土状況 (南から)



西側断面（東から）



西側底面断面（東から）



東側断面（北から）



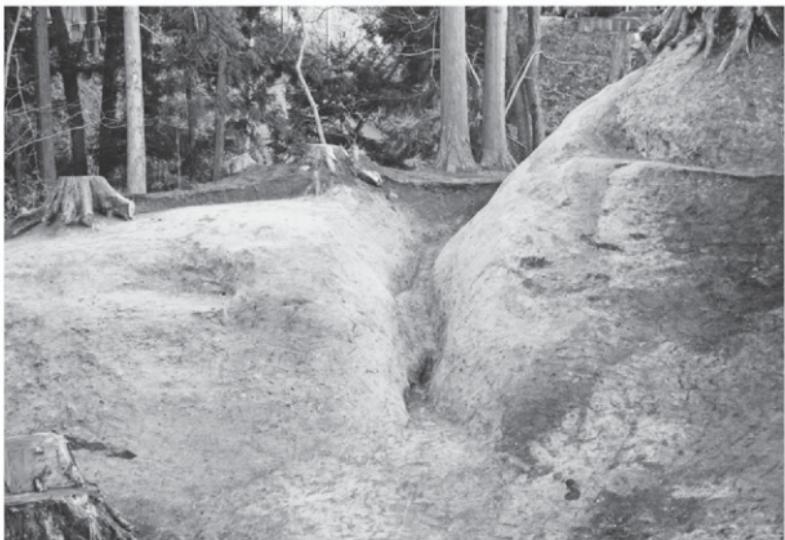
東側底面断面（東から）



全景（東から）



断面（西から）



全景（北から）



断面（北から）



全景（北から）



断面（北から）



堀2との合流地点 (北から)



堀2との合流地点断面 (南から)



全景 (南から)



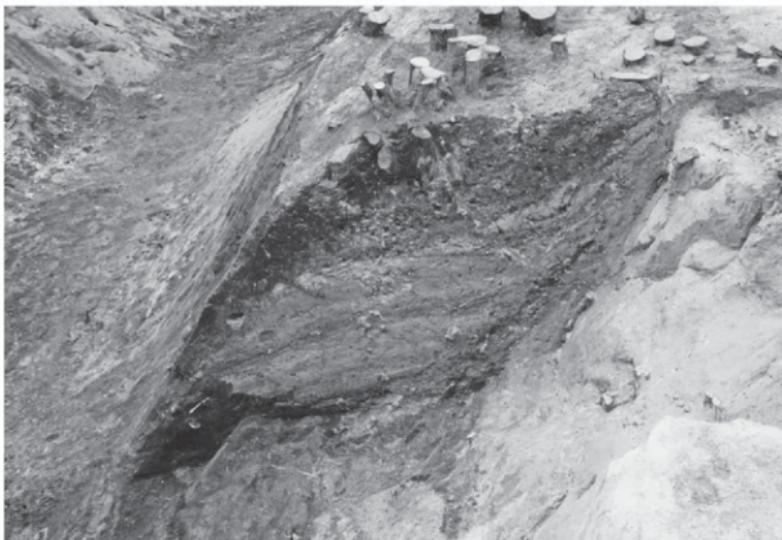
断面 (南から)



全景（西から）



全景（西から）



上部断面（東から）



下部断面（東から）



全景（東から）



断面（東から）



全景（東から）



断面（東から）



全景（西から）



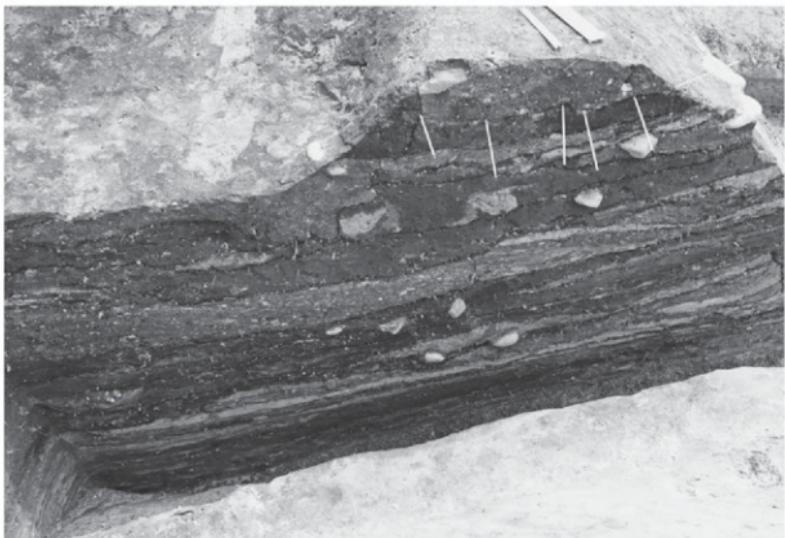
断面（東から）



現況（北から）



全景（北から）



断面（北から）



断面（北から）



検出（東から）



断面（北東から）

写真図版28 切岸1



全景（東から）



付属溝断面（西から）



全景（東から）



断面（南西から）



全景（南から）



断面（南から）



完掘（西から）



東西ベルト 断面（北から）



東西ベルト 断面（北から）



南北ベルト 断面（東から）



南北ベルト 断面（東から）

#### 写真図版32 穹穴建物 1



完掘（南から）



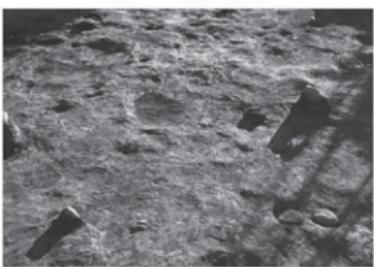
東西ベルト 断面（南から）



東西ベルト 断面（南から）



南北ベルト 断面（東から）



地床炉 棲出（北西から）

写真図版33 穹穴建物2



貼床 断ち割り（北から）



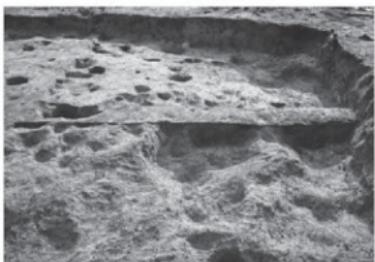
南北ベルト 断面（東から）



南北ベルト 断面（東から）



東西ベルト 断面（北から）



完掘（西から）

写真図版34 竪穴建物 3



完掘（西から）



地床炉 棚出（北から）



炉 断ち割り（南西から）



内溝 断面（南から）



貼床 断ち割り（北から）



完掘（南東から）



北東—南西ベルト 断面（西から）



内土坑 完掘（北西から）



内土坑 断面（東から）



東西ベルト 断面（北から）

写真図版36 穹穴建物 5



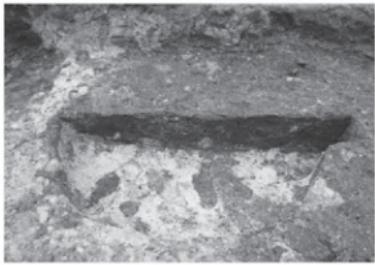
完掘（西から）



南北ベルト 断面（東から）



東西ベルト 断面（南から）



断面（東から）



断面（南から）



空撮 (南から)



断面 (南から)



東西ベルト 断面 (北から)



南北ベルト 断面 (東から)

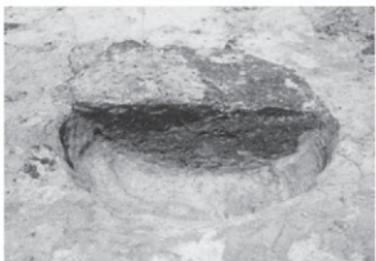


古瓦出土状況 (北から)

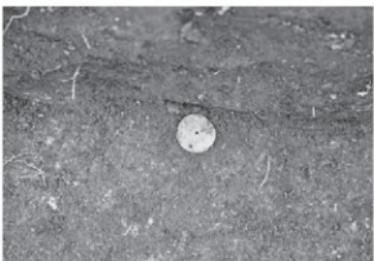
写真図版38 竖穴建物 7



完掘（南から）



断面（西から）



出土状況（南西から）



石群出土状況（南から）



最終完掘（西から）



穴掘 (北から)



断面 (北から)



北東—南北ベルト 断面 (西から)



地床炉 棲出 (東から)



炉 断ち割り (南から)

写真図版40 積穴建物9・10



完掘（東から）



断面（西から）



断面（西から）



出土状況（西から）



出土状況（南から）



完掘（東から）



断面（南から）

写真図版42 壁穴建物14・15



断面（西から）



断面（東から）



断面（東から）



断面（南から）



断面（南から）



出土状況（西から）



断面（東から）



断面（西から）



穴掘（東から）



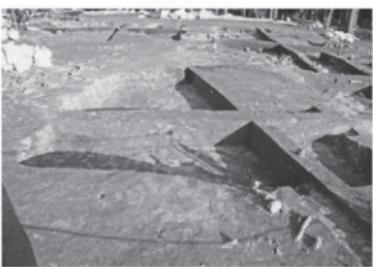
断面（北から）



断面（北から）



断面（北から）



断面（西から）

写真図版44 竪穴建物16



完掘（東から）



南北ベルト 断面（西から）



東西ベルト 断面（南から）



東西ベルト東側 断面（南から）



東西ベルト西側 断面（南から）



竪掘 (東から)



東西ベルト 断面 (南から)



東西ベルト 断面 (南から)



南北ベルト 断面 (南から)



東西ベルト 断面 (南から)

写真図版46 竪穴建物18



完掘（東から）



南北ベルト 断面（西から）



東西ベルト 断面（南から）



南北ベルト 断面（西から）



完掘（北から）



穴掘（南から）



南北ベルト 断面（東から）



完掘 (南から)



南北ベルト 断面 (東から)



完掘（南から）



南北ベルト 断面（東から）



全景（西から）



全景（西から）



中央柱穴群テント跡



北東柱穴群



土坑1 完掘（西から）



土坑1 断面（東から）



土坑2 完掘（南から）



土坑2 断面（西から）



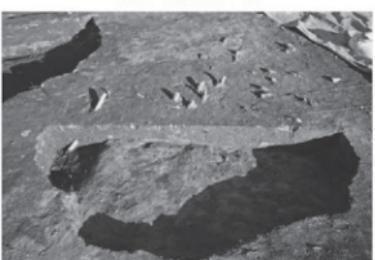
土坑3 完掘（東から）



土坑3 断面（南から）



土坑4 完掘（西から）



土坑4 断面（西から）



土坑5 実掘（西から）



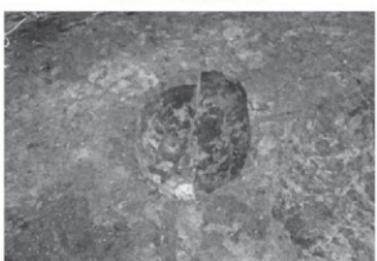
土坑5 断面（南から）



土坑6 実掘（南西から）



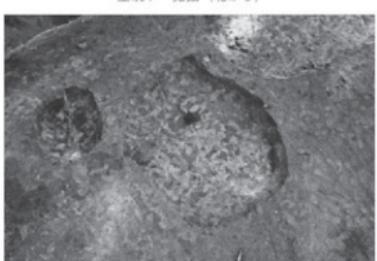
土坑6 断面（西から）



土坑7 実掘（北から）



土坑7 断面（西から）



土坑8 実掘（北から）



土坑8 断面（西から）



土坑9・10 断面（西から）



土坑12 断面（西から）



土坑11 完掘（西から）



土坑11 断面（北から）



土坑13 断面（東から）



土坑12・13 完掘（北から）



土坑14 碎出土状況（東から）



土坑14 完掘（東から）



土坑15 遺物出土状況（北から）



土坑15・16 断面（南東から）



土坑15・16 完掘（南から）



土坑16 断面（東から）



土坑17 完掘（北から）



土坑17 断面（南から）



土坑18 完掘（北から）



土坑18 断面（北から）



土坑19 完掘（西から）



土坑19 断面（東から）



土坑20 断面（東から）



土坑21 断面（南から）



土坑25 完掘（東から）



土坑25 断面（東から）



土坑26 断面（西から）



作業風景（曲輪3）

写真図版57 土坑19~21・25・26、作業風景



土坑27 完掘（南から）



土坑27 断面（東から）



土坑28 完掘（南から）



土坑30 完掘（西から）



土坑30 断面（西から）



土坑32 断面（西から）



土坑31 完掘（南から）



土坑31 断面（南から）

写真図版58 土坑27・28・30・31



土坑33 完掘（南から）



土坑33 断面（南から）



土坑34 完掘（西から）



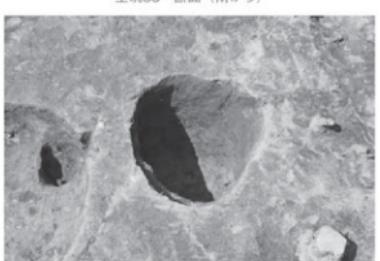
土坑34 断面（東から）



土坑35 断面（南から）



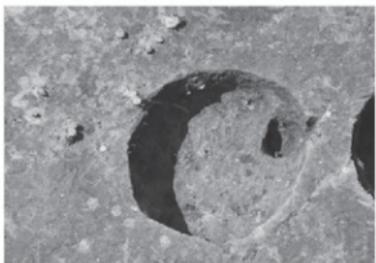
土坑35 完掘（南西から）



土坑36 完掘（南から）



土坑36 断面（南西から）



土坑37 完掘（南から）



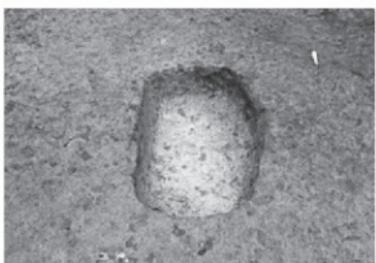
土坑37 断面（南から）



土坑38 完掘（西から）



土坑38 断面（北から）



土坑42 完掘（東から）



土坑42 断面（南から）

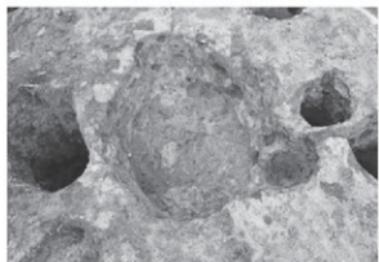


土坑43 完掘（東から）



土坑43 断面（東から）

写真図版60 土坑37・38・42・43



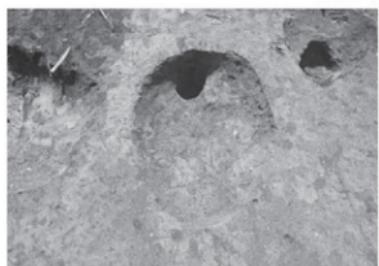
土坑44 完掘（東から）



土坑44 断面（東から）



土坑45 断面（北東から）



土坑46 完掘（東から）



土坑46 断面（東から）



溝1 完掘（北から）



溝1 完掘（西から）



溝2 実掘（西から）



溝2A 断面（南から）



溝2B 断面（東から）



溝2C 断面（南から）



溝1 実掘（南から）



溝1 断面（南から）



溝1 断面（南から）



溝4 断面（南から）



焼土1 植出 (東から)



焼土1 断面 (西から)



焼土2 植出断面 (西から)



焼土2 断面 (西から)



焼土3 植出 (北から)



焼土3 断面 (西から)

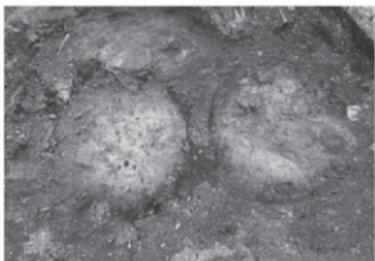


焼土4・5 植出 (南から)



焼土4・5 断面 (西から)

写真図版64 焼土1～4・5



炉6・7 棚出（東から）



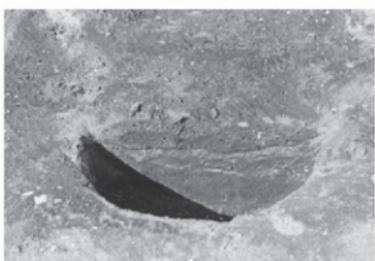
炉6・7 断面（南から）



炉8 棚出（北から）



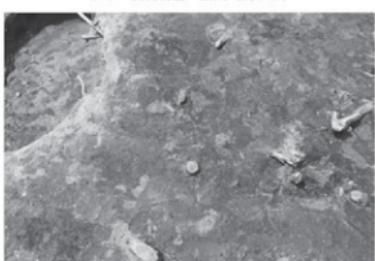
炉8 断面（南から）



炉8 炭化物層 断面（南から）



現地説明会風景



炉9 棚出（東から）



炉9 断面（北から）



完掘（北西から）



断面（南から）



断面（北東から）



陥し穴1 完掘（北から）



陥し穴1 断面（北から）



陥し穴2 完掘（北から）



陥し穴2 断面（北から）

写真図版66 性格不明遺構1・2、陥し穴1・2



陥し穴3 完掘（北から）



陥し穴3 断面（北から）



陥し穴4 完掘（東から）



陥し穴4 断面（東から）



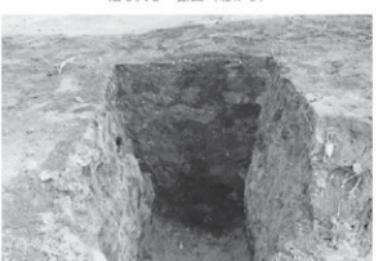
陥し穴5 完掘（北から）



陥し穴5 断面（北から）



陥し穴6 完掘（北から）



陥し穴6 断面（北から）

写真図版67 陥し穴3~6



陥し穴7 完掘（東から）



陥し穴7 断面（北から）



陥し穴8 完掘（南から）



陥し穴8 断面（南から）



陥し穴9 完掘（東から）



陥し穴9 断面（東から）



陥し穴10 完掘（西から）



陥し穴10 断面（西から）

写真図版68 陥し穴7~10



陥し穴11 完掘（南から）



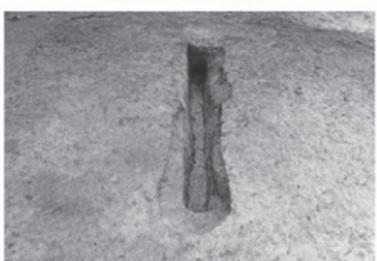
陥し穴11 断面（南から）



陥し穴12 完掘（南から）



陥し穴12 断面（南から）



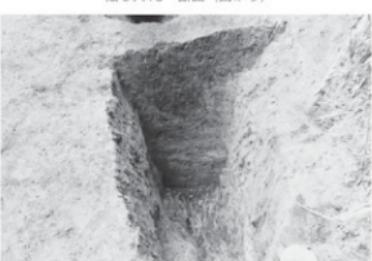
陥し穴13 完掘（東から）



陥し穴13 断面（西から）



陥し穴14 完掘（南西から）



陥し穴14 断面（西から）



陥し穴15 完掘（南から）



陥し穴15 断面（南から）



陥し穴16 完掘（南から）



陥し穴16 断面（南から）



陥し穴17 完掘（北から）



陥し穴17 断面（南から）



陥し穴18 完掘（西から）



陥し穴18 断面（西から）

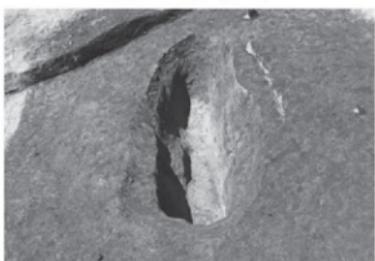
写真図版70 陥し穴15~18



陥し穴19 完掘（南から）



陥し穴19 断面（南から）



陥し穴20 完掘（南から）



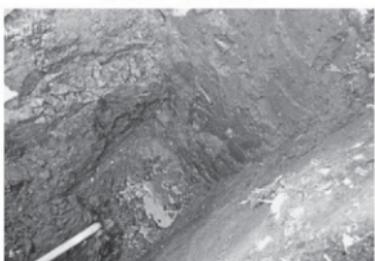
陥し穴20 断面（南から）



陥し穴21 完掘（南から）



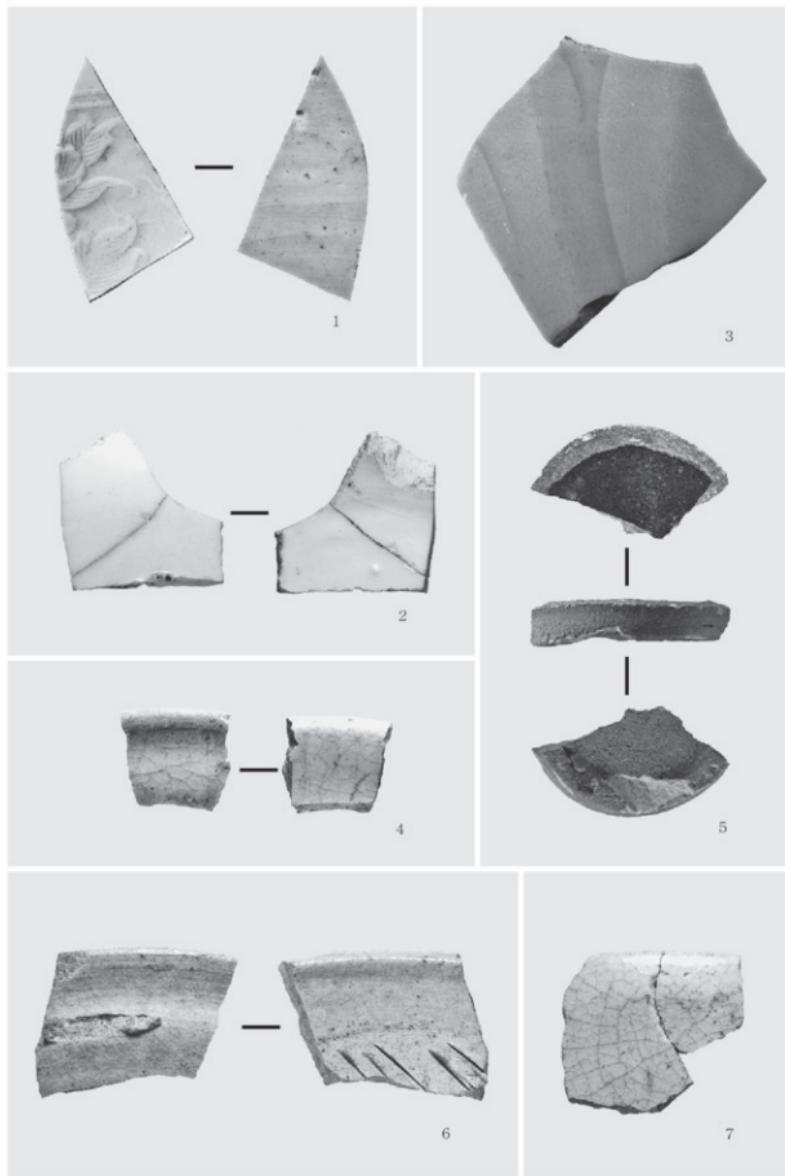
陥し穴21 断面（南から）



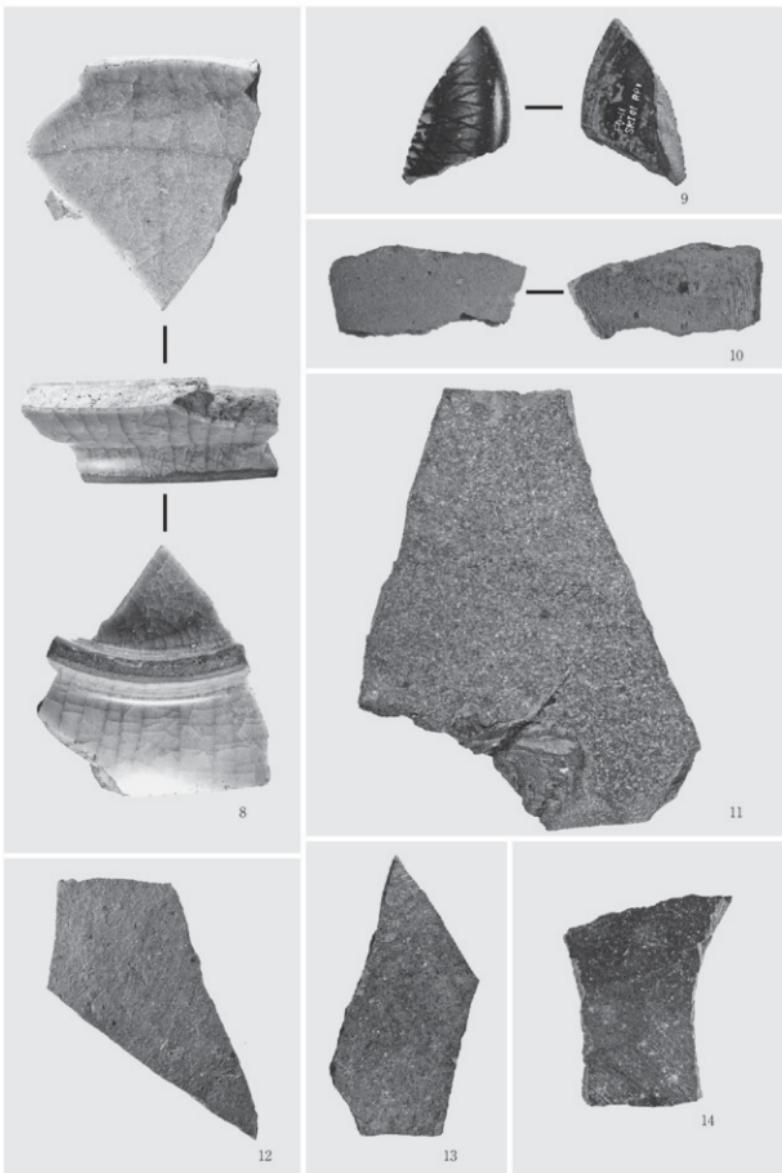
沢際トレンチ



沢際平坦面トレンチ



写真図版72 陶磁器 (1~7)



写真図版73 陶磁器 (8~14)



15



16



19



18

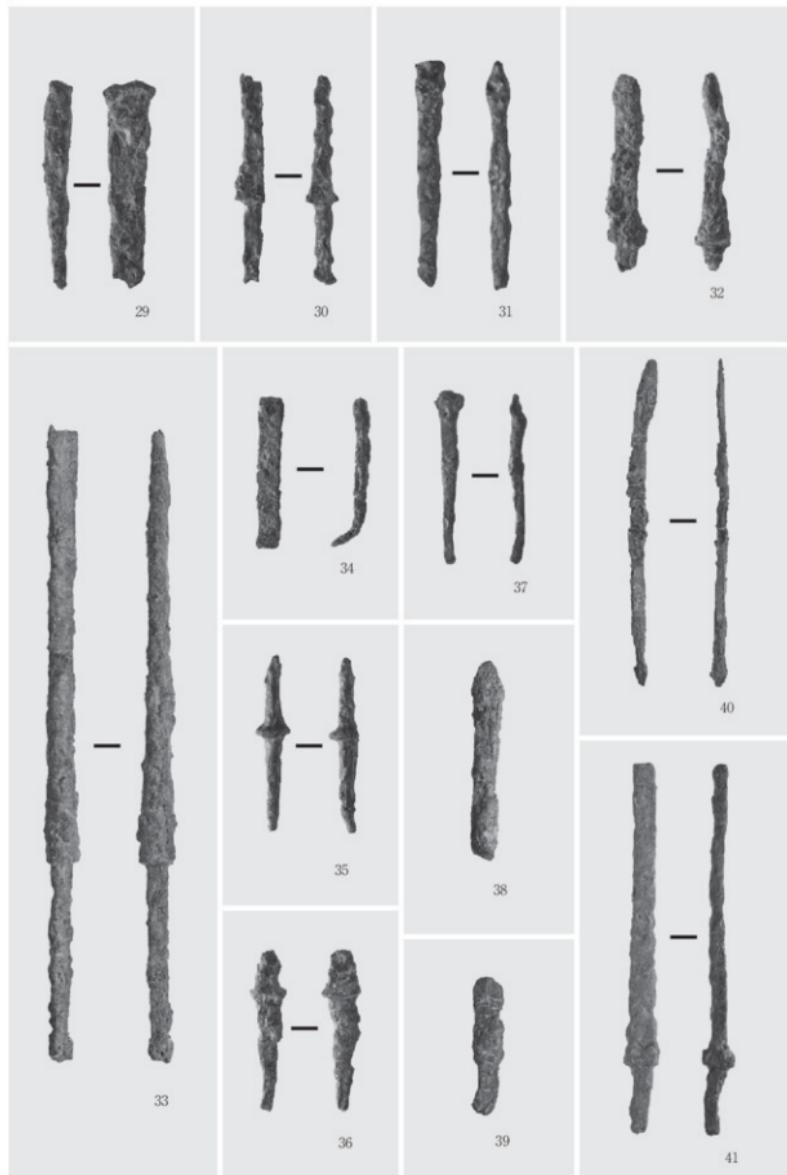


20

写真図版74 陶磁器 (15~20)



写真図版75 金属製品 (21~28)

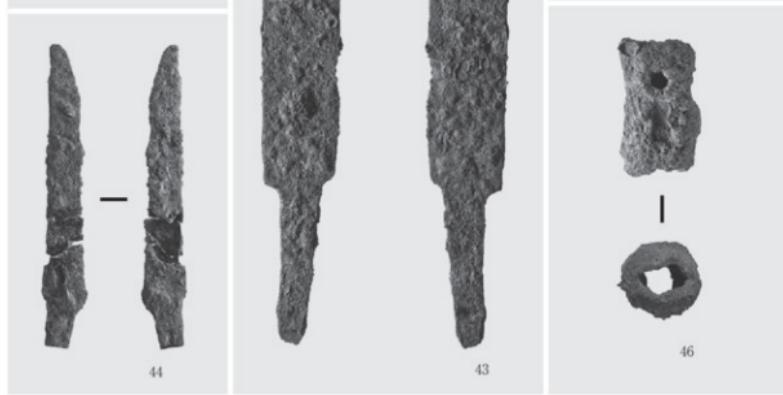


写真図版76 金属製品（29～41）



42

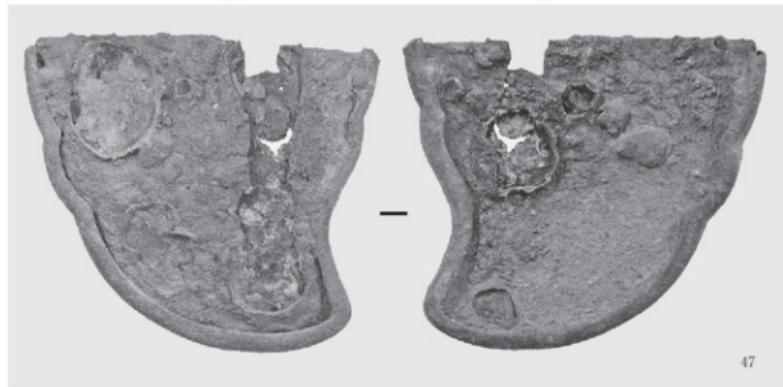
43



44

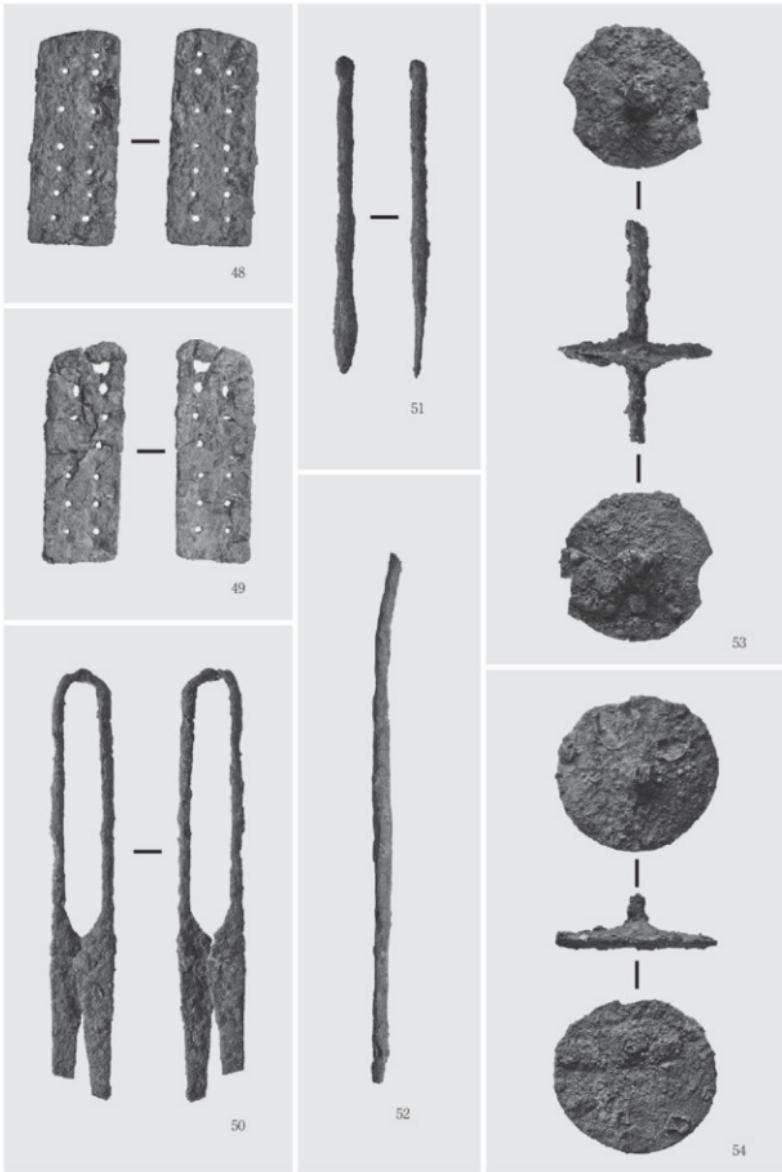
45

46



47

写真図版77 金属製品（42～47）



写真図版78 金属製品（48~54）



55



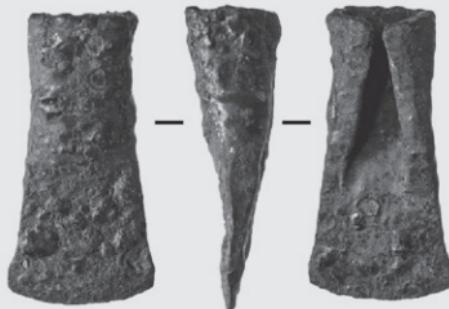
58



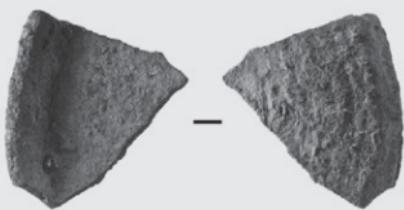
56



57



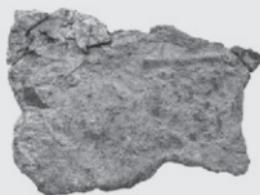
59



60



61



62

写真図版79 金属製品（55~62）



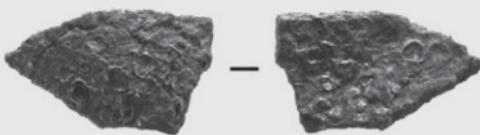
|



63

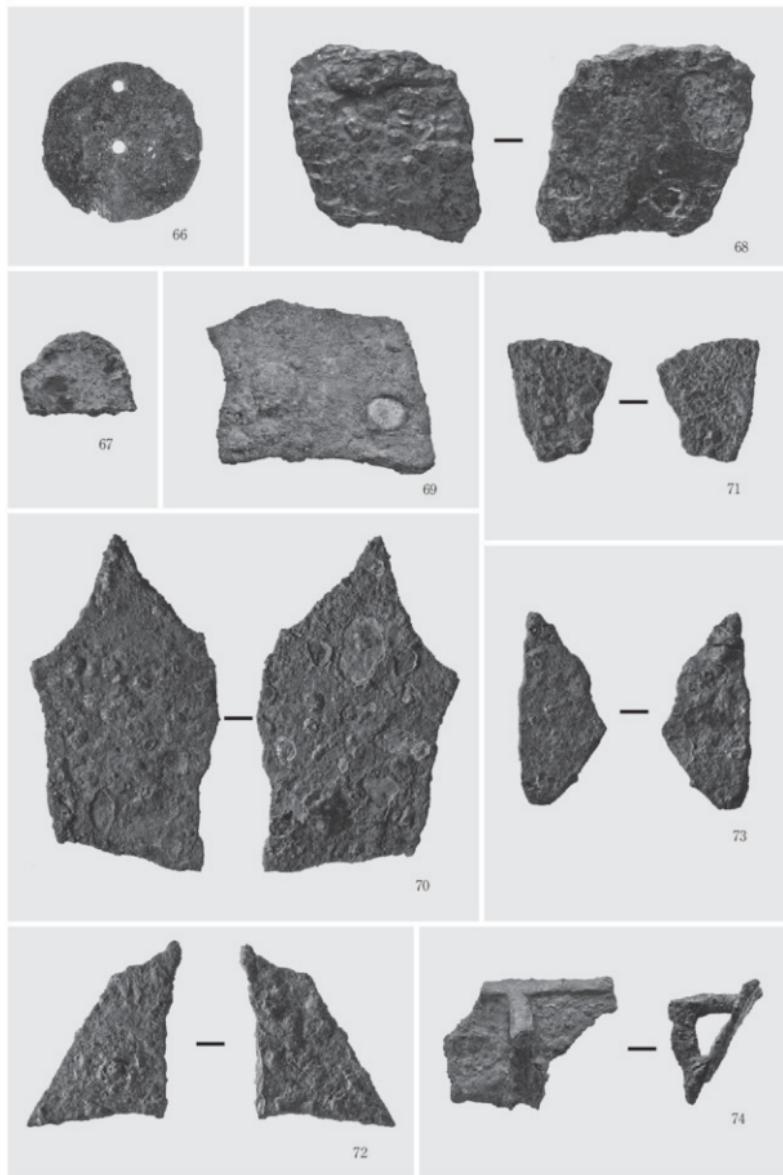


64

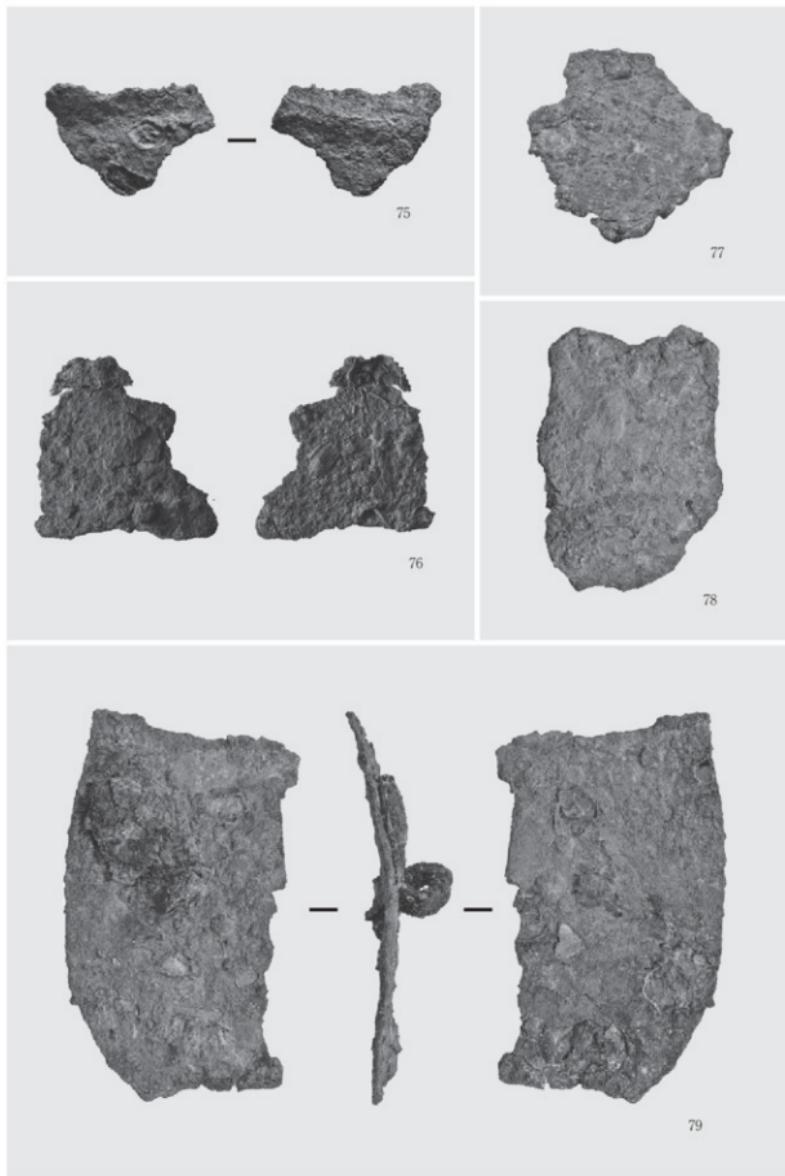


65

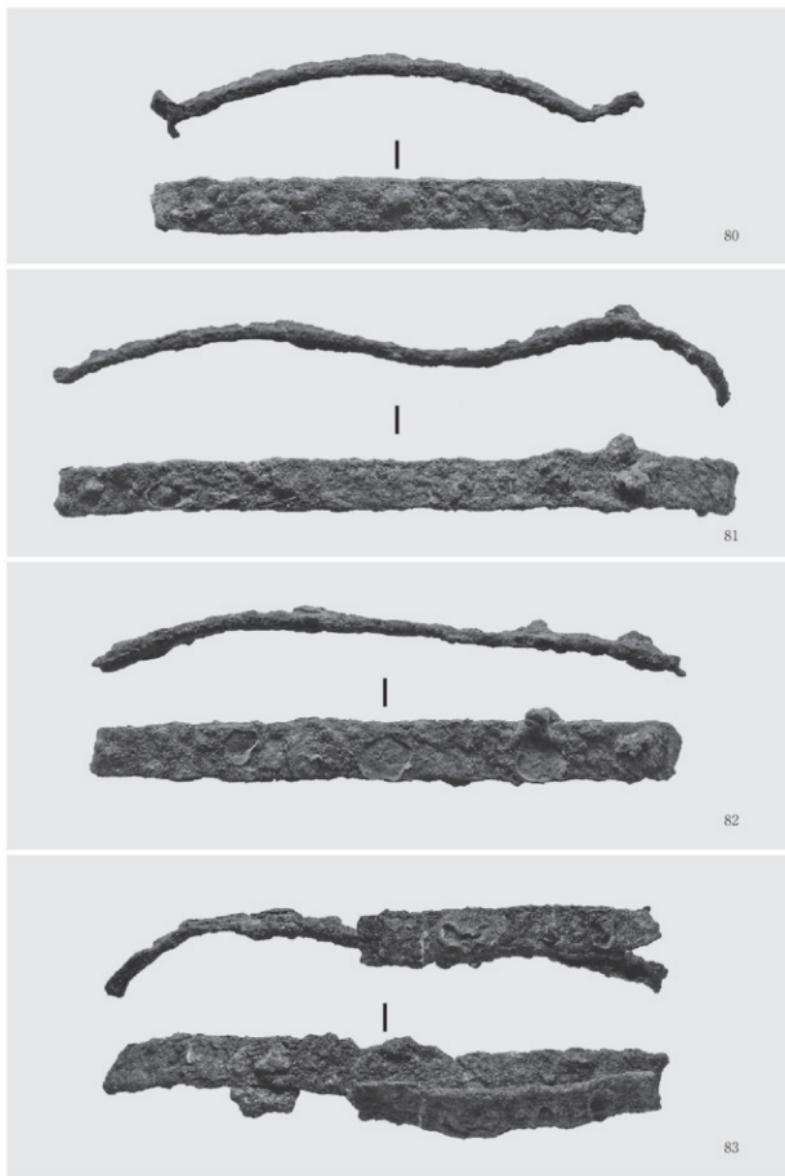
写真図版80 金属製品（63~65）



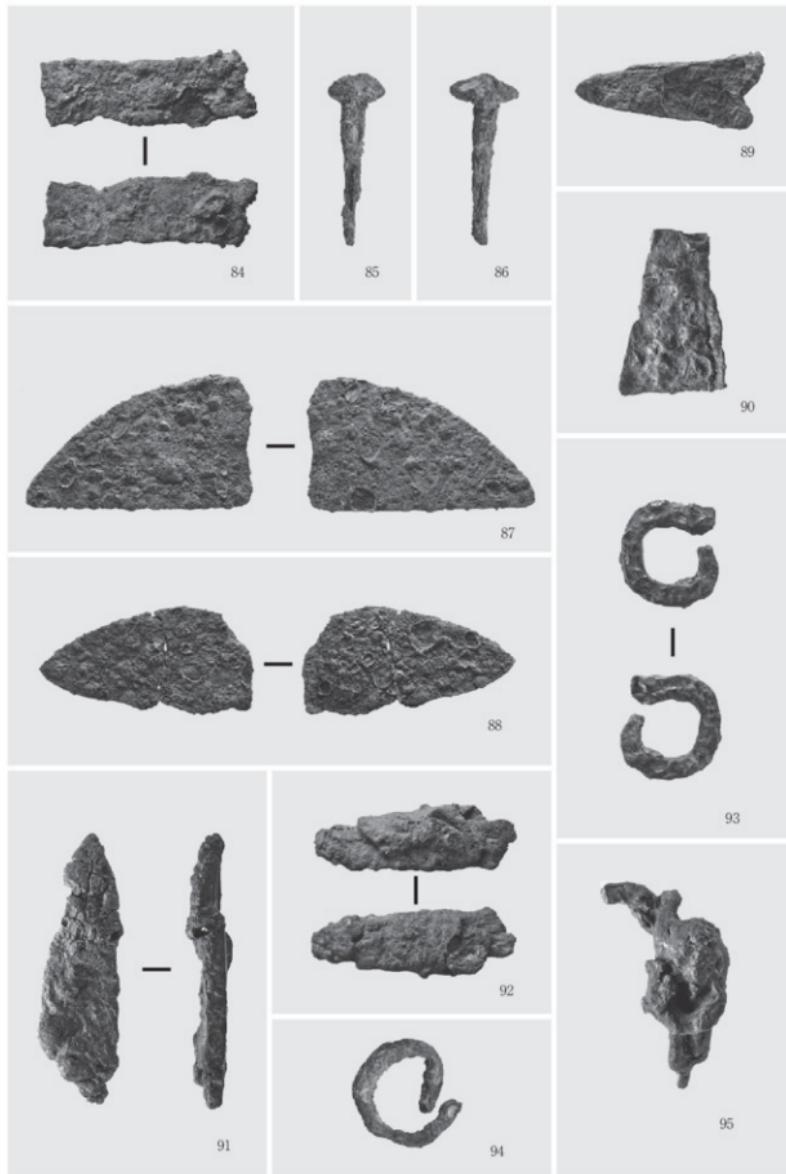
写真図版81 金属製品 (66~74)



写真図版82 金属製品 (75~79)



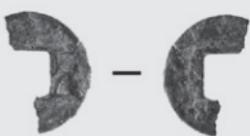
写真図版83 金属製品（80～83）



写真図版84 金属製品 (84~95)



写真図版85 金属製品 (96~109)



110



111



112



113



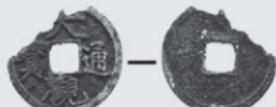
114



115



116



117



118

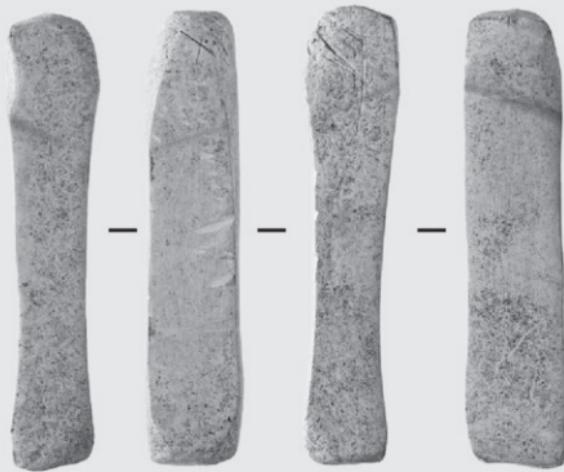


119

写真図版86 錢貨（110～120）



121



122

写真図版87 不明石製品（121）・砥石（122）



123

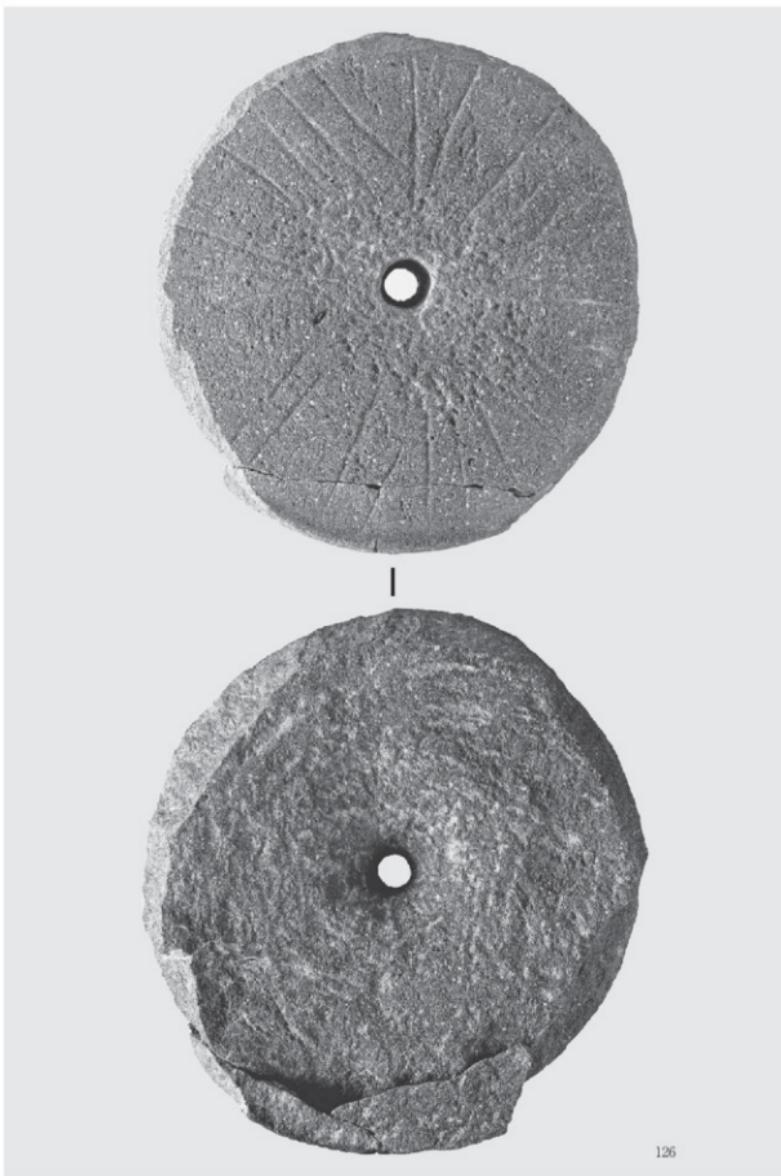


124



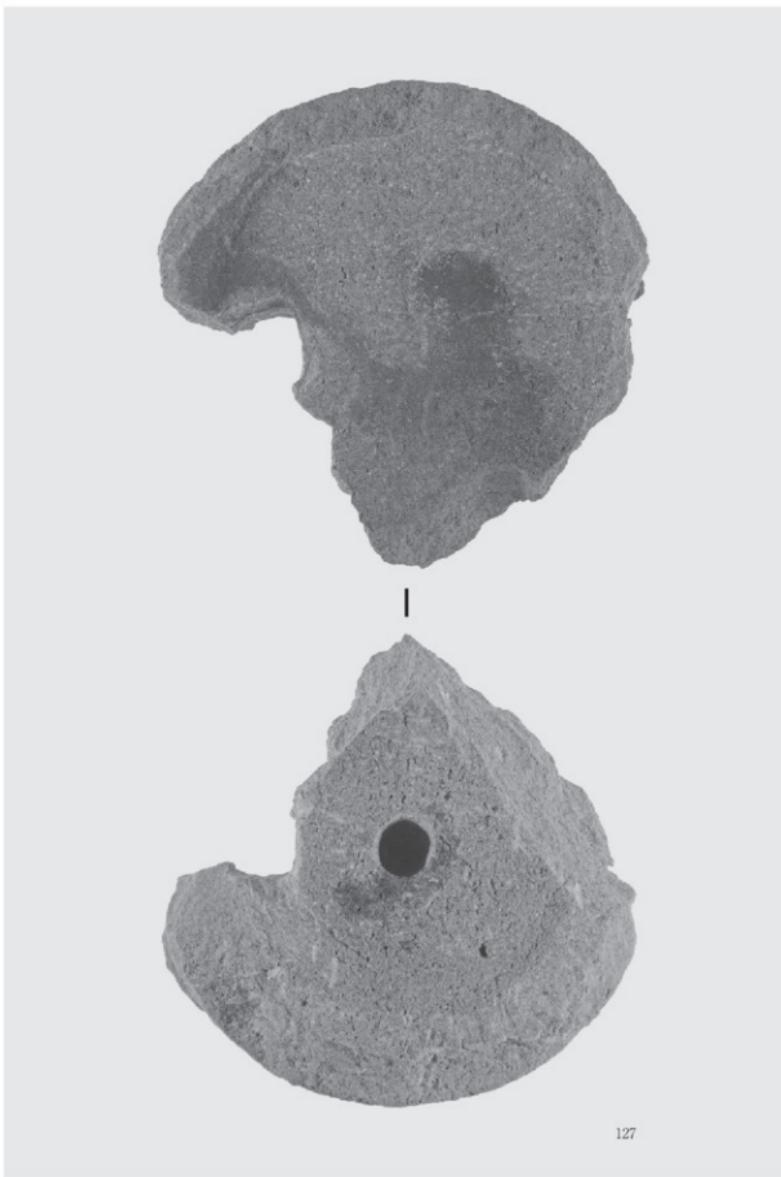
125

写真図版88 砥石（123～125）



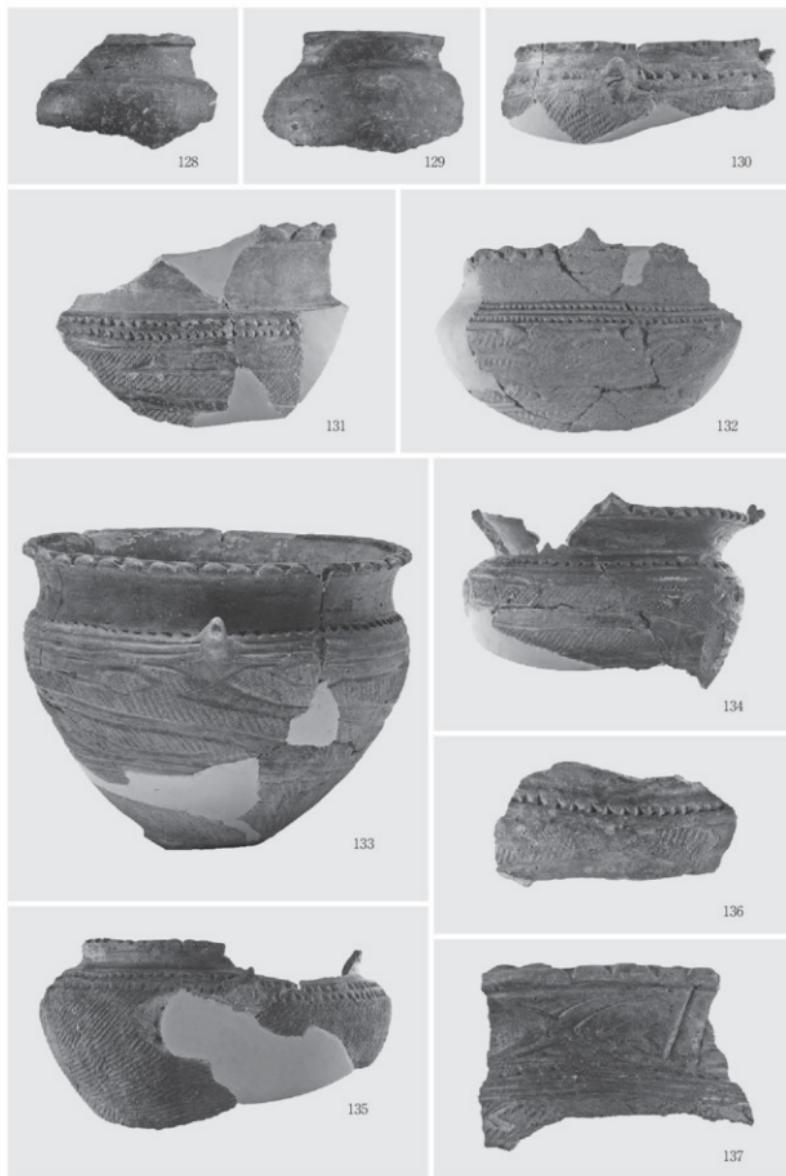
126

写真図版89 石臼 (126)

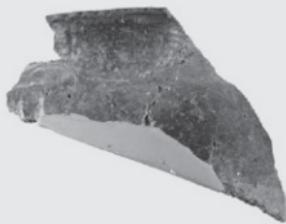
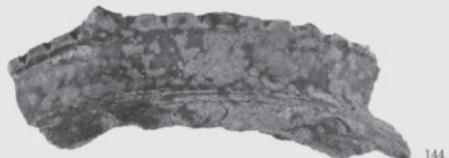


127

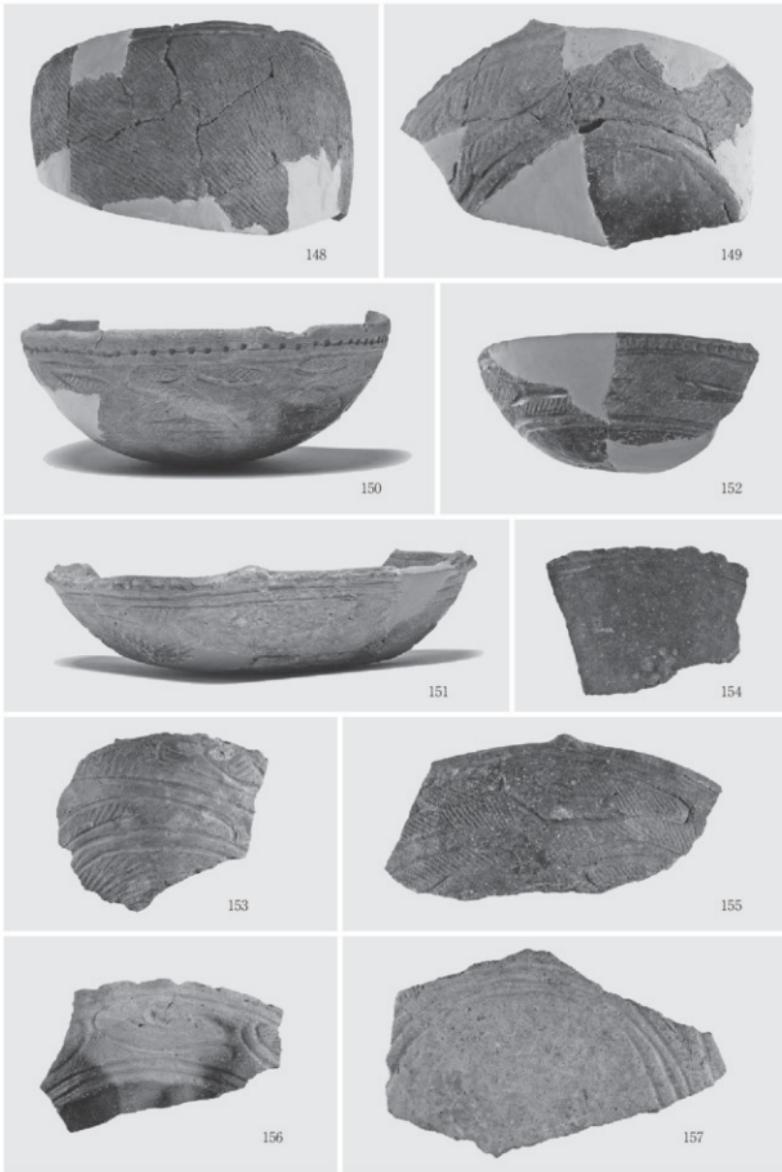
写真図版90 石臼 (127)



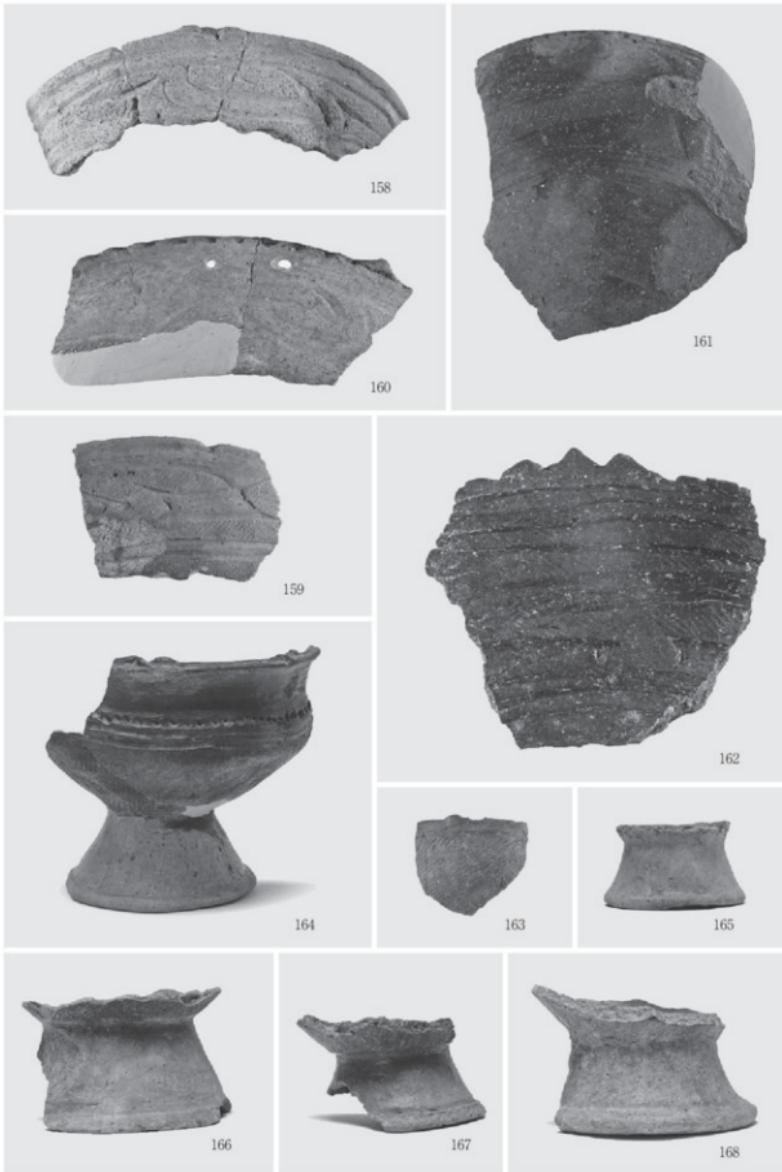
写真図版91 縄文土器 (128~137)



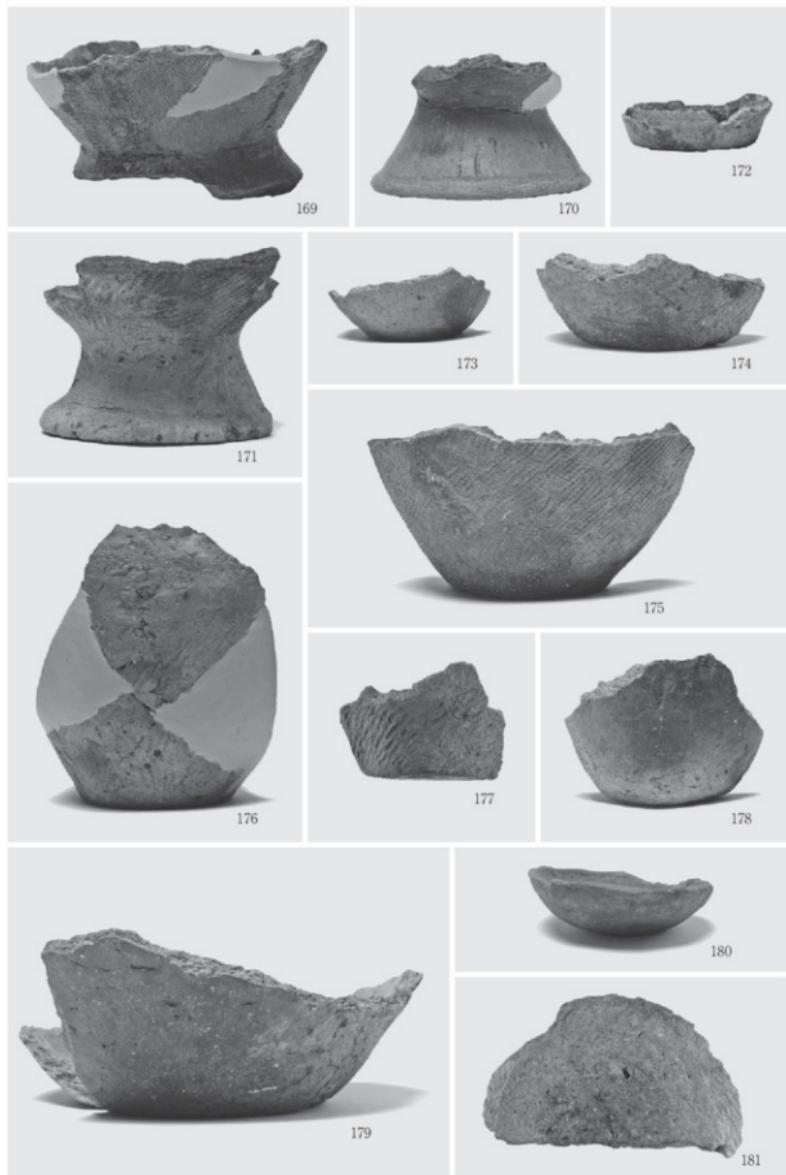
写真図版92 繩文土器 (138~147)



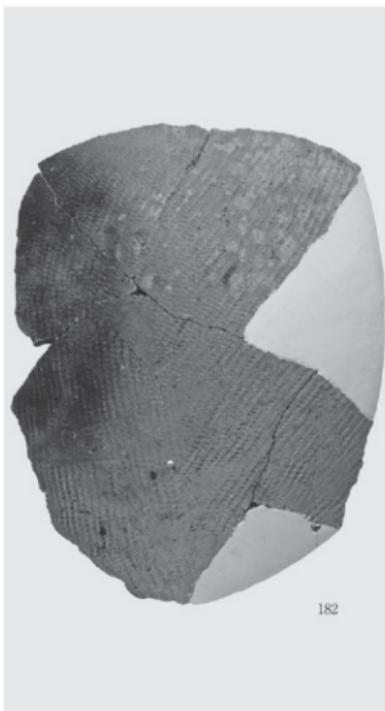
写真図版93 縄文土器 (148~157)



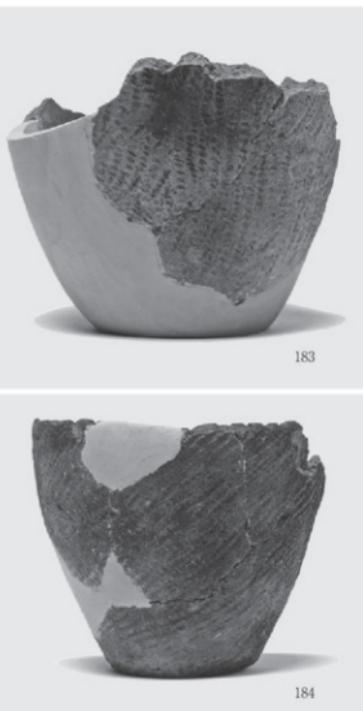
写真図版94 縄文土器 (158~168)



写真図版95 縄文土器 (169~181)



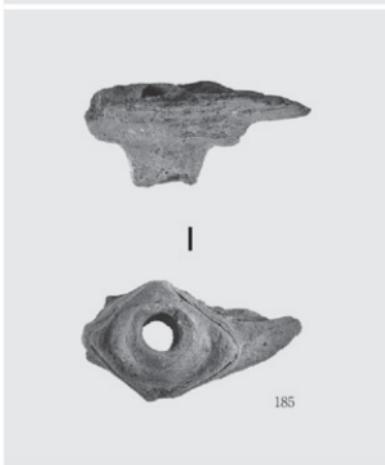
182



183



184



185



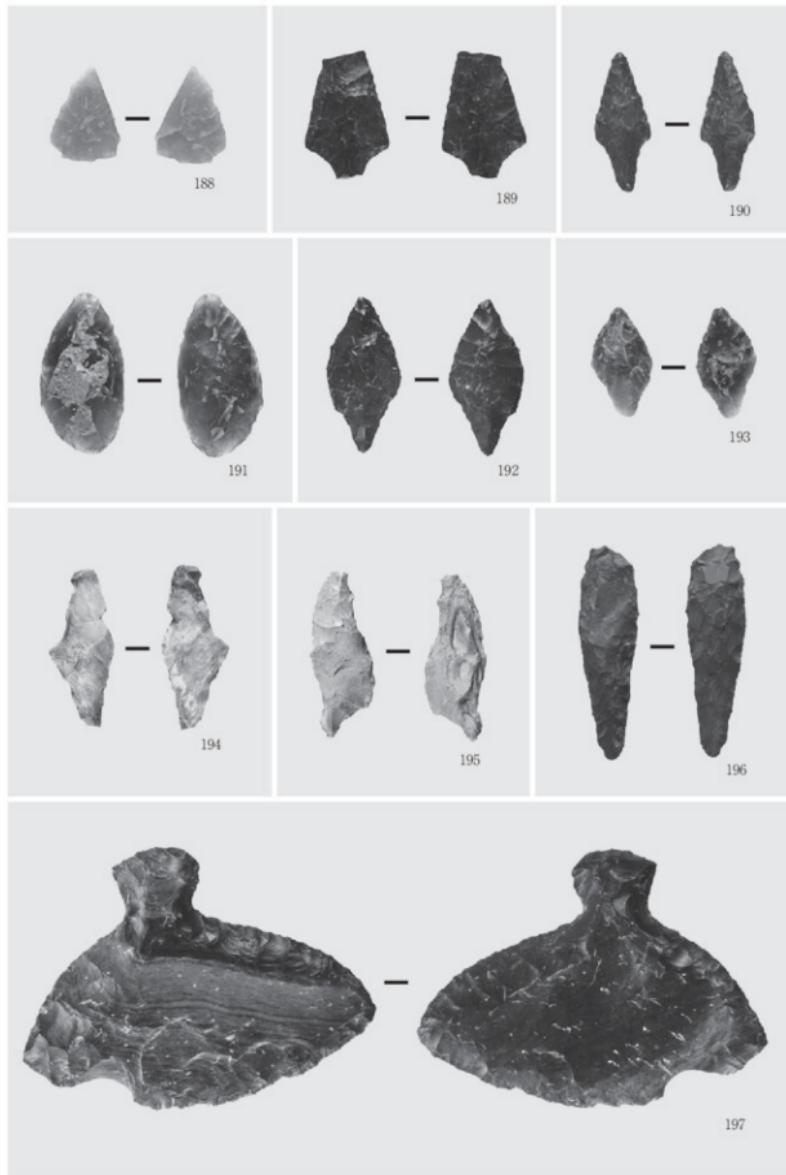
186

写真図版96 繩文土器 (182~186)

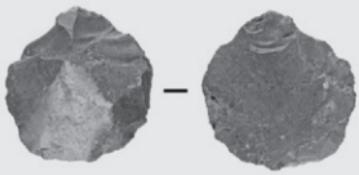


187

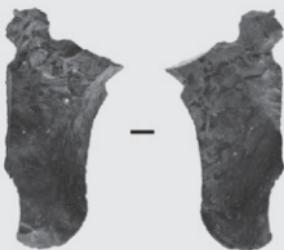
写真図版97 繩文土器 (187)



写真図版98 石器（188～197）



198



199

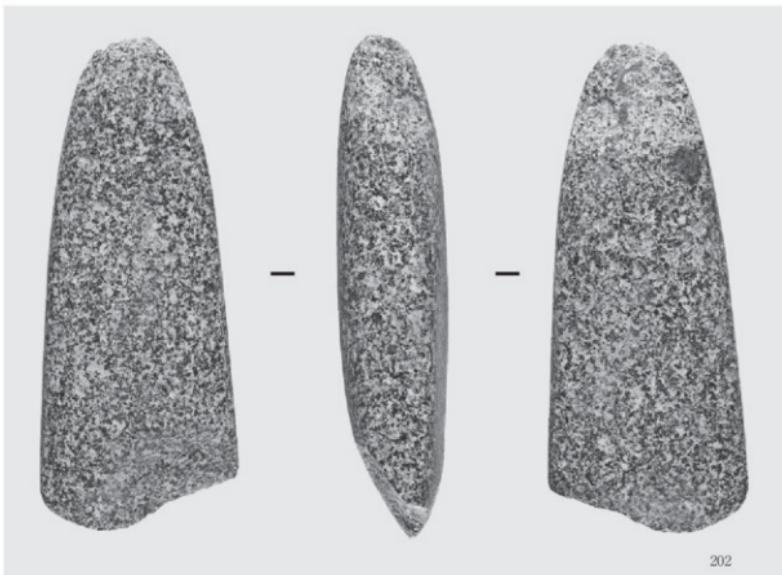


200

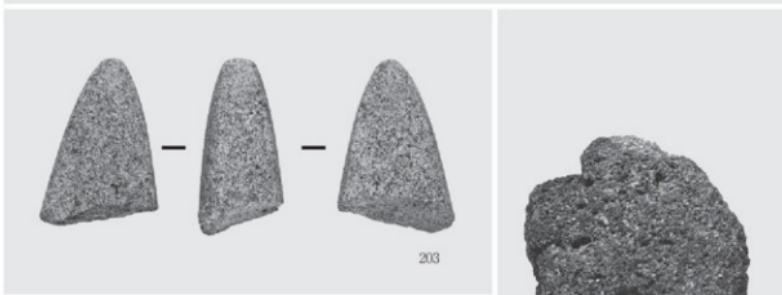


201

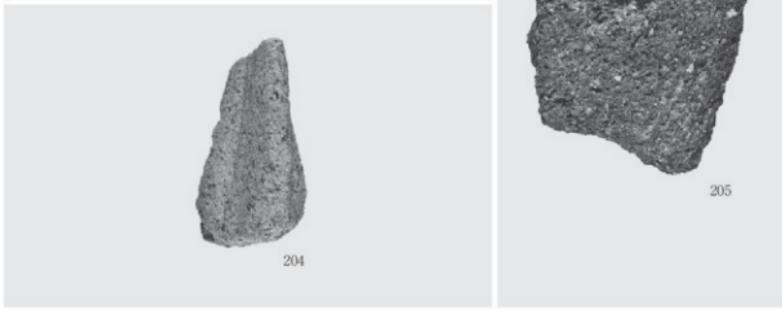
写真図版99 石器（198～201）



202



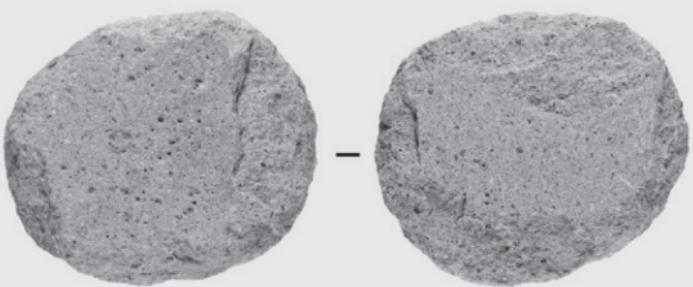
203



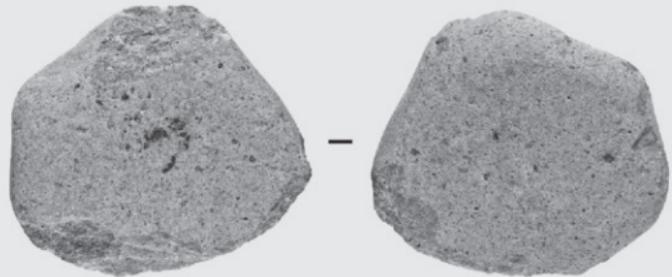
204

205

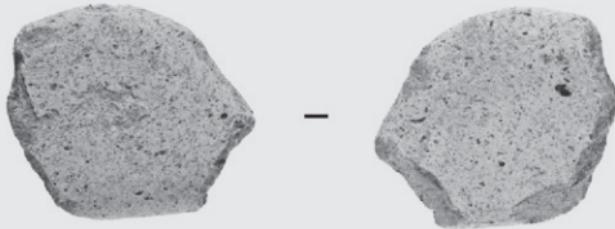
写真図版100 石器 (202~205)



206



207

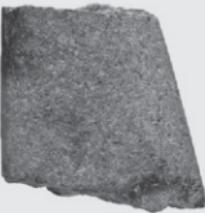


208

写真図版101 石器 (206~208)



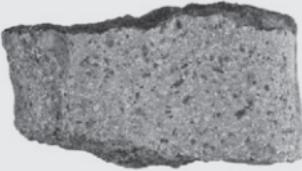
209



210



211



212

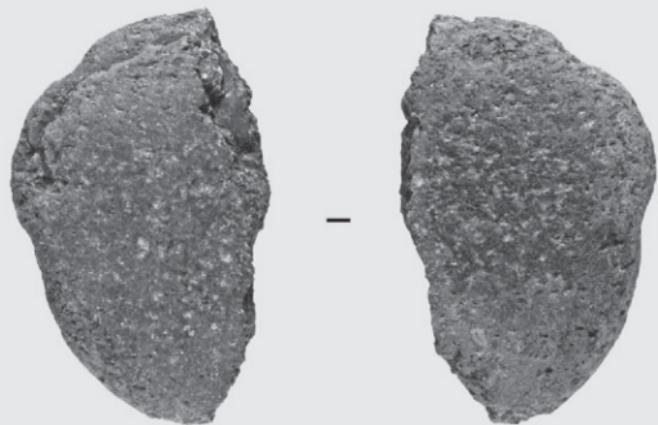


-



213

写真図版102 石器 (209~213)



214



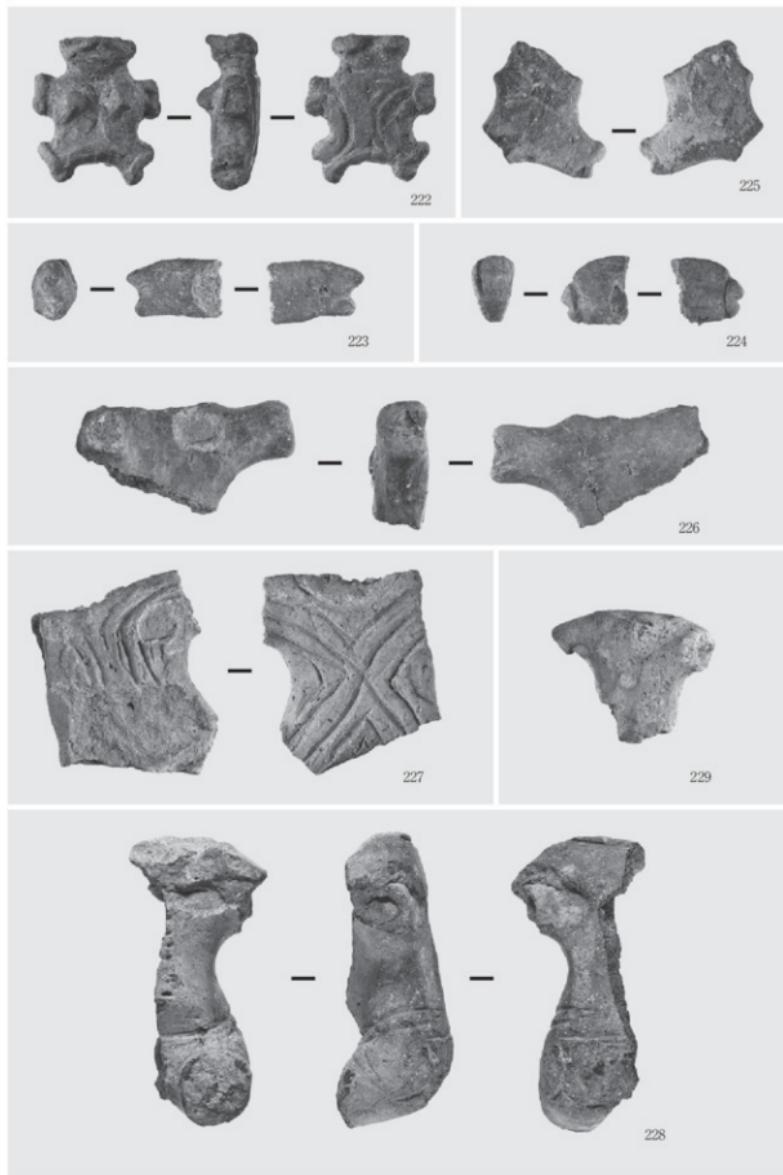
215

216

写真図版103 石器（214）・石製品（215・216）



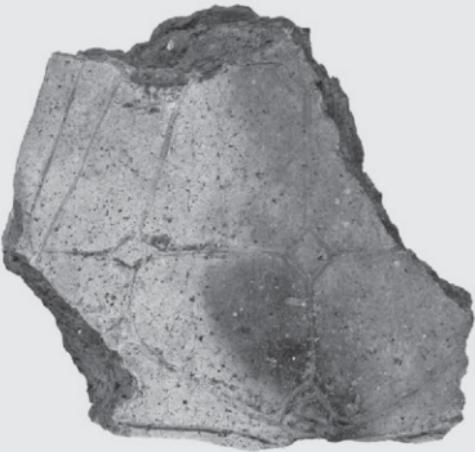
写真図版104 石製品（217～221）



写真図版105 土偶 (222~229)

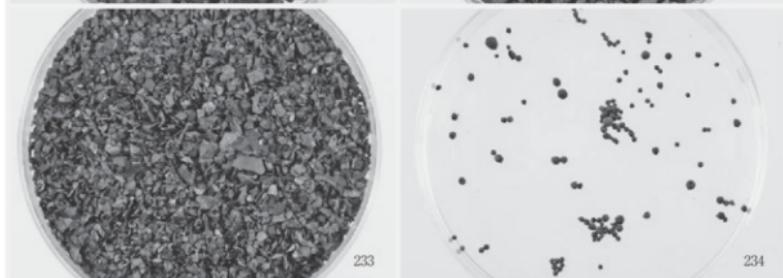
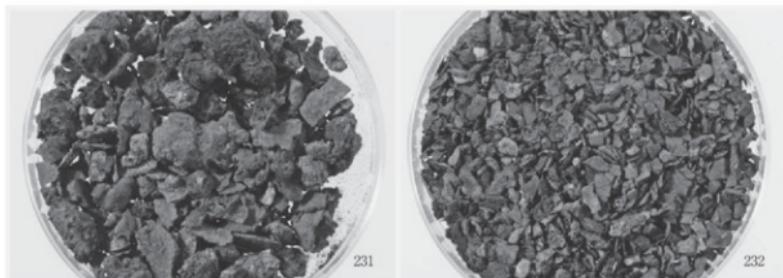


|



230

写真図版106 土偶 (230)



写真図版107 鋳造剥片（231～233）・粒状滓（234）・鉄滓（235）



写真図版108 フイゴ羽口（236・237）・鋳型片（238・239）

## 報告書抄録

|                               |   |                 |  |  |   |  |                                       |  |
|-------------------------------|---|-----------------|--|--|---|--|---------------------------------------|--|
| ふりがな                          | ふどうだてあとはくつちょううさほうこくしょ   |                 |  |  |   |  |                                       |  |
| 書名                            | 不動館跡発掘調査報告書   |                 |  |  |   |  |                                       |  |
| 副書名                           | 主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査   |                 |  |  |   |  |                                       |  |
| 卷次                            |   |                 |  |  |   |  |                                       |  |
| シリーズ名                         | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書  |                 |  |  |   |  |                                       |  |
| シリーズ番号                        | 第624集   |                 |  |  |   |  |                                       |  |
| 編著者名                          | 小山内透・福島正和・北村忠昭・小林弘卓・菅野 梢  |                 |  |  |   |  |                                       |  |
| 編集機関                          | (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター   |                 |  |  |   |  |                                       |  |
| 所在地                           | 〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019)638-9001  |                 |  |  |   |  |                                       |  |
| 発行年月日                         | 2014年3月17日  |                 |  |  |   |  |                                       |  |
| ふりがな<br>所取遺跡名                 | ふりがな<br>所在地   | コード             | 北緯   | 東経   | 調査期間  | 調査面積   | 調査原因                                  |  |
| ふどうだてあとはくつちょううさほうこくしょ<br>不動館跡 | 二戸市淨法寺町清水尻11-2  | 03213 JE37-0073 | 40度<br>10分<br>55秒  | 141度<br>09分<br>40秒   | 2011.06.16<br>～<br>2011.12.08<br>2012.04.10<br>～<br>2012.07.13  | 4.654m <sup>2</sup><br><br>5.697m <sup>2</sup>   | 主要地方道<br>二戸五日市<br>線緊急地方<br>道路整備事<br>業 |  |
| 所取遺跡名                         | 種別  | 主な時代            | 主な遺構   | 主な遺物   | 特記事項  |  |                                       |  |
| 不動館跡                          | 城館跡   | 縄文時代<br>中世      | 陥し穴<br>貯藏穴<br>曲輪<br>切岸<br>堀<br>土塁<br>通路<br>掘立柱建物<br>堅穴建物<br>鍛冶関連遺構<br>土坑<br>横列<br>柱穴 | 21基<br>1基<br>7箇所<br>3箇所<br>9条<br>1基<br>3箇所<br>22棟<br>21棟<br>4基<br>41基<br>1条<br>17基 | 縄文土器・石器・土<br>製品・土偶<br>磁器(青磁、白磁)<br>陶器(古瀬戸、瀬戸・<br>美濃、常滑)<br>鉄製武器・武具<br>鉄製仏具<br>鉄製品(手斧、鉄、針、<br>紡錘車、鍋、釘など)<br>銅貨<br>砥石<br>石臼<br>鋳型<br>铸造剥片<br>鉄滓 | 大規模な普請痕跡を留<br>める中世城跡<br><br>武具は胴丸鎧に付属す<br>ると考えられる金銅製覆<br>輪の杏葉、小札が出土。<br><br>鉄製仏具は鉄磬片、經<br>筒蓋片、鉄鐸などが出土。 |                                       |  |
| 要約                            | 不動館跡は安比川右岸に立地する中世城館である。調査前の現地表面の凹凸からも城館であることに疑問を挟む余地が無いほど良好な遺存状態であった。文献等に登場することはないが、当地を支配していた浄法寺氏あるいはその家の築いたものであると推測される。今回2箇年の発掘調査で、曲輪・切岸・堀・土塁等の普請に関する遺構を検出した。最高位に位置する曲輪1は2重の堀で囲まれており、その他の曲輪よりも防御性の高さが際立っている。この曲輪では掘立柱建物・堅穴建物等の作事遺構がみられ、多くの鉄製品が出土した。一方、東側に位置する常曲輪では掘立柱建物・堅穴建物のほかに鍛冶関連遺構を検出した。これらの遺構は古期の堀を埋めて築かれた平坦面に位置することから、城館そのものが幾度か姿形あるいは機能を変えながら比較的の長期に利用されていたことが窺える。出土した少量の中世陶磁器には、時期幅があり定点を決めることが難しいが、最古のもので13世紀、最新のものが16世紀前半頃である。また、鉄製の武器や武具も鎌倉期ものが主体であり、鎌倉時代より何らかの施設として機能していたことが予想される。また、出土した杏葉は、形態的特徴から鎌倉時代を中心とする2枚作りのものの一部で、全国的にみても数例の出土が確認されるのみである。 |                 |  |  |   |  |                                       |  |

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第624集

## 不動館跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成26年3月11日  
発 行 平成26年3月17日

編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地  
電話 (019) 638-9001

発 行 岩手県県北広域振興局土木部二戸土木センター  
〒028-6103 岩手県二戸市石切所字荷渡6-3  
電話 (0195) 23-9209  
(公財) 岩手県文化振興事業団  
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号  
電話 (019) 654-2235

印 刷 (株) 興版社  
〒020-0816 岩手県盛岡市中野1-4-14  
電話 (019) 624-3456

---